

岩手県埋文センター文化財調査報告書第38集

有矢野遺跡・上の山Ⅹ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県埋蔵文化財センター
日 本 道 路 公 団

有矢野遺跡・上の山Ⅹ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

本県には数多くの遺跡が存在しております。昭和55年度末における埋蔵文化財包蔵地は4719ヶ所が遺跡台帳に登載されております。

文化財は私たちの祖先が長い歴史のなかで創造し、現在に伝えてきた貴重な財産であります。この文化遺産を保護、保存し、次の世代に引継いでいくと共に、文化財を活用することによって私たち自身もこの文化財に学び新たな文化創造への基礎とすることが重要な課題であると思っております。

この貴重な文化遺産の保存と、現代生活を豊かにするという開発指向との均衡を保つため県教委文化課と開発事業者間でその調整について努力しているところではありますが、止むを得ず破壊される遺跡については記録保存の措置をとることとしております。

当センターでは昭和52年発足以来、埋蔵文化財保護の立場に立って発掘調査に取り組んでまいりました。本年度は新たに資料課を設置し、調査と同時に、資料整備、普及活動、報告書の刊行等を進めてまいりました。

本報告書は東北縦貫自動車道建設に関連し、昭和55年度に調査した安代町有矢野遺跡、上の山X遺跡の報告書であります。県北部における発掘調査の機会は少なくこの報告書はその点においても歴史解明上貴重な資料を提示できるものと思っております。いささかでも関係各位の参考になり、斯学向上の一助となれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書刊行にご協力、ご援助賜りました県教育委員会、日本道路公団仙台建設局、はじめ地元関係者、考古学研究者の方々に感謝すると共に、今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

昭和57年3月

(財) 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新 里 盈

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事長	新里 盈	(県教育長)
副理事長	中原良一	(県教育次長)
常務理事	菅原一郎	(県埋文センター所長)
理事	吉田良和	(県農政部次長)
〃	田代太志	(県林業水産部次長)
〃	後藤光雄	(県土木部次長)
〃	板橋 源	(岩手大学名誉教授・県立博物館長)
〃	草間俊一	(岩手大学名誉教授・県立盛岡短期大学学長)
〃	小形信夫	(前常務理事)
監事	白石丈雄	(県総務課長)
〃	及川久雄	(県財務課長)

職員

所長	菅原一郎				
副所長	小野寺登				
総務課長	小笠原喜一	調査課長	嶋 千秋	資料課長	瀬川司男
庶務係長	岡沢成治	主任専門 調査員	近藤宗光	専門 調査員	高橋与右工門
主事	佐藤久四郎	〃	遠藤勝博	〃	本沢慎輔
〃	戸草内幸男	〃	国生 尚	〃	高橋文夫
〃	立花多加志	専門 調査員	村上達夫	専門 調査員	平井 進
技能員	佐藤春男	〃	畠山靖彦	〃	種市 進
		〃	朝野孝二	〃	鈴木隆英
		〃	菊池利和	〃	三浦謙一
		〃	鈴木恵治	〃	岩渕 久
		〃	小平忠孝	〃	光井文行
		〃	大原一則	〃	佐藤 勝
		〃	田鎖寿夫	〃	高橋義介
		〃	佐々木嘉直	〃	佐々木清文
		〃	栢澤満郎	〃	酒井宗孝

緒 言

1. 本報告書は、東北縦貫自動車道建設予定地内に所在する岩手県二戸郡安代町有矢野遺跡・上の山X遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。2遺跡に共通する事項は一括して「序論」として掲載した。
2. 発掘調査は各遺跡の調査要項に示した期間に行なわれた。室内整理作業は昭和54年11月5日から同55年3月31日までの期間に行なわれた。
3. 各遺跡の発掘調査担当者は次のとおりである。
有矢野遺跡・上の山X遺跡……………小平忠孝、種市 進、四井謙吉。
4. 発掘調査にあたっては、次の方から御教示をいただいた。
町田 洋（東京都立大学助教授）、相原康三（岩手県教育委員会 文化課）
5. 発掘調査においては、次の諸機関の御協力をいただいた。
日本道路公団仙台建設局西根工事事務所・安代工事事務所・安代町役場。
6. 発掘調査の作業には、上沖連次郎氏をはじめとする地元の方々に御協力をいただいた。
7. 本報告書の執筆にあたり、石器の石質鑑定を岩手大学教授 橋 行一氏に依頼した。
8. 本報告書の執筆分担は、次のとおりである。
Ⅰ. 序論 1. ……嶋 千秋 2. (1) ……四井謙吉 (2) ……小平忠孝
 3. (1) ……種市 進 (2) ……小平忠孝
Ⅱ. 有矢野遺跡 1. (1) BⅡ-1住～CⅡ-2住・DⅣ-1住・EⅣ-3住……………小平忠孝
 CⅡ-3住～DⅢ-3住……………種市 進
 EⅣ-1住・EⅣ-2住……………四井謙吉
 (2) ……小平忠孝 (3)～(4) ……種市 進
 2. ～3. …… 小平忠孝
Ⅲ. 上の山X遺跡 1. ～3. ……種市 進
9. 図版・写真図版の作成および遺物の復元にあたっては、次の方々の御協力をいただいた。
藤島ヒロ子、南館恭子、滝村キヨ、阿部蓉子、家子珠枝、鈴木スズ子、浅沼朝子、大沼幸恵、白沢ケイ子、中島ヨシ、佐藤満恵、浅沼啓子、村上幹子、川村京子、浅沼幸子、吉田律子、武蔵アサヨ、越場ミチエ、勝政タカ子、瀬川幸子、浅沼光子、川村ミチ子、吉田 京、岩館のぶ子、大木エサ、武蔵ヒサ、吉田サン、佐藤リエ、佐藤ヨシ、佐藤良子、北条恵美子、佐々木キヌ、天沼キミエ、大木絹子、佐藤和也。

本文目次

序

緒言

I. 序論

1. 調査に至る経過	5
2. 調査方法と室内整理の方法	6
(1) 調査方法	6
(2) 室内整理の方法	8
3. 遺跡の立地と環境	13
(1) 地形・地質	13
(2) 周辺の遺跡	23

II. 有矢野遺跡

1. 検出遺構・出土遺物	31
(1) 竪穴住居址	31
(2) ピット	62
(3) 陥し穴状遺構	75
(4) その他	77
2. 遺構外の出土遺物	110
(1) 土器	110
(2) 石器	111
3. まとめ	117

III. 上の山Ⅹ遺跡

1. 検出遺構・出土遺物	179
--------------	-----

(1) 竪穴住居址	179
(2) ピット	188
(3) 陥し穴状遺構	192
2. 遺構外の出土遺物	212
(1) 土器	212
(2) 石器	213
3. まとめ	216

図版目次

I. 序 論	
図版 1 岩手県全体図…………… 3	a. E IV-1・E IV-2 住居址
図版 2 遺跡位置図…………… 4	b. E IV-1 住居址
図版 3 有矢野遺跡グリット配置図…………… 9	c. E IV-2 住居址
図版 4 上の山 X 遺跡グリット配置図……………10	図版13 E IV-3 竪穴住居址状遺構……………61
図版 5 遺跡地形図……………11	図版14……………79
図版 6 地形面区分図……………17	a. B II-51ピット
図版 7 地形断面・地質層序……………19	b. B II-52ピット
	c. C I-51ピット
	d. C I-52ピット
	図版15……………80
II. 有矢野遺跡	a. C I-53ピット
	b. C II-51ピット
	c. C II-52ピット
図版 1 有矢野遺跡遺構配置図……………29	図版16……………81
図版 2……………50	a. C I-54ピット
a. B II-1 竪穴住居址状遺構	b. C I-55ピット
b. B II-2 住居址	図版17 C II-53ピット……………82
図版 3 B II-3 住居址……………51	図版18……………83
図版 4 B II-4 住居址……………52	a. C II-54・C II-55ピット
図版 5 B II-5 住居址……………53	b. C II-56ピット
図版 6 B II-6 住居址……………54	図版19……………84
図版 7 C II-1 住居址……………55	a. C II-57ピット
図版 8 C II-2 住居址……………56	b. C II-58ピット
図版 9 C II-3 住居址……………57	図版20……………85
図版10……………58	a. C II-59ピット
a. D III-1 住居址	b. C III-51ピット
b. D III-2 住居址	c. D II-51ピット
c. D III-3 住居址	図版21……………86
図版11 D IV-1 住居址……………59	a. D III-51ピット
図版12……………60	

b. DⅢ-52ピット	〔BⅡ-3住居址〕
c. DⅢ-53ピット	図版31 遺構内の出土遺物 (3)…………… 96
図版22……………87	〔BⅡ-3・BⅡ-5住居址〕
a. DⅢ-54ピット	図版32 遺構内の出土遺物 (4)…………… 97
b. DⅢ-55ピット	〔BⅡ-5・CⅡ-1・CⅡ-2・DⅢ-1・DⅢ-2住居址〕
c. DⅢ-56ピット	図版33 遺構内の出土遺物 (5)…………… 98
図版23……………88	〔DⅢ-3住居址〕
a. DⅣ-51ピット	図版34 遺構内の出土遺物 (6)…………… 99
b. DⅣ-52ピット	〔DⅣ-1住居址〕
c. DⅣ-53ピット	図版35 遺構内の出土遺物 (7)……………100
図版24……………89	〔DⅣ-1住居址〕
a. DⅣ-54ピット	図版36 遺構内の出土遺物 (8)……………101
b. DⅣ-55ピット	〔DⅣ-1住居址〕
c. DⅣ-56ピット	図版37 遺構内の出土遺物 (9)……………102
d. DⅣ-57ピット	〔EⅣ-3竪穴状遺構, BⅡ-51・BⅡ-52・C1-52ピット〕
図版25……………90	図版38 遺構内の出土遺物 (10)……………103
a. EⅢ-51ピット	〔CⅠ-53・CⅠ-54・CⅠ-55ピット〕
b. EⅣ-51ピット	図版39 遺構内の出土遺物 (11)……………104
c. EⅣ-52ピット	〔CⅠ-55・CⅡ-54ピット〕
d. EⅣ-53ピット	図版40 遺構内の出土遺物 (12)……………105
図版26……………91	〔CⅡ-56・DⅣ-53・DⅣ-54ピット〕
a. EⅣ-54ピット	図版41 遺構内の出土遺物 (13)……………106
b. FⅣ-51ピット	〔DⅣ-54・DⅣ-55・DⅣ-57ピット〕
c. DⅣ-151埋甕	図版42 遺構内の出土遺物 (14)……………107
図版27……………92	〔EⅣ-52・FⅣ-51ピット〕
a. DⅡ-101陥し穴状遺構	図版43 遺構内の出土遺物 (15)……………108
b. DⅢ-101陥し穴状遺構	〔FⅣ-51ピット〕
c. EⅣ-101陥し穴状遺構	図版44 遺構内の出土遺物 (16)……………109
図版28 AⅡ-151溝……………93	〔AⅡ-151溝, DⅣ-151埋設土器遺構〕
図版29 遺構内の出土遺物 (1)……………94	図版45 遺構外の出土遺物 (1)……………113
〔BⅡ-2・BⅡ-3住居址〕	図版46 遺構外の出土遺物 (2)……………114
図版30 遺構内の出土遺物 (2)……………95	図版47 遺構外の出土遺物 (3)……………115

図版48 遺構外の出土遺物 (4)……………116	図版12 遺構内の出土遺物 (4)……………201 〔B I - 1 住居址〕
Ⅲ. 上の山 X 遺跡	図版13 遺構内の出土遺物 (5)……………202 〔B I - 1 住居址〕
図版1 上の山 X 遺構配置図……………177	図版14 遺構内の出土遺物 (6)……………203 〔B I - 1 住居址〕
図版2……………185 a ~ c · f . A II - 1 住居址 d · e . A II - 1 住居址カマド	図版15 遺構内の出土遺物 (7)……………204 〔B I - 1 住居址〕
図版3……………186 a . B I - 1 住居址 b . B II - 1 住居址	図版16 遺構内の出土遺物 (8)……………205 〔B I - 2 住居址〕
図版4 B I - 2 住居址……………187	図版17 遺構内の出土遺物 (9)……………206 〔B I - 2 住居址〕
図版5……………194 a · b . A I - 51ピット c ~ e . B I - 51 · B I - 52ピット	図版18 遺構内の出土遺物 (10)……………207 〔B I - 2 住居址〕
図版6……………195 a ~ c . A II - 51ピット d ~ f . B I - 51ピット	図版19 遺構内の出土遺物 (11)……………208 〔B I - 2 住居址〕
図版7……………196 a · b . B I - 54ピット c · d . B I - 55ピット e · f . B II - 51ピット	図版20 遺構内の出土遺物 (12)……………209 〔B I - 2 · B II - 1 住居址〕
図版8……………197 a ~ c . A II - 101陥し穴状遺構 d · e . B I - 101陥し穴状遺構 f · g . B I - 102陥し穴状遺構	図版21 遺構内の出土遺物 (13)……………210 〔B I - 51ピット〕
図版9 遺構内の出土遺物 (1)……………198 〔A I - 1 住居址〕	図版22 遺構内の出土遺物 (14)……………211 〔B I - 51 · B I - 53 · B I - 54 · B II - 51ピット〕
図版10 遺構内の出土遺物 (2)……………199 〔A I - 1 住居址〕	図版23 遺構外の出土遺物 (1)……………214
図版11 遺構内の出土遺物 (3)……………200 〔A I - 1 住居址 · A I - 51ピット〕	図版24 遺構外の出土遺物 (2)……………215

写真図版目次

<p>Ⅱ. 有矢野遺跡</p> <p>写真図版 1 126</p> <p style="padding-left: 2em;">a. 遺跡遠景</p> <p style="padding-left: 2em;">b. BⅡ-1 住居址状遺構</p> <p>写真図版 2 127</p> <p style="padding-left: 2em;">a・b. BⅡ-2 住居址</p> <p style="padding-left: 2em;">c. BⅡ-2 住居址炉</p> <p>写真図版 3 128</p> <p style="padding-left: 2em;">a・b. BⅡ-3 住居址</p> <p>写真図版 4 129</p> <p style="padding-left: 2em;">a・b. BⅡ-3 住居址炉</p> <p style="padding-left: 2em;">c. BⅡ-3 住居址</p> <p>写真図版 5 130</p> <p style="padding-left: 2em;">a・b. BⅡ-4 住居址</p> <p>写真図版 6 131</p> <p style="padding-left: 2em;">a・b. BⅡ-5 住居址</p> <p style="padding-left: 2em;">c・d. BⅡ-5 住居址炉</p> <p>写真図版 7 132</p> <p style="padding-left: 2em;">a・b. BⅡ-6 住居址</p> <p>写真図版 8 133</p> <p style="padding-left: 2em;">a～c. BⅡ-6 住居址焼土</p> <p>写真図版 9 134</p> <p style="padding-left: 2em;">a・b. CⅡ-1 住居址</p> <p style="padding-left: 2em;">c・d. CⅡ-1 住居址炉</p> <p>写真図版 10 135</p> <p style="padding-left: 2em;">a. CⅡ-2 住居址</p> <p style="padding-left: 2em;">b・c. CⅡ-2 住居址炉</p> <p>写真図版 11 136</p>	<p>a・b. CⅡ-3 住居址</p> <p>c. CⅡ-3 住居址焼土</p> <p>写真図版 12 137</p> <p style="padding-left: 2em;">a～c. DⅢ-1・DⅢ-2・DⅢ-3 住居址</p> <p>写真図版 13 138</p> <p style="padding-left: 2em;">a～e. DⅢ-3 住居址カマド</p> <p style="padding-left: 2em;">f. DⅢ-3 住居址貯蔵穴</p> <p>写真図版 14 139</p> <p style="padding-left: 2em;">a・b. DⅣ-1 住居址</p> <p style="padding-left: 2em;">c. DⅣ-1 住居址炉</p> <p style="padding-left: 2em;">d. DⅣ-1 住居址埋設土器</p> <p>写真図版 15 140</p> <p style="padding-left: 2em;">a. EⅣ-1・EⅣ-2 住居址</p> <p style="padding-left: 2em;">b・c. EⅣ-1・EⅣ-2 住居址炉</p> <p>写真図版 16 141</p> <p style="padding-left: 2em;">a・b. EⅣ-3 住居址状遺構</p> <p>写真図版 17 142</p> <p style="padding-left: 2em;">a・b. BⅡ-51ピット</p> <p style="padding-left: 2em;">c. BⅡ-52ピット</p> <p style="padding-left: 2em;">d・e. CⅠ-51・CⅠ-52ピット</p> <p>写真図版 18 143</p> <p style="padding-left: 2em;">a・b. CⅠ-53ピット</p> <p style="padding-left: 2em;">c・d. CⅠ-54ピット</p> <p style="padding-left: 2em;">e・f. CⅠ-55ピット</p> <p>写真図版 19 144</p> <p style="padding-left: 2em;">a・b. CⅡ-51ピット</p> <p style="padding-left: 2em;">c・d. CⅡ-52ピット</p> <p style="padding-left: 2em;">e・f. CⅡ-53ピット</p> <p>写真図版 20 145</p>
---	---

a・b. CⅡ-54・CⅡ-55ピット	写真図版29	154
c・d. CⅡ-56ピット	a. FⅣ-51ピット	
写真図版21	b・c. CⅡ-101陥し穴状遺構	
a～c. CⅡ-57・CⅡ-58ピット	写真図版30	155
写真図版22	a・b. DⅢ-101陥し穴状遺構	
a・b. CⅡ-59ピット	c・d. EⅣ-101陥し穴状遺構	
c・d. CⅢ-51ピット	写真図版31	156
e. DⅡ-51ピット	a・b. AⅡ-151溝	
写真図版23	c. DⅣ-151埋甕	
a・b. DⅢ-51ピット	写真図版32 遺構内の出土遺物 (1)	157
c・d. DⅢ-52ピット	〔BⅡ-3住居址〕	
e・f. DⅢ-53ピット	写真図版33 遺構内の出土遺物 (2)	158
写真図版24	〔BⅡ-5・DⅢ-2・DⅢ-3住居址〕	
a・b. DⅢ-54ピット	写真図版34 遺構内の出土遺物 (3)	159
c・d. DⅢ-55ピット	〔DⅢ-3・DⅣ-1住居址. CⅡ-56ピット〕	
e・f. DⅢ-56ピット	写真図版35 遺構内の出土遺物 (4)	160
写真図版25	〔DⅣ-53・EⅣ-52ピット〕	
a・b. DⅣ-51ピット	写真図版36 遺構内の出土遺物 (5)	161
c. DⅣ-52ピット	〔EⅣ-52ピット. DⅣ-151埋設土器遺構. BⅡ-2住居址〕	
d・e. DⅣ-53ピット	写真図版37 遺構内の出土遺物 (6)	162
写真図版26	〔BⅡ-3・BⅡ-5・CⅡ-1・CⅡ-2・DⅢ-1・DⅢ-2住居址〕	
a・b. DⅣ-54ピット	写真図版38 遺構内の出土遺物 (7)	163
c・d. DⅣ-55ピット	〔DⅢ-3・DⅣ-1住居址〕	
e・f. DⅣ-56ピット	写真図版39 遺構内の出土遺物 (8)	164
写真図版27	〔DⅣ-1住居址〕	
a・b. DⅣ-57ピット	写真図版40 遺構内の出土遺物 (9)	165
c・d. EⅢ-51ピット	〔DⅣ-1住居址. EⅣ-3竪穴状遺構. BⅡ-51・BⅡ-52ピット〕	
e・f. EⅣ-51ピット	写真図版41 遺構内の出土遺物 (10)	166
写真図版28	〔CⅠ-52・CⅠ-53・CⅠ-54・CⅠ-55ピット〕	
a・b. EⅣ-52ピット	写真図版42 遺構内の出土遺物 (11)	167
c・d. EⅣ-53ピット	〔CⅠ-55・CⅡ-54・CⅡ-56ピット〕	
e・f. EⅣ-54ピット	写真図版43 遺構内の出土遺物 (12)	168

〔DⅣ-53・DⅣ-54ピット〕	写真図版10	231
写真図版44 遺構内の出土遺物 (13)	a・b. AⅠ-51ピット	
〔DⅣ-55・DⅣ-57・EⅣ-52・FⅣ-51ピット〕	c・d. AⅡ-51ピット	
写真図版45 遺構内の出土遺物 (14)	e・f. BⅠ-51・BⅠ-52ピット	
〔FⅣ-51ピット, AⅡ-151溝〕	写真図版11	232
写真図版46 遺構外の出土遺物 (1)	a・b. BⅠ-51・BⅠ-52ピット	
写真図版47 遺構外の出土遺物 (2)	c・d. BⅠ-53ピット	
写真図版48 遺構外の出土遺物 (3)	e・f. BⅠ-54ピット	
	写真図版12	233
Ⅲ. 上の山X遺跡	a・b. BⅠ-55ピット	
	c・d. BⅡ-51ピット	
写真図版1 遺跡遠景	e・f. AⅡ-101陥し穴状遺構	
写真図版2	写真図版13	234
a・b. AⅡ-1住居址	a・b. BⅠ-101陥し穴状遺構	
写真図版3	c・d. BⅠ-102陥し穴状遺構	
a～c. AⅡ-1住居址カマド	写真図版14 遺構内の出土遺物 (1)	235
写真図版4	〔AⅠ-1住居址〕	
a. BⅠ-1住居址, BⅠ-51・BⅠ-52ピット	写真図版15 遺構内の出土遺物 (2)	236
b. BⅠ-1住居址	〔AⅠ-1住居址〕	
c・d. BⅠ-1住居址地床炉	写真図版16 遺構内の出土遺物 (3)	237
写真図版5	〔AⅠ-1住居址, AⅠ-51ピット〕	
a～d. BⅠ-1住居址	写真図版17 遺構内の出土遺物 (4)	238
写真図版6	〔BⅠ-1住居址〕	
a・b. BⅠ-2住居址	写真図版18 遺構内の出土遺物 (5)	239
写真図版7	〔BⅠ-1住居址〕	
a～c. BⅠ-2住居址炉	写真図版19 遺構内の出土遺物 (6)	240
d・e. BⅠ-2住居址	〔BⅠ-1住居址〕	
写真図版8	写真図版20 遺構内の出土遺物 (7)	241
a・b. BⅡ-1住居址	〔BⅠ-2住居址〕	
写真図版9	写真図版21 遺構内の出土遺物 (8)	242
a・b. BⅡ-1住居址炉	〔BⅠ-2住居址〕	
c. BⅡ-1住居址入口状施設	写真図版22 遺構内の出土遺物 (9)	243

〔B I - 2 住居址〕

写真図版23 遺構内の出土遺物 (10)…………… 244

〔B II-1住居址. B I-51・B I-53ピット〕

写真図版24 遺構内の出土遺物 (11)…………… 245

〔B I-53・B I-54・B II-51ピット〕

写真図版25 遺構外の出土遺物…………… 246

表 目 次

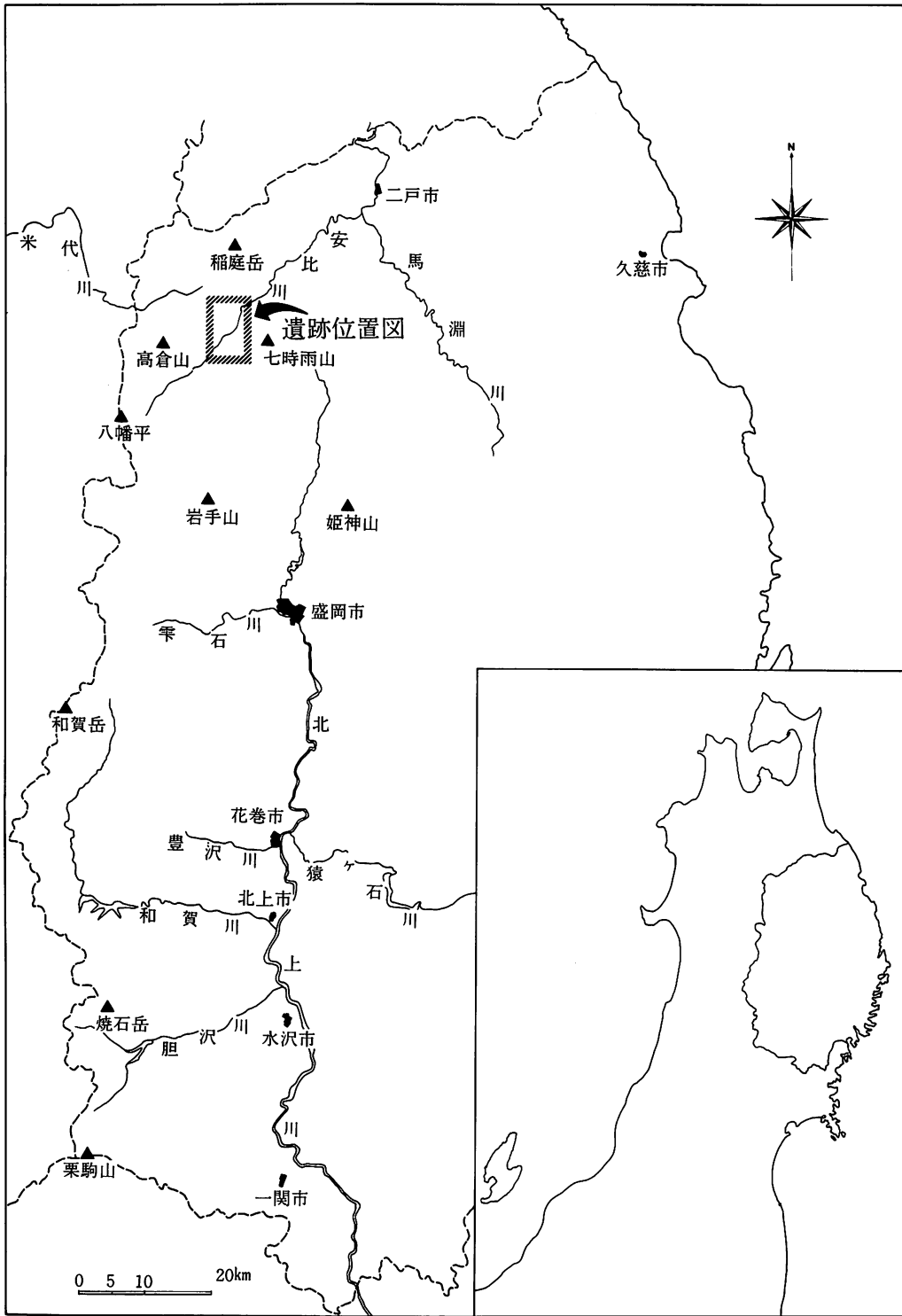
Ⅱ. 有矢野遺跡

表 1	有矢野遺跡遺構名訂正表	122
表 2	有矢野遺跡出土石器計測表	123
表 3	有矢野遺跡 ¹⁴ C 試料測定結果表	123

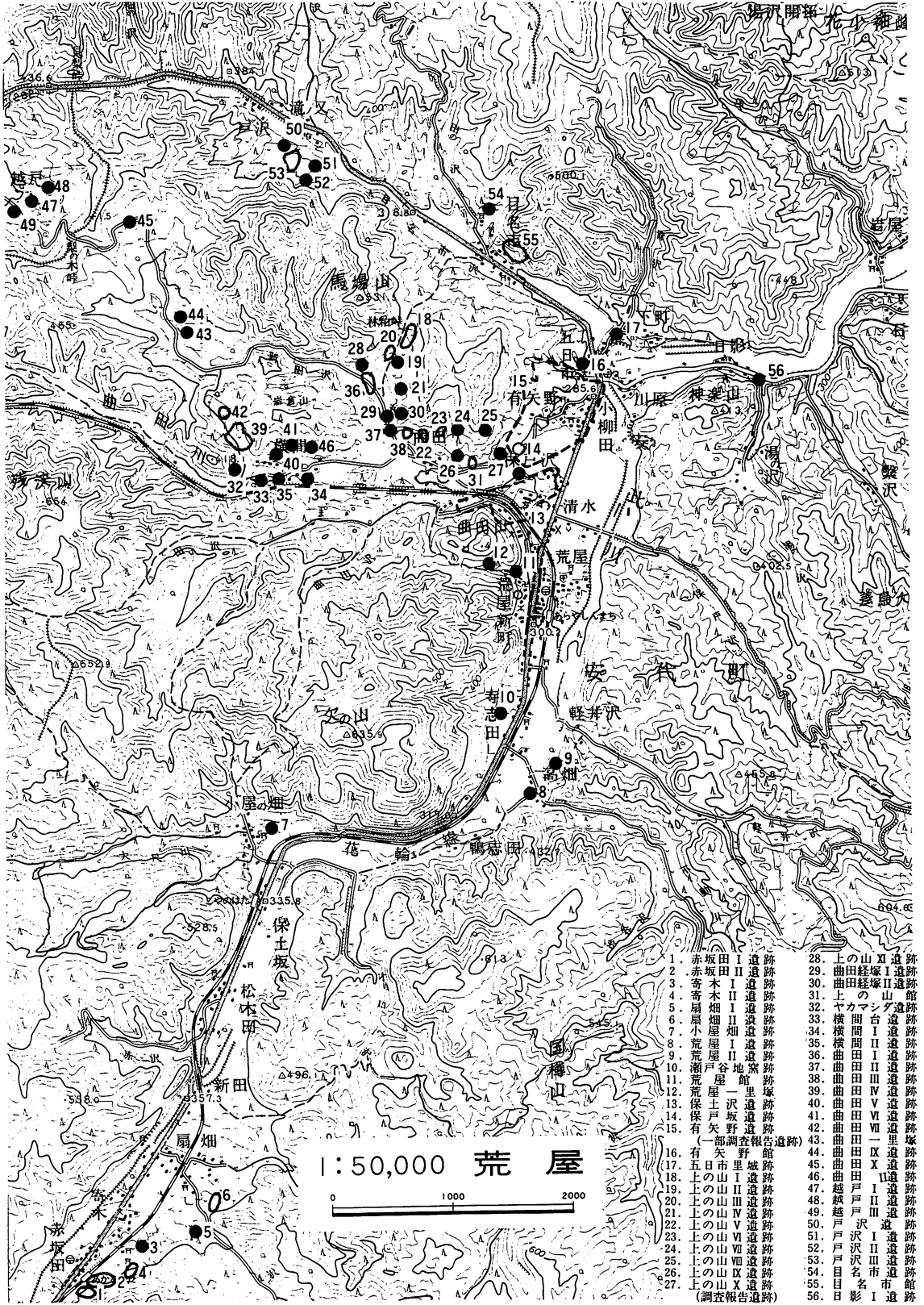
Ⅲ. 上の山 X 遺跡

表 1	上の山 X 遺跡遺構名訂正表	218
表 2	上の山 X 遺跡出土石器計測表	219
表 3	上の山 X 遺跡 ¹⁴ C 試料測定結果表	219

I. 序 論



図版 1 岩手県全体図



図版2 遺跡位置図

1 調査に至る経過

東北縦貫自動車道建設に関連する発掘調査は、昭和47年度から県教委社会教育課によって開始された。調査区は、一関市から盛岡市までの約90km間で、用地取得の先行した金ヶ崎町、北上市、花巻市に所在する遺跡が対象となった。しかし調査の進行と工事工程との間に大幅な差のある事や、東北新幹線関連の発掘調査も10月から開始される等の事情もあって調査体制の制の整備拡充が急務となり昭和48年4月に文化課を新設し、発掘調査体制の強化をはかった。

しかし、東北縦貫自動車道、東北新幹線、御所ダム、バイパス建設等、県内各地で大型開発事業が増大すると共に、その対応のための野外調査が先行し、調査結果の整理作業や報告書刊行が滞る状態となっていた。この事態の解決と恒久的な調査体制確立を図るため、昭和52年4月に財団法人岩手県埋蔵文化財センターが発足した。これによってこれまで県教委が行ってきた発掘調査は当センターが担当することとなった。

以上の経緯から東北縦貫自動車道西根インター以北における発掘調査は昭和53年度より当センターが道路公団との委託契約にもとづいて実施されている。

西根インター以北における調査対象遺跡の分布調査は文化課によって実施され、昭和48年度に2km巾で、さらに、49年度50年度とそれぞれ路線ルート確定までの段階で、500m巾、路線巾について行なわれた。その間、安代町所在の越戸館が道路公団との協議の結果、路線ルート変更することによって現状保存することができた。

昭和53年度における発掘調査は、第4次施工区間の西根町、松尾村、安代町に所在する5遺跡が対象となり、西根町崩石Ⅱ遺跡、松尾村野駄遺跡、寄木遺跡については調査は完了した。

昭和54年度は前年度からの継続調査となった松尾村長者屋敷遺跡、安代町荒屋Ⅱ遺跡と新たに安代町赤坂田Ⅰ、赤坂田Ⅱ、安代寄木、扇畑Ⅰ、Ⅱ、荒屋Ⅰ、有矢野、上の山Ⅹ、越戸Ⅱ遺跡の11遺跡が調査対象となり、このうち安代町赤坂田Ⅰ、Ⅱ、扇畑Ⅱの遺跡については、粗掘遺構検出のみの調査とし、他の遺跡については調査を完了した。安代寄木遺跡では遺構を検出できなかった。

昭和55年度は、前年度精査を残した安代町赤坂田Ⅰ、Ⅱ、扇畑Ⅱ遺跡の継続調査と、安代町上の山館、上の山Ⅶ、上の山Ⅺ、曲田Ⅰ遺跡の調査を行ない、松尾村ではインター設置との関連で、53年度調査した野駄遺跡にかかわる路線拡幅部分についても調査した。これらの調査をもって東北縦貫自動車道青森線関係における本県分の発掘調査は終了の見込みであったが、曲田Ⅰ遺跡の範囲が更に500㎡西に広がることが確実となり、56年度継続調査となった。

2. 調査方法と室内整理の方法

(1) 調査方法

① 座標軸の設定 (図版 3・4)

有矢野遺跡・上の山 X 遺跡の発掘調査において、次のように座標軸の設定を行なった。2 遺跡とも東北縦貫自動車道建設予定地内の基準測量杭をもとに下記の方法で、調査対象区域内に任意の 2 点を基準点として設定した。この 2 点のうち一方を座標原点とした。設定した基準点間を結ぶ直線と、座標原点を通りこれに直交する直線を座標軸とした。調査対象区域全体を 30 m ごとに大区画し、これらに対して東西方向には西から A・B・C……のアルファベットをふり、南北方向には南から I・II・III……のローマ数字を付した。地区名は両者の組合せによって、例えば A I 区・B II 区……のように表わした。また 30 m の大区画を東西方向および南北方向にそれぞれ 10 等分し、3 m×3 m のグリッドを設定した。これらのグリッドには西から a～j のアルファベットをふり、南からは 0～9 のアラビア数字を付した。グリッド名は、以上のアルファベット・数字の組合せによって、例えば A I a 0・B II b 1……のように表わした。

● 有矢野遺跡 安代インターチェンジ料金所——青森線減速車線を結ぶ D ランプの中心杭のうちから、S T A. ④ 4 + 60 と S T A. ④ 4 + 80 (座標原点) の 2 点を基準点として選定した。この 2 点はどちらも調査対象区域内に存在するものである。座標中軸線の方位は、N-90°28'47"-W を示す。

● 上の山 X 遺跡 調査対象区域外にある自動車道中心杭の S T A. 10+00 および S T A. 10+20 の 2 点を仮基準点として選定した。この 2 点をもとにスタジア測量によって、調査対象区域内に基準点を次のように設定した。仮基準点とした 2 点のうち S T A. 10+20 を仮原点とし、もう一つの点 S T A. 10+00 とを結ぶ直線から反時計まわりに 137°30'00" の方向を定めた。そしてこの方向の延長線上で仮原点からの水平距離 43.5 m の位置に座標原点を設定した。さらにまたこの座標原点から水平距離 15 m・方位 N-90°-E の位置にもう一つの基準点を設定した。

② 粗掘り・遺構検出

粗掘りの段階において遺構検出面までの土層の除去を上の山 X 遺跡では人力によって行なったが、有矢野遺跡の場合には短期間に土層を除去するために重機 (パワー・シャベル) を 1 台導入した。重機によって土層を除去した後は、作業員を投入して遺構の有無を確認した。そして遺構がないことが判明した区画については土捨場にあてた。この一連の作業をほぼ大区画ごとに行ない、最終的に全調査対象区域について遺構の有無を確認した。

遺構が発見された場合には、その平面形の把握に努めた。検出された遺構にはその種別に関係なく大区画単位内で、例えばB I - 1・B I - 2……のように通し番号の名称を与えた。しかし室内整理作業の段階でこれらの遺構名をその種別ごとに編成しなおし、大区画単位で、住居址は1～・ピット類は51～・陥し穴状遺構は101～・その他の遺構は151～と一連の番号を付した名称に改めた。そのため新旧の遺構名を各遺跡ごとに「遺構名訂正表」として末尾に掲げた。

③ 精査方法

住居址は4分法、ピット類・陥し穴状遺構は2分法を原則として、移植ベラおよび竹ベラを使用して遺構精査を行なった。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を行なった。しかし住居址やピット類の中で埋土が単層で構成されているものについては、その性状をField Cardに記載しただけで土層断面図の作成は省略した。出土遺物の取り上げは次のように行なった。遺構内のは遺構名・出土位置・出土レベルを、また遺構外のは地区名あるいはグリッド名とともに出土層位を記入の上取り上げた。これらの出土遺物の洗浄・注記を発掘現場のプレハブにおいて野外作業と並行して行なった。

④ 実測方法

2遺跡ともグリッドの基準杭にトランシットを据え基準線を起こす簡易的な遣り方実測を行なった。遺構の実測図は $\frac{1}{50}$ の縮尺を基本とし、炉や埋設土器などはその状況に応じて $\frac{1}{10}$ の縮尺とした。遺構のレベル計測は50cm間隔で行なったが、必要に応じて計測の間隔を細かくした。遺構の実測・埋土土層注記はすべて作業員の中から養成した実測班が行なった。実測班は計測者・作図者の2人1組とし、ほとんど女子作業員で構成された。調査員の実測作業における任務は、実測班に対する指示とその点検のみに限った。

⑤ 写真撮影

どちらの遺跡においても6×7cm判カメラ1台と35mm判カメラ2台を1セットとして使用した。写真撮影は現場で養成したカメラマン・大森公世が主として担当した。撮影にあたっては当埋文センター作成の「撮影カード」を使用し、写真整理の際の資料とした。

⑥ その他

調査員はフィールドにおいては原則として発掘調査作業内容の指示・点検と遺跡特に遺構からの情報収集の任に当たることを、調査担当者間で確認しあつた。情報収集にあたっては当埋文センター作成のField Cardを使用し、日々の観察事項を詳細に記録することに努めた。2遺跡の実際の野外作業進行上、作業員に対する指示事項に混乱をきたさないようにするため、調査員間で各段階別の指示責任者を次のように決めた。

- 有矢野遺跡 調査全体の総轄・粗掘り・遺構検出……小平、遺構精査……種市、遺構

実測……………四井。

●上の山Ⅹ遺跡 調査全体の総轄・粗掘り・遺構検出……………種市、遺構精査……………四井、遺構実測……………小平。

(2) 室内整理の方法

室内整理作業は、次の様な方法で行なった。

① 作業内容及び分担

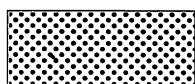
整理作業は、遺構図面のトレースと遺物の仕分け、復元を並行して進め、その後に遺物の実測、拓本、トレース、図版作成と順次行なった。これらの作業は、調査員の指示・点検のもとに室内整理協力員が担当した。

② 遺構の図面

遺構配置図は、発掘調査時に作成した平面図を基に $\frac{1}{200}$ ～ $\frac{1}{500}$ の縮尺図を作成した。各遺構の図は、発掘調査時に作成した実測図をトレースし、それを以下の縮尺で載せた。

住居址の平面図・断面図： $\frac{1}{40}$ ～ $\frac{1}{60}$ ・不定縮尺、炉の断面図： $\frac{1}{5}$ ～ $\frac{1}{6}$ 、ピット類： $\frac{1}{40}$ ～ $\frac{1}{60}$ 、陥し穴状遺構・その他： $\frac{1}{40}$ ～ $\frac{1}{60}$ ・不定縮尺。

これら各遺構の図には、焼土および白色細粒浮石を図上で明確にするため、スクリーン・トーンを使用した。その指示は次の通りである。なお、礫は「G」、土器は「Pot」、柱穴は「P₁、P₂～」で示した。



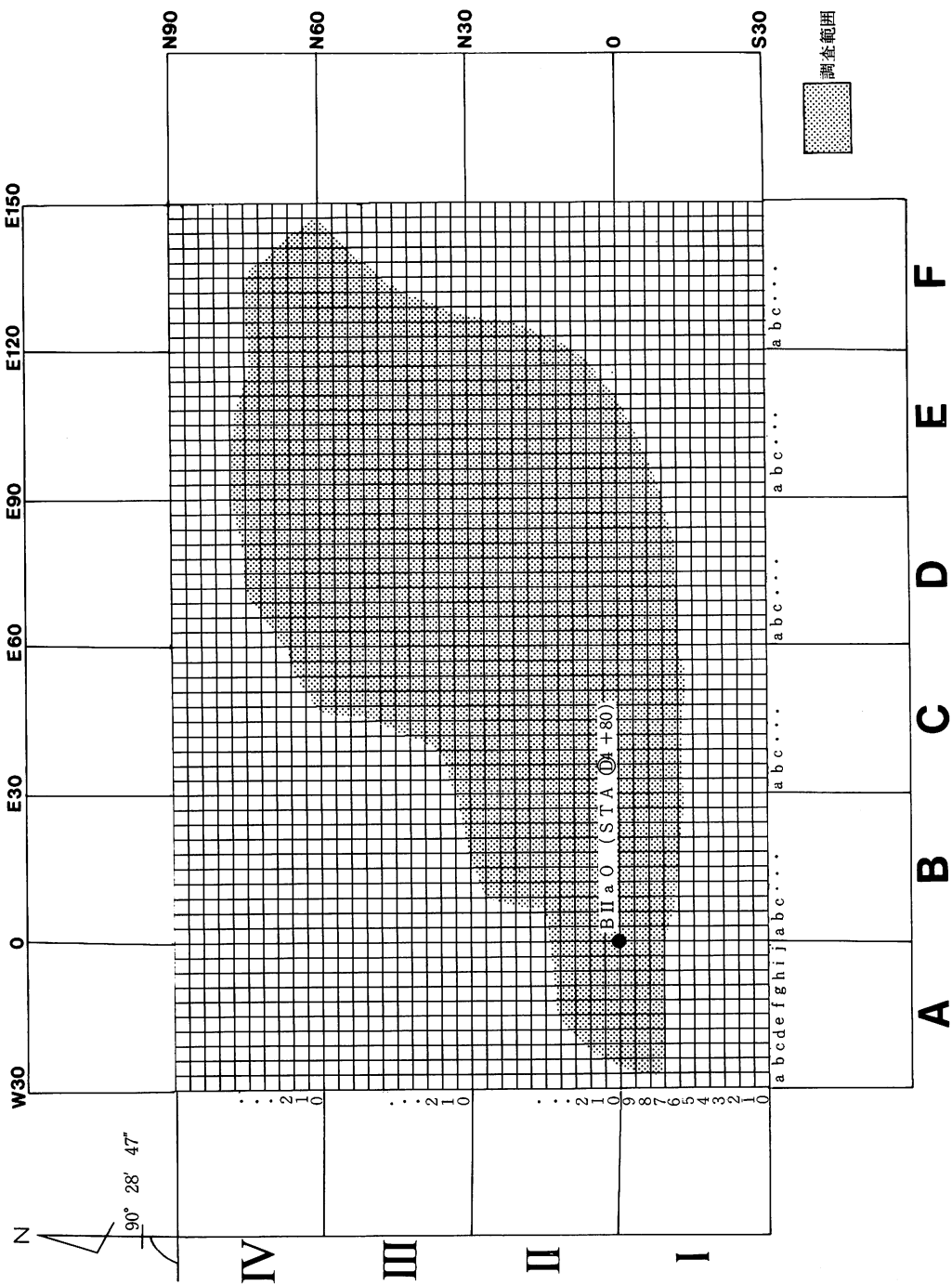
焼 土



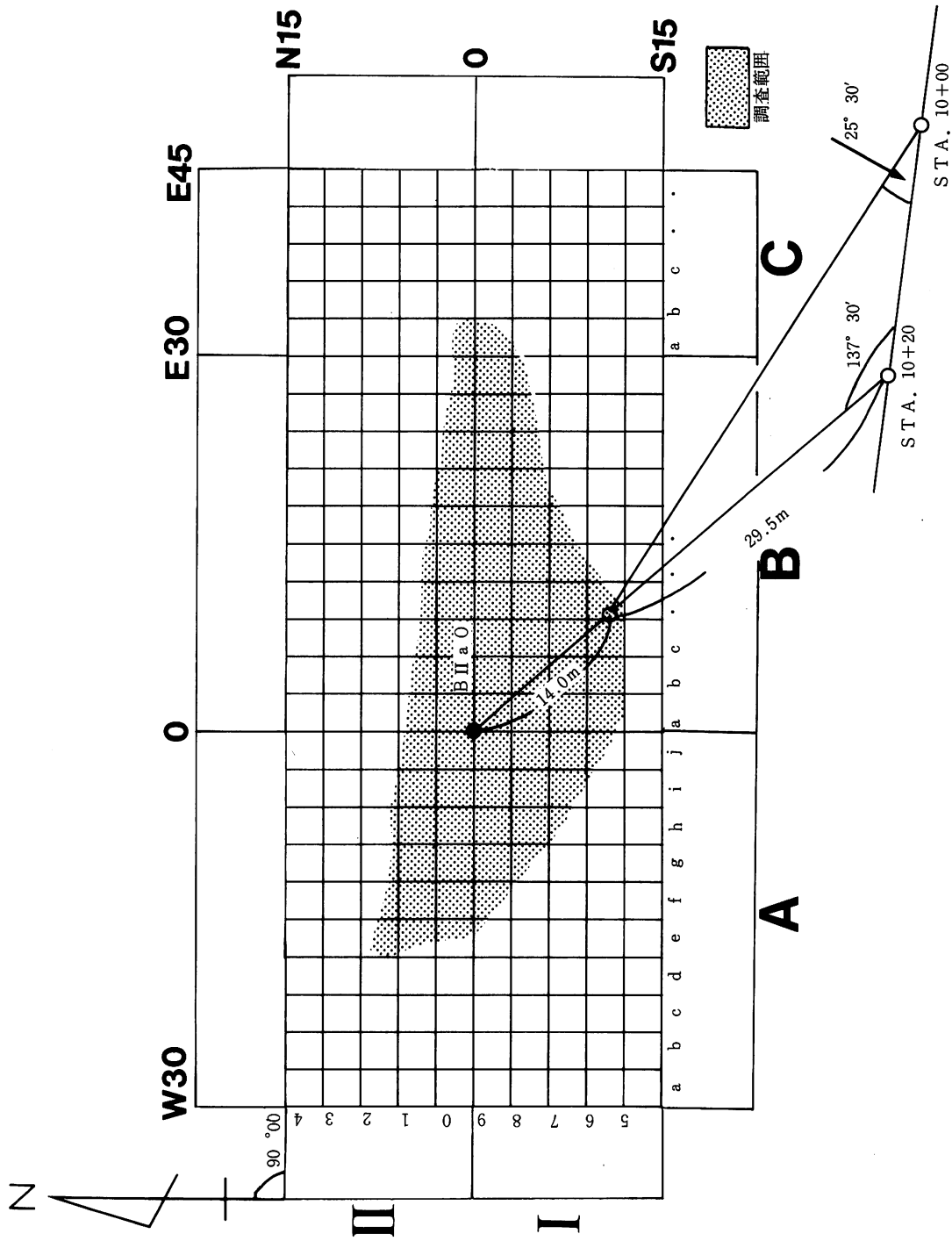
白色細粒浮石

③ 土器と石器

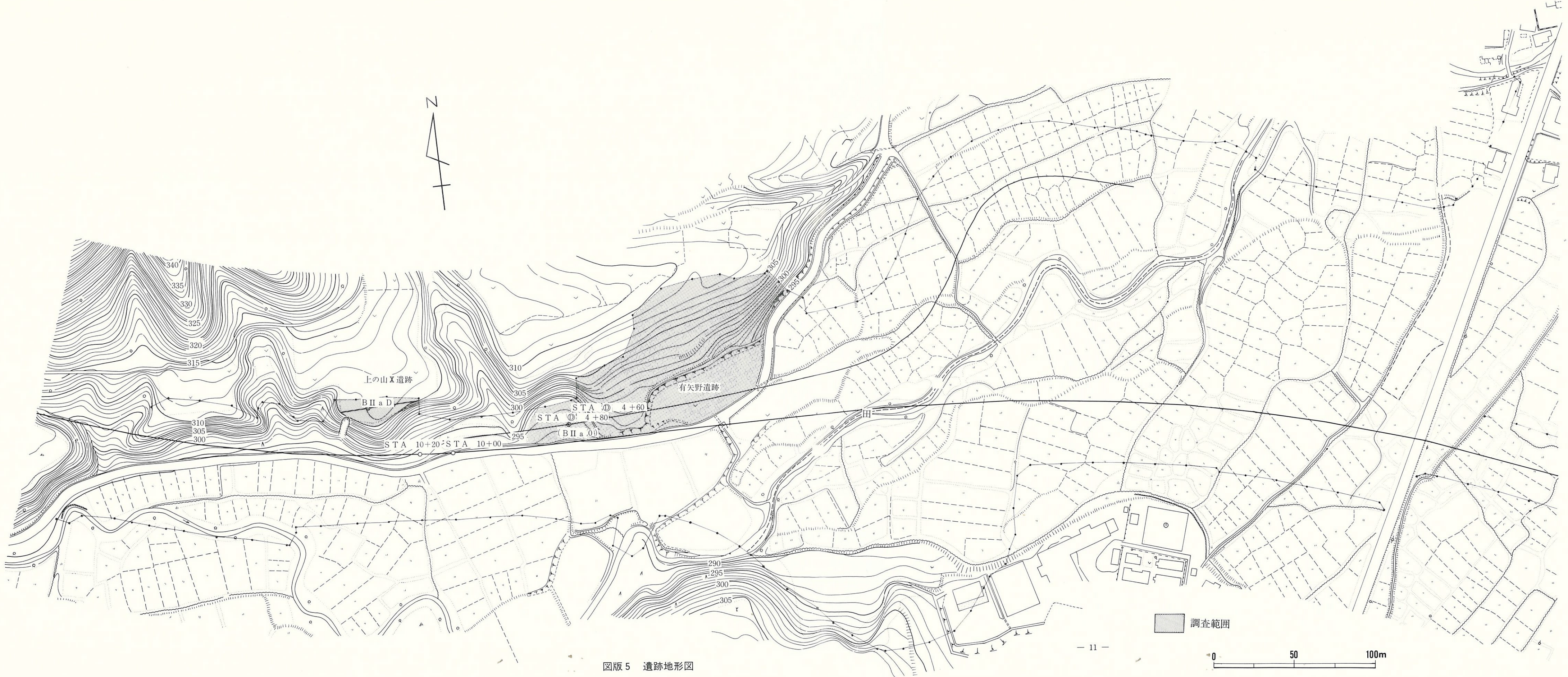
復元した土器と石器を実測し $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ で載せた。他の土器片は、文様を有する破片を中心に分類し拓影を $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ で示した。実測図の中で上部に記載した数値は、口径・底径・器高を示す。なお、—は計測不可能なものを示し、()の数字は、残存部からの推定値である。



図版3 有矢野遺跡グリッド配置図



図版 4 上の山 X 遺跡グリッド配置図



図版 5 遺跡地形図

3. 遺跡と立地と環境

(1) 地形・地質

安代町では、1975年に保土沢遺跡、1978～1979年に荒屋Ⅱ遺跡、1979年に扇畑Ⅰ遺跡・荒屋Ⅰ遺跡・有矢野遺跡・上の山Ⅹ遺跡・越戸Ⅱ遺跡、1979年～1980年に赤坂田Ⅰ遺跡・赤坂田Ⅱ遺跡・扇畑Ⅱ遺跡、1980年に上の山Ⅶ遺跡・上の山館遺跡、1980年～1981年に上の山Ⅺ遺跡・曲田Ⅰ遺跡が発掘調査されている。

町内の遺跡に関する調査資料は、「岩手県遺跡分布図」と「保土沢遺跡報告書」それに東北縦貫自動車道関連遺跡発掘に伴う上記の扇畑Ⅰ遺跡・荒屋Ⅰ遺跡・荒屋Ⅱ遺跡・越戸Ⅱ遺跡の各報告書及び現地説明会資料である。

本報告書では、安代町の地形概観と各遺跡の立地・周辺環境を記すに止め、上記各遺跡の相互の立地関係は、後日他の報告書で述べられるので、ここでは特に触れていない。

〈水系と流域〉

安代町の水系は、安比川（馬淵川の支流）と米代川の2系統によって構成されている。町域内における両河川の流域割合は、それぞれ約5割を占めている。以下その本流流域について地形を概観する。

安比川は、八幡平黒谷地湿原の北方にその源を發し、安比岳（1493m）と茶臼岳北方の恵比須森（1496m）との間に浸蝕谷を形成しつつ北流する。その後安比高原を開析して急峻な谷間を作った川は、細野及び豊畑付近で大規模な扇状地を形成し、さらに北流を続ける。その東方には深沢山（690.4m）・御月山（954.4m）・国樽山（580.0m）・七時雨山（1060m）が、西方には黒森山（972.0m）・大尺山（741.2m）などの山地が連なっている。赤坂田付近の東岸部には、川からの比高38m前後の河岸段丘が、長さ約700mの範囲で後背山地から張り出している。この段丘面上に赤坂田Ⅰ遺跡が立地している。さらにその北方の寄木・扇畑付近では、支流の深沢・見岳川・新田沢によって形成された複合扇状地が連なっており、この扇面上に赤坂田Ⅱ遺跡・扇畑Ⅰ遺跡・扇畑Ⅱ遺跡が立地している。小屋の畑付近では、西方に比高20m前後の段丘が発達している。川はこの付近で東へ向きを変え、屈曲し高畑方面に流れた後、高畑付近で再び流れを大きく変え、北方の荒屋新町へと流れていく。

高畑付近には、合流する不動川と軽井沢との関連によって形成された段丘面が、3段に発達している。そのうちの最上位の段丘面上に荒屋Ⅱ遺跡が、中位の段丘面上に荒屋Ⅰ遺跡が、それぞれ立地している。荒屋新町付近から北方の五日市付近にかけて、やや広い沖積地が広がっている。この沖積地に西方から流れ込む曲田川と目名市沢の河岸部には、いくつかの段丘群が

発達しており、これらの段丘面上に多くの遺跡が立地している。この中の曲田川左岸に発達している段丘上に、有矢野遺跡・上の山Ⅹ遺跡が立地している。沖積地をぬけ、五日市付近で東方に流向を変えた安比川は、石神・中佐井付近で右岸に比高35m前後の段丘を形成し、蛇行を続け浄法寺町方面に流れ、やがて一戸町鳥越付近で馬淵川に合流する。

一方米代川は、青森県田子町と安代町を境する分水嶺付近に根石川としてその源を発する。周囲には、北方に大倉森(896.9m)、東方に稲庭岳(1078m)がそびえている。南流する米代川は、長者前・栗木田をぬけ、やがて田山付近にさしかかる。ここで東方から流れ込む矢神山と合流する。その周辺部には、やや広い沖積地が形成されている。その後、川は西方へ流向を変え国鉄花輪線沿いに、戸鎖・館市・兄畑と曲りくねりながら下る溪流(穿入曲流)となって秋田県鹿角市大里付近にぬけていく。

〈分水嶺・峠〉

安比川と米代川の水系を分ける分水嶺は、北から黒森(727.3m)～上の木(768.5m)～貝梨峠(450m)～梨木峠(476m)～残決山(651m)～大尺山(741.2m)～高倉山(1051.3m)～比山(1037.8m)～鍋越峠(710m)～野沢欠峠(792m)～桂久保山(902.5m)～安比岳(1493m)を結ぶ稜線である。この稜線上にはいくつかの鞍部がみられ、中で最も標高の低い部分は、貝梨峠付近と梨木峠付近である。

両峠付近では、上記の両水系が背反する形で流れ始まる最初の川の谷が、稜線付近まで深く入り込んでいる。その様子は、次の2つの状況の中にみることができる。貝梨峠付近では、安比川水系の日名市沢と米代川水系の矢神川が、分水嶺を境に東西へ流れており、梨木峠付近では、安比川水系の新田川と米代川水系の越戸川が、同様に分水嶺を境に東西へ流れている。その中で、前者より後者の河岸の谷の傾斜が、幾分緩やかであり、さらには峠付近の傾斜も緩やかである。前者の貝梨峠の場合、その傾斜は、20度以上30度未満であるのに比し、後者の梨木峠の場合、その傾斜は、急なところでも20度未満であり、多くは15度未満と緩やかである。この梨木峠の田山側の緩傾斜地に、越戸Ⅱ遺跡が立地する。

以上の事実からも示される様に、当地域の分水嶺の中にあって最も越えやすい条件を備えているのは、梨木峠であると云ってもよい。そのため、この付近を近世には「鹿角街道」が通っている。この「鹿角街道」は、南部藩領内に於ける脇街道であり、3本の街道の総称である。第一は、盛岡から寺田・荒屋・曲田・田山を經由して鹿角に至る街道、第二は、福岡から浄法寺を經由して荒屋の曲田に至る街道、第三は、三戸から田子を經由して鹿角に至る街道である。それよりも更にさかのぼった平安時代に既に『三代実録』元慶2年(878年)10月12日の条に、蝦夷討伐のため坂上好蔭が兵二千人を率いて流霞道(七時雨山道)から秋田営(秋田城)に至ると記されており、梨木峠は、この「流霞道」の通過区間であった可能性も十分予想すること

ができる。また、縄文時代にあつては、この沢沿いに多くの遺跡が分布することから、既にこの頃から、現在の秋田県北と岩手県北を結ぶ交通の要衝として機能していた様子が伺われる。この様なことから、安代町地域が、地形的にみて、古来北日本に於ける東西の交流の場としての要衝であったことをも推察することができる。

有矢野・上の山 X 遺跡の地形・地質

当遺跡付近は、安比川に曲田川が合流する地域であるため段丘の発達が良好である。さらには、曲田川河岸及びその支流の新田川河岸にも段丘の発達がみられる。これらの段丘面上には数多くの遺跡が分布している。

現在までのところ安比川流域の段丘区分に関する文献資料はほとんどない。そこで、遺跡の立地説明のため遺跡付近の段丘の地形面区分を試みた。もちろん、より正確な段丘区分を行うには、安比川流域全体にわたる検討を必要とするものであるが、今回の報告では、安代町他地域の観察資料との対比をもとに遺跡周辺部のみに限って記述する。高位から順に以下に記す通りである。(図版6)

A面： 有矢野遺跡・上の山 X 遺跡の載る面である。曲田川の左右の河岸及び曲田川が安比川に合流する地域の左岸に広く発達している。有矢野・五田市付近に於いては、曲田川と安比川がほぼ平行して北流する部分の左岸に広くみられる。東辺は段丘崖となり比高約13mで下位B面に移行する。一部浸蝕により緩斜面となる部分もある。西辺は後背山麓からの扇状地扇端によって被覆されている。ここの面全体が有矢野遺跡に指定されている部分であり、大規模な遺跡である。今回の調査区はこの南端部である。この南端部から小谷を隔てた西方に同一面が細長く続いており、ここに上の山 X 遺跡が位置し、さらには上の山館遺跡がある。保土沢付近に於いては、曲田山から北東に舌状に張り出す様にみられ、ここに保土沢遺跡が位置している。この部分の北東には下位B面が小規模に張り出しており、南東方向はC面北西方向はD面に接する。横間付近に於いては、曲田川に沿って後背山地が間近に張り出しているため、巾100m前後の細長い面として発達しているが、小谷によって断続される部分も多い。さらには堆積物の土石流等による移動によって面としてとらえにくい地域もある。右岸の面上には横間Ⅰ・Ⅱ遺跡、左岸には曲田Ⅵ・Ⅶ遺跡が載っている。曲田川と新田川の分岐点の北東付近にも小規模に分布しており、北西及び南東の端はA'面によって被覆されているため面の広がりには正確にとらえることはできない。

この面全体を概括してみると曲田川からの比高は20~24mとなっている。

A'面： A面と後背山麓の間にかつA面の山麓側一部を被覆する様に分布する面である。A

面相当の山麓崖錐性扇状地にあたる。標高305～340m付近に分布し、傾斜角7～8°の緩傾斜面である。有矢野・曲田の後背山麓及び馬場山(531.5m)の林粕峠南方、そして横間の南方で残丘状の小丘を隔てた谷頭状地形部に分布している。地形面区分布で示した様に、有矢野遺跡の一部・上の山Ⅳ・上の山Ⅵ・上の山Ⅶ・上の山Ⅺ・曲田Ⅰ等の遺跡が分布している。上の山Ⅶ遺跡付近では、この面が完全にA面を被覆しているものと思われる。

B面： 曲田川が広い沖積面に出る付近の南方の保土沢にわずかに分布する。西方は上位A面に接し、南・北・東方向は下位C面に囲まれる。全体としてA面から北東に舌状に張り出す形を呈している。標高295m～300mであり、A面との比高10m・C面との比高8mほどである。保土沢遺跡の一部がA面上から引き続いて位置する。

その他有矢野付近に於いてA面に貼り付く形で細長く分布すると思われるが、現在までの資料では明確にし得ない。

C面： 沖積古期面と考えられる。保土沢付近のA・B面を大きく囲むように分布しており、日本道路公団ボーリング資料によると砂礫によって構成されている。下位D面とは5～6mの比高である。現在までの資料では、遺跡の確認はない。

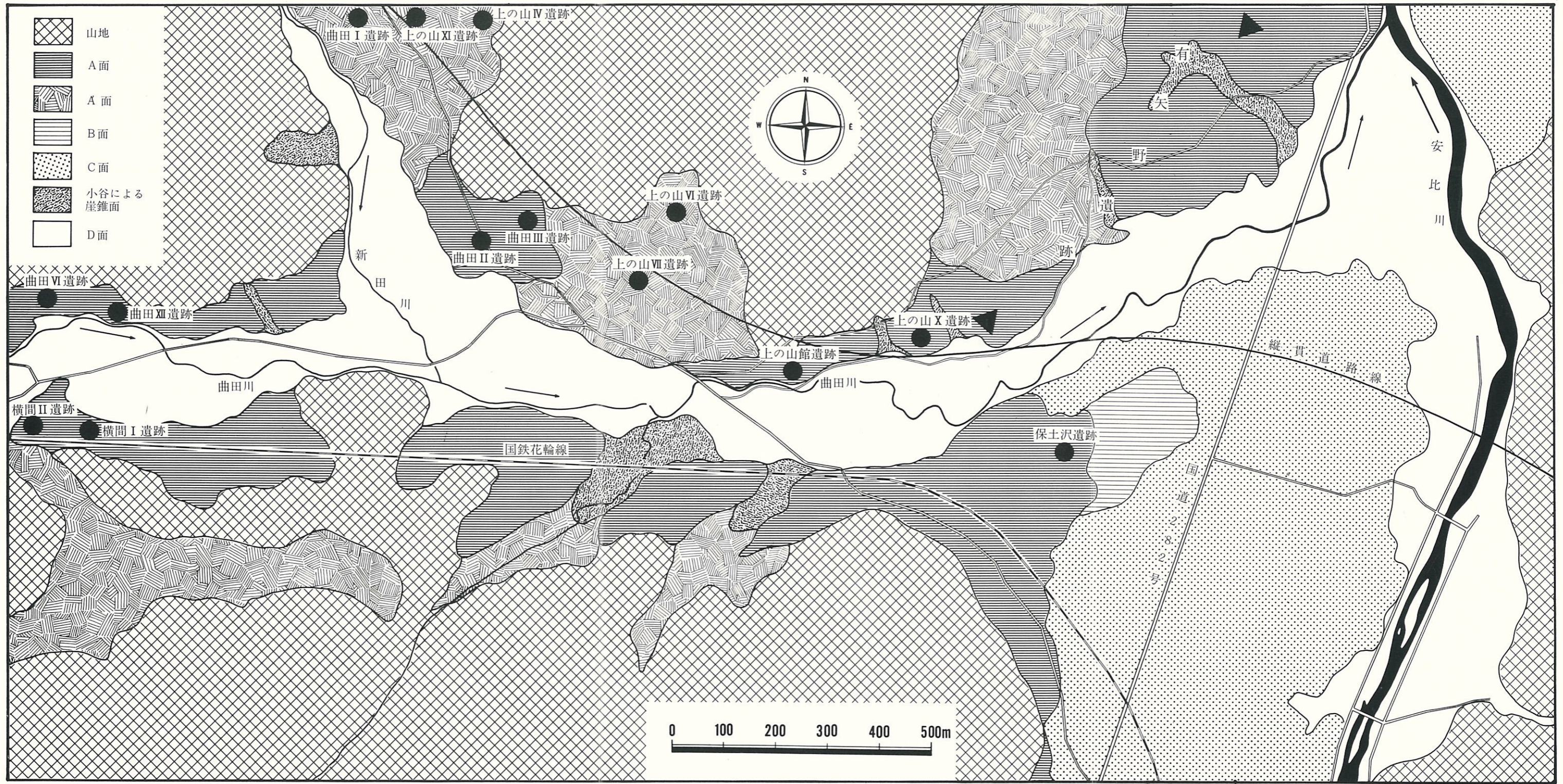
D面： 現沖積面であり、安比川・曲田川・新田川の河道に沿って分布しているが、小河川である曲田川・新田川の河道沿は、改田・畑地などによってその原形を明確にし得ない状態にある。

※ 有矢野・上の山Ⅹ遺跡地形断面図(含隣接地域)(図版7図)

- a. 上の山Ⅹ遺跡と保土沢遺跡は、曲田川を隔てた同一A面上に立地し、平安時代の遺構遺物に類似するものがある。
- b. 有矢野遺跡の南端一部の断面で調査区に相当する部分である。この部分は段丘崖の浸蝕により緩斜面となっている。
- c. 曲田山から安比川までの北東方向の断面であり、A・B・C・D面の段位差が明瞭に確認できる。
- d. 五田市小学校の位置する面はA面であり、有矢野遺跡に指定されている部分である。その山麓側に、山麓崖錐堆積物(A'面)が、被覆している。
- e. 上の山Ⅹ遺跡から有矢野遺跡全体の断面である。同一のA面であることが明瞭であり、安比川の下流方向への傾斜とこの面の傾斜は、ほぼ同一である。

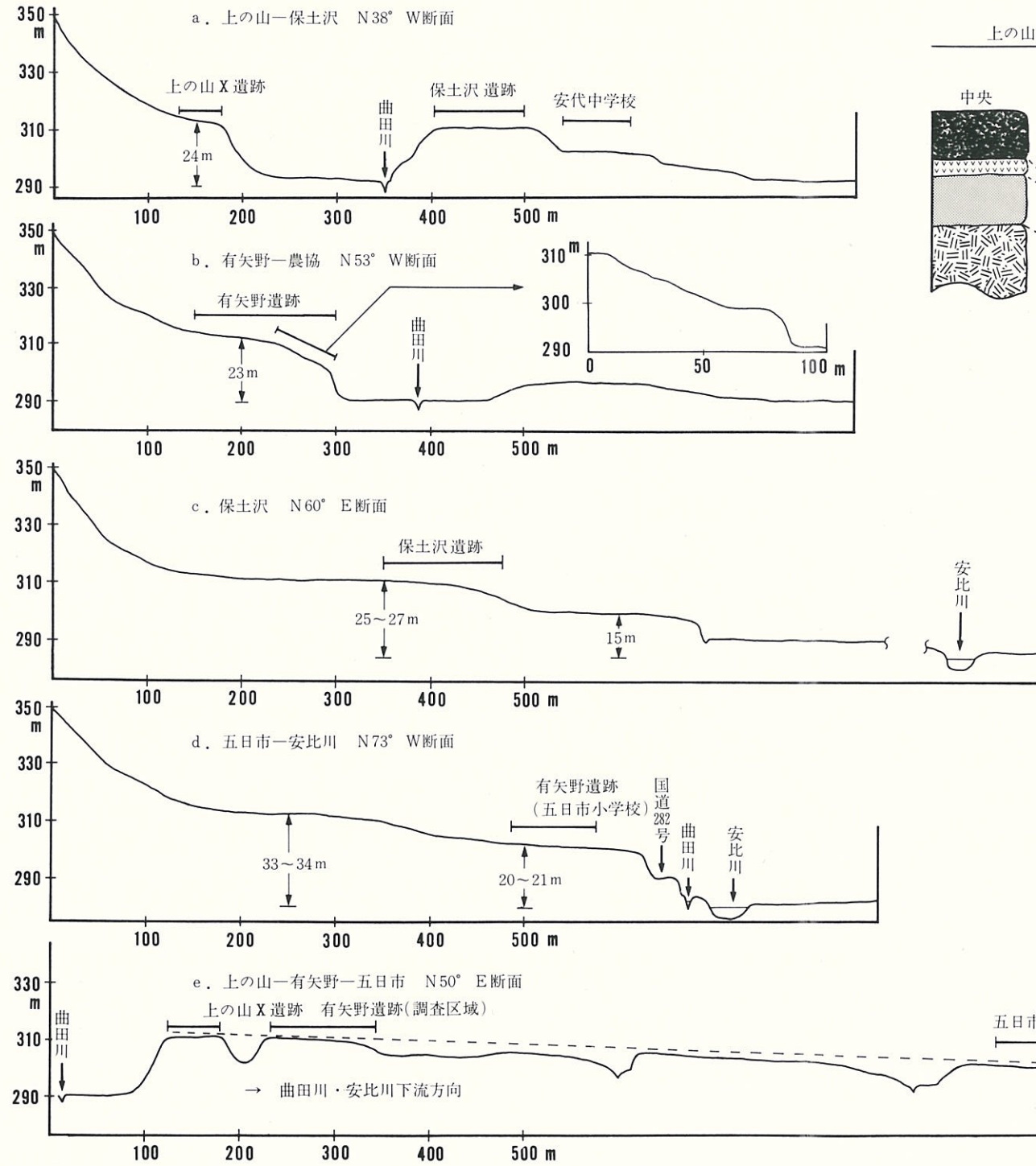
〈調査区地形〉

有矢野遺跡調査区は、先の地形面区分で述べられたように、有矢野遺跡の南端であり、浸蝕によって南東に向う緩斜面となっている。A面としての段丘崖は明確にみられないが、この斜

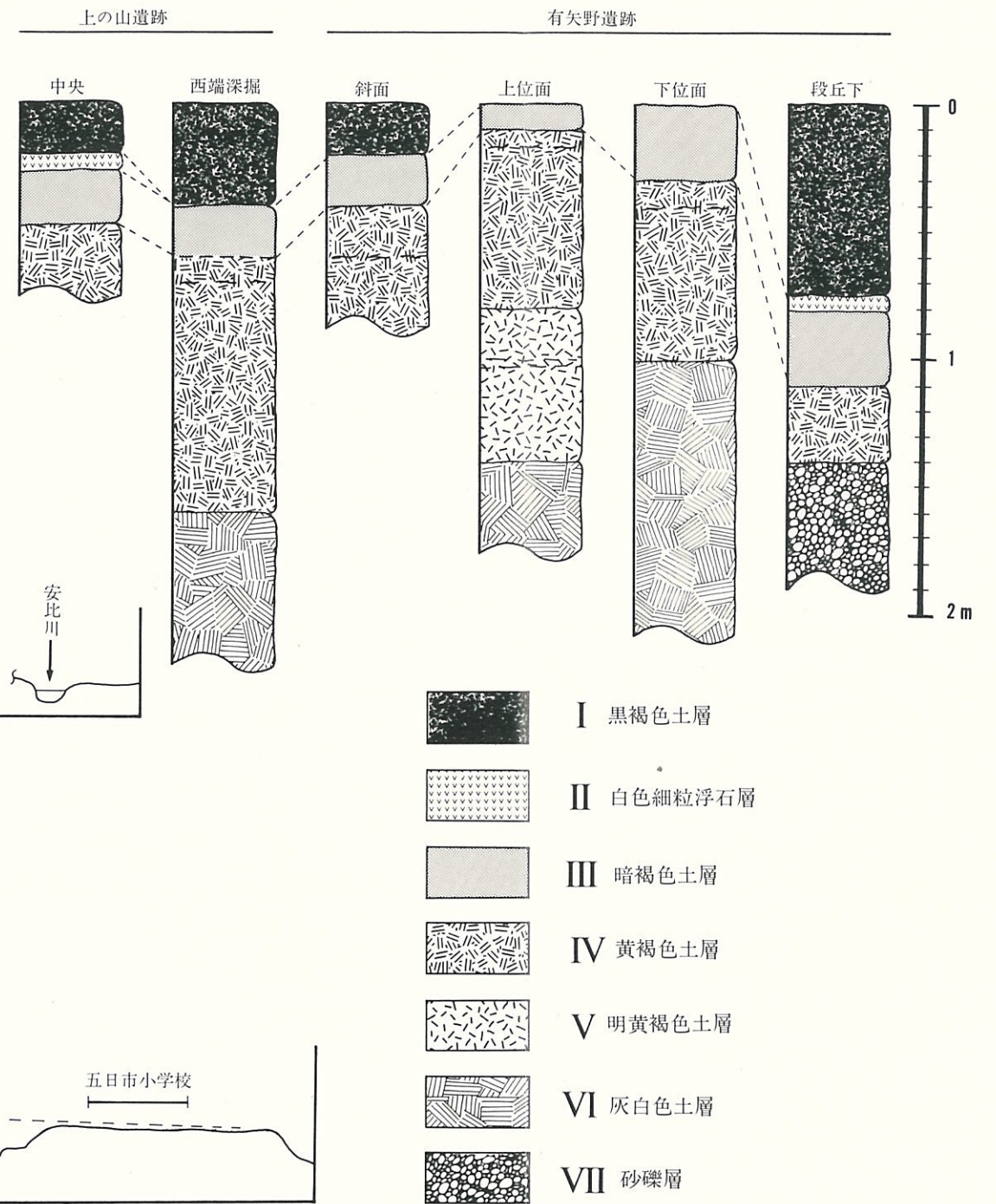


図版 6 地形面区分図

1. 有矢野・上の山X遺跡(含付近)地形断面図



2. 有矢野・上の山X遺跡地質層序



図版7 地形断面・地質層序

面下位に下位面との比高4mほどの段丘崖の一部が残っている。この斜面は標高295～309mの間にあり、その大部分は傾斜角約10°であるが、斜面下位の一部にはほぼ平坦な地域もある。この調査区の北及び北東方向には有矢野遺跡の主体部である段丘面（A面）が広がり、西方向には小谷と隔てて上の山Ⅹ遺跡・上の山館の載る段丘（A面）が細長く続いている。

報文記載上の都合により調査区斜面を便宜的に下記に示すように区分をした。（図版7図）

標高304～309mの斜面 ——→ 上位緩斜面

標高299～304mの斜面 ——→ 中位緩斜面

標高295～299mの斜面 ——→ 下位平坦面

上の山Ⅹ遺跡は、上記で述べられているように有矢野遺跡の西方で、小谷を隔てた段丘面（A面）上に位置する。遺跡の載る部分は、この段丘面の東西が小谷によって浸蝕されているため後背山地から30mほど舌状に張り出す形を呈している。調査区はこの南端であり、標高は310～311mである。南端縁は段丘崖となり下位面まで急激に18mほど落ちる。段丘崖の浸蝕後退が激しかったと思われ、段丘縁の遺構は削剝されている。

〈遺跡調査区基本層序〉（図版7図）

有矢野・上の山Ⅹ遺跡の位置する地形面は、同一A面上であり、地質的にも同一であるためここでは一括して記述する。基盤は第三紀中新世田山層の凝灰質泥岩であり、その上位に火砕流堆積物が厚く堆積している。表層を構成しているものは、十和田火山を起源とする火山灰とそれらの風化物からなっている。以下に上位から順に調査区内の地質層序を記す。（ ）内は層厚を示す。

- I：黒色土層（20～40cm） 黒色～黒褐色を呈し、やわらかいシルトで構成されている。下位Ⅲ層の浮石が混入している。この層は、耕作によって攪乱を受けていることが多い。上の山Ⅹ遺跡は段丘の平坦部であるため、耕作や浸蝕による移動は少ないが、有矢野遺跡では、地形面の多くは斜面であったため削剝されている部分が多く、下位平坦面にのみ厚く堆積している。
- II：白色細粒浮石層（5～10cm） 細かい浮石から構成される単層であり、下位から上位までよく分級されて堆積している。平坦面では自然堆積として観察される部分は少なく、平安住居址の埋土・中期末～後晩期の住居址の埋土・風倒木痕など凹地状になる部分に自然堆積の層相を呈して観察される。
- III：暗褐色土層（20～30cm） I層よりはしまりのあるシルトによって構成される。遺物を包含する層である。上位Ⅱ層の浮石がわずかながらこの層の上位面に混在する。下位Ⅳ層とは明確に境することはできなく漸移していることから、この層はⅣ層の風化帯に相当すると思われる。

- Ⅳ：黄褐色土層（70～100cm） 火山噴出物を起源とする層であり、5mm台の淡黄色浮石が混在している。竪穴住居址やピットの壁・床面は、この層を削剝して構築されている。
- Ⅴ：明黄褐色土層（60cm） 粘性の大きいシルトからなる。有矢野遺跡の上位緩斜面に於ける深掘で観察されたもので、粘土の薄層を狭在しており、粘土化の激しい部分かと思われる。他の地点では、この層に対比される層はない。
- Ⅵ：灰白色土層（100cm以上） Ⅳ層から漸移している層で、Ⅳ層のグライ化した層と考えられる。混在する浮石はⅣ層のものとは比して、やや発泡が少なく緻密である。陥し穴状遺構や有矢野遺跡の大ピットの底面は、この層まで掘り込んで構築されている。

参考・引用文献

- 岩手県 1954 『岩手県地質説明書』
- 二戸科学教育研究会 1978 『二戸の地学』
- 青森県 1972 『青森県の地学』
- 岩手県 1974 『土地分類基本調査』 「荒屋」
- 大池昭二 1963 「八戸浮石層の絶対年代について」 『青森地学第8号』
- 大池昭二・他 1965 「馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰」 『第四紀研究第5巻第1号』
- 大池昭二 1972 「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」 『第四紀研究第11巻第4号』
- 大池昭二 1973 「十和田火山東麓の火山灰」 『東北の土壌と農業』
- 東北地方第四紀研究グループ 1967 「東北地方における第四紀海水準変化」 『地学団体研究会 専報第15号 日本第四系』
- 寺田公民館 1957 「寺田地区の歴史的展開」 『寺田地区基本調査』
- 岩手県教育委員会 1980 「鹿角街道」 『岩手県 歴史の道 調査報告書』

参考資料

- 『三代実録』 「元慶2年10月21日の条」
- 『日本後紀』 「弘仁2年3月20日の条」

(2) 周辺の遺跡

安代町の荒屋新町を中心とした付近一帯には、数多くの遺跡が知られている。これらの遺跡は、八幡平黒谷地湿原を源として北流する安比川及びその支流によって形成された三つの段丘の内、上位二段の段丘面とその縁辺部にほぼ立地している。ここでは、本報告書で扱う有矢野(15)、上の山Ⅹ(27)の2遺跡の歴史的環境を理解するために周辺の遺跡について概観してみたい。

第2図は、荒屋新町を中心として付近一帯の遺跡群を岩手県遺跡地図及び岩手県遺跡地名表(岩手県教育委員会、1980)に基づいて示したものである。この範囲内において現在までに確認された遺跡数は56である。これらの遺跡は、1961年以後の遺跡分布調査によって知られているものの他に、東北縦貫自動車道建設に伴う緊急の遺跡分布調査で新たに確認されたものも含まれている。この様に多くの遺跡が知られていながら、正式に発掘調査された例は、1975年の安代中学校体育館改築に伴う保土沢遺跡の調査(安代町教育委員会、1975)のみで、1979年に東北縦貫自動車道関係の遺跡調査が開始されるまでほとんど無かったと云ってよい。従って、各遺跡の具体的な様相は、大部分が未だに不明であり、今後の調査に期待される面が大きいと云えよう。以下現在までに判明した各遺跡の具体的な状況を簡単にみてゆくことにしたい。なお、旧石器時代の遺跡は、未だに確認されていないので縄文時代以降の遺跡について述べる。

○ 縄文時代の遺跡

縄文時代の遺跡は40ヶ所確認されている。その内13遺跡は、縄文時代の遺跡があることが確認されているものの、細かな所属時代は不明である(3・11・19・22・31・34・35・37・38・49・50・54・56)。次にこれらを除いた27遺跡の主なものについて述べる。

早期の遺跡として知られているのは、安比川とその支流である曲田川が合流する地点の北西側一帯に発達した段丘上に立地する有矢野遺跡(15)のみである。この遺跡は、縄文時代の大遺跡として以前からよく知られており、早期から前期、中期、後期、晩期の全時期にわたって大集落を形成した複合遺跡と推定されている。しかし、その実態は調査資料に乏しくほとんど不明であった。本報告で扱う有矢野遺跡は、この遺跡の一部にあたり南西端の段丘縁辺に位置する。今回の発掘調査によってさらにこの遺跡は、弥生時代・平安時代の遺跡でもあることが確認された。

前期の遺跡としては、有矢野遺跡以外、小屋の畑遺跡(7)・横間台遺跡(33)・曲田Ⅰ遺跡(36)・上の山Ⅺ遺跡(28)の5遺跡が知られている。小屋の畑遺跡は、小屋の畑地域の安比川西岸の段丘上に立地し、円筒下層d式土器を中心とする遺物包含地として知られている。曲田Ⅰ、上の山Ⅺ遺跡は、安比川の支流曲田川に注ぐ新田川の北側、馬場山南麓部に発達した崖錐性扇

状地縁辺部に立地する。縄文時代の遺物包含地として知られていたが、1980年の発掘調査によって、この両遺跡は、地形的に一連の遺跡で、縄文時代前期、中期、後期、晩期、弥生時代、中近世にわたる複合遺跡であることが確認された。前期の遺物として、大木1式土器がピット中から出土している。

中期の遺跡は、縄文時代の遺跡のうちで最も多く知られており、その数は有矢野遺跡を始めとして16遺跡である(4・8・9・13・15・21・23・24・26・31・33・36・44・48・52・53)。

本報告で扱う有矢野遺跡(15)の、その主な内容は、縄文時代中期である。上の山Ⅶ遺跡(24)は、曲田川によって形成された北岸の段丘上に立地し、以前から縄文時代中期から後期にかけての遺跡として知られていたが、1980年の発掘調査で、それが確認されるとともに平安時代の集落址であることも確認された。縄文時代中期の住居址は、大木9・10式土器を伴出する住居址4棟が検出されており、他に、中期末葉から後期初頭に入るとされる住居址10棟が検出されている。この遺跡に隣接する上の山Ⅲ(31)でも1980年の発掘調査で、中期末葉の住居址2棟が検出されている。また、上の山Ⅳ(21)、上の山Ⅵ(23)、上の山Ⅸ(26)の各遺跡でも大木9、大木10式土器が表面採集され、中期末葉の遺跡として知られている。

後期の遺跡としては、赤坂田Ⅰ遺跡(1)を始めとして13遺跡が知られている(1・2・6・8・15・16・20・24・26・27・28・45・47)。

赤坂田Ⅰ遺跡(1)と赤坂田Ⅱ遺跡(2)は、赤坂田地域の安比川東岸に形成された段丘上に立地する。1979年～1980年にかけての二次にわたる発掘調査によって赤坂田Ⅰ遺跡においては、安行Ⅱ式土器を伴出する住居址4棟、赤坂田Ⅱ遺跡では、安行Ⅱ式土器を伴出する住居址7棟がそれぞれ検出された。この様に両遺跡は、縄文時代後期末葉を中心として小集落が形成された遺跡であることが確認された。また、1980年に発掘調査された上の山Ⅺ遺跡では、後期初頭の大湯式土器伴出の住居址4棟とピット類が、扇畑Ⅱ遺跡では、同じく後期初頭の大湯式土器伴出の住居址7棟とピット類がそれぞれ検出されている。なお、本報告で扱う上の山Ⅹ遺跡も、後期の遺跡で、後期初頭の遺物と遺構が検出されている。

晩期の遺跡としては、上の山Ⅲ遺跡(20)を始めとして12遺跡が知られている(1・8・13・15・20・28・32・36・45・51・52・53)。遺跡数が比較的多い割には、他の時期に比べて遺跡の実態が余りよく解っていない。その中で、上の山Ⅲ遺跡は、上の山Ⅰ(18)、上の山Ⅱ(19)、上の山Ⅺ(28)、曲田Ⅰ(36)の各遺跡と同様、馬場山南麓部に発達した崖錐性扇状地上に立地し、表面採集で碧玉、岩製品、管玉等、及び後期～晩期(大洞A'式土器片が多い)の土器片が多数採集され、以前から後期～晩期の集落址ではないかと推定されている。なお、すぐ近くの上の山Ⅺ遺跡からは、1980年度の発掘調査で、晩期前葉から中葉にかけての住居址5棟が検出されている。

○ 弥生時代の遺跡

弥生時代の遺跡としては、有矢野(15)・上の山Ⅰ(18)・上の山Ⅱ(19)・上の山Ⅺ(28)のわずか4遺跡が確認されているにすぎない。これらの遺跡は、土器などの遺物が若干発見されているのみで、遺構は、1980年度に調査された上の山Ⅺ遺跡で検出された墓塚を除いて、ほとんど確認されていない。この中で上の山Ⅱ遺跡は、所謂「天王山くずれ」の土器片が表面採集されており、以前から弥生後期の遺跡として安代町内で知られていた唯一の遺跡である。なお、有矢野遺跡以外の3遺跡は、馬場山南麓部に発達した崖錐性扇状地上に立地する。

○ 古代の遺跡

古代に属する古墳、奈良、平安時代の遺跡で確認されているのは、奈良時代の戸沢Ⅰ遺跡(51)、平安時代の赤坂田Ⅰ(1)、扇畑(5)、扇畑Ⅱ(6)、荒屋館(11)、保土沢(13)、保戸坂(14)、有矢野(15)、上の山Ⅴ(22)、上の山Ⅶ(24)、上の山Ⅹ(27)の11遺跡である。戸沢Ⅰ遺跡は、馬場山の北麓日名市沢の南側に立地し、栗閉式に比定される土師器片が表面採集されている。この遺跡は、現在までのところ荒屋新町周辺で知られる唯一の奈良時代の遺跡である。扇畑Ⅰ・扇畑Ⅱの両遺跡は、安比川の支流である見岳川によって形成された扇状地に立地している。見岳川を挟んで南側に扇畑Ⅰ遺跡、北側に扇畑Ⅱ遺跡が位置している。この両遺跡は、1979～1980年の発掘調査で、扇畑Ⅰ遺跡では、平安時代の住居址10棟が検出され、扇畑Ⅱ遺跡では、平安時代の住居址3棟が検出された。保土沢遺跡は、安比川とその支流曲田川によって形成された段丘上に立地する。この遺跡の上に安代中学校が存在し、1974年にここの体育館が改築されることになり、それに先立って建設予定地内の試掘調査が行なわれ、遺構の存在することが確認された。翌1975年に本格的発掘調査が行なわれ、その結果、平安時代の住居址が5棟検出された。

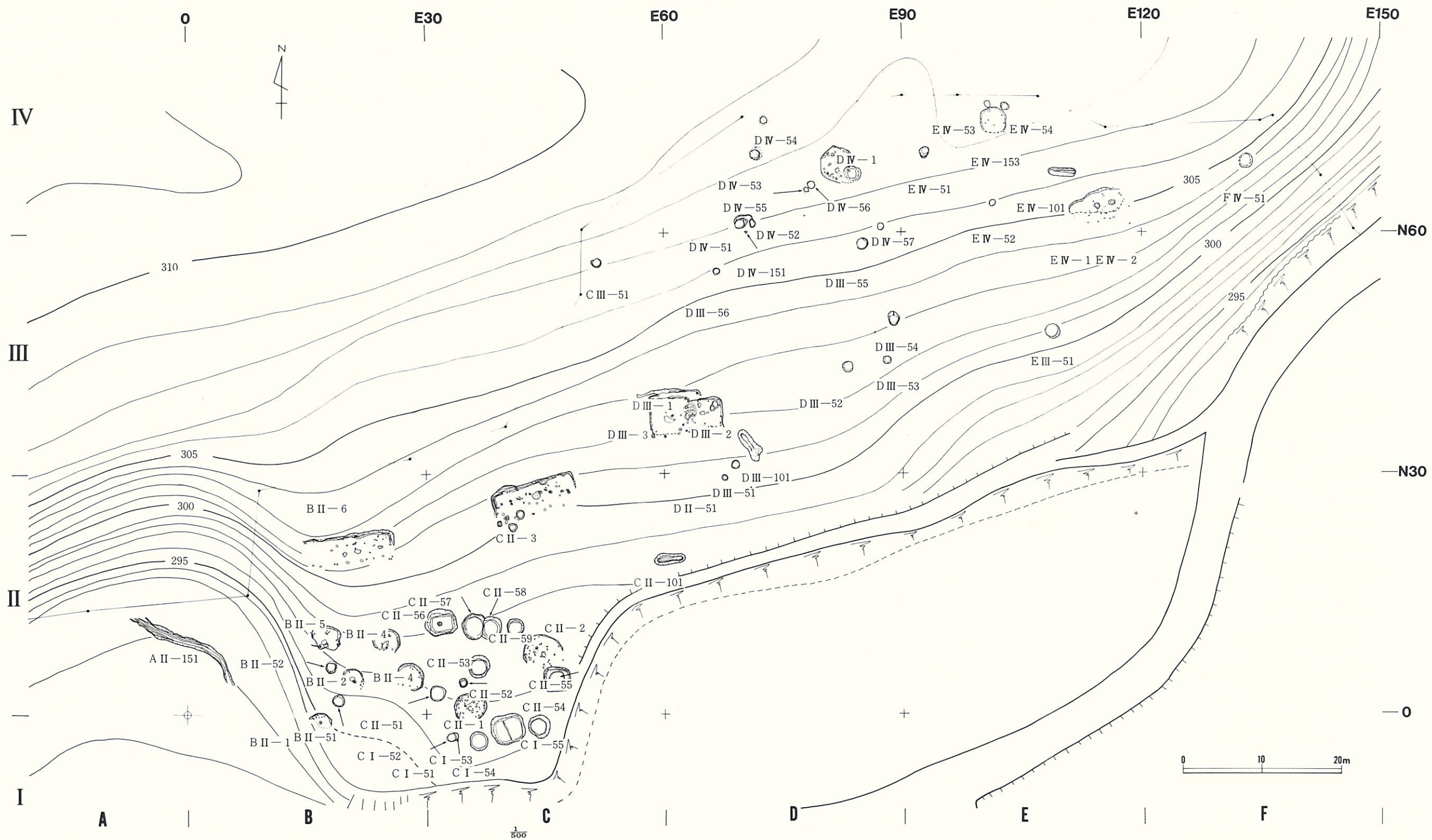
この調査は、安代町荒屋新町地区での初めての発掘調査であり、かつ奥羽山地の真只中に位置する安代町付近にも平安時代の大規模な集落址の存在する可能性のあることを予想させた画期的な調査であった。その後、1980年度に発掘調査された上の山Ⅶ遺跡(24)において、その予想どおり平安時代の住居址39棟が検出され、大規模な集落址であることが確認された。

中世以降の遺跡としては、城館跡(11・16・17・31・55)、経塚(29・30)、一里塚(12・43)、窯跡(10)などがある。

以上簡単に荒屋新町周辺の原始・古代を中心にその遺跡を概観してきたが、この地域での遺跡の立地等について種々の特徴点がみられる。しかし、その詳細について今後さらに検討する必要がある、ここで述べることは省略する。

Ⅱ．有^{あり}矢^や野^の遺跡

- 1．遺跡所在地 二戸郡安代町大字五日市字有矢野
- 2．調査期間 昭和54年6月16日～8月11日
- 3．調査対象面積 6,000㎡
- 4．発掘面積 6,000㎡
- 5．遺跡記号 AYN 79



図版 I 有矢野遺跡遺構配置図

1. 検出遺構

(1) 竪穴住居址

B II 区

B II - 1 竪穴住居址状遺構

遺 構 (図版 2 - a ・ 写真図版 1 - b)

この竪穴住居址状遺構は、下位平坦面西側の縁辺部に位置する。この遺構の南西側が、段丘崖の浸食後退により約 $\frac{2}{3}$ ほど消失しており、残存部は北側と東側の一部のみである。従って正確な規模、形状を知ることはできない。

埋土は、遺構の $\frac{2}{3}$ が消失、および木根による攪乱をうけ、現在観察できるのは薄い黒褐色土の単層のみである。このためField cardにその性状を記載しただけで土層断面図の作製は省略した。

残存部の床面はほぼ平坦でやわらかい。北壁際に集中して杭状の小ピットが10個検出されたが、柱穴の一部であるかどうか不明である。

壁高は、北壁20cm土・東壁15cm土を計る。北壁はほぼ垂直に立ちあがる。

炉は、検出されなかった。しかし、北壁の南95cm土の床面に炭化物を微量に含んだ暗褐色土の堆積する極めて浅い落ちこみがみられる。これは地床炉状の様相を呈するが、焼土の形成もみられず、その詳細については不明である。出土遺物はなかった。

なお、この遺構の時期については、大半が削剝をうけ正確な形態を把握することができず、また、時期決定しうる遺物の出土もみられない事から不明である。

B II - 2 住居址

遺 構 (図版 2 - b ・ 写真図版 2 - a ~ c)

この住居址は、下位平坦面西側の縁辺部に位置する。南東側が斜面下方にあたっているため、東側の一部から南側にかけての壁が消失している。従って、正確な規模、形状を知ることができないが、残存部の状況から推定すると、規模は径2.7m土×2.6m土を計り、形状はほぼ円形を呈するものと思われる。

埋土は、上位から黒色土・褐色土・炭化物を微量に含む黒褐色土によって構成される。

床面は、若干の凹凸がみられ、やややわらかい。

柱穴は、P₁ (径16cm土・深さ〈不明〉)・P₃ (径18cm土・深さ42cm土)・P₄ (径22cm土・深さ

32cm±)・P₅(径14cm±・深さ8cm±)の4個で構成され、やや変形ながら四角形の配置を示している。これらの中で、P₅—P₁・P₄—P₃がそれぞれ対になる在り方を示している。以上の柱穴以外に、P₂(径16cm±・深さ22cm±)・P₆(径10cm±・深さ17cm±)の柱穴状ピットがみられるが、具体的位置づけについては不明である。

壁高は、北壁36cm±・東壁11cm±・西壁9cm±を計る。

炉は、住居址の中央部に位置する地床炉である。径60cm±×50cm±の楕円形状の広がりを持ち、層厚6cm±を計る現地性の焼土が形成されている。なお、使用面は床面と同じレベルにある。

出土遺物(図版29—1～5・写真図版36—14～18)

床面上の出土遺物はなく、埋土中から土器片が出土している。すべて深鉢の破片と思われる。1はやや外反ぎみの口縁部片で、口唇部まで地文が施されている。表面にススの付着が著しい。2は体部片で、細い粘土紐の貼り付けによる隆起線が施され、その隆起線に沿って棒状工具によって刺突が加えられている。3と4は、それぞれ異なる個体の体部片で、沈線によって区画されその外側を磨削している。5は地文のみの体部片で、表面にススの付着がみられる。

以上の出土遺物と遺構の形態から、この住居址は、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

B II—3 住居址

遺構(図版3・写真図版3—a, b・4—a～c)

この住居址は、下位平坦面の中央部に位置する。南西側が斜面下方にあたっているため、南側の一部から西側にかけての壁が消失している。従って正確な規模、形状を知ることができないが、残存部の状況から推定すると、規模は径3.3m±×3.2m±を計り、形状はほぼ円形を呈するものと思われる。

埋土は、上位から黒色土・暗褐色土・褐色土によって構成される。

床面は、凹凸がみられるが比較的堅くしまっている。

柱穴は、P₁(径15cm±・深さ27cm±)・P₄(径15cm±・深さ45cm±)・P₅(径12cm±・深さ8cm±)・P₈(径15cm±・深さ22cm±)・P₉(径20cm±・深さ25cm±)の5個で構成され、五角形の配置を示している。これらの中で、P₁を要としてP₉—P₄・P₈—P₅が、それぞれ対になる在り方を示している。以上の柱穴以外に、P₂(径13cm±・深さ13cm±)・P₃(径15cm±・深さ39cm±)・P₆(径16cm±・深さ16cm±)・P₇(径17cm±・深さ25cm±)の柱穴状ピットが見られるが、具体的位置づけについては不明である。

壁高は、北壁53cm±・東壁28cm±・南壁5cm±を計る。

炉は、住居址のほぼ中央部に位置し、石囲い部と前庭部の2つの部位からなる複式炉である。全長75cm±を計る。石囲い部の炉縁径は、35cm±×43cm±を計り、ほぼ四角形の形状を呈する。構成礫は、粒径12cm±～26cm±の安山岩類亜角礫6個で、火山灰土中3cm±～12cm±の深さに埋設されている。使用面は、床面と同じレベルにあり、その使用面下7cm±の深さまで火熱により生じた赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。前庭部は、石囲い部の南に位置し、平面形は楕円形状、断面形は皿状を呈する。その底面は、踏み固められたように堅い黒褐色土によって形成されている。層厚は4cm±を計る。この部位には焼土、炭化物はない。

出土遺物 (図版29-6、30-7～8、31-9～11・写真図版32-1～3、37-19～21)

出土遺物は、床面上から小型深鉢(6)の完形品1個体と深鉢の土器片多数が出土している。6の口縁部は、4つの大波状とその中間に4つの小波状を呈する波状口縁で内弯する。この波状口縁に沿って沈線が施され、その沈線に沿って棒状工具によって刺突が加えられている。体部の文様は、地文(単節斜縄文)を沈線で「波頭」状に区画し、その内側を磨消している。その磨消し部分の両先端に鱗状の小突起が施されている。なお、文様は横方向に4回転回されている。底部は、磨耗が激しくわずかに網代底であることが把握できる。また、内外面にスス状の付着物がみられる。7と8は、大型深鉢の口縁部～体部片である。7の口縁部は、平縁でやや外反し、体部で膨む。文様は、地文(単節斜縄文)のみが施されている。内外面にスス状の付着物がみられる。8の口縁部は、平縁でやや内弯ぎみを呈する。文様は、地文(単節斜縄文)のみで口唇部まで施されている。表面にはススの付着が著しい。9～11は、深鉢の体部片で、9は地文(単節斜縄文)を沈線で区画し磨消が施され、10と11は、地文(単節斜縄文)のみが施されている。これらの表面にはススが付着している。なお、11には内面にもそれがみられる。

以上の出土遺物と遺構の形態から、この住居址は、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

BII-4 住居址

遺 構 (図版4・写直図版5-a、b)

この住居址は、下位平坦面の中央部に位置する。南側が斜面下方にあたっているため南壁が消失している。従って、正確な規模、形状を知ることができないが、残存部から推定すると、規模は径3.3m±×3.2m±を計り、形状はやや変形ながら円形を呈するものと思われる。

埋土は、上位から黒褐色土・褐色土によって構成される。

床面は、若干の凹凸がみられるが比較的堅くしまっている。

柱穴は、P₁(径31cm±・深さ16cm±)・P₂(径15cm±・深さ23cm±)・P₃(径20cm±・深さ32cm±)の3個で構成され、やや変形ながら三角形の配置を示している。これら以外にP₄(径

16cm±・深さ32cm±)の柱穴状ピットがみられるが、具体的位置づけについては不明である。

壁高は、北壁53cm±・東壁31cm±・西壁16cm±を計る。

床面中央部に径115cm±×65cm±、深さ14cm±を計り、平面形が楕円形、断面形が皿状を呈する掘り込み部分がみられる。底面は踏みかためられたように堅い。この形状は地床炉に類似しているが、この部分に炭化物、焼土の形成が皆無なことから炉址として断定しえなかった。

この住居址の時期については、時期決定しうる正確な遺構形態の把握ができず、また遺物の出土もみられないことから不明である。

B II - 5 住居址

遺 構 (図版5・写真図版6-a~d)

この住居址は、下位平坦面西側の縁辺部に位置する。南西側が斜面下方にあたっているため、南側から南西側にかけての壁が消失している。従って正確な規模、形状を知ることができないが、残存部の状況から推定すると、規模は径3.6m±×3.2m±を計り、形状は隅丸方形を呈するものと思われる。

埋土は、上位から黒色土・黒褐色土・暗褐色土によって構成される。

床面は、凹凸が見られるが堅くしまっている。

柱穴状のピットと思われるP₁(径10cm±・深さ26cm±)・P₂(径13cm±・深さ28cm±)・P₃(径18cm±・深さ10cm±)・P₄(径10cm±・深さ7cm±)・P₅(径17cm±・深さ6cm±)・P₆(径14cm±・深さ7cm±)・P₇(径17cm±・深さ10cm±)・P₈(径11cm±・深さ36cm±)・P₉(径10cm±・深さ39cm±)・P₁₀(径12cm±・深さ〈不明〉)の10個が西側の一部～北側～東側の一部にかけての壁際に検出された。それ以外は壁、および床面の消失によって確認できなかった。従って、これらの具体的位置づけについては不明である。

壁高は、北壁58cm±・東壁20cm±・西壁10cm±を計る。

炉は、住居址の中央やや南側に位置する石囲い炉とその北側に位置する地床炉である。石囲い炉は、炉縁径72cm±×50cm±を計り、ほぼ長方形の形状を呈する。構成礫は、粒径9cm±～26cm±の安山岩類亜角礫9個で直立、あるいは斜位に床面下12cm±～14cm±の深さに埋設されている。使用面は、床面より10cm±低いレベルにあり、その使用面下6cm±の深さまで火熱により生じた赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。地床炉は、径65cm±×70cm±のやや変形ながら楕円形状の広がりを持ち、層厚3cm±を計る現地性の焼土が形成されている。なお、使用面は床面と同じレベルにある。

出土遺物 (図版31-12、32-13~15・写真図版33-4、37-22~24)

出土遺物は、床面上から出土した深鉢の土器片のみである。12は、口縁部～体部片で、口縁

部が平縁でやや外反する。文様は、地文（複節斜縄文）のみで、口縁部まで施されている。内外面にススの付着が著しい。13～15は、深鉢の同一個体片である。13の口縁部片は、平縁でやや外反する。口縁部と体部を一本の沈線で区画し、口縁部に無文帯を構成している。14と15の体部片は、磨消縄文が施されている。なお、表面にスス状の付着物がみられる。

以上の出土遺物と遺構の形態から、この住居址は、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

B II - 6 住居址

遺 構（図版6・写真図版7-a, b, 8-a～c）

この住居址は、緩傾斜面中位の西端に位置し、西方に段丘崖を臨む。斜面を「L」字状に掘り下げて構築されているが、侵蝕により西壁等が消失しており原形を止めていない。このため正確な規模・形状を知ることはできないが、残存部から推定すると、この住居址の規模は11.0m±×4.0m±であり、形状は長方形を呈すると考えられる。

埋土は、上位より黒褐色土・暗褐色土によって構成され、床面直上の埋土には多量の炭化材が包含されており、その集積は遺構の東½の面積に強くみられる。床面の北半分は、全体的に平坦でありやわらかいが、南半分は侵蝕のためゆるやかに傾斜しており原形を示していない。

柱穴と思われるピットは、29個検出され、その規模は次のようになる。

P₁（径18cm±・深さ62cm±）・P₂（径15cm±・深さ36cm±）・P₃（径21cm±・深さ57cm±）・
P₄（径19cm±・深さ12cm±）・P₅（径17cm±・深さ17cm±）・P₆（径17cm±・深さ51cm±）・
P₇（径13cm±・深さ59cm±）・P₈（径24cm±・深さ68cm±）・P₉（径15cm±・深さ37cm±）・
P₁₀（径11cm±・深さ33cm±）・P₁₁（径15cm±・深さ63cm±）・P₁₂（径12cm±・深さ30cm±）・
P₁₃（径18cm±・深さ34cm±）・P₁₄（径18cm±・深さ44cm±）・P₁₅（径26cm±・深さ39cm±）・
P₁₆（径17cm±・深さ56cm±）・P₁₇（径23cm±・深さ40cm±）・P₁₈（径13cm±・深さ34cm±）・
P₁₉（径23cm±・深さ17cm±）・P₂₀（径18cm±・深さ54cm±）・P₂₁（径16cm±・深さ37cm±）・
P₂₂（径23cm±・深さ38cm±）・P₂₃（径18cm±・深さ不明）・P₂₄（径22cm±・深さ54cm±）・
P₂₅（径24cm±・深さ42cm±）・P₂₆（径22cm±・深さ不明）・P₂₇（径15cm±・深さ16cm±）・
P₂₈（径12cm±・深さ40cm±）・P₂₉（径12cm±・深さ31cm±）。

この住居址と同様の形態及び柱穴配置をもつC II - 3住居址がある。両者の相互の共通性より、柱穴配置についての次のような見方を記述し、今後の同様な資料との検討をまちたい。1例は、北壁ぎわの住穴と南方の柱穴の対応である。これは、P₁ - P₁₂・P₂ - P₁₃・P₃ - P₁₄・P₄ - P₁₅・P₅ - P₁₆・P₆ - P₁₇・P₇ - P₁₈がそれぞれ対応するゆがんだ長方形であるとする考え方である。しかしながら長軸方向に対し斜交する対応となるため構造的に弱い形と思われ、対頂する柱同

志の梁を多く必要とするであろう。2例は、 $P_1 \cdot P_{13} \cdot P_3$ がそれぞれ対応し、それに梁をわたすことによってできる三角形を基調とする考え方である。この単位が一辺を共有する形で交互に繰り返えされて長軸方向に配置すると思われる。即ち、 $P_1 - P_{13} - P_3 - P_1 \cdot P_3 - P_{13} - P_{15} - P_3 \cdot P_3 - P_{15} - P_6 - P_3 \cdot P_6 - P_{18} - P_{10} - P_6$ のつながりである。壁ぎわの対応する柱穴間にそれぞれ柱穴がみられ、これは壁を支えるためのものと思われる。以上2例の他に $P_7 - P_{11} - P_{21} - P_{17} - P_7$ の方形の住居址も考えられ、地床炉No.1はこの住居址に伴うと思われる。しかしながら前述の住居址との新旧関係、拡張・縮小関係等は、全くとらえることはできない。

壁高は、残存している北壁で観察でき北東隅で39cm土を計り、西方につれ低くなり西端は侵蝕により明確にし得ない。壁の立ち上りは、ほぼ原形を残し急な立上りとなっている。

周溝は、北壁ぎわで柱穴の間に構築されており、幅7cm土～30cm土・深さ6cm土～8cm土を計る。柱穴 P_1 と P_2 間には確認されなかった。

床面上に3基の地床炉が検出された。No.1地床炉については前述のとおり方形の住居址に係わる可能性もあるが、明確にするだけの根拠に乏しいため、ここでは一括して記述する。この地床炉の中心点を結ぶ直線は、北壁とほぼ平行であり、やや南に寄っている。いずれも現地性焼土で不整形に広がり、その規模と焼成の深さは、No.1地床炉(59cm土×40cm土・6cm土)、No.2地床炉(74cm土×55cm土・12cm)、No.3地床炉(60cm土×45cm土・5cm土)である。

出土遺物はない。

C II 区

C II - 1 住居址

遺 構 (図版7・写真図版9-a～d)

この住居址は、下位平坦面のほぼ中央部に位置する。南側が斜面下方にあたっているため、南壁の一部が消失している。しかし、正確な規模の計測は可能である。規模は径4.0m土×3.6m土を計り、形状は不整形ながらほぼ円形を呈している。

埋土は、上位から黒色土・黒褐色土・暗褐色土によって構成される。

床面は、やや凹凸がみられるが堅くしまっている。

柱穴は、壁際に沿って環状に配列するピット群と思われる。それらの規模は次の通りである。

P_1 (径15cm土・深さ12cm土)・ P_2 (径9cm土・深さ5cm土)・ P_3 (径15cm土・深さ10cm土)・ P_4 (径12cm土・深さ7cm土)・ P_5 (径15cm土・深さ6cm土)・ P_6 (径15cm土・深さ17cm土)・ P_7 (径11cm土・深さ7cm土)・ P_8 (径14cm土・深さ31cm土)・ P_9 (径16cm土・深さ14cm土)・ P_{10} (径13cm土・深さ9cm土)・ P_{11} (径13cm土・深さ14cm土)・ P_{12} (径18cm土・深さ10cm土)・

P₁₃(径17cm±・深さ15cm±)・P₁₄(径11cm±・深さ17cm±)・P₁₅(径9cm±・深さ5cm±)・
P₁₆(径10cm±・深さ7cm±)・P₁₇(径8cm±・深さ5cm±)。

壁高は、北壁32cm±・東壁15cm±・南壁2cm±・西壁14cm±を計る。

炉は、住居址の中央部に位置する石囲い炉で、炉縁径64cm±×68cm±を計る。形状は、北東の一部に開口する部分が見られるが、ほぼ円形を呈する。構成礫は、粒径9cm±～31cm±の安山岩類亜角礫11個で構成されている。これらの大部分は、火山灰土中7cm前後の深さに埋設されているが、床面上に置くだけのものも1個みられる。使用面は、床面と同じレベルにあり、その使用面下5cm±の深さまで、火熱により生じた赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。

出土遺物 (図版32-16・写真図版37-25)

床面上からの出土遺物はなく、埋土中から1個の土器片が出土した。縄文土器の細片で、内外面ともにミガキが施されている。

この住居址の時期については、遺構の形態から縄文時代晩期と考えられるが、晩期のいつ頃に位置づけられるかということについては、決定しうる遺物の出土がみられなかったので不明である。

C II - 2 住居址

遺構 (図版8・写真図版10-a~c)

この住居址は、下位平坦面の東側に位置する。南東側が斜面下方にあたっているため、東側から南側にかけての壁が消失している。従って正確な規模、形状を知ることはできないが、残存部の状況から推定すると、規模は径4.5m±×4.0m±を計り、形状は楕円形を呈するものと思われる。

埋土は、炭化物を微量に含む黒褐色土の単層で構成されている。このため Field card にその性状を記載しただけで土層断面図の作製は省略した。

床面は、全体にゆるやかな起伏がみられ、やや軟らかい。

柱穴は、P₁(径23cm±・深さ25cm±)・P₃(径22cm±・深さ27cm±)・P₆(径24cm±・深さ27cm±)・P₉(径24cm±・深さ57cm±)の4個で構成され、菱形状の四角形の配置を示している。これらの柱穴の中で、P₁ - P₆・P₉ - P₃がそれぞれ対になる在り方を示している。以上の柱穴以外に、P₂(径20cm±・深さ40cm±)・P₄(径22cm±・深さ20cm±)・P₅(径24cm±・深さ39cm±)・P₇(径20cm±・深さ23cm±)・P₈(径28cm±・深さ77cm±)・P₁₀(径26cm±・深さ14cm±)・P₁₁(径18cm±・深さ24cm±)の柱穴状ピットがみられるが、具体的な位置づけについては不明である。

壁高は、北壁14cm土・西壁10cm土を計る。

炉は、住居址のほぼ中央部に位置する石囲い炉で、炉縁径56cm土×72cm土を計り、ややゆがんだ五角形状を呈している。構成礫は、粒径12cm土～35cm土の安山岩類亜角礫8個で火山灰土中6cm土～9cm土の深さに埋設されている。使用面は、床面とほぼ同じレベルにあり、その使用面下7cm土の深さまで火熱により生じた赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。

出土遺物 (図版32-17～18・写真図版37-26、27)

床面上からの出土遺物はなく、埋土中から深鉢の体部片と思われる土器片が出土している。すべて細片である。17は、地文(単節斜縄文)のみが施されている。表面にススの付着が著しい。18は、磨消縄文が施されている。

以上の出土遺物から、この住居址の時期の推定は無理であるが、遺構の形態から縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

C II - 3 住居址

遺構 (図版9・写真図版11-a～c)

緩斜面中位で、標高301.6m土に位置する。斜面を「L」字状に掘り込んで構築されており、10.5m土×4.0m土の規模をもち、その形状は、長方形を呈する。

埋土は、全体にやわらかく上位より黒色土・黒褐色土・暗褐色土・にぶい褐色土によって構成され、斜面上位からの流入による自然堆積の層相を示す。炭化物は、全体に微量に含まれる。

壁は、斜めに立ち上り、壁高は北壁中央で110cm土を計る。

柱穴とみられるピットは23個検出されている。その規模は、P₁(径28cm土・深さ不明)・P₂(径13cm土・深さ34cm土)・P₃(径30cm土・深さ48cm土)・P₄(径25cm土・深さ不明)・P₅(径21cm土・深さ36cm土)・P₆(径25cm土・深さ63cm土)・P₇(径28cm土・深さ38cm土)・P₈(径20cm土・深さ17cm土)・P₉(径20cm土・深さ11cm土)・P₁₀(径28cm土・深さ48cm土)・P₁₁(径25cm土・深さ32cm土)・P₁₂(径26cm土・深さ34cm土)・P₁₃(径21cm土・深さ48cm土)・P₁₄(径24cm土・深さ60cm土)・P₁₅(径18cm土・深さ40cm土)・P₁₆(径24cm土・深さ48cm土)・P₁₇(径26cm土・深さ37cm土)・P₁₈(径27cm土・深さ67cm土)・P₁₉(径23cm土・深さ39cm土)・P₂₀(径25cm土・深さ50cm土)・P₂₁(径29cm土・深さ119cm土)・P₂₂(径34cm土・深さ51cm土)・P₂₃(径21cm土・深さ32cm土)である。P₁₄とP₁₅の間に柱穴P_xがあったと仮定するならば、B II - 6住居址の柱穴配置と同様三角形の対応を基調とする柱穴配置が考えられる。即ちP₁₄ - P₁₂ - P_x - P₁₄・P_x - P₁₂ - P₁₁ - P_x・P_x - P₁₁ - P₁₅ - P_x・P₁₅ - P₁₁ - P₁₀ - P₁₅・P₁₅ - P₁₀ - P₁ - P₁₅・P₁ - P₁₀ - P₉ - P₁・P₁ - P₉ - P₄ - P₁・P₄ - P₉ - P₈ - P₄・P₄ - P₈ - P₆ - P₄が長軸方向に一辺を共有しつつ配列する。東西の閉じ方は、P₆ - P₇ - P₈とP₁₄ - P₁₃ -

P₁₂になると思われる。柱穴配置全体を俯瞰するとP₁₀を通る短軸線に対し左右対称となっている。また、これら全体の大黒柱的な支柱としてP₂₁とP₂₂が、長軸線上に相対して位置している。これらの他に住居址内にP₁₆—P₁₇—P₁₈—P₁₉の直線的な柱穴配置があるが、用途不明である。

床面の北半分は、かなりの凹凸をもちかたくなっているが、南半分は侵蝕により原形を残しておらず、斜面下方へゆるやかに傾斜している。この床面中央付近に現地性の焼土がみられ、その規模は、105cm±×80cm±を計り不整形に広がり、焼成は深さ23cm±まで及ぶ。使用頻度の高い地床炉である。

住居址内に、2基のピットが検出された。P₂₄ピットは、南西部P₁₁柱穴ぎわに位置し、平面形が円形を呈し、開口部径105cm±・底部径91cm±・深さ50cm±の規模をもつ。埋土は、柱穴の埋土と同様の暗褐色土の単層である。P₂₅ピットは、北壁中央からやや東に寄って位置し、住居址の壁を共有する。平面形が半円形を呈し、播鉢状の形態をもつ。開口部径84cm±・深さ20cm±の規模をもつ。埋土は、P₂₄ピット同様暗褐色土の単層である。両ピットとも出土遺物はない。

周溝は、北壁ぎわと両壁ぎわの柱穴の間に構築され、幅10cm±～17cm±・深さ5cm±～7cm±を計る。出土遺物はない。

D III 区

当区の同一場所に3棟の住居址が重複して位置する。緩傾斜面中位であり、標高302.4m～303.0mのところにある。いずれも斜面を「L」字状に掘り込んで構築されている。新旧関係は、古い住居址からD III—1、D III—2、D III—3の順となる。

D III—1 住居址

遺 構 (図版10—a・写真図版12—a, b)

この住居址は、D III—2によってその大部分を切られ、さらにはD III—3によって切られているため、北側の壁と壁ぞいの床・柱穴・周溝を残しているのみである。このため規模・形状は、ほとんどとらえることができない。残存する北壁の長さは、6.4m±を計る。柱穴は3個で北壁ぞいに配列しており、その規模は、P₁(径15cm±・深さ39cm±)・P₂(径18cm±・深さ36cm±)・P₃(径21cm±・深さ49cm±)である。床面はやわらかい。周溝が、北東隅から中央付近まで確認され、長さ2.6m±である。

壁高は、北壁中央部で39cm±を計り、その立ち上りは、ほぼ垂直に近い。

出土遺物（図版32-19・写真図版37-28）

出土遺物は、埋土下位から得られた土師器口縁部破片(19) 1点のみである。口縁部は、わずかに外反している。器壁の外面はヘラケズリ、内面はナデ、口唇部は横ナデによって調整されている。

DⅢ-2住居址

遺構（図版10-b・写真図版12-a, c）

この住居址は、その西半分をDⅢ-3住居址によって切られ、さらには残存部の床上にDⅢ-3住居址のカマドが構築されているため、正確な規模形状を知ることができない。しかし、残存する柱穴よりP₇-P₉-P₁₉-P₂₀-P₇と囲まれる区域がこの住居址に該当するとみられ、P₂₀付近でDⅢ-3住居址と一部分西壁を共有していると考えられる。この規模は、8.8m±×3.6m±で、平面形は長方形を呈する。

埋土は、全体に黒色系の土からなり黒褐色土と暗褐色土の薄層の互層である。ラミナが発達し斜面上位より流入した自然堆積の層相を示す。壁ぎわに沿って壁の崩れによる黄褐色土やいぼい褐色土がみられる。

壁は、床面からは垂直に立ち上がるが、上位にがけ崩れがみられ原形を残していない。壁高は北東隅で65cm±、DⅢ-1住居址の床を切った部分で45cm±を計る。東壁では、斜面に沿って壁高を低くする。

柱穴は、この住居址に係わるものとして16個検出されている。その規模は次のようになる。P₄（径18cm±・深さ23cm±）・P₅（径22cm±・深さ47cm±）・P₆（径16cm±・深さ16cm±）・P₇（径20cm±・深さ26cm±）・P₈（径20cm±・深さ80cm±）・P₉（径20cm±・深さ19cm±）・P₁₀（径18cm±・深さ32cm±）・P₁₁（径23cm±・深さ18cm±）・P₁₂（径25cm±・深さ27cm±）・P₁₃（径45cm±・深さ26cm±）・P₁₄（径16cm±・深さ25cm±）・P₁₅（径24cm±・深さ58cm±）・P₁₆（径30cm±・深さ27cm±）。この中でDⅢ-3住居址の貼床削剝後に検出された柱穴は、P₁₂・P₁₃・P₂₂である。柱穴配置については、P₄とP₁₄の間及びP₁₃の西方がDⅢ-3住居址によって切られているため柱穴が消失していることにより、全様を明らかにすることができない。しかしながら残存柱穴より推定すると、北側と南側の柱穴対応は、P₄-P₁₂-P₅-P₁₁・P₆-P₁₀・P₇-P₉と思われ、さらには、柱穴が他に比し深いことより、P₈とP₁₅が支柱的な役割を持ったものと考えられる。

床面北東隅に切り合う2基のピットP₂₃・P₂₄が検出された。P₂₃の北東部 $\frac{1}{3}$ ほどを切りP₂₄が構築されており、古い順にP₂₃・P₂₄となる。P₂₃ピットは、開口部径72cm±・底部径50cm±・深さ31cm±の規模をもち、断面形は浅鉢形を呈する。埋土は、上位より黄褐色土・暗褐色土

によって構成され、焼土粒が全体に多く混入し、炭化物の混入量は少量である。またこの埋土の上面は廃棄後床面として使用されたと思われ、P₂₄の埋土上面よりかたくしまっている。一方P₂₄ピットは開口部径102cm±×70cm±・底部径54cm±×73cm±・深さ39cm±の規模をもち、平面形は不整楕円形、断面形は浅鉢形を呈する。埋土は、上位より暗褐色土・にぶい黄褐色土によって構成され、炭化物が全体に微量に含まれる。このピット2基は、その形態より貯蔵穴と思われる。

残存床面上の4ヶ所に現地性焼土の分布が検出された。中央部に68cm±×47cm±と40cm±×25cm±、その東方と南方にそれぞれ33cm±×不明（P₂₃ピットに切られる）・20cm±×22cm±の規模をもって不整形に広がる。焼成はいずれも4～6cmの深さまで及んでいる。またP₅南方に、焼成を受け赤紫色を呈するシルト質粘土の盛り上げがみられ、60cm±×53cm±・高さ7cm±の規模をもち不整形に広がる。

周溝は、P₈の北方とP₆とP₇の間に一部検出されたのみで全様をつかみ得る検出ではない。

出土遺物（図版32-20、21・写真図版33-5、37-29）

出土遺物は、埋土下位から得られた土師器片(20)と須恵器片(21)である。

20は口縁部破片であり、口縁はほぼ水平に近いまで外反している。器壁の外側はヘラケズリ、内側はナデ、口唇部は横ナデによって調整されている。器壁の上位に円錐状の穴が外から内に向ってあけられており、それを取りまく形で円形の脱落痕がある。21は体部の小破片であり、形状は全く推察することができない。外側にはタタキ目痕がみられる。

DⅢ-3 住居址

遺 構（図版10-C・写真図版12-a、b、13-a～f）

4.8m±×4.8m±の規模をもち、方形を呈する住居址である。床面は単に斜面を「L」字状に掘り込んだときの水平面だけとせず、さらに下位斜面上に盛り上げ土を施し床面を広げて構築されており、全面に貼床を施しかたくしめられている。

埋土は、上位より黒色土・暗褐色土・にぶい灰褐色土によって構成され、いずれにも炭化物が微量に含まれている。黒色土と暗褐色土の間には、ラミナをもって砂質のシルトが薄層として挟在している。いずれも斜面上位からの流入による自然堆積の層相を示す。

壁は、北壁東方で一部崩れがみられるが、全体に原形をよく残しており、床面からほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は、北壁中央部で51cm±を計る。北壁の上端は、DⅢ-1住居址の床面である。

柱穴と考えられるピットは、13個検出されている。その規模は、次のようになる。

P₂₅（径21cm±・深さ43cm±）・P₂₆（径21cm±・深さ51cm±）・P₂₇（径21cm±・深さ51cm±）・

P₂₈(径21cm土・深さ102cm土)・P₂₉(径25cm土・深さ84cm土)・P₃₀(径21cm土・深さ62cm土)・P₃₁(径24cm土・深さ55cm土)・P₃₂(径25cm土・深さ54cm土)・P₃₃(径21cm土・深さ40cm土)・P₃₄(径24cm土・深さ70cm土)・P₃₅(径22cm土・深さ50cm土)・P₃₆(径22cm土・深さ50cm土)・P₃₇(径22cm土・深さ48cm土)。P₂₈からP₃₅までの柱穴は、壁に沿って配列する。1つの壁は4個の柱穴によって構成され、柱穴間はほとんど約150cmであり規則性をもっている。P₃₆は、柱穴配列線上に位置していることより、同類の柱穴と考えられる。P₃₇については、住居中央付近にあり、他柱穴との関連は不明である。

周溝は、北壁沿いの西半分から西壁沿いに検出され、幅十数cmで柱穴間に構築されている。

カマドは、東壁の北寄りにあり、DⅢ-2住居址の床面上に載るかたちで構築されている。かなり破壊され、配石等も崩れ落ちているため、正確に形態を把握することはできない。カマド全体の基礎は、粘土質火山灰土を盛り上げたものである。全体の大きさは幅約120cm、全長約170cmほどである。袖部は、原形を止めておらず、崩れ落ちの状態から推定すると、芯に安山岩の中礫から大礫を用い、それを火山灰土で包みこむように固着していたと考えられる。焚口部と燃烧部の区別は明確にできず、燃烧部とみられる幅は35cm土・長さは65cm土を計る。煙道部の全長は102cm土でやや屈曲し、幅は20～25cmである。この起点から32cm土の位置より傾斜が上昇している。煙道部は不明である。天井部は、カマド断面の観察によって、扁平な大礫によって構築されていたと推定されるが、形態は全く不明である。

床面中央部に現地性焼土が4ヶ所に分布している。それらは、125cm土×60cm土・45cm土×40cm土・38cm土×17cm土・24cm土×14cm土の規模をもち、焼成は深さ5cm土まで及ぶ。地床炉と考えられる。

カマド右にP₃₈ピットがあり、その規模は、開口部径77cm土・深さ28cm土を計り、断面形は播鉢状を呈する。埋土は、上位より暗褐色土・にぶい褐色土によって構成される。暗褐色土全体に焼土粒を少量含み、上位に炭化物を多く含んでいる。このピットより土師器破片と鉄製直刀が出土しており、その形態より貯蔵穴と考えられる。

出土遺物 (図版33-22～26・写真図版33-6、34-7、38-30～32)

出土遺物は、カマドそば(22)・貯蔵穴状ピットP₃₈内(23・24)・埋土下位(25・26)から得られている。

22は復元された小型の深鉢型土器である。外底面は凸曲面を呈し、体部に膨みをもち、口縁部で外反している。体壁の内外面はヘラケズリ、口唇部及び口縁部内面は横ナデによって調整されている。内面全体にわたりススが付着している。外底面は黒斑状に変化している。23は体部上半から口縁部までの破片である。その形状より甕型土器と思われる。体部に最大径をもつ。体壁外面はヘラケズリ、内面はヘラケズリとナデによって調整されている。特に内面の調整は

雑であり、かなりの凹凸がみられる。口縁部は横ナデによって調整されている。内外面とも全体にススの付着がみられる。24～26は鉄製品である。24は平造の直刀である。中子の目釘穴から欠損しているためその全長は不明である。現存の刀身長は31.5cm、刀背の長さ29.7cm、刀背区の長さ5mm、刃区の長さ約5mmである。銚子の部分は明瞭に区分できない。刀背区と刃区は同一延長上にはなく、刃区の方が4mmほど中子に入り込んでいる。25は刀装具とみられ板金を巻いたものである。その内部と外部に柄の一部とみられる木部が残っている。26は穂摘具と考えられ、両端付近に穴があげられている。

DIV区

DIV-1 住居址

遺構（図版11・写真図版14-a～d）

この住居址は、断丘縁の中央部に位置する。内部にみられるピット群の相互関係や配列を検討した結果、このDIV-1住居址内には、炉・床面・柱穴・壁のそれぞれを、何らかの形で共有して、異なる柱穴配置を示す住居址4棟存在することが判明した。これらの住居址の新旧関係は不明であるが、一応便宜的にDIV-1a住居址・DIV-1b住居址・DIV-1c住居址・DIV-1d住居址と呼称する。なお、柱穴配置以外一括して記述する。

この住居址の南側が斜面下方にあたっていることや、南西部に風倒木によると思われる攪乱をうけた部分があるため、南側の一部から南西側にかけての壁が消失している。従って、正確な規模、形状を知ることができないが、残存部の状況から推定すると、規模は径4.2m±×4.0m±を計り、形状は楕円形に近い六角形を呈するものと思われる。

埋土は、上位から褐色土・黒褐色土・暗褐色土によって構成される。炭化物は、暗褐色土に多く含まれ、他の埋土には、極めて微量に含まれている。

床面は、ほぼ平坦で堅くしまっている。

壁高は、北壁32cm±・東壁19cm±・南壁6cm±・西壁20cm±を計る。

周溝は、北壁際の一部にのみ検出された。幅15cm±、深さ10cm±を計る。

炉は、住居址の中央やや南側に位置する石囲い炉で、炉縁径68cm±×60cm±を計る。形状は五角形を呈しており、その長軸の方向は南北である。これは、住居址の平面形の長軸の方向と一致する。構成礫は、粒径6cm±～36cm±の安山岩類亜角礫6個で、火山灰土中3cm±～10cm±の深さに埋設されている。使用面は、床面とほぼ同じレベルである。炉内は、よく焼成をうけており、使用面下6cm±の深さまで、火熱により生じた赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。

石囲い炉の北側1.5m±の床面下に埋設土器がある。埋設されているピットは、開口部径50cm±、深さ40cm±を計る。出土レベルは床面より20cm±の深さである。土器は、破損し原形をとどめておらず破片の状態で出土しているが、底部の破片が上位に位置しており、このような状況からみて、口縁部を下にして倒立状態で直ちに埋設したものと思われる。

なお、石囲い炉の南西際に断面形が皿状を呈するピットが見られる。東側が風倒木と思われるものによって切られているが、残存部から推定すると径75cm±~100cm±、深さ7cm±~10cm±を計り、平面形は楕円形を呈するものと思われる。底面は硬くしまっており、若干の凹凸がみられる。

DIV-1a住居址

この住居址は、DIV-1住居址内で、次にあげる柱穴配置を示すものである。P₄(径32cm±・深さ44cm±)・P₁₂(径20cm±・深さ49cm±)・P₁₇(径35cm±・深さ39cm±)・P₂₆(径29cm±・深さ46cm±)の4個で構成され、四角形の配置を示している。これらの柱穴の中で、P₂₆-P₄・P₁₇-P₁₂が、それぞれ対になる在り方を示している。

DIV-1b住居址

この住居址は、DIV-1住居址内で、次にあげる柱穴配置を示すものである。P₁(径28cm±・深さ35cm±)・P₄(径32cm±・深さ44cm±)・P₁₁(径24cm±・深さ71cm±)・P₁₉(径37cm±・深さ31cm±)・P₂₅(径32cm±・深さ39cm±)の5個で構成され、五角形の配置を示している。これらの中で、P₁を要としてP₂₅-P₄・P₁₉-P₁₁が、それぞれ対になる在り方を示している。なお、この住居址の柱穴配置と石囲い炉の平面形が類似し、長軸の方向も一致している。

DIV-1c住居址

この住居址は、DIV-1住居址内で、次にあげる柱穴配置を示すものである。P₁(径28cm±・深さ35cm±)・P₃(径23cm±・深さ33cm±)・P₁₁(径24cm±・深さ71cm±)・P₁₃(径25cm±・深さ29cm±)・P₁₈(径32cm±・深さ18cm±)・P₂₅(径32cm±・深さ39cm±)の6個で構成され、六角形の配置を示している。これらの柱穴の中で、P₁-P₁₃・P₂₅-P₃・P₁₈-P₁₁が、それぞれ対になる在り方を示している。

DIV-1d住居址

この住居址は、DIV-1住居址内で、次にあげる柱穴配置を示すものである。P₁(径28cm±・深さ35cm±)・P₅(径30cm±・深さ43cm±)・P₁₁(径24cm±・深さ71cm±)・P₁₅(径31cm±・深さ19cm±)・P₂₀(径21cm±・深さ43cm±)・P₂₄(径21cm±・深さ35cm±)の6個で構成され、六角形の配置を示している。これらの柱穴の中で、P₁-P₁₅・P₂₄-P₅・P₂₀-P₁₁が、それぞれ対になる在り方を示している。なお、この住居址の平面形と柱穴配置の構成が一致する。

出土遺物 (図版34-27~34、35-35~44、36-45~46・写真図版34-8、38-33~37、39-

出土遺物は、土器片、石器、土製品である。埋設土器の破片(27)以外すべて床面直上からの出土である。27は、体部の上半から口縁部にかけて欠損する粗製深鉢である。文様は、地文(単節斜縄文)のみが施されている。この土器は、破損状態で床面下に倒立する様な形で埋設されていた。なお、表面の一部にスス状の付着物がみられる。28～31は、深鉢の口縁部片である。28は平縁でやや外反する。口縁部と体部が1本の沈線で区画され、口縁部に無文帯を形成し、体部には縦位の燃糸文が施されている。29は、波状口縁で外反する。頸部に細い粘土紐を貼りつけて隆起線を施し、口縁部に無文帯を形成し、体部には、斜縄文が施されている。また、表面にスス状の付着物がみられる。30は、平縁で直立する。斜縄文のみが施され、口唇部と内面にはナデが施されている。31は、平縁で外反する。28同様1本の沈線で口縁部と体部が区画され、口縁部に無文帯を形成し、体部には、単節の斜縄文が施されている。32は、深鉢の体部片である。文様は燃糸文が施され、それを曲線の沈線によって区画し、その内側を磨消している。文様構成は細片のため把握できない。33と34は同一個体片で、深鉢の体部片である。文様は、斜縄文を曲線の沈線によって区画し、その内側を磨消している。また曲線文の連続する接点には、鱗状の小突起が施されている。なお、全体の文様構成については、破片のため把握できない。

石器の出土は、筥状石器2点(35・36)、スクレイパー5点(37～41)、不定形石器1点(42)、磨製石斧1点(44)、半円状扁平打製石器1点(45)、磨石1点(46)の計11点である。35と36は、縦長剥片を利用し、片面の先端部および側面部に入念な調整剥離を施し、刃部を作り出している。断面形は凸状を呈する。石質はともに玻璃質石英安山岩である。37は、剥片の先端部から長軸方向に平行する両側縁に刃部を形成するエンドスクレイパー的機能を有する石器である。石質は玻璃質安山岩である。38～41は、剥片の長軸方向に平行する縁辺に刃部を形成するサイドスクレイパー的機能を有する石器である。石質は、38～40が玻璃質安山岩、41が玻璃質石英安山岩である。42は、一次加工のみの縦長剥片である。両側縁部に使用痕が認められる。石質は、玻璃質石英安山岩である。44は、刃部側の体部半分を欠損しているため、正確な形態を把握することができないが、比較的大型の定角式石斧と思われる。体部の両面および両側面は、よく研磨されている。横断面形は楕円形状を呈する。石質は斑レイ岩である。45は、平面形が半円状を呈し、その周縁の一部に研磨痕がみとめられる。石質は安山岩である。46は、棒状の自然礫の一稜面を磨っており一部に敲打痕がみられる。石質は安山岩である。土製品の出土は、43の滑車形耳飾り1点である。形状は円形を呈し、中央に大きい孔があり、規模は径4.8cm土、高さ2.7cm土を計る。表面の文様は、周縁側から孔側にかけて「ノ」字状の隆起線を2個所に施し、この隆起線間の周縁側と孔側に竹管状の工具によってそれぞれ一本の刺突文が施されて

いる。また、裏面には、「十」字状に竹管状の工具によって2本の刺突文が施されている。

以上の出土遺物と遺構の形態から、この住居址は縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

E IV区

E IV-1 竪穴住居址

遺 構 (図版12-a・写真図版15-a, b)

この住居址は、調査区域東側の上位緩傾斜面に位置しており、次のような事実からみてE IV-2住居址よりも先行するものである。その事実とは、E IV-2住居址の床面が当住居址の床面や炉の上に貼床として形成されているということである。E IV-1住居址の内部にみられる小ピット群の配置や相互関係を検討した結果、床面・壁・炉などを何らかの形で共有して異なる柱穴配置を示す2棟の住居址が存在していることが判明した。これらの住居址をここで、E IV-1a住居址・E IV-1b住居址と呼称する。この両住居址の新旧関係は不明である。両住居址について述べる前に、まずE IV-1住居址全体について記載する。

斜面下方の壁が消失していることやE IV-2住居址との重複関係により北壁の大半が破壊されているため、規模・形状の詳細は不明である。

埋土は炭化物を少量含む褐色土によって構成されている。単層であるためその性状をField Cardに記載しただけで土層断面図の作成は省略した。

床面はほぼ平坦で堅くしまっている。

壁高は、北壁30cm±・西壁8cm±を計る。

この住居址に伴う炉は1号炉である。1号炉は四形ピット状の掘りこみをもつものである。この掘りこみは、開口部径83cm±×70cm±・底部径60cm±×53cm±・深さ7cm±を計り、平面形がやや不整な円形を呈する。掘りこみの底面の西側部分が炉の使用面となっており、この使用面下には径40cm±×35cm±・厚さ5cm±の明赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。

E IV-1a住居址

この住居址は、E IV-1住居址内で、次のような柱穴配置を示すものである。P₂(径18cm±・深さ30cm±)・P₆(径25cm±・深さ24cm±)・P₁₀(径13cm±・深さ31cm±)・P₁₃(径15cm±・深さ29cm±)・P₁₄(径16cm±・深さ20cm±)・P₁₅(径13cm±・深さ32cm±)・P₁₆(径13cm±・深さ37cm±)の7個で構成され、五角形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P₆—P₁₅—P₁₀—P₁₄と結びあう線がジグザグの形を呈する。

E IV-1b住居址

この住居址は、EⅣ-1住居址内で、次のような住穴配置を示すものである。P₁(径25cm±・深さ46cm±)・P₄(径15cm±・深さ20cm±)・P₈(径10cm±・深さ12cm±)・P₁₁(径18cm±・深さ19cm±)・P₁₂(径16cm±・深さ28cm±)・P₁₄(径16cm±・深さ20cm±)・P₁₅(径13cm±・深さ32cm±)・P₁₆(径13cm±・深さ37cm±)の8個で構成され、長方形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P₄-P₁₆-P₈-P₁₅-P₁₁-P₁₄と結びあう線がジグザグの形を呈する。

出土遺物

出土遺物は、柱穴P₁₀の最下部から得られた深鉢の口縁部片1点だけである。この土器片は地文として単節の斜縄文が施されているもので、その所属時期は縄文時代中期末葉に相当するものと考えられる。しかし室内整理作業中この土器片を紛失したため、本報告書の図版に掲載することができなかった。

EⅣ-1住居址は、以上の出土遺物と炉の形態からみて縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

EⅣ-2住居址

遺構 (図版12-b・写真図版15-a, c)

この住居址は、調査区域東側の上位緩傾斜面に位置しており、EⅣ-1住居址を切りこんでいる。EⅣ-2住居址内部にみられる小ピット群の配置や相互関係を検討した結果、床面・壁・炉などを何らかの形で共有して異なる柱穴配置を示す3棟の住居址が存在していることが判明した。これらの住居址をここで、EⅥ-2a住居址・EⅣ-2b住居址・EⅣ-2c住居址と呼称する。これらの住居址の新旧関係は不明である。個々の住居址について述べる前に、まずEⅣ-2住居址全体について記載する。

北壁の一部を除いてほとんどの壁が消失しているため、規模・形状の詳細は不明である。

埋土は炭化物を少量含む褐色土によって構成されている。単層であるためその性状をField Cardに記載しただけで土層断面図の作製は省略した。

床面はほぼ平坦で非常に堅くしまっている。この床面は貼床で、EⅣ-1住居址の床面や炉(1号炉)の上に炭化物・黒褐色土を微量に含むにふい褐色土が盛られて形成されたものである。

壁高は北壁45cm±を計る。

この住居址に伴う炉は2号炉である。2号炉は、皿形ピット状の掘りこみをもち1号炉と同じ形態を示す。この掘りこみは、開口部径88cm±×68cm±・底部径60cm±×53cm±・深さ12cm±の規模を計り、平面形が楕円形状を呈する。掘りこみの底面の中で炉の使用面となった部分には明赤褐色を呈する現地性の焼土が形成されている。この焼土の範囲は径45cm±×25cm±・厚さ3cm±を計る。なお炉の使用面上の一部に黒褐色土を含む炭化物がみられた。炭化物の分布範囲は、径33cm±×26cm±・厚さ1cm±であった

EⅣ-2a 住居址

この住居址は、EⅣ-2住居址内で、次のような柱穴配置を示すものである。P₁(径25cm±・深さ46cm±)・P₃(径15cm±・深さ20cm±)・P₅(径25cm±・深さ16cm±)・P₁₁(径18cm±・深さ19cm±)・P₁₅(径13cm±・深さ32cm±)・P₁₇(径12cm±・深さ20cm±)の6個で構成され、台形状の配置を示す。これらの柱穴の中で、P₁—P₅—P₁₇—P₁₁と結びあう線がジグザグの形を呈する。

EⅣ-2b 住居址

この住居址は、EⅣ-2住居址内で、次のような柱穴配置を示すものである。P₁(径25cm±・深さ46cm±)・P₉(径22cm±・深さ13cm±)・P₁₁(径18cm±・深さ19cm±)・P₁₅(径13cm±・深さ32cm±)の4個で構成され、菱形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P₁—P₁₁・P₉—P₁₅とそれぞれを結ぶ線が対角線を構成し直交する。

EⅣ-2c 住居址

この住居址は、EⅣ-2住居址内で、次のような柱穴配置を示すものである。P₂(径18cm±・深さ30cm±)・P₉(径22cm±・深さ13cm±)・P₁₁(径18cm±・深さ19cm±)・P₂₉(径20cm±・深さ32cm±)の4個で構成され、菱形の配置を示す。これらの柱穴の中で、P₂—P₁₁・P₉—P₂₉とそれぞれを結ぶ線が対角線を構成し直交する。

EⅣ-2住居址およびEⅣ-1住居址の床面には、これまでに列挙した柱穴群のほかに、P₇(径18cm±・深さ18cm±)・P₁₈(径18cm±・深さ24cm±)・P₁₉(径15cm±・深さ16cm±)・P₂₀(径17cm±・深さ24cm±)・P₂₁(径10cm±・深さ14cm±)・P₂₂(径16cm±・深さ21cm±)・P₂₃(径15cm±・深さ34cm±)・P₂₄(径16cm±・深さ52cm±)・P₂₅(径16cm±・深さ24cm±)・P₂₆(径13cm±・深さ14cm±)・P₂₇(径10cm±・深さ32cm±)・P₂₈(径17cm±・深さ27cm±)の計12個の柱穴状のピット群が検出されている。しかしこれらの具体的な位置づけについては不明である。

EⅣ-2住居址は、出土遺物がないためその所属時期を断定することはできないが、炉の形態およびEⅣ-1住居址との重複関係からみて、縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

EⅣ-3 竪穴住居址状遺構

遺 構 (図版13・写真図版16-a, b)

この竪穴住居址状遺構は、断丘縁の東側に位置する。南側が斜面下方にあたっているため南壁が消失している。従って正確な規模、形状を知ることができないが、残存部から推定すると、規模は径3.3m±×3.2m±を計り、形状はほぼ円形を呈するものと思われる。

埋土は、上位から黒褐色土・明褐色土・褐色土・暗褐色土・黒褐色土によって構成される。炭化物は、上位と下位の黒褐色土に多く含まれ、他の埋土には、極めて微量に含まれている。これらの埋土は、最下位の黒褐色土以外、周囲の各方向から流入堆積した自然堆積の層相を呈している。

床面は平坦であるが部分的に硬軟の差がみられる。それは、南側が非常に堅くしまっており、中央部がやや軟らかく、北側がそれより軟らかい。

柱穴は検出されず、わずかに柱穴状のピットと思われるのが、北東部の壁際に1個（径16cm土・深さ46cm土）検出された。

壁高は、北壁34cm土・東壁17cm土・西壁26cm土を計る。

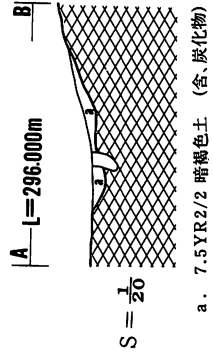
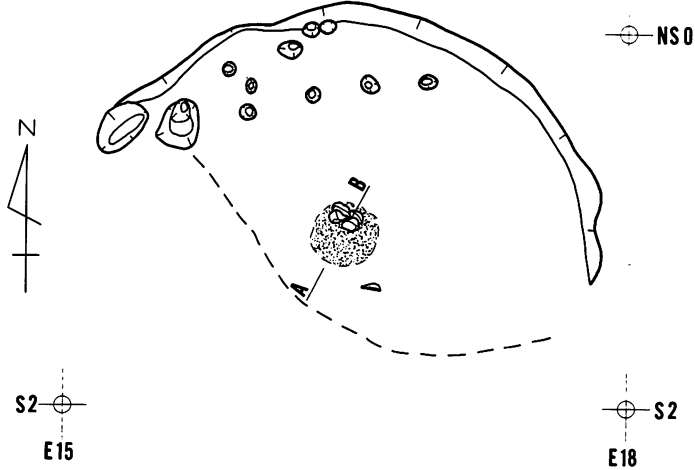
炉または、その痕跡を示すものは確認できなかった。なお、床面上に対をなすと思われる礫が2個存在する。一つは北壁際に位置し、粒径40cm土を計るやや扁平な亜角礫である。この礫は、床面に密着しておらず、その間に層厚2～3cm土の黒色土混りのにぶい灰褐色土が存在している。この礫の特徴は、礫面の中央部から末端部にかけて南北に長い「凹」状のへこみを有することである。もう一つの礫は、床面の中央よりやや南側に位置し、粒径28cm土を計る直方体状の亜角礫で、床面を掘り込んで直立に埋設されている。この礫の北側の上端部が打ち欠かれている。これら2つの礫の間は160cm土を計る。

出土遺物（図版37-47～49・写真図版40-52～54）

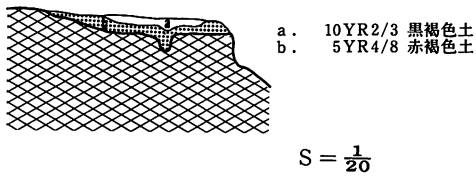
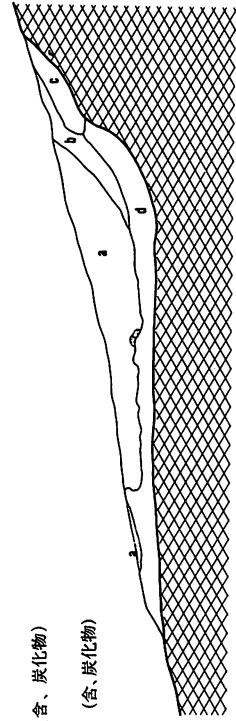
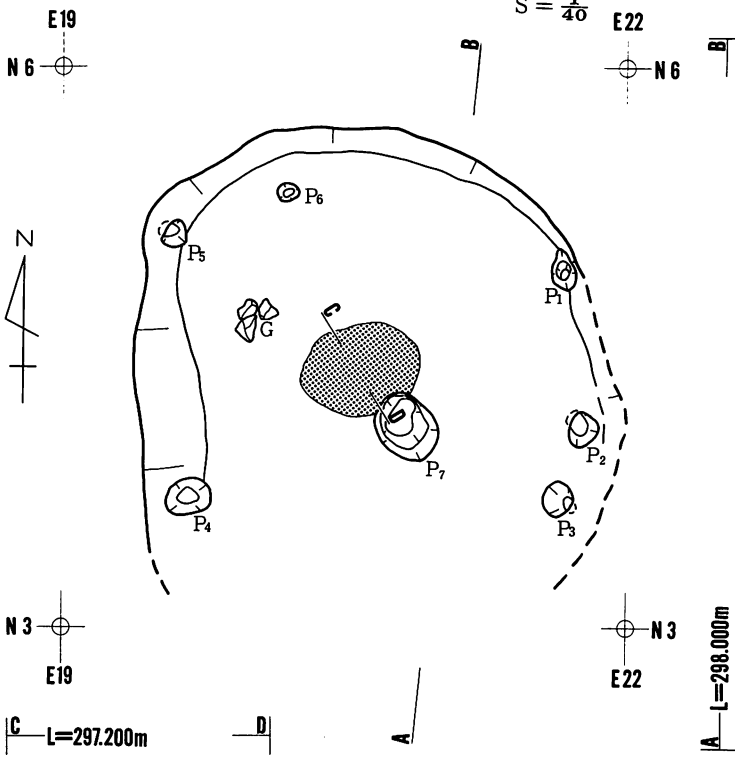
床面上の出土遺物はなく、埋土中から土器片が少数出土している。器形は細片のため把握できない。47は、やや外反ぎみの口縁部片で、斜縄文のみが施されている。48は、体部片で無節の斜縄文が施されている。49は、口縁部片で斜縄文が施され、その上に沈線が施されている。なお、47と48の内外面にはスス状の付着物がみられる。

以上の遺構の形態と出土遺物だけでは、時期を推定しうる資料として乏しく、従って、時期は不明である。

a. B II—1 竖穴住居址状遺構



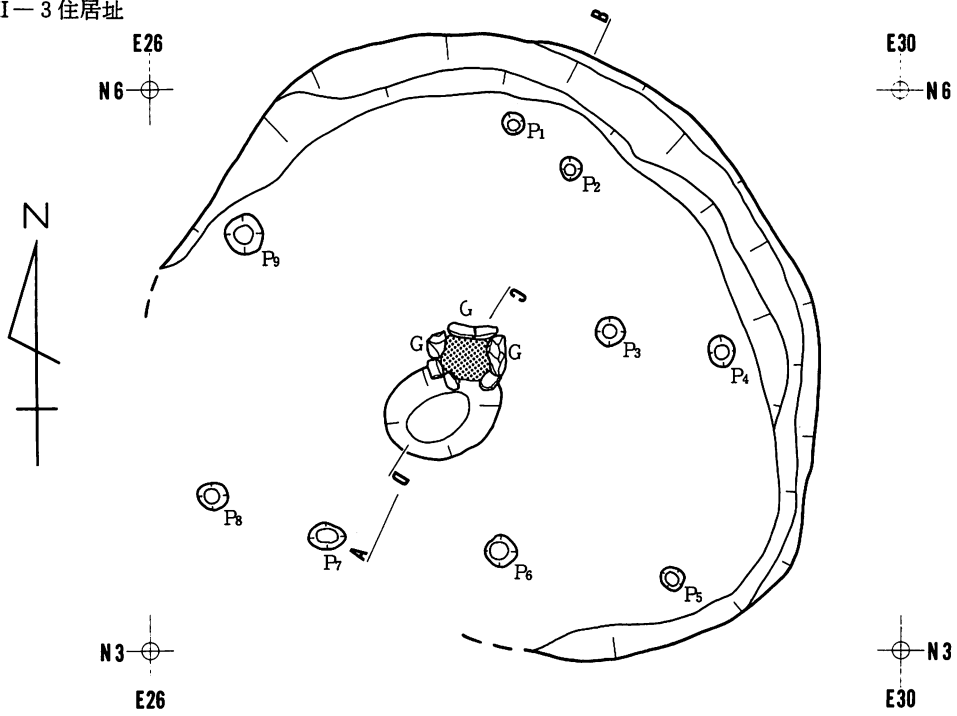
b. B II—2 住居址



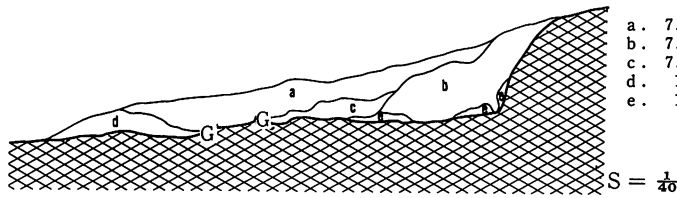
- a. 7.5YR2/1 黑色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR2/2 黑褐色土
- c. 7.5YR4/4 暗褐色土
- d. 7.5YR2/2 黑褐色土 (含、炭化物)

图版 2

B II—3 住居址

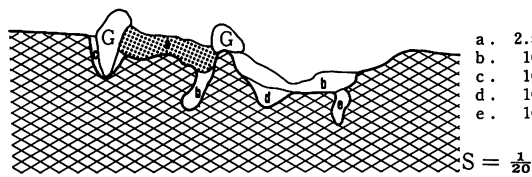


A L=298.400m



- a. 7.5YR2/1 黑色土
- b. 7.5YR3/4 暗褐色土
- c. 7.5YR2/3 極暗褐色土
- d. 10YR3/4 暗褐色土
- e. 10YR4/6 褐色土

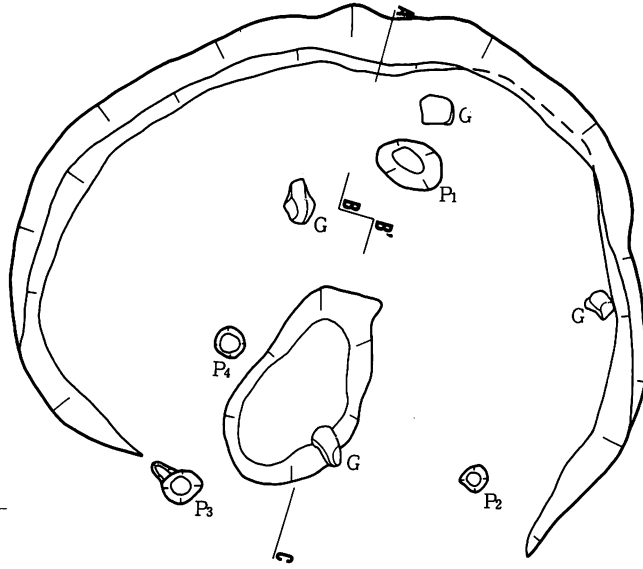
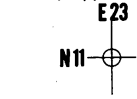
C L=297.900m



- a. 2.5YR2/1 赤黑色土
- b. 10YR2/3 黑褐色土
- c. 10YR4/6 褐色土
- d. 10YR5/6 黃褐色土
- e. 10YR5/8 黃褐色土

圖版 3

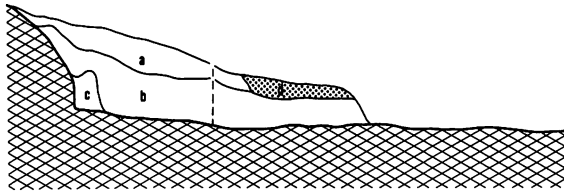
B II-4 住居址



A L=299.000m

B B'

C

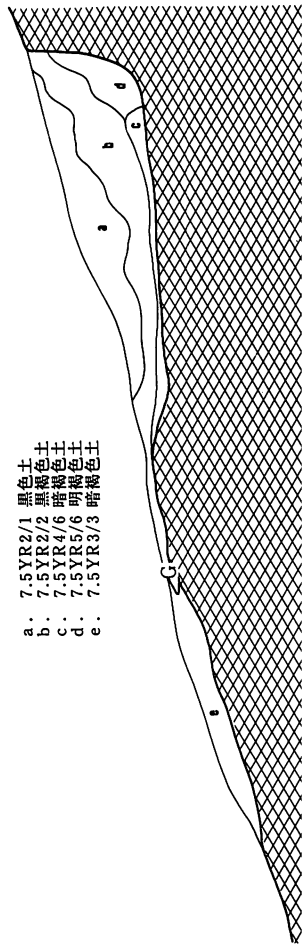
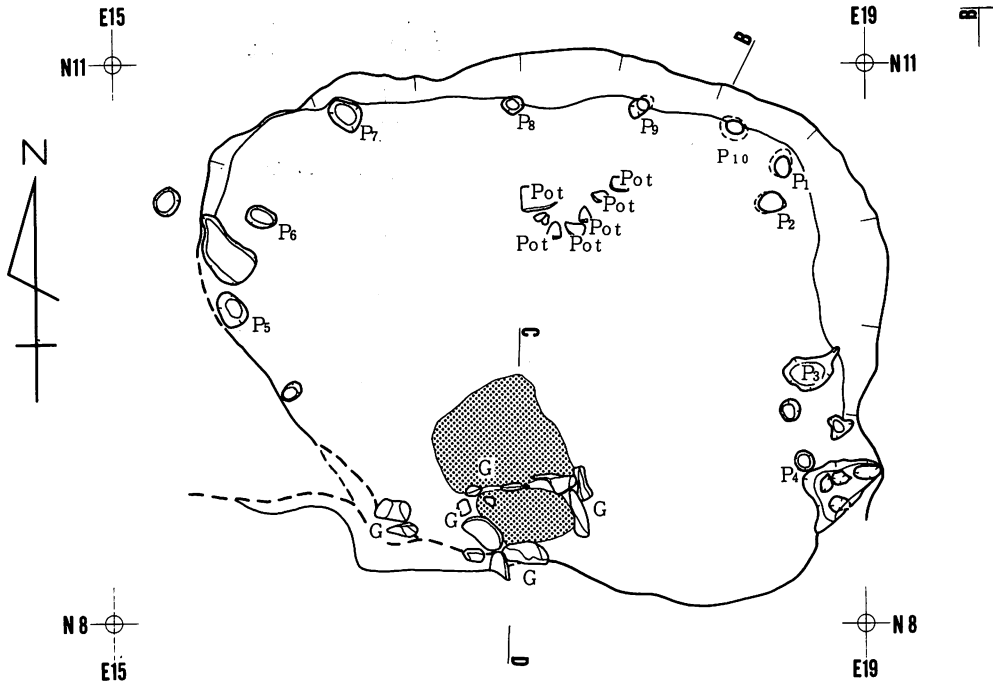


- a. 7.5YR2/2 黑褐色土 (含、炭化物)
- b. 10YR4/6 褐色土
- c. 10YR5/6 黄褐色土
- d. 5YR5/8 明赤褐色土

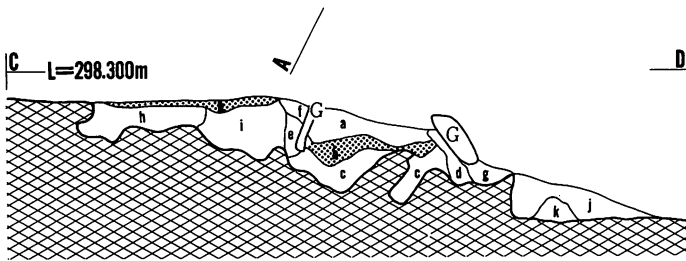
S = $\frac{1}{40}$

图版 4

B II—5 住居址



- a. 7.5YR2/1 黑色土
- b. 7.5YR2/2 黑褐色土
- c. 7.5YR4/6 暗褐色土
- d. 7.5YR5/6 暗褐色土
- e. 7.5YR3/3 暗褐色土



- a. 5YR1 7/1 黑色土
- b. 5YR5/8 明赤褐色土
- c. 10YR4/6 褐色土
- d. 7.5YR3/4 褐色土
- e. 10YR3/4 暗褐色土
- f. 7.5YR2/2 黑褐色土
- g. 7.5YR4/4 褐色土
- h. 710YR4/6 褐色土
- i. 10YR4/6 褐色土
- j. 10YR4/4 褐色土
- k. 10YR4/6 褐色土

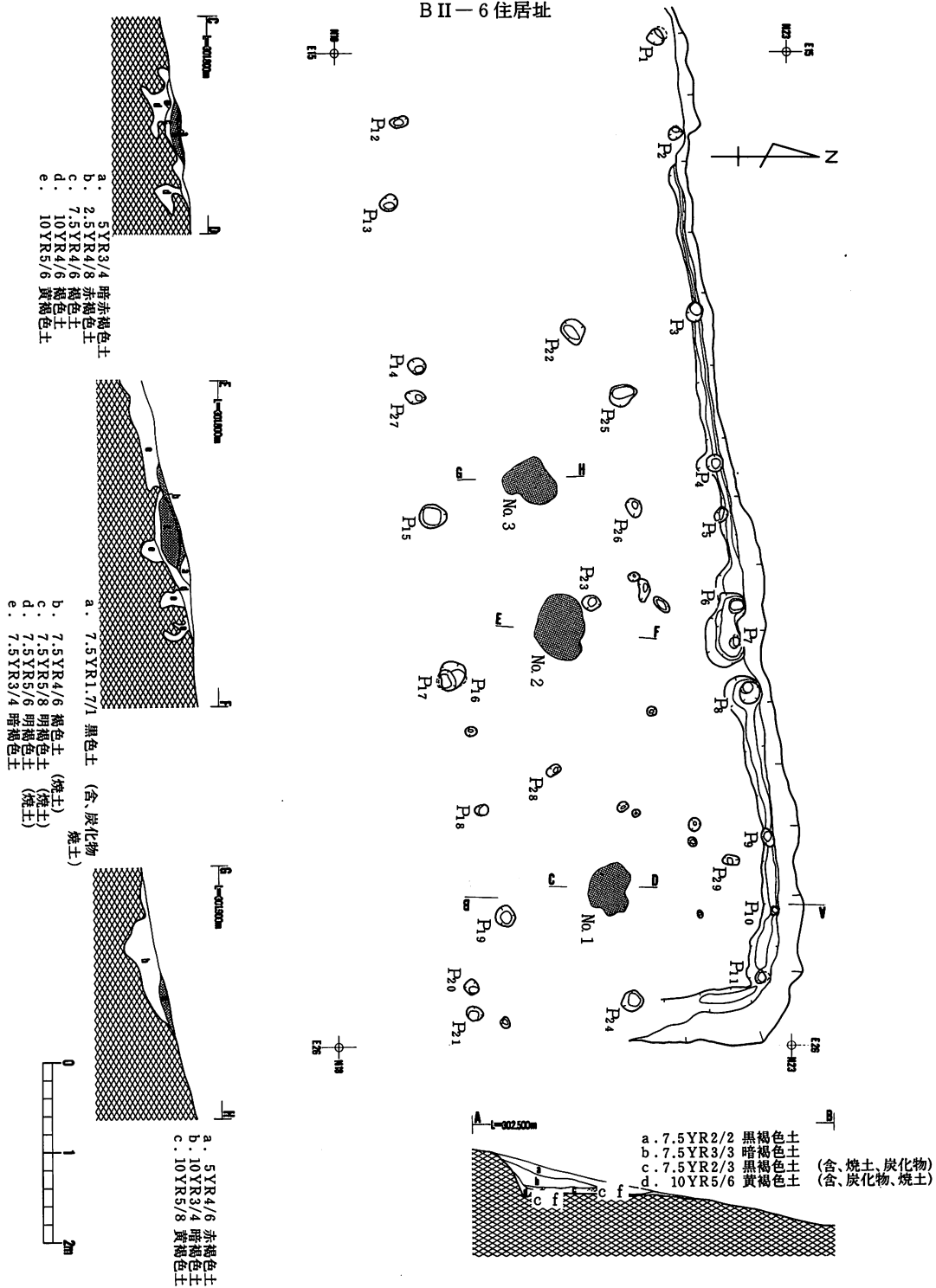
A—L=299.300m

S = 1/20

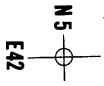
S = 1/40

图版 5

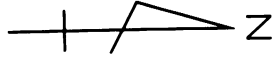
B II-6 住居址



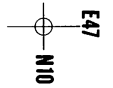
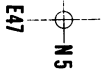
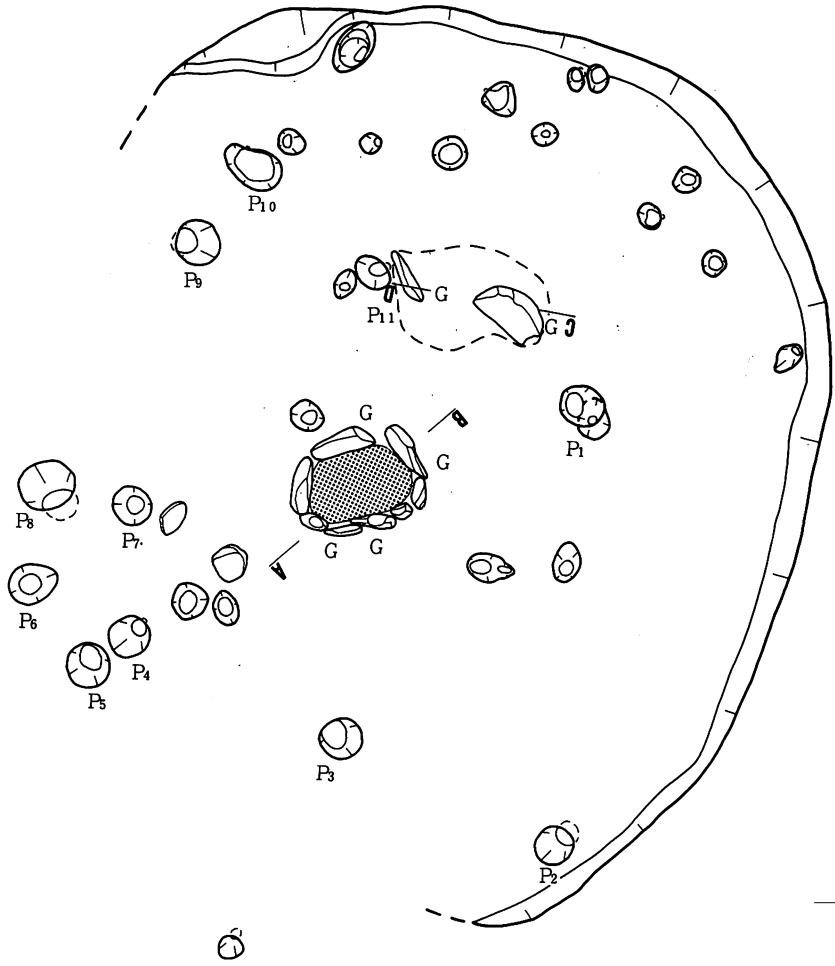
图版 6



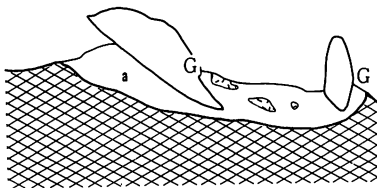
C II-2 住居址



$S = \frac{1}{40}$

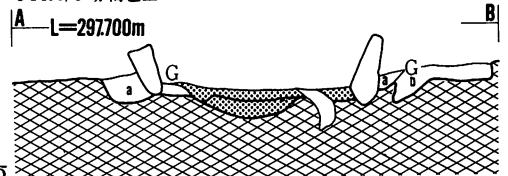


a. 7.5YR2/1 黑色土 (含炭化物)
C—L=298.000m



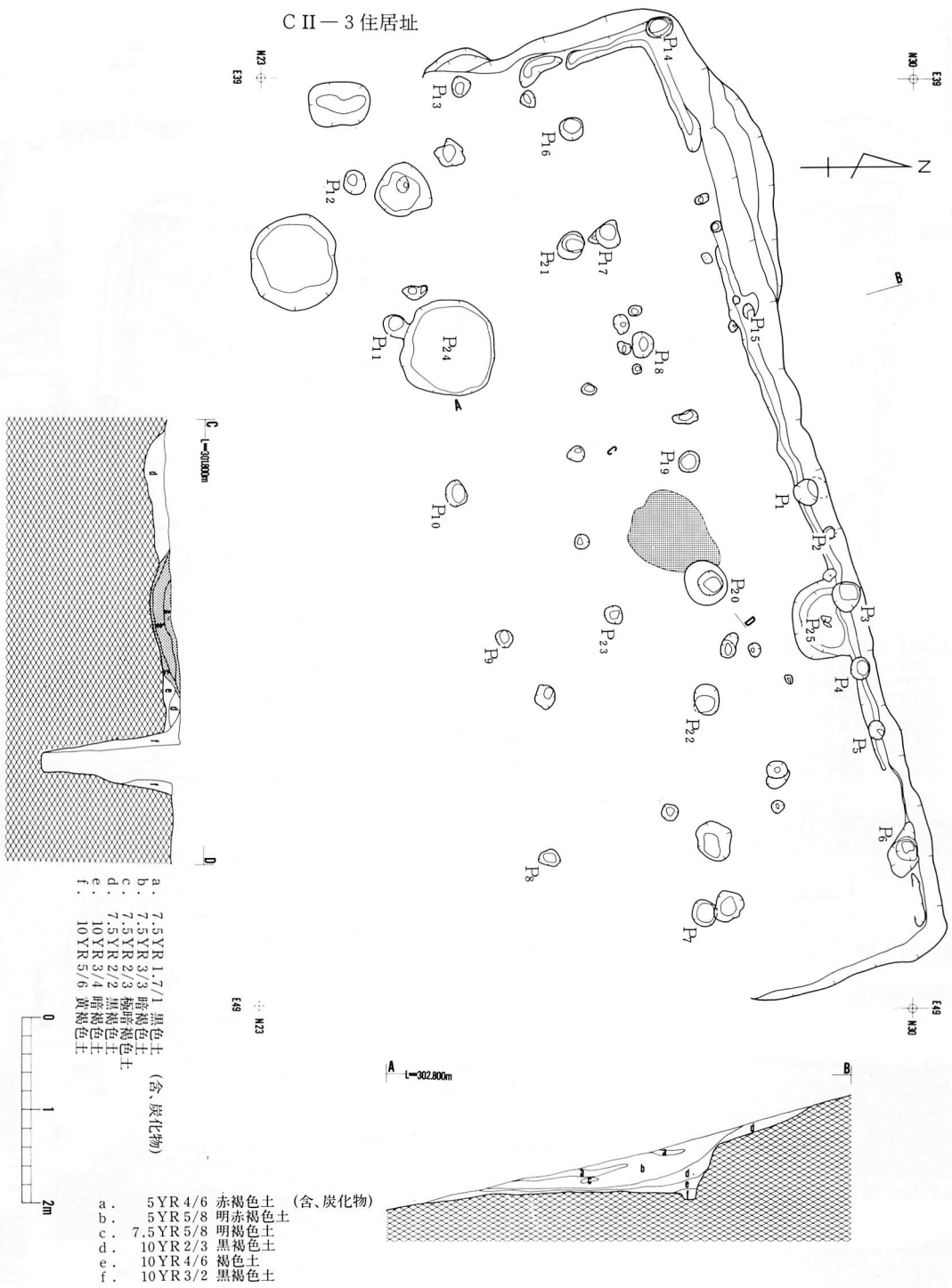
- a. 10YR3/3 暗褐色土
- b. 10YR3/4 暗褐色土
- c. 10YR4/6 褐色土
- d. 7.5YR2/2 黑褐色土
- e. 5YR4/8 赤褐色土

A—L=297.700m



$S = \frac{1}{20}$

图版 8



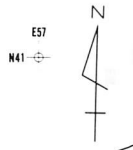
C II - 3 住居址

- a. 7.5YR 1.7/1 黑色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR 3/3 暗暗褐色土
- c. 7.5YR 2/3 暗暗褐色土
- d. 7.5YR 2/2 黑褐色土
- e. 10YR 3/4 暗褐色土
- f. 10YR 5/6 黄褐色土

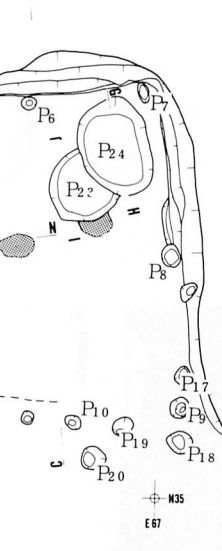
- a. 5YR 4/6 赤褐色土 (含、炭化物)
- b. 5YR 5/8 明赤褐色土
- c. 7.5YR 5/8 明褐色土
- d. 10YR 2/3 黑褐色土
- e. 10YR 4/6 褐色土
- f. 10YR 3/2 黑褐色土

图版 9

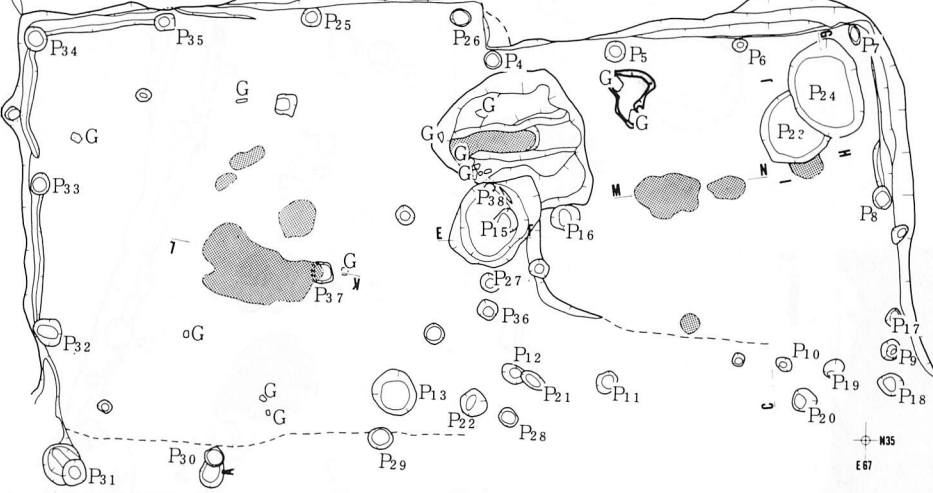
a. D III-1 住居址



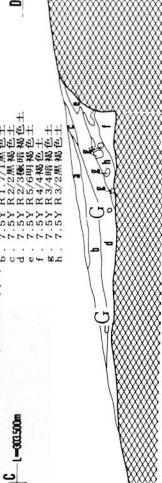
b. D III-2 住居址



c. D III-3 住居址



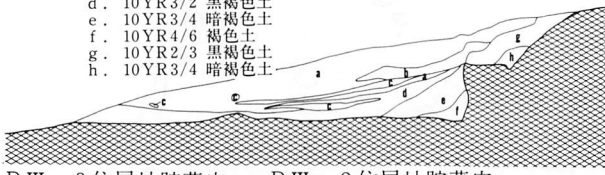
D III-2 住居址断面



D III-1 住居址・3 住居址断面

A L=30.00m

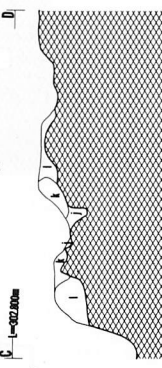
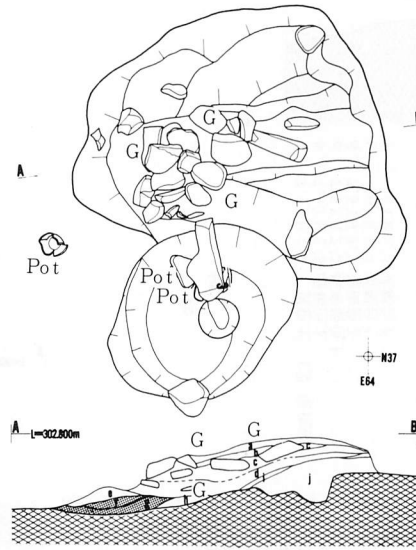
- a. 10YR1.7/1 黒色土 (含、炭化物)
- b. 10YR3/2 黒褐色土
- c. 7.5YR2/2 黒褐色土
- d. 10YR3/2 黒褐色土
- e. 10YR3/4 暗褐色土
- f. 10YR4/6 褐色土
- g. 10YR2/3 黒褐色土
- h. 10YR3/4 暗褐色土



D III-3 住居址カマド

E62 N39

E64 N39



D III-3 住居址貯蔵穴

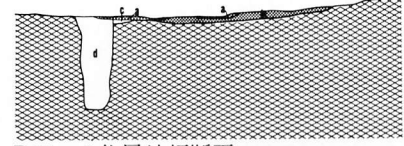
D III-2 住居址貯蔵穴

- a. 10YR3/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- b. 10YR3/3 暗褐色土 (焼土)
- a. 10YR2/3 黒褐色土
- b. 10YR4/4 褐色土
- a. 7.5YR3/4 暗褐色土 (含、炭化物)
- b. 10YR2/3 黒褐色土 (焼土)

D III-3 住居址炉断面

K L=30.50m

- a. 7.5YR4/2 にふい橙色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR5/4 にふい褐色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR4/3 褐色土
- d. 7.5YR3/2 黒褐色土 (含、炭化物)



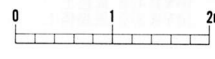
D III-2 住居址炉断面

M L=30.50m

- a. 7.5YR5/8 明褐色土
- b. 10YR4/6 褐色土
- c. 7.5YR5/6 明褐色土

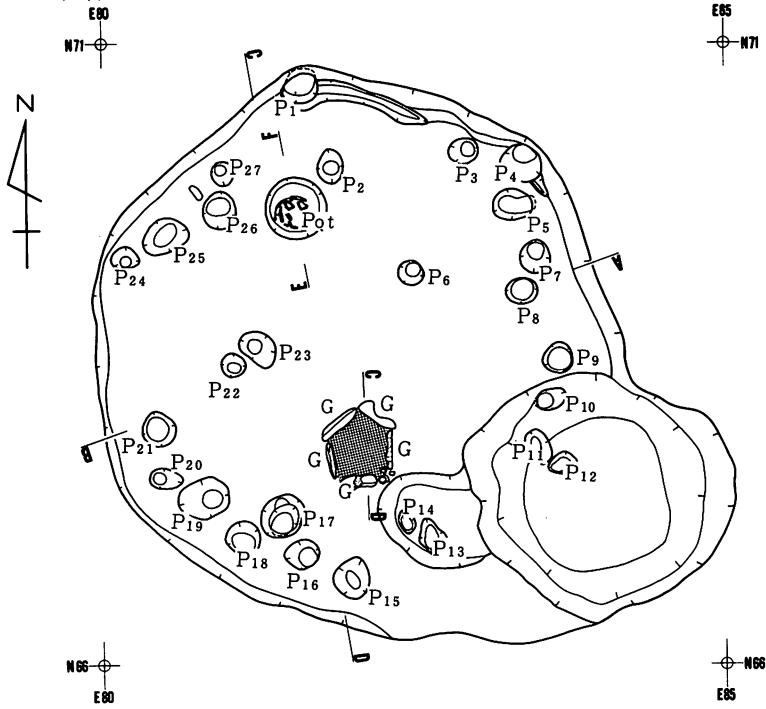


- a. 7.5YR3/3 暗褐色土 (含、炭化物)
- b. 5YR6/0 暗褐色土 (焼土)
- c. 5YR3/3 暗褐色土
- d. 5YR4/6 赤褐色土
- e. 5YR5/3 暗褐色土 (含、炭化物)
- f. 5YR6/0 暗褐色土 (焼土)
- g. 7.5YR6/0 暗褐色土 (含、炭化物)
- h. 7.5YR5/3 にふい、褐色土 (焼土)
- i. 7.5YR4/2 にふい、褐色土 (含、炭化物)
- j. 7.5YR4/2 にふい、褐色土 (含、炭化物)
- k. 7.5YR3/0 暗褐色土
- l. 7.5YR5/3 にふい、褐色土 (含、炭化物)



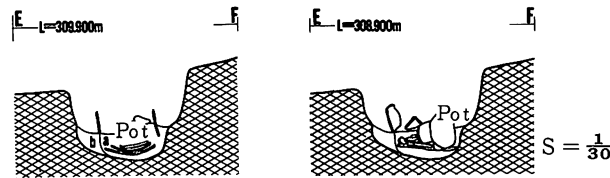
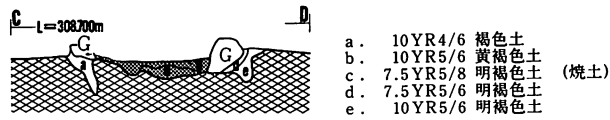
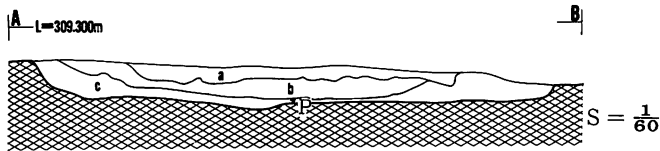
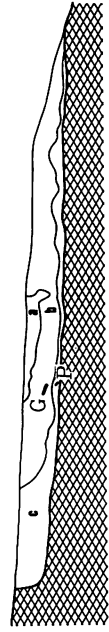
図版10

DIV-1 住居址



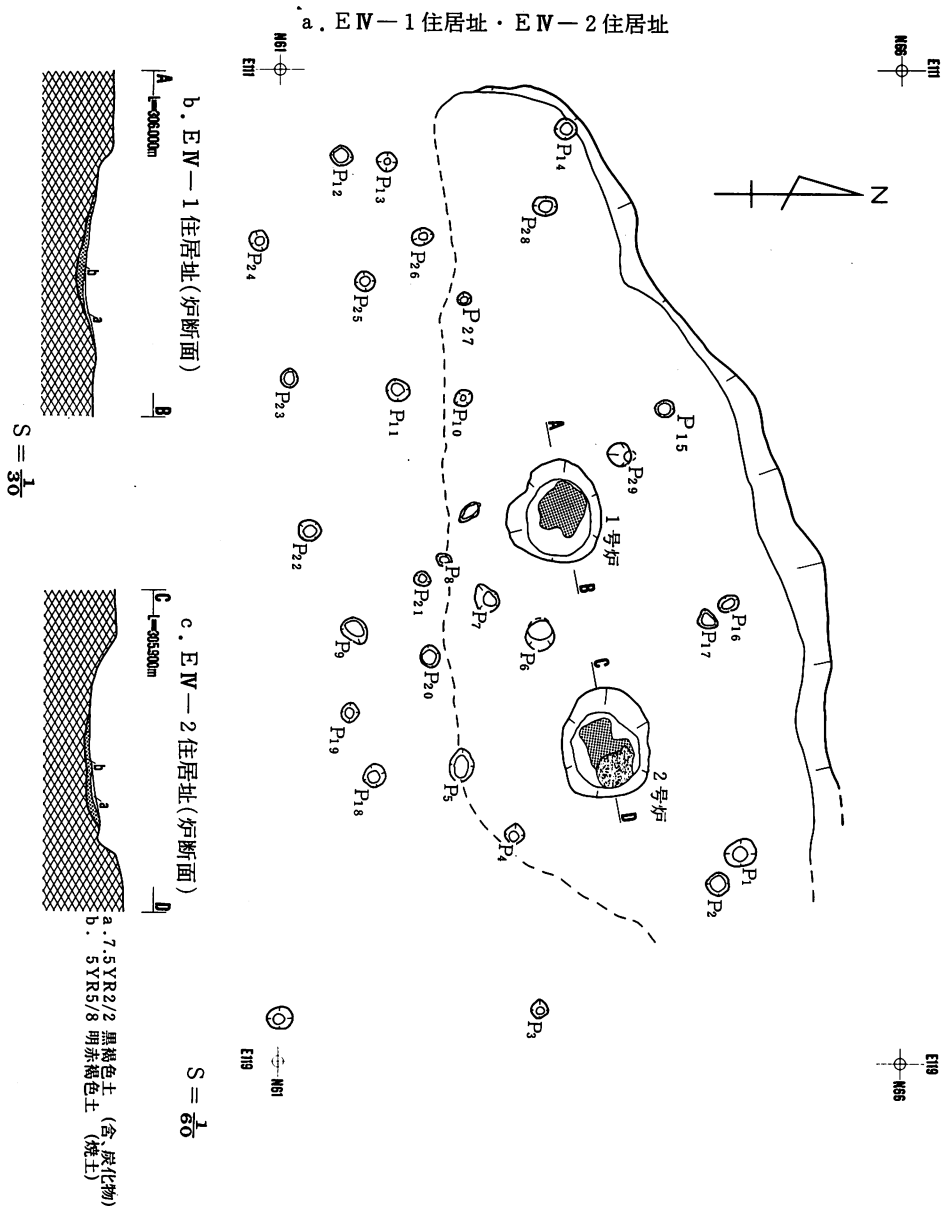
- a. 7.5YR4/3 褐色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR2/1 黒色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR3/4 暗褐色土 (含、炭化物)

1-308.300m



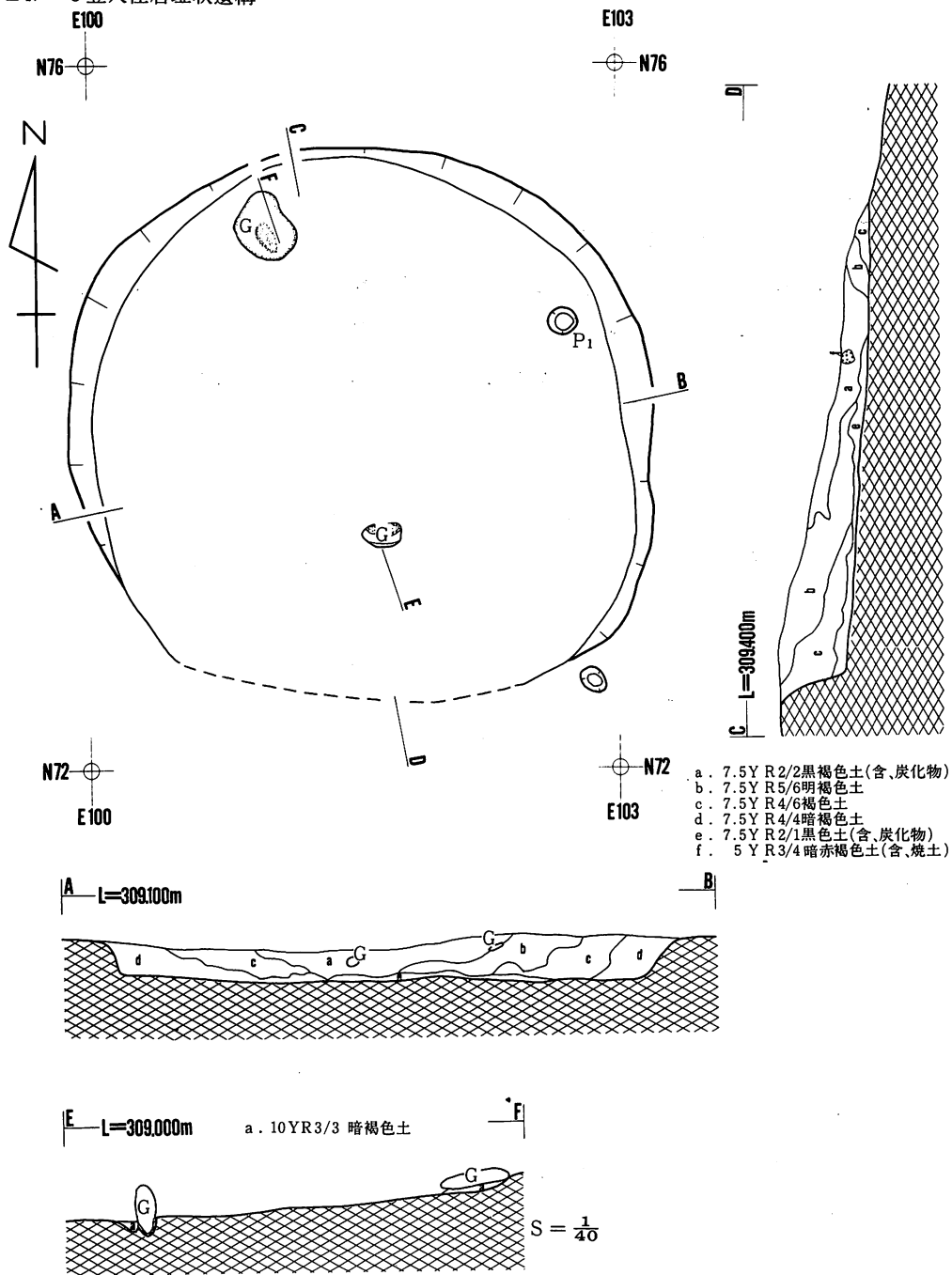
- a. 7.5YR5/6 明褐色土
- b. 7.5YR5/4 にぶい褐色土

図版II



图版12

E IV—3 竖穴住居址状遺構



图版13

(2) ピット

B II 区

B II-51ピット

遺構 (図版14-a・写真図版17-a, b)

このピットは、下位平坦面西側の縁辺部に位置する。規模は、開口部径140cm±・頸部径120cm±・底部径126cm±・深さ50cm±を計る。平面形はほぼ円形を呈し、断面形はフラスコ状を呈する。埋土は、上位から黒色土・黒褐色土・暗褐色土によって構成される。底面は平坦で堅くしまっている。

出土遺物 (図版37-50・写真図版40-55)

埋土上位から少数の土器片が出土している。50は深鉢の体部片で、文様は磨消縄文と細い粘土紐の貼付けによる隆起線が施されている。細片のため全体の構成が把握できない。

B II-52ピット

遺構 (図版14-b・写真図版17-c)

このピットは、下位平坦面西側の縁辺部に位置する。規模は、開口部径124cm±・頸部径105cm±・底部径126cm±・深さ55cm±を計る。平面形はほぼ円形を呈し、断面形はフラスコ状を呈する。埋土は、黒褐色土の単層であるため Field card にその性状を記載しただけで土層断面図の作製は省略した。底面は、平坦で堅くしまっている。

出土遺物 (図版37-51~53・写真図版40-56~58)

埋土上位から土器片が出土している。51~53は、それぞれ異なる深鉢の口縁部片と体部片である。51は、平縁で直立する口縁部片で、頸部に沈線を施して区画し、口縁部に無文帯を形成している。体部には斜縄文が施されている。52と53は体部片で、52には無節の斜縄文が、53には単節の斜縄文が施されている。

C I 区

C I-51ピット

遺構 (図版14-c・写真図版17-d)

このピットは、下位平坦面中央部に位置する。C I-52ピットに西側過半部を大きく切られている。従って、正確な規模・形状を知ることができないが、残存部の状況から推定すると、

規模は開口部径104cm±・底部径105cm±・深さ48cm±を計り、平面形は円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈するものと思われる。埋土の構成は、土層断面の観察を行なわないで掘り上げてしまったため不明である。底面は、平坦で堅くしまっている。なお、遺物の出土はみられなかった。

C I-52ピット

遺構 (図版14-d・写真図版17-d, e)

このピットは、C I-51ピットに東側を切られている。従って、正確な規模・形状を知ることができないが、残存部の状況から推定すると、規模は開口部径90cm±・頸部径80cm±・底部径110cm±・深さ67cm±を計り、平面形はほぼ円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈するものと思われる。埋土は、上位から黒褐色土・極暗褐色土・極暗褐色土と明褐色土の混合土・橙色土によって構成される。これらの埋土は、不規則な堆積の層相を呈している。底面は、平坦でやや堅くしまっている。

出土遺物 (図版37-54~56・写真図版41-59~61)

埋土中から土器片が出土している。54~56は、深鉢の口縁部と体部の破片で同一個体片である。54の口縁部は小波状口縁を呈し、頸部から大きく外反する。この口縁部にはナデが施されている。また体部片には斜縄文が施されている。

C I-53ピット

遺構 (図版15-a・写真図版18-a, b)

このピットは、下位平坦面中央部に位置する。規模は開口部径232cm±・底部径182cm±・深さ81cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形は浅いビーカー形を呈する。埋土は、上位から黒褐色土・暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土によって構成される。これらの埋土は、自然堆積の層相を呈している。底面は、平坦で堅くしまっている。

出土遺物 (図版38-57, 58・写真図版41-62, 63)

埋土上位から土器片が出土している。57は高台杯の底部片である。58は、鉢の頸部から体部にかけての破片と思われる。頸部に2本の沈線が施され、体部には斜縄文が施されている。

C I-54ピット

遺構 (図版16-a・写真図版18-c, d)

このピットは、下位平坦面中央部に位置する。規模は開口部径415cm±×362cm±・底部径324cm±×265cm±・深さ122cm±を計る。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形はビーカー形を呈す

る。埋土は、上位から黒褐色土・極暗褐色土・黒褐色土・褐色土・暗褐色土・黄褐色土によって構成される。上位の黒褐色土～黒褐色土は、「U」字状の堆積状況を示し、自然堆積の層相を呈している。底面は西側半分だけに黒褐色土・褐色土混りの浅黄橙色土を貼っているが、全体的に平坦で堅くしまっている。なお、底面の東側部分に焼土を伴う「カヤ」状の炭化物がみられ、その西側からは径15cm±、底面からの深さ25cm±を計る柱穴状のピットが検出された。

出土遺物 (図版38-59、60・写真図版41-64)

埋土中位から土器片が出土している。59と60は、小型浅鉢の口縁部と体部の破片で、59は、平縁でやや内弯ぎみの口縁部片である。文様は、口縁部に2本の平行沈線文がめぐり、その上位の沈線に刻みが、さらに平縁の口唇部に刻みが施されている。なお、体部には斜縄文と横位に綾絡文が施されている。60は地文(単節の斜縄文)のみである。

C I-55ピット

遺構 (図版16-b・写真図版18-e, f)

このピットは、下位平坦面東側の縁辺部に位置する。規模は開口部径280cm±・底部径185cm±・深さ148cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形はビーカー形を呈する。埋土は、上位から橙色土・黒色土・黒褐色土・明褐色土・黒色土・褐色土・黒褐色土によって構成される。上位の黒色土・黒褐色土と最下位の黒褐色土には、炭化物が含まれ、下位の黒色土の上部には、白色細粒浮石がブロック状に混入している。最下位の黒褐色土以外「U」字状の堆積状況を示し、自然堆積の層相を呈している。底面は、平坦で堅くしまっている。

出土遺物 (図版38-61~65、39-66~69・写真図版41-65~71、42-72、73)

埋土の中位(遺構の東側壁付近)から多数の土器片が出土した。61~64・66~68の7片は、66(平縁で内弯ぎみ)を除いてすべて平縁で外反する鉢型土器の口縁部片である。61~63の文様は、頸部に1本の平行沈線を施し、口縁部文様帯と体部上半の文様帯を区画している。61の口縁部文様は、1本の平行沈線で上下に区画し、上半には羊歯状文、下半には刺突文が施されている。体部上半には、2本の平行沈線文がめぐり、上位の沈線と頸部の沈線間に連続刻め目文が施されている。また体部下半には、斜縄文が施されている。また、頸部に外面から穿孔した補修孔がみられる。62は、口唇部に刻め目が施され、体部上半には、2本の平行沈線文がめぐり、上位の沈線と頸部の沈線間に刺突が施され、また瘤状貼付文が施されている。体部下半には斜縄文が施されている。なお、63は62の同一個体片で、両方の内外面にススの付着が著しい。64・66~68は、口縁部にのみ文様帯を持つものですべて3本の平行沈線文が、口唇部に刻み目が施されている。68のみ、その沈線間に刺突が施されている。また、すべての内外面にススの付着がみられる。65は深鉢の体部片、69は鉢の体部下半の破片であるが、同じ斜縄文のみ

が施されている。

C II 区

C II-51ピット

遺構 (図版15-b・写真図版19-a, b)

このピットは、下位平坦面中央部に位置する。規模は、開口部径185cm±・底部径168cm±・深さ67cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形はピーカー形を呈する。埋土は上位から黒褐色土・暗褐色土・褐色土によって構成される。黒褐色土の下部には、微量の炭化物が含まれている。底面は、平坦でやや堅くしまっている。なお、遺物の出土はみられなかった。

C II-52ピット

遺構 (図版15-c・写真図版19-c, d)

このピットは、下位平坦面中央部に位置する。規模は開口部径105cm±・底部径75cm±・深さ31cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形は浅鉢形を呈する。埋土は黒色土と黒褐色土によって構成される。底面は、若干の凹凸がみられるが堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

C II-53ピット

遺構 (図版17・写真図版19-e, f)

このピットは、C II-52ピットの北東約1mのところに位置する。規模は開口部径230cm±・底部径198cm±・深さ118cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形はピーカー形を呈する。埋土は、上位から黒色土・暗褐色土・黒褐色土と暗褐色土の混合土・黒褐色土・暗褐色土が不連続に挟在する黒色土・暗褐色土・にぶい灰褐色土によって構成される。暗褐色土が不連続に挟在する黒色土には、炭化物が微量に、白色細粒浮石が多量に混入している。最下層のにぶい灰褐色土以外「U」字状の堆積を示し、自然堆積の層相を呈している。底面は、平坦で堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

C II-54ピット

遺構 (図版18-a・写真図版20-a, b)

このピットは、下位平坦面東側の縁辺部に位置する。規模は開口部径347cm±×294cm±・底部径280cm±×244cm±・深さ95cm±を計る。平面形は隅丸方形を呈し、断面形はピーカー形を

呈する。埋土は、上位から黒色土・暗褐色土・褐色土によって構成される。炭化物は、どの土にも微量に含まれているが、特に上位の黒色土に多い。また、この埋土中には白色細粒浮石がブロック状に混入している。底面のほぼ中央に、褐色土を円形状に踏み固めた部分が存在する。これは、CⅡ-55ピットを褐色土で閉塞してCⅡ-54ピットの底面を形成したものである。なお、踏み固められた褐色土以外の底面も堅く全体的に平坦である。

出土遺物（図版39-70～79・写真図版42-74～81）

埋土の中位、南西側の壁付近から多数の土器片が出土した。70と71は、深鉢の平縁で直立する口縁部片と体部片で同一個体の破片である。口縁部まで斜縄文のみが施されており、外面にはスス状の付着物がみられる。72は、深鉢の口縁部片と思われる細片である。直立する口縁部まで斜縄文が施されているのが確認できる。73は、深鉢の波状口縁を呈し直立する口縁部片である。口唇部には小突起が施され、外面には斜縄文が施されている。74は、鉢の平縁で外反する口縁部片である。口唇部に刻み目が施されており頸部と体部上半には3本の平行沈線文が施され、その上位2本の沈線間に刻み目状の連続刺突文が施されている。体部下半は、斜縄文のみが施されている。なお、内外面ともにススの付着が著しい。75～77は、鉢の口縁部～体部片ですべて同一個体の破片である。口縁部は平縁で外反し、口唇部に刻み目が施されている。頸部には、2本の平行沈線文が施され、口縁部と体部を区画している。体部は斜縄文のみが施されている。なお、内外面にススの付着が著しい。

CⅡ-55ピット

遺構（図版18-a・写真図版20-a）

このピットは、CⅡ-54ピットの底面から検出された。従って下位の一部しか残存しておらず正確な規模・形状を知ることができない。わずかに底部の径184cm±、CⅡ-54ピットの底面からの深さ52cm±を計り、残存部の平面形が円形を呈するのを知るのみである。残存部の埋土は、踏み固められたと思われる褐色土・にぶい黄橙色土・明褐色土によって構成されている。これらの埋土は不規則な堆積の層相を示している。底面は平坦で堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

CⅡ-56ピット

遺構（図版18-b・写真図版20-c, d）

このピットは、下位平坦面中央部に位置する。規模は開口部径405cm±×323cm±・底部径252cm±×195cm±・深さ146cm±を計る。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形はピーカー形を呈する。埋土は、上位から黒褐色土・黒色土・黒褐色土・灰褐色土・暗褐色土・褐色土・黒褐色土・

明褐色土によって構成される。炭化物は、黒色土に微量に含まれている。また、白色細粒浮石が灰褐色土に多量に、暗褐色土には微量に混入している。これらすべての埋土は、自然堆積の層相を呈する。底面は平坦で堅くしまっている。その底面のほぼ中央部から掘り方を持つ柱穴が1個検出された。規模は径48cm±・底面からの深さ45cm±を計る。

出土遺物 (図版40-78、79・写真図版34-9、42-82)

埋土の中位から土器片が出土した。78は、深鉢の体部下半から底部にかけての破片で、体部下半に斜縄文が施されている。また、外面のみにススの付着がみられる。79は、平縁で外反ぎみの深鉢の口縁部片である。口唇部に鋸歯状の刻みが施され、口縁部から体部にかけては斜縄文を施し、その後に口縁部のみヘラミガキによる磨消しを施している。なお、外面にスス状の付着物がみられる。

C II-57ピット

遺構 (図版19-a・写真図版21-a, b)

このピットは、下位平坦面中央部に位置する。C II-58ピットに東側の一部を切られている。規模は開口部径298cm±・底部径234cm±・深さ164cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形はビーカー形を呈する。埋土は、上位から暗褐色土・褐灰色土・褐色土・にぶい褐色土・極暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土・灰褐色土・にぶい褐色土・明褐色土によって構成される。上位の褐灰色土から極暗褐色土にかけて白色細粒浮石がブロック状に混入している。また中位のにぶい褐色土と極暗褐色土に炭化物が微量に含まれている。全体の埋土は自然堆積の層相を呈している。底面は平坦で堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

C II-58ピット

遺構 (図版19-b・写真図版21-a, c)

このピットは、C II-57ピットの東側に位置する。西側の一部がC II-57ピットの埋土を切るような形で構築されている。この状況から新旧関係は、C II-57ピット廃絶後にC II-58ピットを構築したものと思われる。規模は開口部径278cm±・底部径185cm±・深さ188cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形はビーカー形を呈する。埋土は、上位から黒色土・黒褐色土・暗褐色土・黒褐色土・黒色土・黄褐色土・黄橙色土・黒色土・黒褐色土によって構成される。上位の黒褐色土から中位の黒色土にかけて炭化物が微量に含まれている。また中位の黒褐色土には、白色細粒浮石がブロック状に混入している。これら全体の埋土のうち、中位の黒色土より上位は自然堆積の層相を呈し、下位は不規則な堆積の層相を呈している。底面は平坦で堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

C II-59ピット

遺構 (図版20-a・写真図版22-a, b)

このピットは、C II-58ピットの東方約1mのところの位置する。規模は開口部径210cm土・底部径155cm土・深さ110cm土を計る。平面形は円形を呈し、断面形はビーカー形を呈する。埋土は、上位から黒色土・暗褐色土・黒褐色土・明褐色土・褐色土によって構成される。これらのうち暗褐色土には白色細粒浮石がブロック状に混入し、この暗褐色土とその下位の黒褐色土には、微量ながら炭化物が含まれている。なお、すべての埋土は自然堆積の層相を呈している。底面は平坦で堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

C III区

C III-51ピット

遺構 (図版20-a・写真図版22-c, d)

このピットは、緩傾斜地上位の北西部に位置する。南側が斜面下方にあたっているため南側の壁は、北側に比べて半分しか存在しておらず、従って、深さ、断面形は北側の観察から記載した。規模は開口部径125cm土・底部径100cm土・深さ47cm土を計る。平面形は円形を呈し、断面形は皿状を呈する。埋土は、上位から黒褐色土・暗褐色土・極暗褐色土・明褐色土によって構成される。全体に不規則な堆積の層相を呈している。底面は凹凸がみられるが堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

D II区

D II-51ピット

遺構 (図版20-b・写真図版22-e)

このピットは、緩傾斜面中位のほぼ中央部に位置する。南側が斜面下方にあたっているため、南側の壁は北側に比べて半分しか残存しておらず、従って、深さ・断面形は北側の観察から推定して記載した。規模は開口部径70cm土・底部径58cm土・深さ15cm土を計る。平面形はほぼ円形を呈し、断面形は皿状を呈する。埋土は、白色細粒浮石を多量に、炭化物を微量に含んだ灰褐色土の単層である。そのため Field Card にその性状を記載しただけで土層断面図の作製は省略した。底面は凹凸がみられるが堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

D III区

D III-51ピット

遺 構 (図版21-a・写真図版23-a, b)

このピットは、D II-51ピットの北東約1.5mの緩傾斜地に位置する。南側が斜面下方にあたっているため南側の壁高は3cm±しか残存しておらず、従って、深さ・断面形は北側の観察から推定して記載した。規模は開口部径105cm±・底部径94cm±・深さ25cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形は皿状を呈する。埋土は、炭化物を微量に含む黒色土・黒褐色土・褐色土によって構成される。全体に不規則な堆積の層相を呈している。底面は凹凸がみられるが堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

D III-52ピット

遺 構 (図版21-b・写真図版23-c, d)

このピットは、緩傾斜面上位のほぼ中央部に位置する。規模は開口部径128cm±・底部径104cm±・深さ40cm±を計る。平面形はほぼ円形を呈し、断面形は皿状を呈する。埋土は、炭化物を微量に含む黒褐色土と灰褐色土によって構成される。底面は平坦で堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

D III-53ピット

遺 構 (図版21-c・写真図版23-e, f)

このピットは、D III-52ピットの東方約4mの緩傾斜地に位置する。規模は開口部径88cm±・底部径75cm±・深さ50cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形はピーカー形を呈する。埋土は、炭化物と火山灰を微量に含む黒褐色土と暗褐色土によって構成される。底面はほぼ平坦で堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

D III-54ピット

遺 構 (図版22-a・写真図版24-a, b)

このピットは、D III-52ピットの北方約4mの緩傾斜地に位置する。開口部の北側に風倒木痕状の浅い落ちこみがみられ、正確な開口部径は計測できなかった。従って、規模・形状は、頸部以下の観察から記載した。規模は頸部径92cm±・底部径117cm±・深さ41cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。埋土は、炭化物を微量に含む黒褐色土と暗

褐色土によって構成される。底面は平坦で堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

DⅢ-55ピット

遺構 (図版22-b・写真図版24-c, d)

このピットは、緩傾斜面上位の北東部に位置する。南側が斜面下方にあたっているため南側の壁は、北側に比べて約 $\frac{1}{2}$ しか残存しておらず、従って、深さ・断面形は北側の観察から推定して記載した。規模は開口部径140cm±・底部径125cm±・深さ40cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形は皿状を呈する。埋土は、上位から暗褐色土・黒褐色土・褐色土によって構成される。全体に不規則な堆積の層相を呈している。底面はほぼ平坦でやわらかい。遺物の出土はみられなかった。

DⅢ-56ピット

遺構 (図版22-c・写真図版24-e, f)

このピットは、緩傾斜面上位の北西部に位置する。規模は開口部径80cm±・底部径65cm±・深さ22cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形は皿状を呈する。埋土は、炭化物を微量に含む褐色土と橙色土によって構成される。底面はほぼ平坦でやわらかい。遺物の出土はみられなかった。

DⅣ区

DⅣ-51ピット

遺構 (図版23-a・写真図版25-a, b)

このピットは、DⅢ-56ピットの北東6m±の段丘縁辺に位置する。東側の開口部の一部が攪乱穴によって破壊されている。規模は開口部径120cm±×110cm±・底部径110cm±×98cm±・深さ47cm±を計る。平面形は隅丸方形を呈し、断面形はピーカー形を呈する。埋土は、上位から炭化物を微量に含む黒褐色土・明褐色土・暗褐色土・褐色土によって構成される。最上位の黒褐色土は、非常に堅く人為的に埋められて叩きしめられたような層相を呈している。底面は平坦で堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

DⅣ-52ピット

遺構 (図版23-b・写真図版25-c)

このピットは、DⅣ-51ピットの東側約50cmの段丘縁辺に位置する。南側が斜面下方にあた

っているため南側の壁は、北側に比べて約半分しか残存しておらず、従って、深さ・断面形は北側の観察から推定して記載した。規模は開口部径95cm±×75cm±・底部径82cm±×55cm±・深さ40cm±を計る。平面形はいびつな楕円形状を呈し、断面形はピーカー形を呈する。埋土は、ブロック状に少量の黄褐色土を含む暗褐色土の単層である。そのため Field Card にその性状を記載しただけで土層断面図の作製は省略した。底面は平坦で非常に堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

DIV-53ピット

遺 構 (図版23-c・写真図版25-d, e)

このピットは、DIV-1住居址の西方8mの段丘面に位置する。規模は開口部径124cm±・底部径158cm±・深さ77cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。埋土は、上位から黒褐色土・暗褐色土・極暗褐色土・明褐色土によって構成される。炭化物はどの層にも微量に含まれるが、最上位の黒褐色土には特に多い。これらの埋土は、全体に不規則な堆積の層相を呈している。底面は平坦で堅くしまっている。この底面の三隅（北側・南東側・西側）から、次の規模・形状を呈するピットが検出された。P₁ (径22cm±・深さ10cm±)・P₂ (径42cm±・深さ35cm±)・P₃ (径45cm±・深さ15cm±)で、これらの平面形は円形を呈し、断面形はほぼフラスコ形を呈する。なお、これらのピット群は、P₁を頂点とする三角形の配置を示している。

出土遺物 (図版40-80~83・写真図版35-10、43-83~85)

埋土の中～下位からほぼ完形に近い土器(80)と多数の土器片が出土した。80は、口縁部が小波状口縁を呈し、外反する台付浅鉢である。内外面とも入念なミガキが施され一部に黒斑がみられる。なお、底部に黒色処理を施した様相がみられる。81は、平縁で直立ぎみの口縁部から体部にかけての小型鉢型土器の破片である。外面の文様は、頸部に一条の平行沈線を施し、口縁部文様帯と体部文様帯を区画している。口縁部文様帯は、三叉状刻文と長弧状の磨消縄文の組み合わせのくり返しによって構成され、体部文様帯は、三叉状刻文と環状の磨消縄文の組み合わせのくり返しによって構成されている。内面には、横方向のヘラミガキが施されている。82は、小波状口縁を呈する浅鉢の口縁部～体部にかけての破片である。内外面ともミガキが施され、一部に黒斑がみられる。83は、小型鉢の体部片と思われる。摩耗が激しく磨消縄文が確認されるだけである。なお、内面にススの付着が著しい。

DIV-54ピット

遺 構 (図版24-a・写真図版26-a, b)

このピットは、DⅣ-53ピットの北方4mの段丘面に位置する。規模は開口部径102cm±・底部径115cm±・深さ68cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。埋土は、上位から黒褐色土・褐色土・暗褐色土によって構成される。炭化物は、どの埋土にも微量に含まれている。全体に「ㄣ」状の堆積を示しており、自然堆積の層相を呈している。底面はほぼ平坦で堅くしまっている。

出土遺物（図版40-84~86、41-87~89・写真図版43-86~91）

埋土中位から多数の土器片が出土している。84~86はそれぞれ異なる深鉢の口縁部片と体部片である。84は、平縁のやや外反する口縁部片で頸部に1本の沈線を施し、口縁部に無文帯を形成する。体部には燃糸文が施されている。85は、体部片で地文（単節の斜縄文）を沈線で区画し磨消が施されている。86は、平縁で外反する口縁部片で、口唇部まで斜縄文が施されている。87~89は、小型鉢の口縁部片と体部片である。87は、内弯する口縁部片で平縁の口唇部には刻みを、口辺部には2本の平行沈線文が施され、体部には斜縄文が施されている。88は、87と同様の文様を有している。なお、89は同一個体片である。

DⅣ-55ピット

遺構（図版24-b・写真図版26-c, d）

このピットは、DⅣ-1住居址の南西3mの段丘縁に位置する。規模は開口部径70cm±・底部径65cm±・深さ25cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形は皿状を呈する。埋土は、炭化物を微量に含む暗褐色土と明褐色土によって構成される。底面は平坦で堅くしまっている。

出土遺物（図版41-90・写真図版44-92）

床面の直上から土器片が出土している。90は、深鉢の体部片で縄文が横位に施されており、その内外面にはスス状の付着物がみられる。

DⅣ-56ピット

遺構（図版24-c・写真図版26-e, f）

このピットは、DⅣ-55ピットの東隣に位置する。規模は開口部径98cm±・底部径94cm±・深さ51cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形はビーカー形を呈する。埋土は、上位から黒褐色土・暗褐色土・明褐色土・橙色土によって構成される。最下位の橙色土以外の埋土には、微量ながら炭化物が含まれている。底面はほぼ平坦で堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

DⅣ-57ピット

遺構 (図版24-d・写真図版27-a, b)

このピットは、DⅣ-53ピットの北方3mの断丘面に位置する。規模は開口部径94cm±×83cm±・底部径95cm±・深さ72cm±を計る。平面形は開口部が楕円形状、底部が円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。埋土は、上位から極暗褐色土・黒色土・褐色土によって構成される。上位の極暗褐色土と黒色土には、微量ながら炭化物が含まれている。底面は平坦でやや堅くしまっている。


出土遺物 (図版41-91・写真図版44-93)

埋土中から土器片のみが出土している。91は、平縁でやや外反する深鉢の口縁部片である。頸部には1本の沈線を施し、無文帯を形成している。体部には燃糸文が施されている。

EⅢ区

EⅢ-51ピット

遺構 (図版25-a・写真図版27-c, d)

このピットは、緩傾斜面中位の東側に位置する。規模は開口部径178cm±・底部径160cm±・深さ102cm±を計る。平面形はほぼ円形を呈し、断面形は北側にややフラスコ状を示す部分もみられるが全体にピーカー形を呈する。埋土は、上位から黒褐色土・暗褐色土・灰褐色土・橙色土・にぶい橙色土・黒褐色土によって構成される。炭化物は、どの埋土にも含まれているが、上位の黒褐色土・暗褐色土には特に多い。なお、最下位の黒褐色土は「」状のもりあがりが見られる。層相は全体に不規則である。底面は平坦で非常に堅くしまっている。出土遺物はみられなかった。

EⅣ区

EⅣ-51ピット

遺構 (図版25-b・写真図版27-e, f)

このピットは、DⅣ-1住居址の東方9mの段丘面に位置する。開口部の南側の一部が木根による攪乱をうけ、開口部と頸部が大きくくずれている。規模は開口部径110cm±・頸部径70cm±・底部径90cm±・深さ70cm±を計る。平面形はほぼ円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。埋土は、上位から黒色土・黒褐色土・明褐色土・にぶい褐色土によって構成される。黒褐色土は、埋土全体の9割近く占めており、かつ、この埋土のみに炭化物が含まれている。底面は平坦で堅くしまっている。出土遺物はみられなかった。

EⅣ-52ピット

遺構 (図版25-c・写真図版28-a, b)

このピットは、EⅣ-151竪穴状遺構の南方9mの緩傾斜面上位に位置する。規模は開口部径70cm±・底部径52cm±・深さ28cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形は皿状を呈する。埋土は、炭化物を含む暗褐色土の単層である。そのため Field card にその性状を記載しただけで土層断面図の作製は省略した。底面はほぼ平坦で堅くしまっている。

出土遺物 (図版42-92~95・写真図版35-11、36-12、44-93~95)

埋土の最上位から半完形品の土器2個体(92・93)と土器片が出土した。92は、口縁部が波状口縁を呈し、外反ぎみの小型深鉢である。波状口縁の頂部には刻み目が施されている。文様は口縁部に斜縄文が、体部には縦位の縄文が施され、その上に頸部~体部上半にかけて5本の平行沈線文が施されている。なお、内外面にススの付着がみられる。93は、口縁部が小波状を呈し、内傾する肩部に張り出しがみられる深鉢土器である。文様は、肩部の一部に無節の斜縄文を施し、その後にナデで磨消している。また、口縁部と体部下半にナデが、内面にはケズリが施されている。底部は平底で藁を敷いた様な跡がみられる。外面の上半部にススの付着がわずかにみられる。94と95は、鉢型土器の体部片である。同一個体の破片で斜縄文のみが施されている。

EⅣ-53ピット

遺構 (図版25-d・写真図版28-c, d)

このピットは、EⅣ-151竪穴状遺構の北隣に位置する。規模は開口部径75cm±・底部径110cm±・深さ60cm±を計る。平面形はほぼ円形を呈し、断面形はEⅣ-54ピットのようなくびれを持たないフラスコ形を呈する。埋土は、炭化物を含む暗褐色土の単層である。そのため Field card にその性状を記載しただけで土層断面図の作製は省略した。底面はほぼ平坦で堅くしまっている。出土遺物はみられなかった。

EⅣ-54ピット

遺構 (図版26-a・写真図版28-e, f)

このピットは、EⅣ-153竪穴状遺構の北東隣、EⅣ-53ピットの東方1.5mのところに位置する。規模は開口部径100cm±・頸部径76cm±・底部径95cm±・深さ78cm±を計る。平面形は円形を呈し、断面形はフラスコ形を呈する。埋土は、炭化物を含む暗褐色土の単層である。そのため、Field card にその性状を記載しただけで土層断面図の作製は省略した。底面は平坦

で堅くしまっている。遺物の出土はみられなかった。

F IV区

FM-51ピット

遺構 (図版26-b・写真図版29-a)

このピットは、段丘面の東端、段丘崖寄りに位置する。規模は開口部径170cm±・底部径150cm±×138cm±・深さ16cm±を計る。平面形は開口部で円形、底部で楕円形を呈し、断面形はほぼピーカー形を呈する。埋土は、上位から暗褐色土・明褐色土・暗褐色土・極暗褐色土・明褐色土・ぶい褐色土によって構成される。炭化物は下位の極暗褐色土と明褐色土に含まれている。層相は不規則な堆積を示している。底面は平坦で堅くしまっている。

出土遺物 (図版42-96~100、43-101~105・写真図版44-96~100、45-101~105)

埋土の上～中位から多数の土器片と石器1点(105)が出土している。96は、深鉢の平縁で直立する口縁部片である。磨耗が激しく、わずかに横位に沈線が施されているのが確認できる。97は、深鉢の口縁部下半から頸部にかけての破片である。口縁部に沈線と縄の圧痕が施されているが、全体の文様構成は把握できない。頸部には、細い粘土紐の貼り付けによる隆帯が施されている。98~101は、深鉢の口縁部下半から体部にかけての破片であり、すべて同一個体片である。文様は、頸部に沈線を施し口縁部と体部を区画し、口縁部には網目状燃糸文が、体部には斜縄文が施されている。102は、深鉢の体部片で網目状燃糸文が施されている。103は、深鉢の体部下半から底部にかけての破片で斜縄文が施されている。104は、深鉢の口縁部片で斜縄文が施されている。なお、96~103の土器片の胎土には植物質繊維と小礫が混入している。105は、剥片の長軸方向に平行する片側の縁辺に刃部を形成するサイドスクレイパー的機能を有する石器である。なお、刃部の大部分が破損している。石質は玻璃質安山岩である。

(3) 陥し穴状遺構

D II-101陥し穴状遺構

遺構 (図版27-a・写真図版29-b, c)

この遺構は、緩斜面の下位で段丘崖の縁に位置する。長軸は東西方向を呈し、斜面傾斜方向とは直交する。長軸方向では、開口部径370cm±・頸部径300cm±・底部径330cm±を計る。短軸方向では、開口部径120cm±・頸部径45cm±・底部径23~36cm±を計る。平面形は、底部軸長比 $\frac{1}{3}$ で長楕円形を呈する。深さ100cm±を計り、長軸方向の断面に於いて、頸部から上位に

かけ大きく外反し、頸部から底部にかけては台形状を呈している。短軸方向の断面に於いて、頸部から上位にかけ大きく外反し、頸部から底部にかけては「U」字状を呈する。

埋土は、上位から炭化物を微量に含む黒色土・黒褐色土・褐色土・壁の崩れ落ちとみられる褐色土と明褐色土によって構成される。上位の黒色土のみが自然堆積とみられる浅鉢状の層相を呈している。

底面には、径8cm±・深さ15cmほどのピットが長軸に沿って6個検出されている。これは1個のピットを除き、いずれも北側の壁ぎわにあり、3個を1組として東西に分れて配列する。底面の幅は不規則で西半分はほぼ等間隔であるが、東半分は北側に広がられている。底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

DⅢ-101陥し穴状遺構

遺 構（図版27-b・写真図版30-a, b）

この遺構は、緩斜面中位に位置する。長軸は、N-30°-W方向を呈し、斜面傾斜方向と平行する。遺構の南端は、風倒木痕によって破壊されており、長軸方向の規模は不明である。長軸方向では、開口部径 $240+\alpha$ cm・頸部径 $210+\alpha$ cm・底部径 $240+\alpha$ cmを計る。短軸方向では、開口部径120cm±・頸部径40cm±・底部径18cm±を計る。平面形は、底部軸長比 $\frac{1}{4}$ 以下で長楕円形を呈する。深さ114cm±を計り、長軸方向の断面に於いて、北端部は、頸部から上位にかけ外反し、頸部から下位にかけ抉り込まれている。短軸方向の断面に於いて、頸部から上位は外反し、頸部から下位にかけほとんど垂直に落ち「U」字状を呈する。

埋土は、上位に黒褐色土・中位から下位にかけ褐色土・黄褐色土が不規則に堆積している。

底面は、斜面下方にやや傾斜するものの平坦に近い。出土遺物はない。

EⅣ-101陥し穴状遺構

遺 構（図版27-c・写真図版30-c, d）

この遺構は、緩傾斜面の上位に位置する。長軸は、ほぼ東西方向を呈し、等高線に対し30°ほどの角度をもつ。長軸では、開口部径340cm±・頸部径325cm±・底部径341cm±を計る。短軸では、開口部径103cm±・頸部径62cm±・底部径11cm±を計る。平面形は、底部軸長比 $\frac{1}{4}$ で長楕円形を呈する。深さは、100cm～128cm±を計る。長軸方向の断面に於いて、東端は大きくオーバーハングする形で抉りこまれ、西端はほぼ垂直に底部まで落ちている。短軸方向の断面に於いて北側の壁は、埋土の状態を観察されるように崩れが認められるが、原形を大きく崩すほどではなく、断面形は「Y」字状を呈する。

埋土は、大きく2分され、上位に自然堆積状態を示す層相で上位より黒褐色土・黒色土・暗

褐色土、下位に主として北側壁の崩れとみられる褐色土・黄褐色土によって構成される。自然堆積層の中心は、遺構の中心から南方の斜面下方にずれており、埋没経過を示唆している。なお、遺物の出土はみられなかった。

(4) その他

A II-151 溝

遺 構 (図版28・写真図版31-a, b)

この遺構は、調査区域西端の標高293mほどの平坦な沖積面上に位置し、1mほどの黒色を主体とする表層を削剝した後の明黄褐色砂質シルト層の上面で検出された。ここは、段丘を東西に隔てる小規模な浸蝕谷の谷口部であり、そのため湿地となっている。

この溝の起点及び終点は、調査区域外に延びているため、全体の様相は全くつかむことができない。確認できた範囲では、長さ15mを計る。幅は1.5m～0.58mの範囲で変化するものの全体的に南方ほど狭くなる。北半分の底面上に粒径10cm±～30cm±の垂円礫が堆積状態で検出されたが、何の意味をもつものかは不明である。またこれら礫の下で底面直上に馬の歯と思われるものが、歯の配列状態のまま出土している。

礫を取り除いた後の深さは、53cm上、礫のない部分での深さは、21～26cm±を計り、底面は南方に向い低く傾斜している。横断面は、全体に「U」字状あるいは浅鉢形を呈し、特に南端部分では、底部までの深さが浅く皿状を呈する。

埋土は、上位より暗褐色土・にぶい褐色土によって構成されている。

出土遺物 (図版44-106～109・写真図版45-106～109)

出土遺物は、検出面上の埋土より得られている。106・107は体部から口縁部にかけての破片である。体部の外面はヘラケズリ、内面はナデ、口縁部は内外とも横ナデによって調整されている。106の口縁部は体部に比し厚く形成されている。108・109は底部片である。ともに外面はヘラケズリ、内面はナデによって調整されている。

D IV-151 埋甕

遺 構 (図版26-c・写真図版31-c)

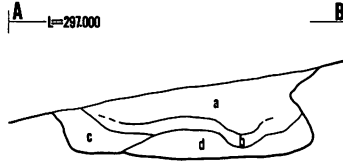
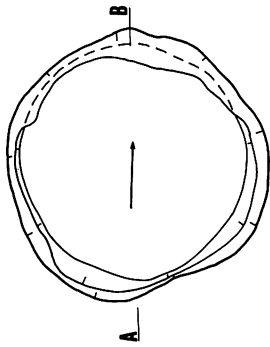
調査区域の中央で、段丘面から下位の緩傾斜面に移行するところに位置する。深鉢土器が、直立に埋設されており、このため掘られたピットは、開口部径30cm±・底部径15cm±・深さ20cm±の規模をもち深鉢状を呈する。このピットと土器の間には、黄褐色土が充填され、土器内には、炭化物を極めて微量に混入する暗褐色土と褐色土が入っている。土器の底部は、原形を

とどめているが、上半部は、破損し折れ重なっている。この埋甕の近くには、北方50cmほどのところにDⅣ-51ピットとDⅣ-52ピットがあり、北東12cmほどのところにDⅣ-1住居址があるが、これらとの関係を示唆するものはない。当記述に於いては、屋外に設けられた埋甕と思われる。

出土遺物（図版44—110・写真図版36—13）

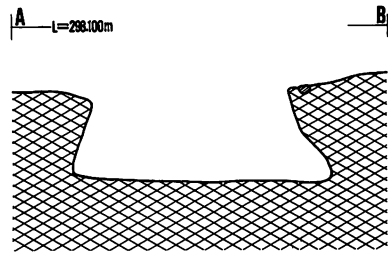
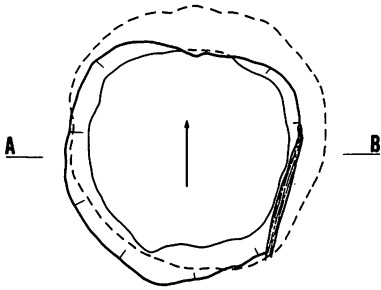
この深鉢形土器（110）は、体部文様帯の上半から上が欠損している。体部に膨らみをもち、頸部にかけてやや内傾すると思われる。残存する文様は、沈線区画による磨消文様で構成され、地文は単節斜縄文である。図版でみられるように小単位の文様の両端の沈線の上に孤状隆起線文が貼りつけられている。底面には網代模様がみられる。底部から文様帯の下付近までススが付着している。

a. B II-51ピット



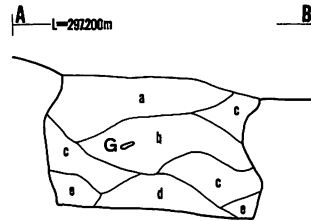
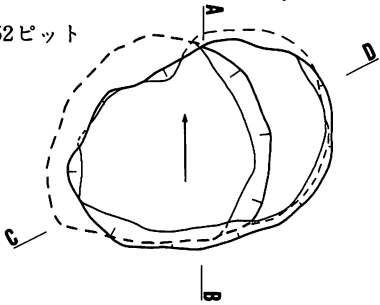
- a. 10Y R1.7/1黒色土
- b. 10Y R1.7/1黒色土 (含、炭化物)
- c. 7.5Y R2/2黒褐色土
- d. 7.5Y R4/3暗褐色土

b. B II-52ピット



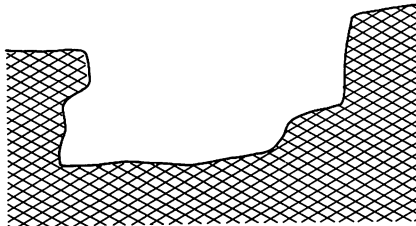
c. C I-51ピット

d. C I-52ピット



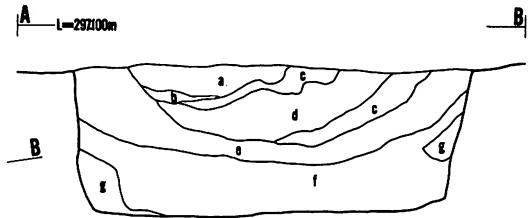
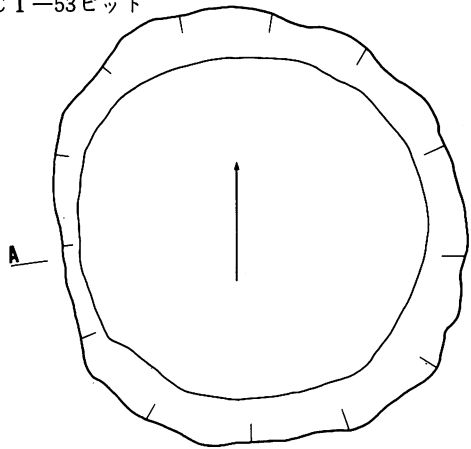
- a. 7.5Y R2/2黒褐色土
- b. 7.5Y R2/3極暗褐色土
- c. 7.5Y R2/3, 5/6極暗褐色、明褐色土
- d. 7.5Y R2/3, 5/8極暗褐色、明褐色土
- e. 7.5Y R6/6橙色土

C | l=297200m



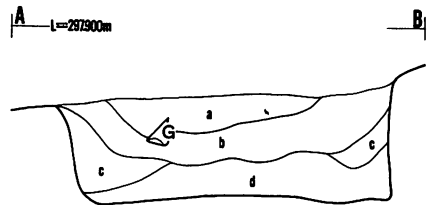
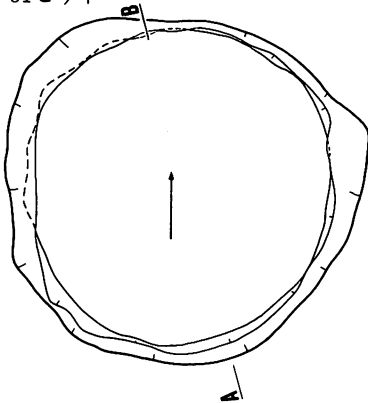
$$S = \frac{1}{40}$$

a. CI-53ピット



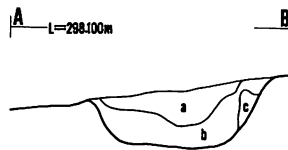
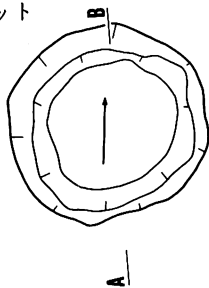
- a. 10YR2/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- b. 10YR3/3 暗褐色土
- c. 7.5YR3/4 暗褐色土
- d. 10YR3/4 暗褐色土
- e. 10YR2/3 黒褐色土 (含、炭化物)
- f. 10YR3/3 暗褐色土
- g. 10YR4/6 褐色土

b. CII-51ピット



- a. 7.5YR3/2 黒褐色土 (含、白色細粒浮石)
- b. 7.5YR3/1 黒褐色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR3/3 暗褐色土
- d. 7.5YR4/6 褐色土

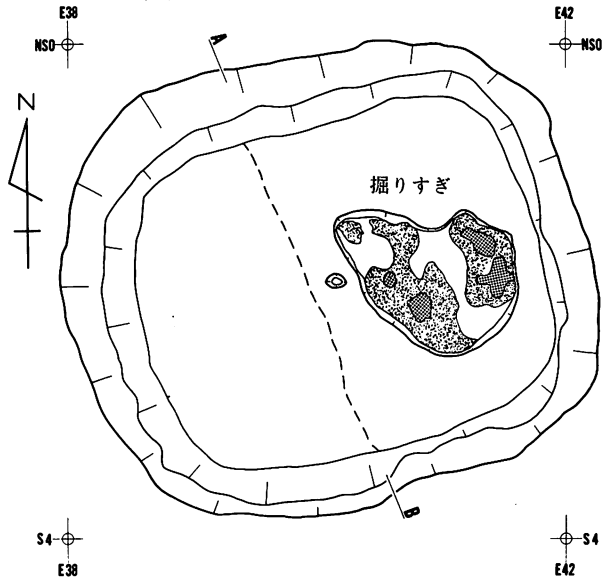
c. CII-52ピット



- a. 7.5YR2/1 黒色土
- b. 7.5YR3/1 黒褐色土
- c. 10YR4/6 褐色土

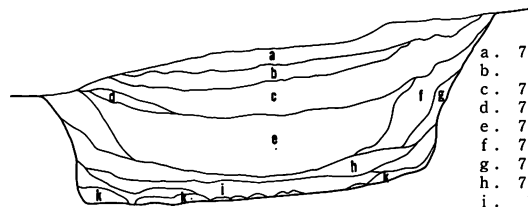
$$S = \frac{1}{40}$$

a. CI-54ピット



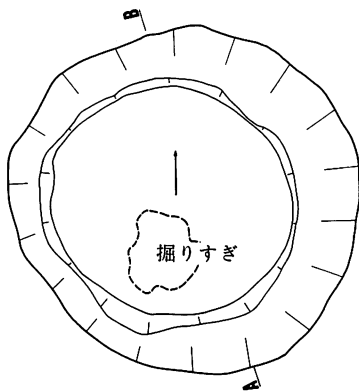
A
L=297400m

B



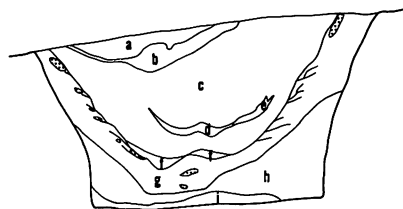
- a. 7.5YR2/2 黒褐色土
- b. 10YR2/3 黒褐色土
- c. 7.5YR2/2 黒褐色土
- d. 7.5YR3/3 暗褐色土
- e. 7.5YR2/3 極暗褐色土 (含、炭化物)
- f. 7.5YR2/3 極暗褐色土
- g. 7.5YR4/4 褐色土
- h. 7.5YR2/2 黒褐色土
- i. 10YR4/4 褐色土
- j. 10YR3/3 暗褐色土
- k. 10YR5/6 黄褐色土

b. CI-55ピット



A
L=297400m

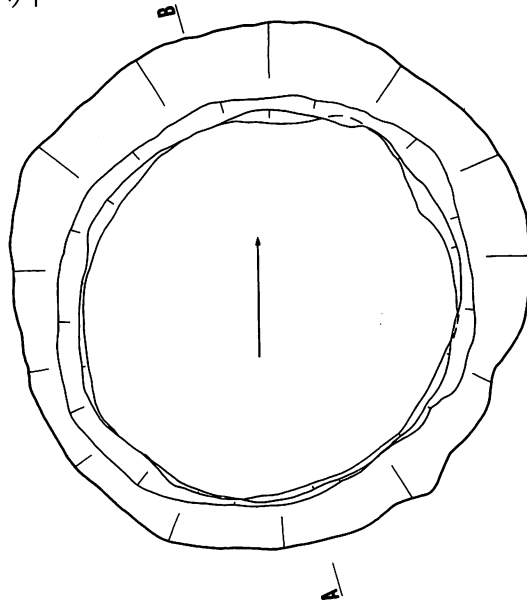
B



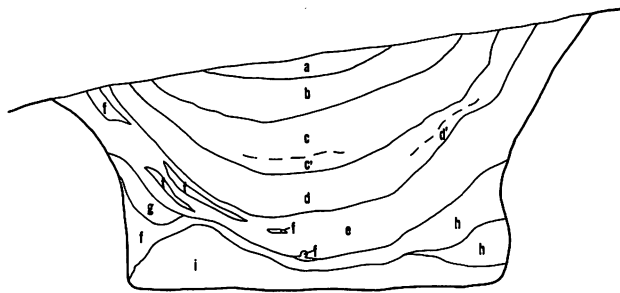
- a. 7.5YR6/6 橙色土
- b. 7.5YR1.7/1 黒色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- d. 7.5YR5/8 明褐色土
- e. 7.5YR3/4 暗褐色土
- f. 7.5YR5/6 明褐色土
- g. 7.5YR1.7/1 黒色土 (含、白色細粒浮石)
- h. 7.5YR4/6 褐色土
- i. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、炭化物)

$$S = \frac{1}{60}$$

C II-53ピット



A |-----| B
|-----|
L=298.500m

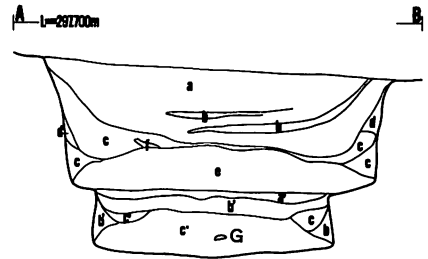
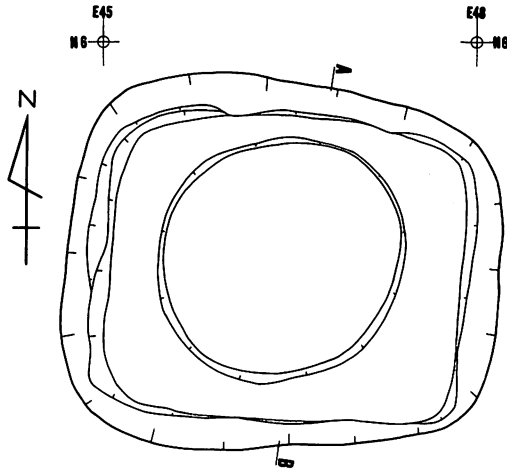


$S = \frac{1}{40}$

- a. 10YR2/1 黒色土
- b. 7.5YR3/3 暗褐色土
- c. 7.5YR2/2 黒褐色土
- c'. 10YR3/4 暗褐色土
- d. 7.5YR1.7/1 黒褐色土
- d'. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
- e. 10YR2/1 黒色土 (含、炭化物)
- f. 10YR3/3 暗褐色土 (白色細粒浮石)
- h. 7.5YR3/4 暗褐色土
- i. 7.5YR4/3 褐色土

図版17

a. C II-54. 55ピット



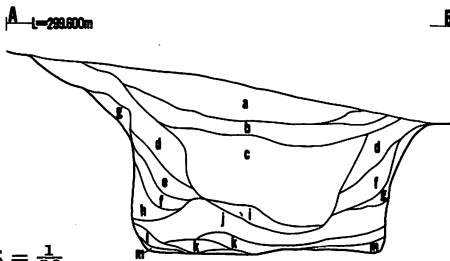
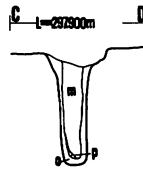
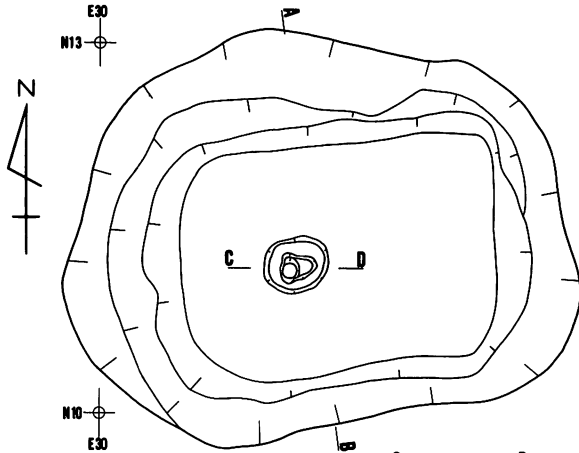
- a. 7.5YR1.7/1 黒色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、白色細粒浮石)
- c. 7.5YR3/3 暗褐色土
- d. 7.5YR5/8 明褐色土
- e. 7.5YR4/3 褐色土
- f. 10YR5/4 にぶい黄褐色土

N2
E45

b. C II-56ピット

N2
E48

- a: 7.5YR4/4 褐色土
- b: 10YR6/4 にぶい黄褐色土
- c: 7.5YR5/6 明褐色土



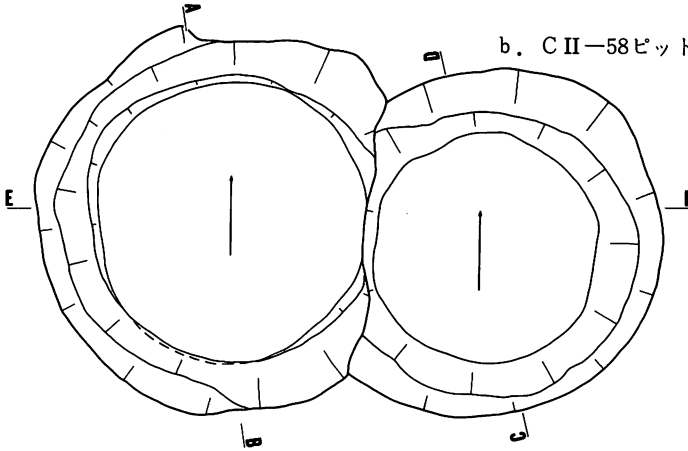
$S = \frac{1}{60}$

- a. 7.5YR2/2 黒褐色土
- b. 7.5YR1.7/1 黒色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR1.7/1 黒色土 (含、炭化物)
- d. 7.5YR2/2 黒褐色土
- e. 7.5YR4/2 灰褐色土 (火山灰含白色細粒浮石)
- f. 7.5YR3/4 暗褐色土 (火山灰含白色細粒浮石)
- g. 7.5YR4/6 褐色土
- h. 7.5YR3/3 暗褐色土
- i. 7.5YR1.7/1 黒色土 (含、炭化物)
- j. 7.5YR4/4 褐色土
- k. 7.5YR2/2 黒褐色土
- l. 7.5YR2/2 黒褐色土
- m. 7.5YR5/6 明褐色土
- n. 7.5YR2/6 褐色土
- o. 7.5YR4/1 にぶい褐色土
- p. 7.5YR6/5 明褐色土

図版18.

a. CII-57ピット

b. CII-58ピット

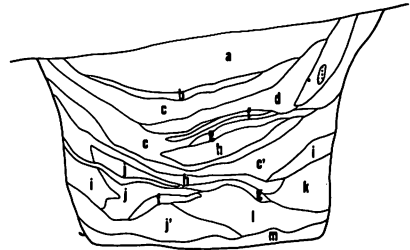
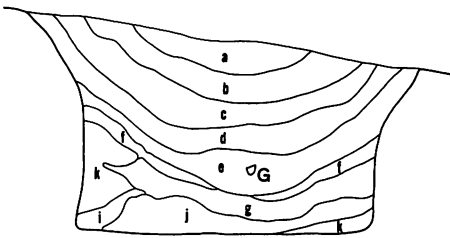


A | 299.300m

B

C | 299.100m

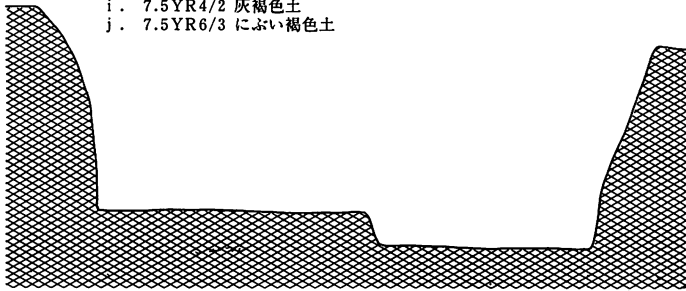
D



- a. 7.5YR3/3 暗褐色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR4/1 灰褐色土 (含、白色細粒浮石)
- c. 7.5YR4/3 褐色土
- d. 7.5YR5/3 にぶい褐色土 (含、炭化物)
- e. 7.5YR2/3 極暗褐色土 (含、炭化物)
- f. 7.5YR2/2 黒褐色土
- g. 7.5YR3/4 暗褐色土
- h. 7.5YR5/6 明褐色土
- i. 7.5YR4/2 灰褐色土
- j. 7.5YR6/3 にぶい褐色土

E | 299.100m

F

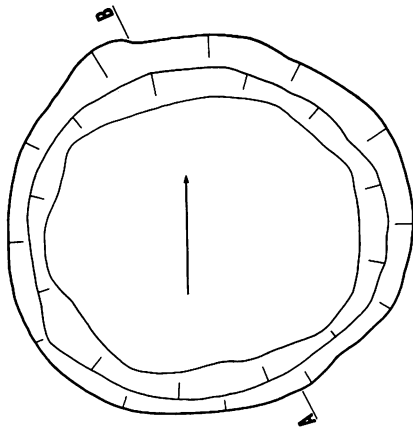


$S = \frac{1}{60}$

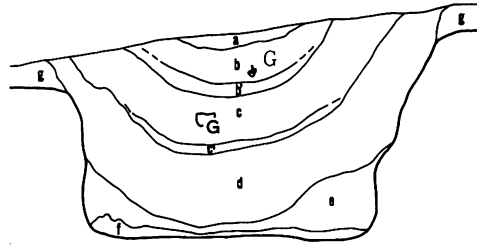
- a. 7.5YR1.7/1 黒色土 (含、礫)
- b. 7.5YR3/1 黒褐色土 (含、礫、炭化物)
- c. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- d. 7.5YR2/1 黒色土 (含、炭化物)
- e. 7.5YR3/3 暗褐色土 (含、炭化物)
- f. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、炭化物、白色細粒浮石)
- g. 10YR4/6 褐色土 (含、礫)
- h. 10YR3/2 黒褐色土
- i. 10YR5/6 黄褐色土 (含、炭化物)
- j. 10YR6/4 黄橙色土
- k. 10YR6/4 黄橙色土
- l. 10YR2/3 黒褐色土
- m. 10YR2/1 黒色土

図版19

a. C II—59ピット

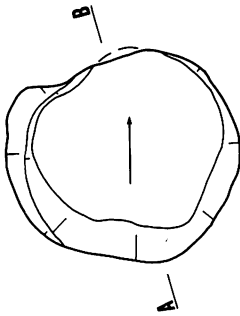


A L=299,000m B

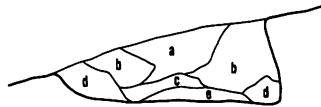


- a. 7.5YR2/1 黒色土
- b. 7.5YR3/3 暗褐色土 (含、炭化物)
- b'. 10YR3/3 暗褐色土 (含炭化物、白色細粒浮石)
- c. 7.5YR3/2 黒褐色土
- c'. 10YR2/2 黒褐色土 (含炭化物、白色細粒浮石)
- d. 7.5YR2/3 黒褐色土
- e. 7.5YR5/6 明褐色土
- f. 7.5YR4/4 褐色土
- g. 7.5YR2/3 極暗褐色土(含、炭化物)

b. C III—51ピット

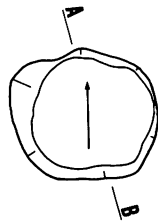


A L=308,900m B

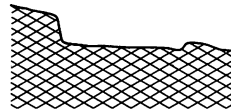


- a. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR3/4 暗褐色土
- c. 7.5YR2/3 極暗褐色土
- d. 7.5YR5/6 明褐色土
- e. 7.5YR5/8 明褐色土

c. D II—51ピット

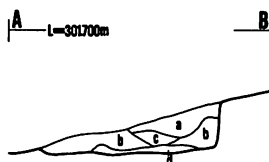
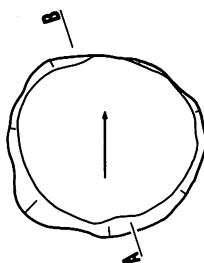


A L=301,500m B



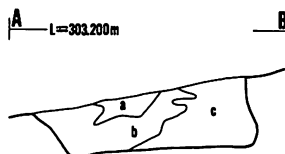
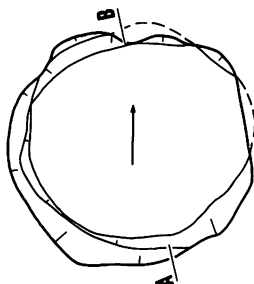
S = $\frac{1}{40}$

a. DⅢ—51ピット



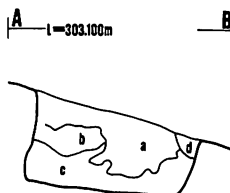
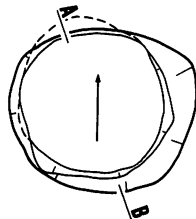
- a. 7.5YR2/1 黒色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR2/2 黒褐色土
- c. 7.5YR3/2 黒褐色土
- d. 10YR4/4 褐色土

b. DⅢ—52ピット



- a. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR3/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR4/2 灰褐色土

c. DⅢ—53ピット

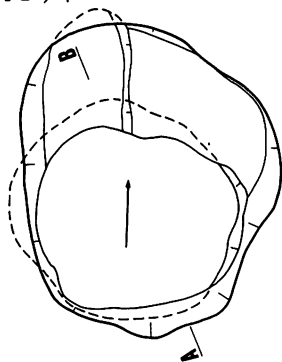


- a. 10YR2/2 黒褐色土
- b. 10YR3/2 黒褐色土
- c. 10YR3/4 暗褐色土
- d. 10YR4/4 黒褐色土

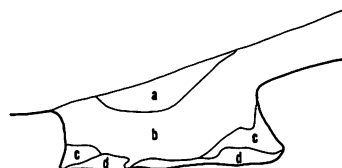
$$S = \frac{1}{40}$$

図版21

a. DIII-54ピット

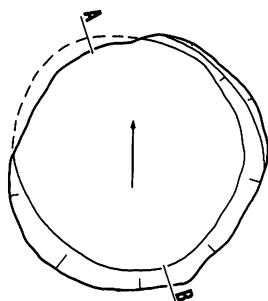


A L=304400m B

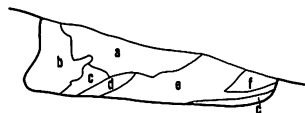


- a. 7.5YR2/2 黒褐色土
- b. 7.5YR3/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR3/3 暗褐色土
- d. 7.5YR3/4 暗褐色土

b. DIII-55ピット

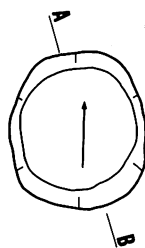


A L=307000m B

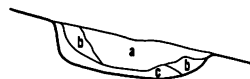


- a. 7.5YR2/3 極暗褐色土
- b. 7.5YR4/6 褐色土
- c. 7.5YR3/3 暗褐色土
- d. 7.5YR5/6 明褐色土
- e. 7.5YR3/2 黒褐色土
- f. 7.5YR4/6 褐色土

c. DIII-56ピット



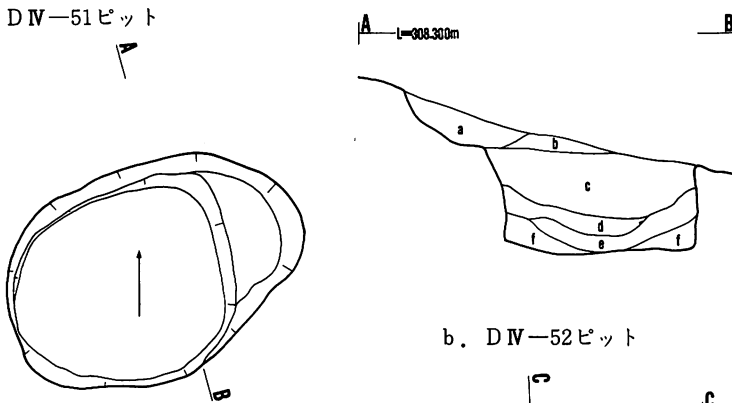
A L=307100m B



- a. 7.5YR4/3 褐色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR6/6 橙色土
- c. 7.5YR8/6 橙色土

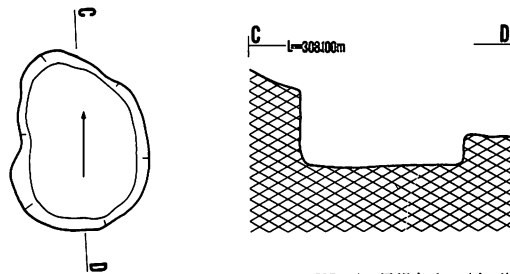
$$S = \frac{1}{40}$$

a. DIV-51ピット



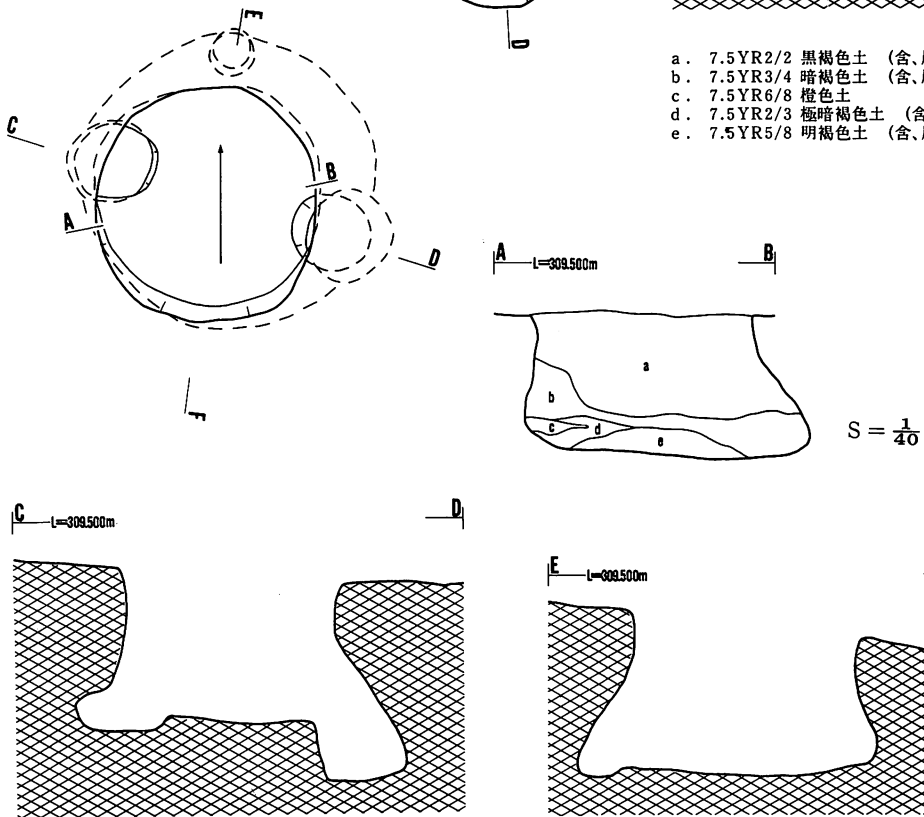
- a. 7.5YR3/3 暗褐色土
- b. 7.5YR4/6 褐色土
- c. 10YR2/3 黒褐色土
- d. 7.5YR5/6 明褐色土
- e. 10YR3/4 暗褐色土
- f. 7.5YR4/4 褐色土

b. DIV-52ピット

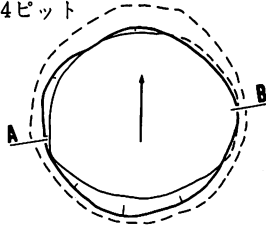


- a. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR3/4 暗褐色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR6/8 橙色土
- d. 7.5YR2/3 極暗褐色土 (含、炭化物)
- e. 7.5YR5/8 明褐色土 (含、炭化物)

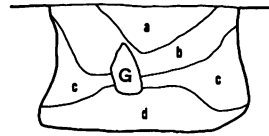
c. DIV-53ピット



a. DIV-54ピット

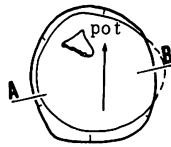


A — L=308.900m — B

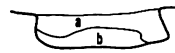


- a. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR4/4 褐色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR3/4 暗褐色土 (含、炭化物)
- d. 7.5YR3/3 暗褐色土 (含、炭化物)

b. DIV-55ピット

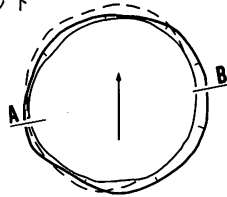


A — L=308.700m — B

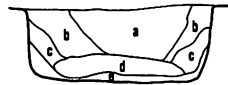


- a. 7.5YR3/4 暗褐色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR5/6 明褐色土 (含、炭化物)

c. DIV-56ピット

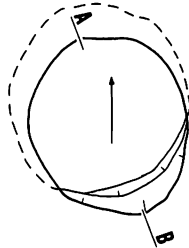


A — L=308.500m — B

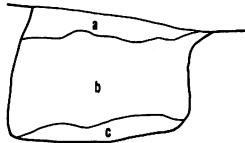


- a. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR3/4 暗褐色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR5/6 明褐色土 (含、炭化物)
- d. 7.5YR3/4 暗褐色土 (含、炭化物)
- e. 7.5YR6/6 橙色土

d. DIV-57ピット



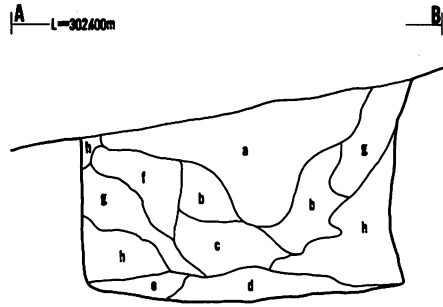
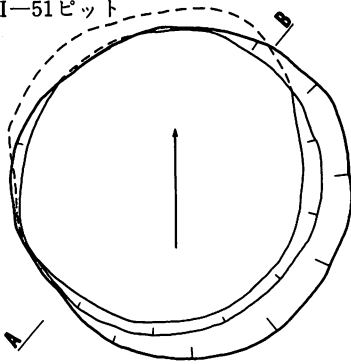
A — L=307.200m — B



- a. 7.5YR2/3 極暗褐色土
- b. 7.5YR2/1 黒色土 (含、炭化物)
- c. 10YR4/1 褐色土

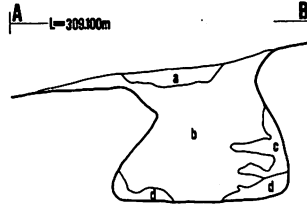
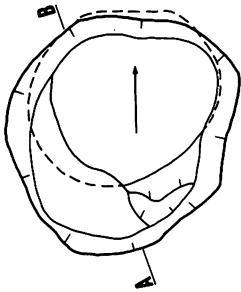
$$S = \frac{1}{40}$$

a. E III—51ピット



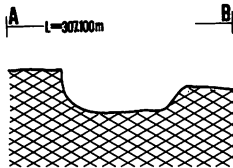
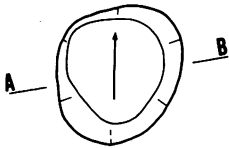
- a. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含炭化物)
- b. 7.5YR3/4 暗褐色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR4/2 灰褐色土 (含、炭化物)
- d. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- e. 7.5YR4/4 褐色土 (含、炭化物)
- f. 7.5YR5/6 明褐色土 (含、炭化物)
- g. 7.5YR6/6 橙色土 (含、炭化物)
- h. 7.5YR6/4 におい褐色土 (含、炭化物)

b. E IV—51ピット

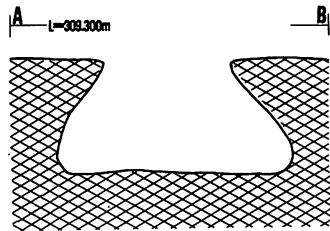
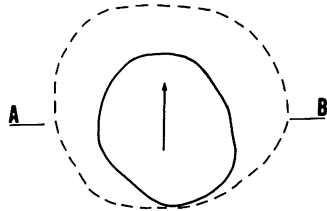


- a. 7.5YR2/1 黒色土
- b. 7.5YR3/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR5/6 明褐色土
- d. 7.5YR5/3 におい褐色土

c. E IV—52ピット

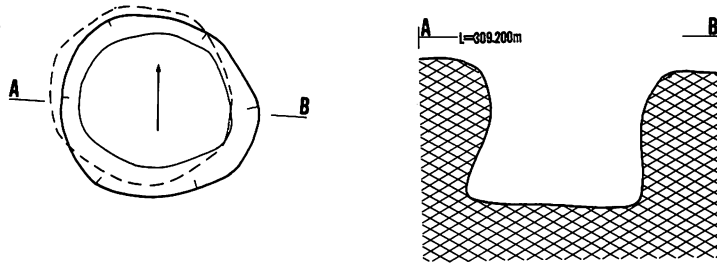


d. E IV—53ピット

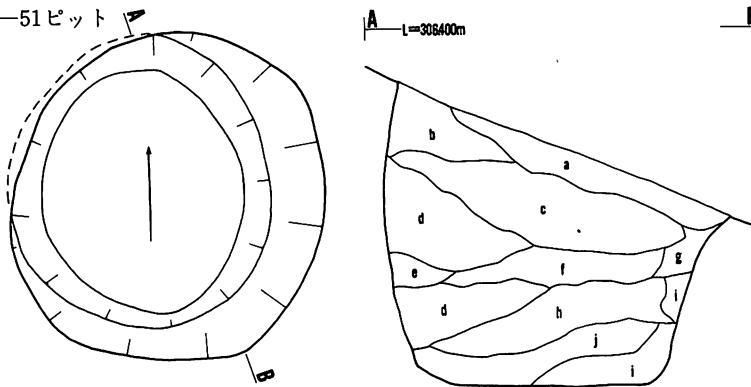


$$S = \frac{1}{40}$$

a. EIV-54ピット



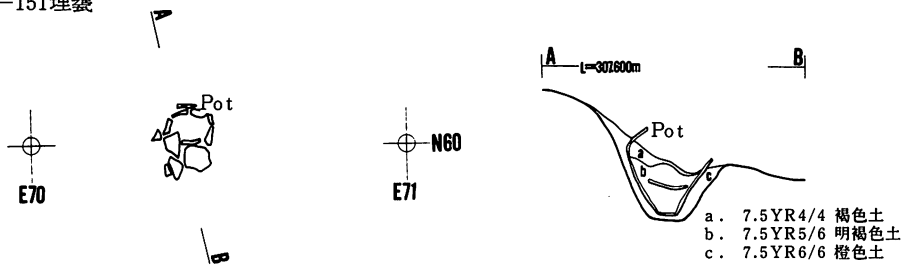
b. FIV-51ピット



- a. 7.5YR3/4 暗褐色土
- b. 7.5YR4/4 褐色土
- c. 7.5YR3/3 暗褐色土
- d. 7.5YR5/6 明褐色土
- e. 7.5YR5/8 明褐色土
- f. 7.5YR3/3 暗褐色土
- g. 7.5YR4/4 褐色土
- h. 7.5YR2/3 極暗褐色土 (含、炭化物)
- i. 7.5YR5/6 明褐色土 (含、炭化物)
- j. 7.5YR5/3 にぶい褐色土

$$S = \frac{1}{40}$$

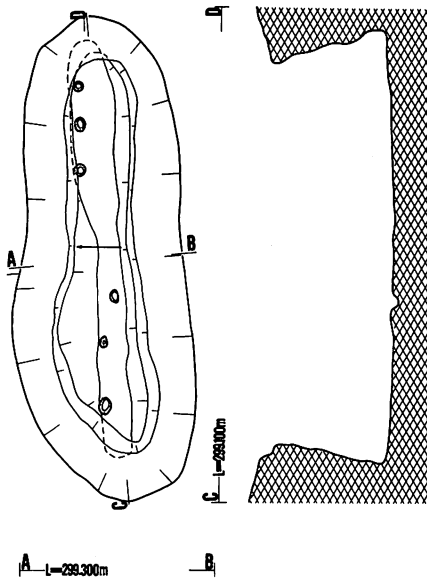
c. DIV-151埋嚢



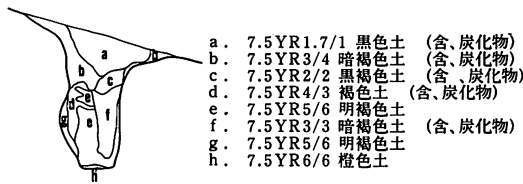
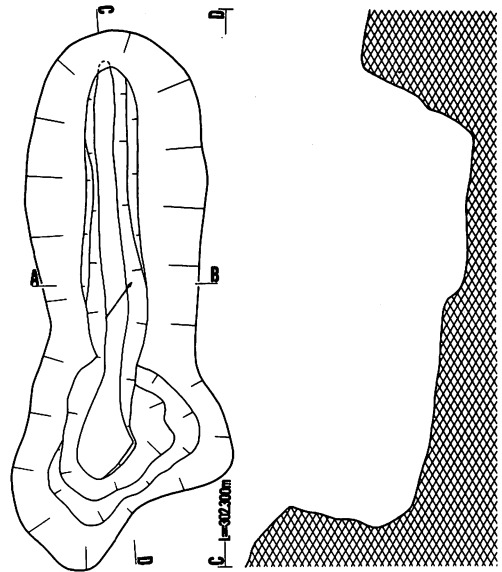
- a. 7.5YR4/4 褐色土
- b. 7.5YR5/6 明褐色土
- c. 7.5YR6/6 橙色土

$$S = \frac{1}{20}$$

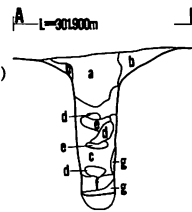
a. DII-101 陥し穴状遺構



b. DIII-101 陥し穴状遺構

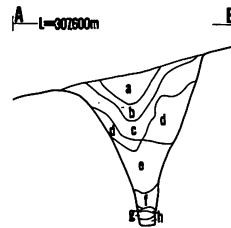
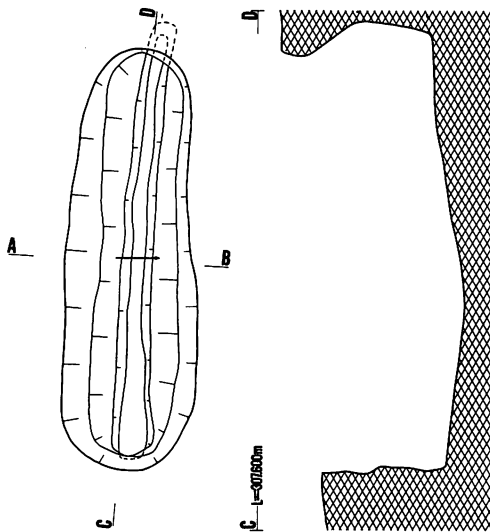


- a. 7.5YR1.7/1 黒色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR3/4 暗褐色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- d. 7.5YR4/3 褐色土 (含、炭化物)
- e. 7.5YR5/6 明褐色土
- f. 7.5YR3/3 暗褐色土 (含、炭化物)
- g. 7.5YR5/6 明褐色土
- h. 7.5YR6/6 橙色土



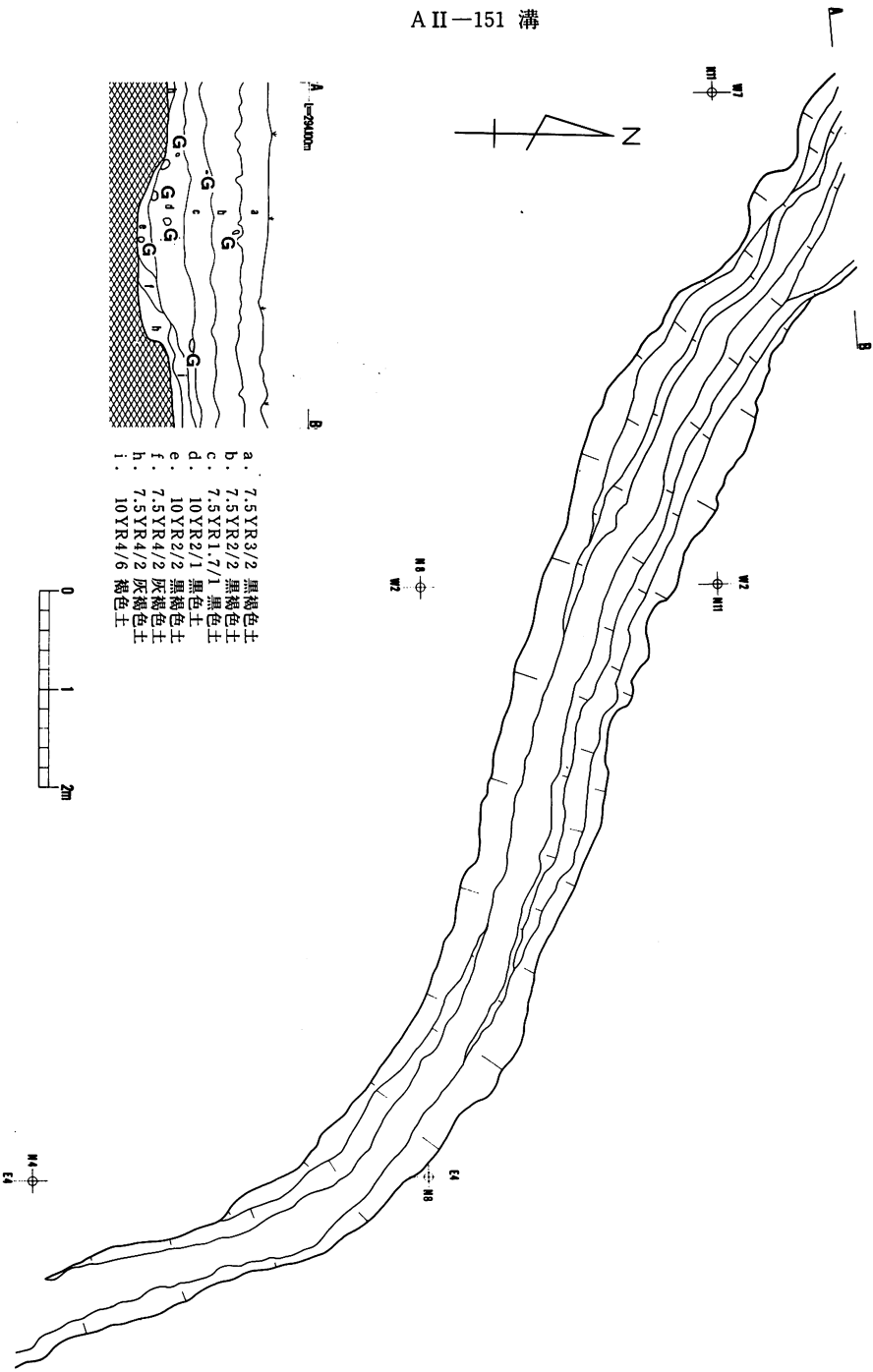
- a. 5YR1.7/1 黒色土
- b. 7.5YR4/6 褐色土
- c. 7.5YR4/4 褐色土
- d. 7.5YR5/4 におい橙色土
- e. 7.5YR2/2 黒褐色土
- f. 7.5YR2/3 極暗褐色土
- g. 7.5YR5/3 におい褐色土

c. EIV-101 陥し穴状遺構



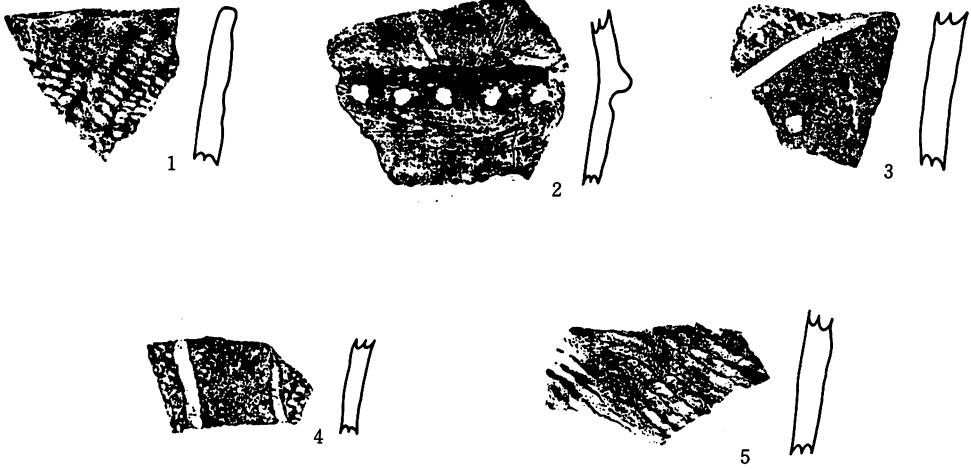
- a. 7.5YR3/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR4/6 褐色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR5/8 明褐色土 (含、炭化物)
- d. 7.5YR5/6 明褐色土 (含、炭化物)
- e. 7.5YR6/4 におい橙色土 (含、炭化物)
- f. 7.5YR6/6 橙色土 (含、炭化物)
- g. 7.5YR6/3 におい褐色土
- h. 7.5YR5/4 におい褐色土

$$S = \frac{1}{60}$$



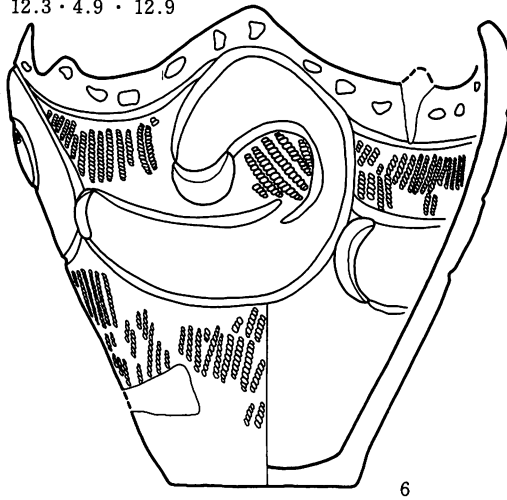
图版28

B II - 2 住居址(1 ~ 5)



B II - 3 住居址(6 ~ 11)

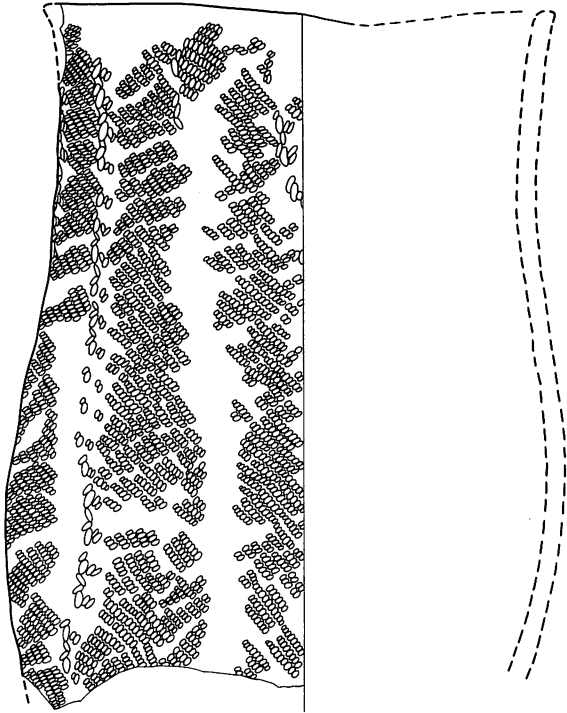
12.3 · 4.9 · 12.9



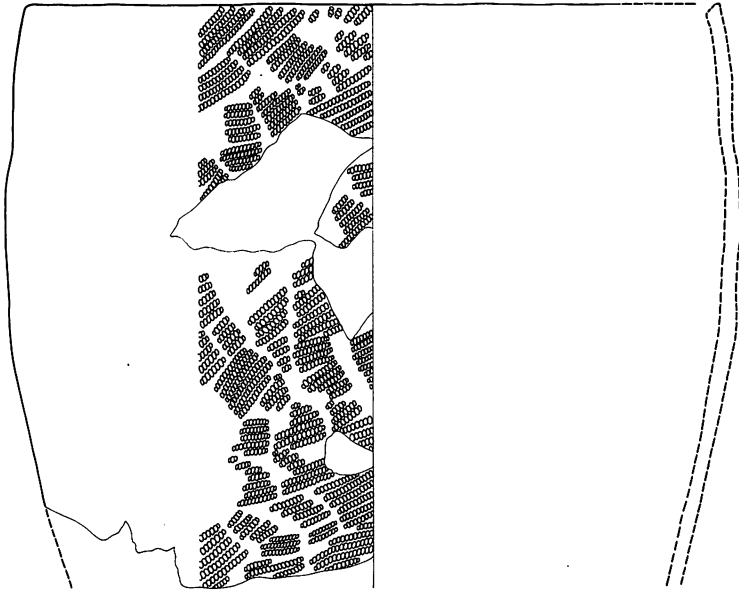
$S = \frac{1}{2}$

図版29 遺構内の出土遺物(1)

(20.5)

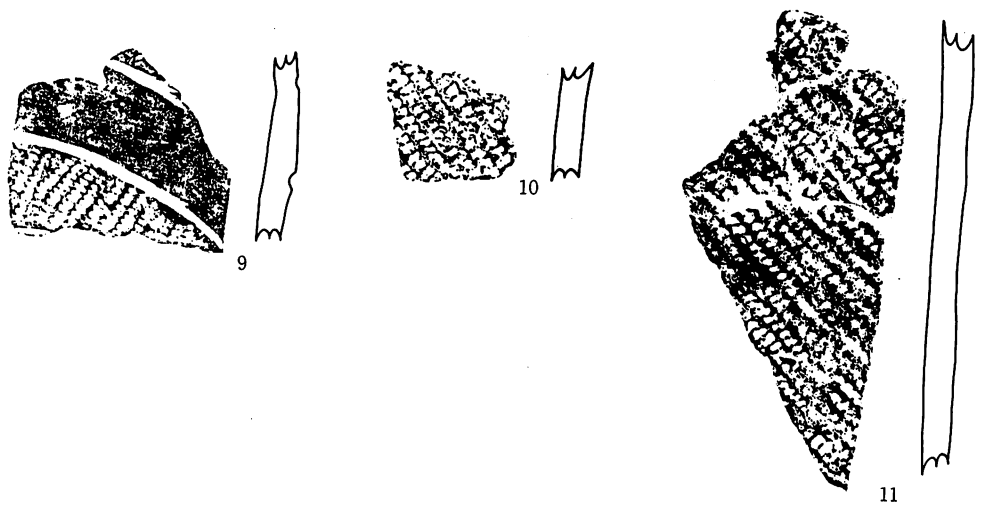


28.0

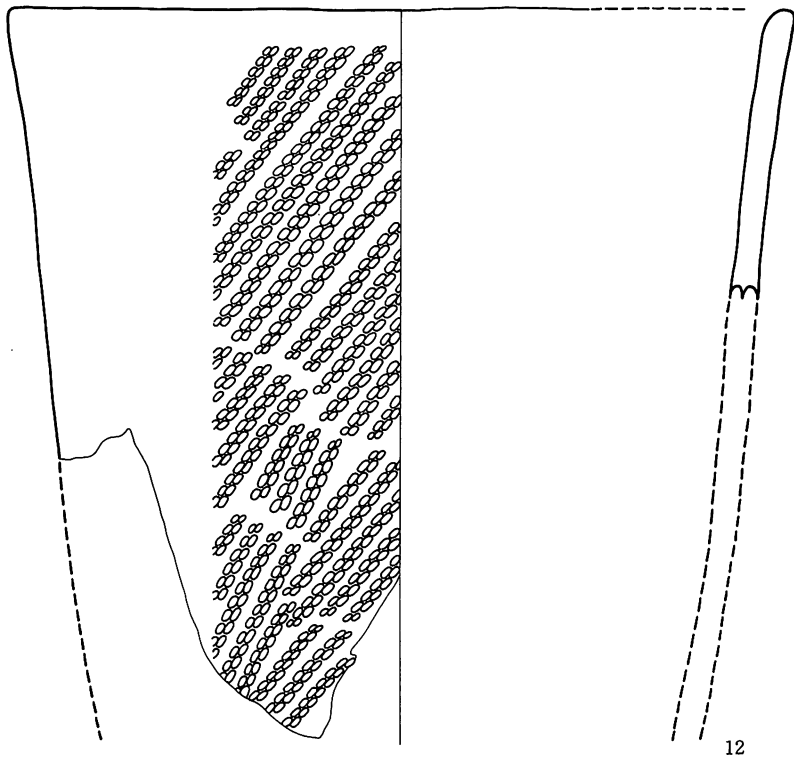


S = $\frac{1}{3}$

図版30 遺構内の出土遺物(2)

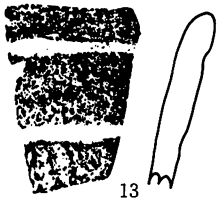


B II—5 住居址(12~15)
21.0 · — · —



S = $\frac{1}{2}$

図版31 遺構内の出土遺物(3)



13

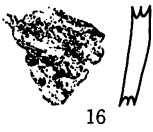


14



15

C II - 1 住居址(16)



16

C II - 2 住居址(17・18)



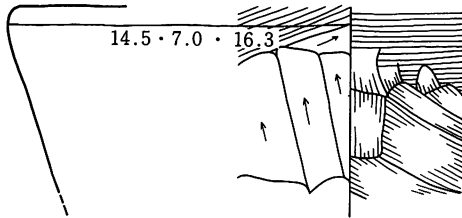
17



18

D III - 1 住居址(19)

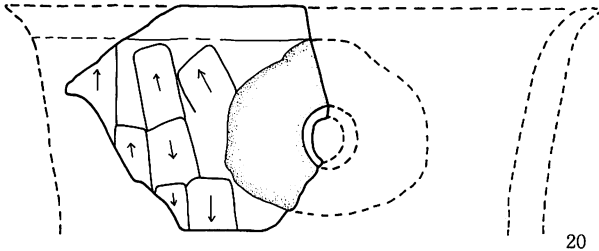
28.0 . . . -



19

D III - 2 住居址(20・21)

(16.0) . . . -



20



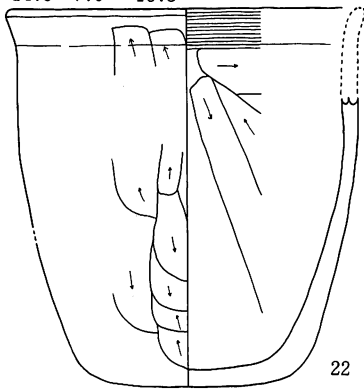
21

S = $\frac{1}{2}$

図版32 遺構内の出土遺物(4)

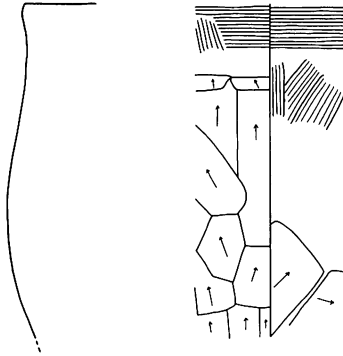
D III—3 住居址(22~26)

14.5・7.0・16.3

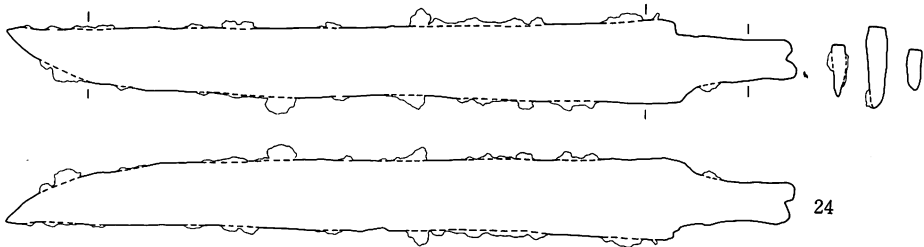


22

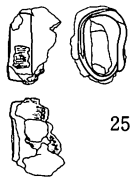
(19.8) · · · ·



23

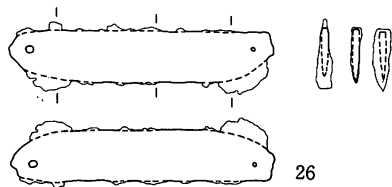


24



25

$S = \frac{1}{8}$

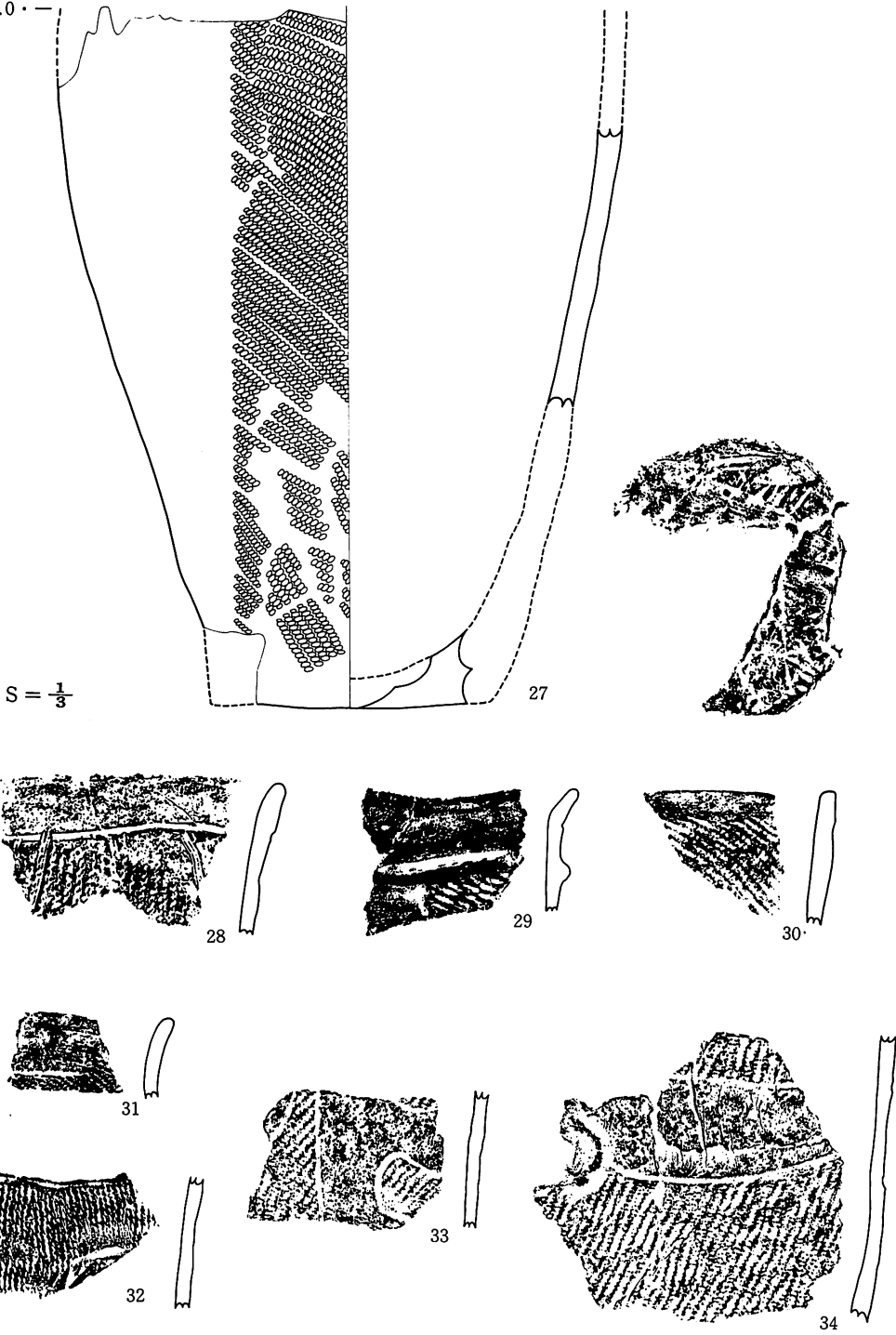


26

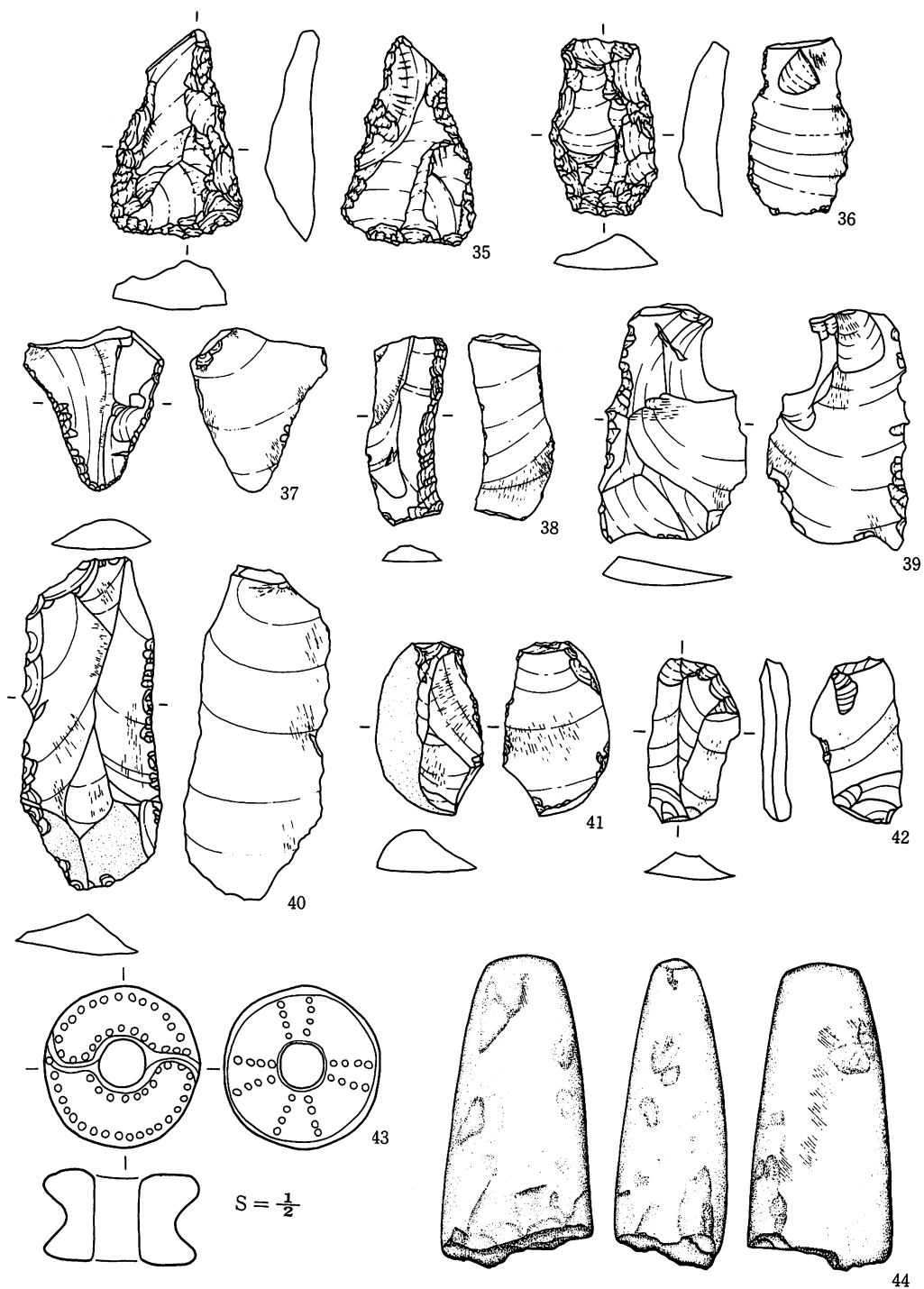
図版33 遺構内の出土遺物(5)

D IV-1 住居址(27~46)

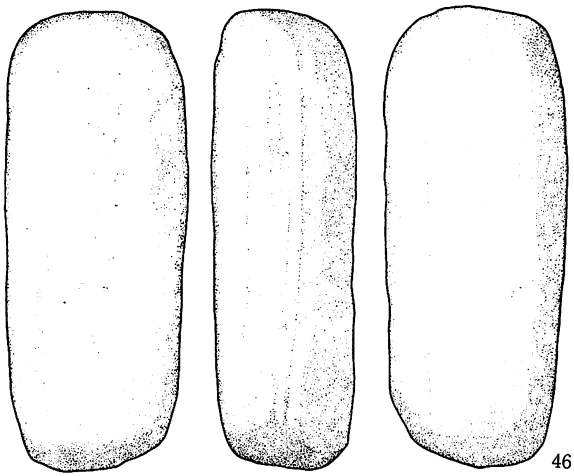
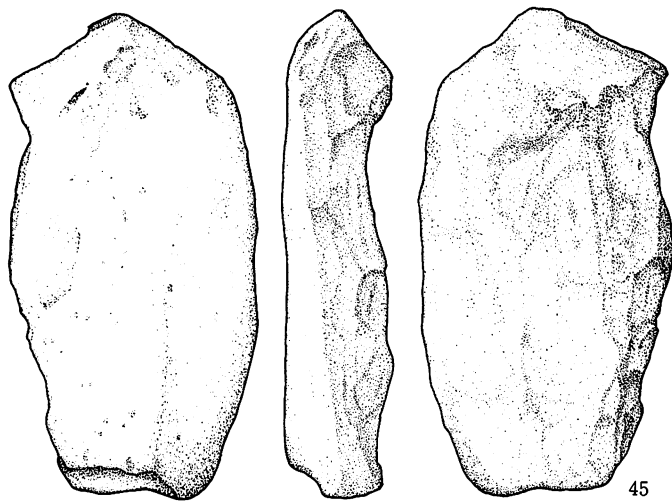
—・12.0—



図版34 遺構内の出土遺物(6)



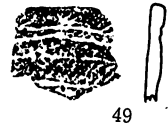
図版35 遺構内の出土遺物(7)



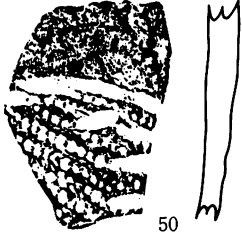
$S = \frac{1}{2}$

図版36 遺構内の出土遺物(8)

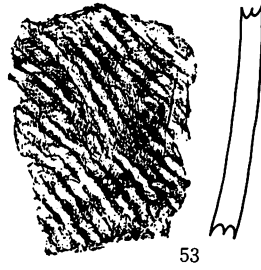
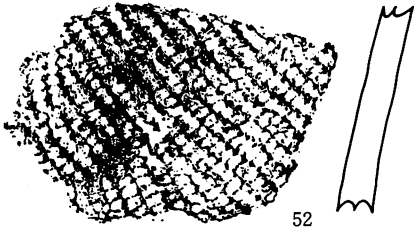
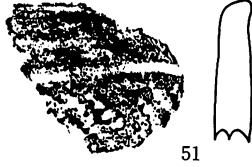
E IV - 3 竪穴状遺構(47~49)



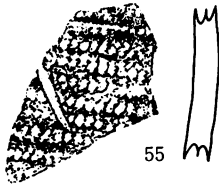
B II - 51ピット(50)



B II - 52ピット(51~53)



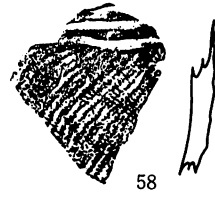
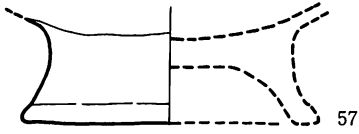
C I - 52ピット(54~56)



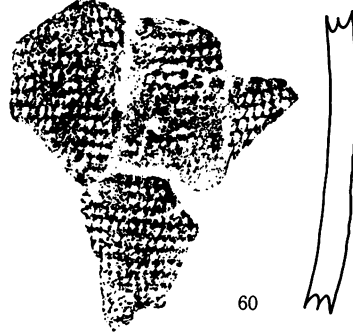
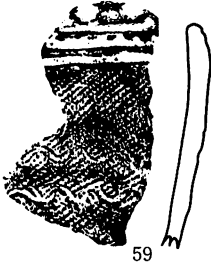
S = $\frac{1}{2}$

図版37 遺構内の出土遺物(9)

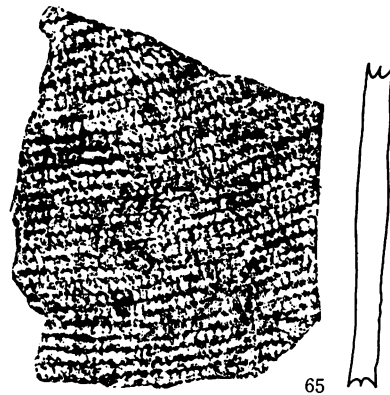
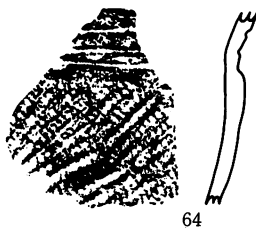
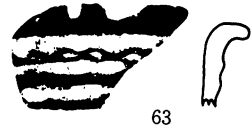
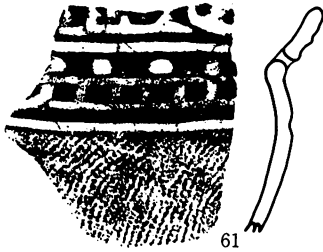
C I—53ピット(57・58)
—・8.0—



C I—54ピット(59・60)

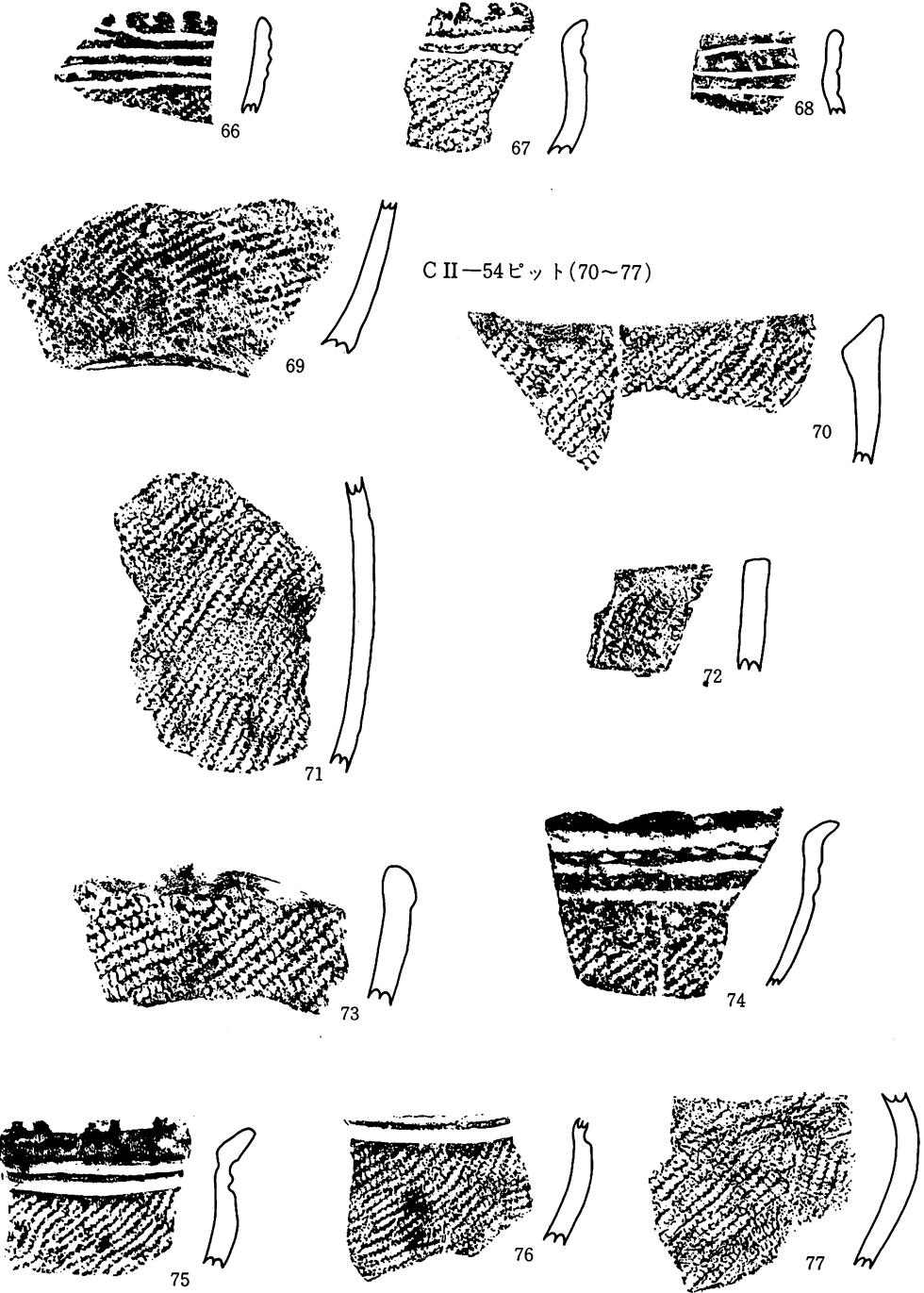


C I—55ピット(61~69)



S = $\frac{1}{2}$

図版38 遺構内の出土遺物(10)

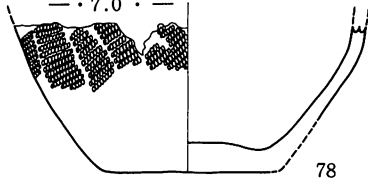


S = 1/2

図版39 遺構内の出土遺物(11)

C II—56ピット(78・79)

—・7.0・—



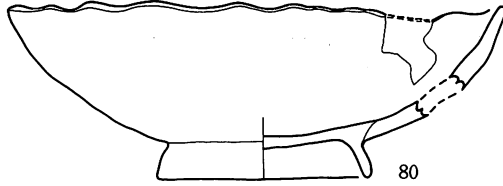
78



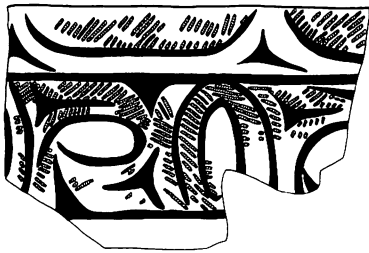
79

D IV—53ピット(80~83)

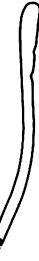
19.6・8.3・6.9



80



81



82

S = 1/3



83

D IV—54ピット(84~89)



84

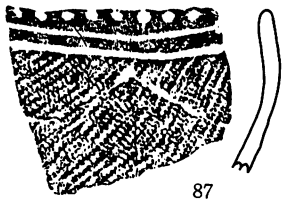


85



86

図版40 遺構内の出土遺物(12)



87

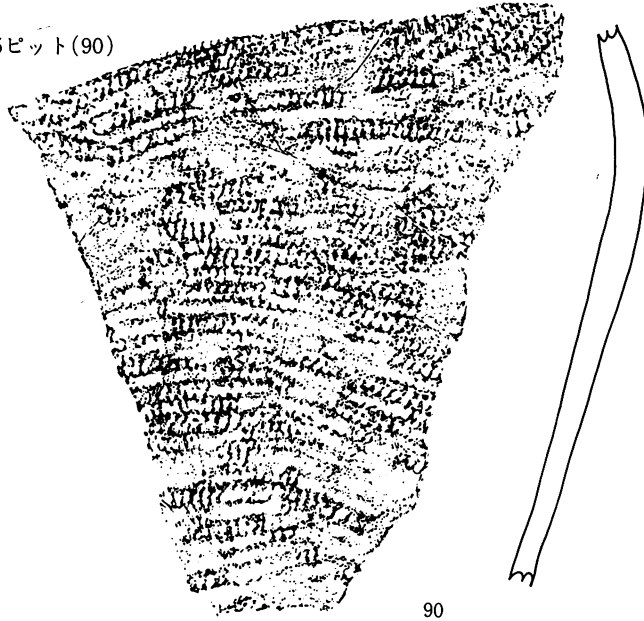


88



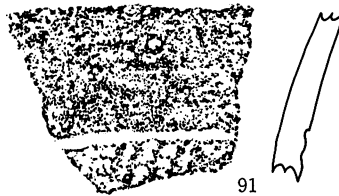
89

D IV-55ピット(90)



90

D IV-57ピット(91)



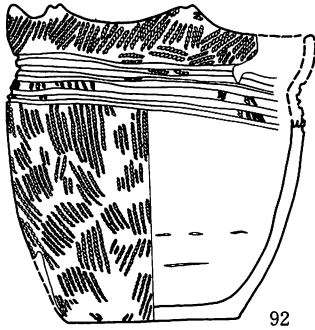
91

S = $\frac{1}{2}$

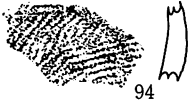
図版41 遺構内の出土遺物(13)

E II—52ピット(92~95)

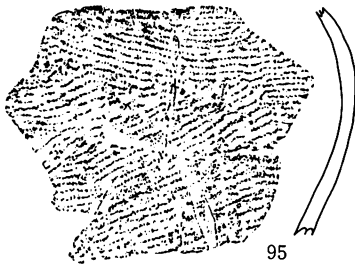
11.9・6.8・12.2



92

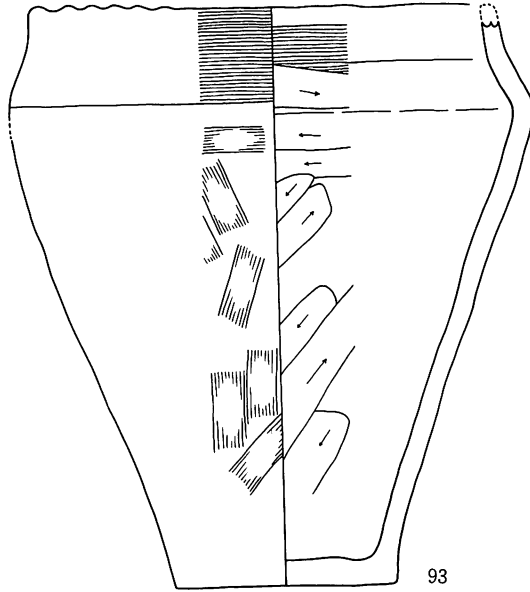


94



95

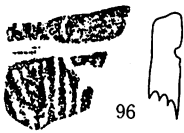
18.0・9.0・23.5



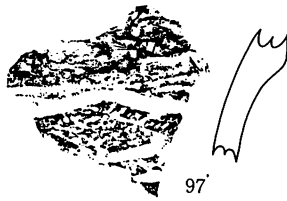
93



F IV—51ピット(96~105)



96



97



98



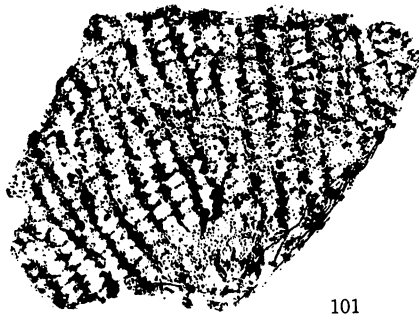
99



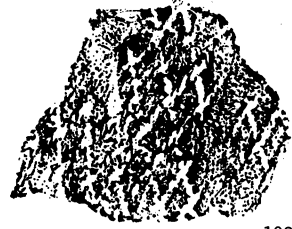
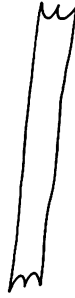
100

S = $\frac{1}{3}$

図版42 遺構内の出土遺物(14)



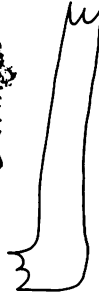
101



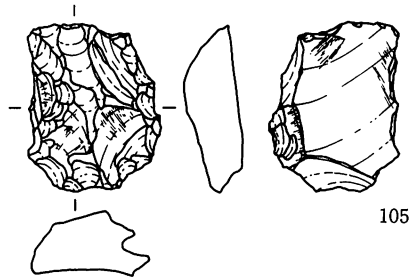
102



103



104

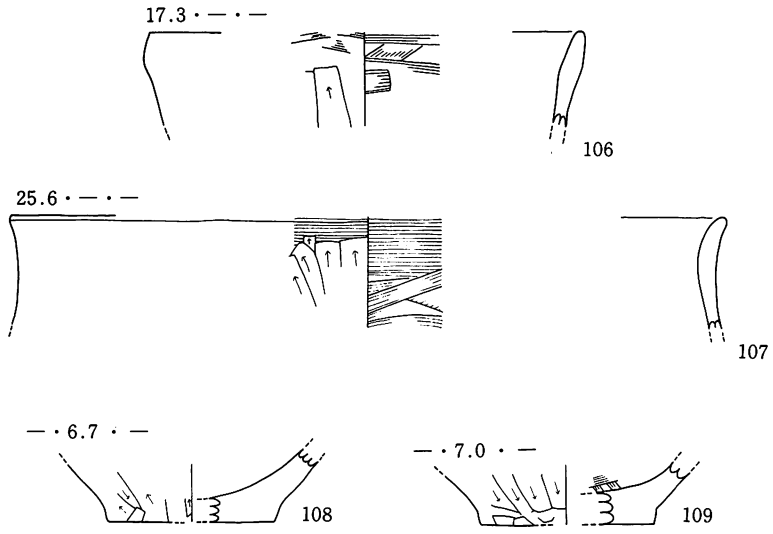


105

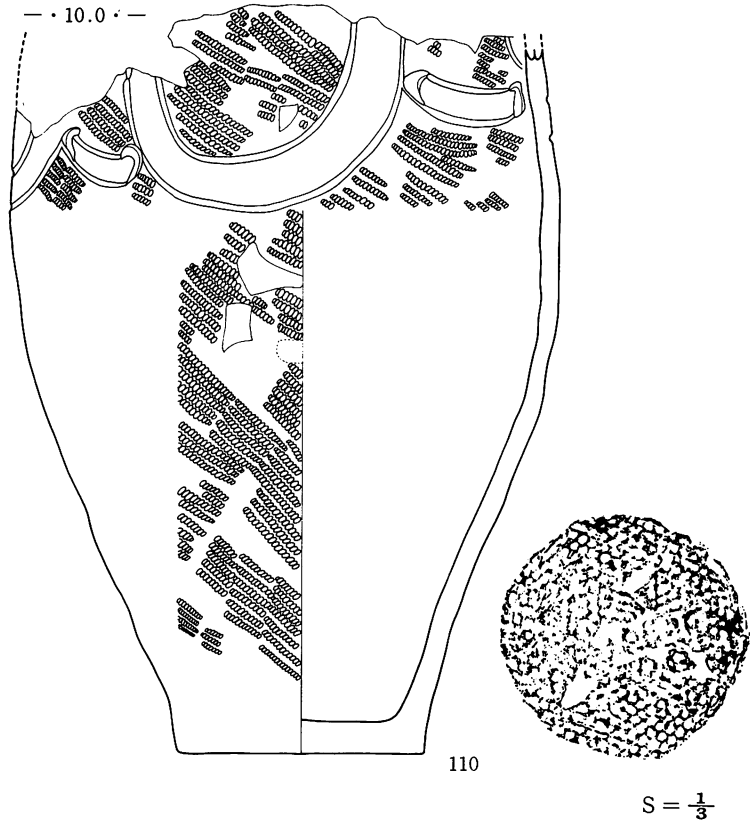
S = $\frac{1}{2}$

図版43 遺構内の出土遺物(15)

AII -151 溝(106 ~109)



D IV -151 埋設土器遺構(110)



図版44 遺構内の出土遺物(16)

2. 遺構外の出土遺物

有矢野遺跡の遺構外の出土遺物は、土器からなる。土器は縄文時代のものと同様に位置づけられるものである。これらの遺物はⅠ層～Ⅲ層からの出土であるが、大部分はⅢ層の暗褐色土中から出土している。

(1) 土器

縄文土器 縄文時代前期から晩期に至る各時期の土器が出土している。これらの土器を時期別に分類し、それぞれに第Ⅰ群土器～第Ⅳ群土器の名称を付した。すなわち、前期の土器を第Ⅰ群土器、中期の土器を第Ⅱ群土器、後期の土器を第Ⅲ群土器、晩期の土器を第Ⅳ群土器とした。以下に各群の土器について記述する。なお、上の山Ⅹ遺跡の遺構外出土の縄文土器についても、これらの名称を用いて記述することとする。

① 第Ⅰ群土器 (図版45—2～6、46—7・写真図版46—2～7)

2～7がこの群に属する土器で、すべて深鉢の口縁部～底部にかけての破片である。2は内弯する口縁部である。粘土紐の貼り付けによる隆帯と沈線文が施され、その上に斜縄文が施されている。3は頸部片で、2本の捺糸圧痕文が施され、その上下に斜縄文が施されている。4は頸部以下の体部片である。頸部には捺糸圧痕文が施され、その下部には縦位の捺糸文が施されている。5と6は体部片である。5には斜縄文が、6には捺糸文が施されている。7は体部最下部から底部にかけての破片で、体部下半に斜縄文が施されている。また、底部にも縄文が施されている。これら土器片の胎土には植物質繊維と小礫が混入している。なお、これらの土器群は、文様・胎土等から縄文時代前期前葉に属する土器と考えられる。

② 第Ⅱ群土器 (図版46・写真図版46—8、9・47—10～12)

8～12がこの群に属する土器で、すべて深鉢の口縁部と体部片である。8は波状を呈し、直立する口縁部片である。粘土紐の貼り付けによる隆起線が施され、その上側に沿って連続刺突文が施されている。9は口縁部の細片である。平縁で外反ぎみであり、内外面にミガキが施されている。10～12は体部片である。地文(単節の斜縄文)を沈線で区画し、磨消しが施されている。12のみには沈線に沿って連続刺突文が施されている。また、外面にススの付着がみられる。なお、これらの土器群は、文様等から縄文時代中期末葉に属する土器と考えられる。

③ 第Ⅲ群土器 (図版46—13・写真図版47—13)

13のみがこの群に属する土器片で、深鉢の体部片である。地文(単節の斜縄文)の上に沈線が数本施されている。この土器片は、縄文時代後期前葉の土器と考えられる。

④ 第Ⅳ群土器 (図版45—1、46—14、15・写真図版46—1、47—14、15)

1と14・15がこの群に属する土器片で、すべて鉢の体部片、及び体部～底部片である。1は口縁部から体部上半を欠く土器片である。全面に朱塗りが施された後に、体部に斜縄文が施されている。外面の一部にスス状の付着物がみられる。14と15は体部片で斜縄文のみが施されている。内外面にスス状の付着物がみられる。時期は、縄文時代晩期に属する土器と考えられるが詳細については不明である。

須恵器（図版46—16・写真図版47—16）

DⅡ区から破片が1点(16)出土している。体部の細片で、外面に敲き目が確認できるのみで器形等詳細は不明である。

(2) 石器

石器の出土数は9点(17～26)である。すべてⅢ層の下位からの出土である。その内訳は、石鏃1点、石匙2点、スクレイパー1点、不定形石器1点、剣状石製品1点、磨製石斧1点、磨石1点、半円状扁平打製石器1点である。

① 石鏃（図版47—17・写真図版なし）

出土した石鏃は1点(17)である。基部がほぼ平坦で正三角形に近い形状を呈する。両面に第2次剝離面を残すが、先端部から基部にかけての両側縁には入念な調整剝離が施されている。

② 石匙（図版47—18、19・写真図版47—17、18）

出土した石匙は2点(18・19)である。いずれも石器の長軸方向につまみ部をもつ縦形石匙である。18は両面に、19は片面に1次剝離面を残すが、つまみ部から刃部にかけての縁辺は、入念な調整剝離が加えられている。石質はともに玻璃質石英安山岩である。

③ スクレイパー（図版47—20・写真図版47—19）

出土したスクレイパーは1点(20)である。石器の長軸と直交する片面の縁辺に簡単な刃部を形成したエンドスクレイパー的石英である。なお、その頭部に打面が残されている。石質は玻璃質安山岩である。

④ 不定形石器（図版47—21・写真図版47—20）

出土は1点(21)のみである。不定形な剝片の縁辺の一部に、簡単な刃部の加工がなされている。なお、頭部に打面が残されている。石質は玻璃質安山岩である。

⑤ 剣状石製品（図版47—22、23・写真図版47—21、22）

出土した剣状石製品は2点(22・23)であるが、これらは同一石器の破片である。破損しているため全体の形状は把握できないが、扁平な粘板岩を素材として作られた剣状磨製石器の刃先部と胴身部破片である。両面及び両側面をよく研磨して作り出している。先端部の刃部は鋭利に作られており、その周辺には擦痕が観察される。

⑥ 磨製石斧 (図版47—24・写真図版48—23)

出土した石斧は1点(24)である。この石器は、定角式石斧で両面及び両側面、上端がよく研磨されている。また器面全体に細かい擦痕が観察される。刃部は鋭利な蛤刃状を呈している。石質は緑色岩である。

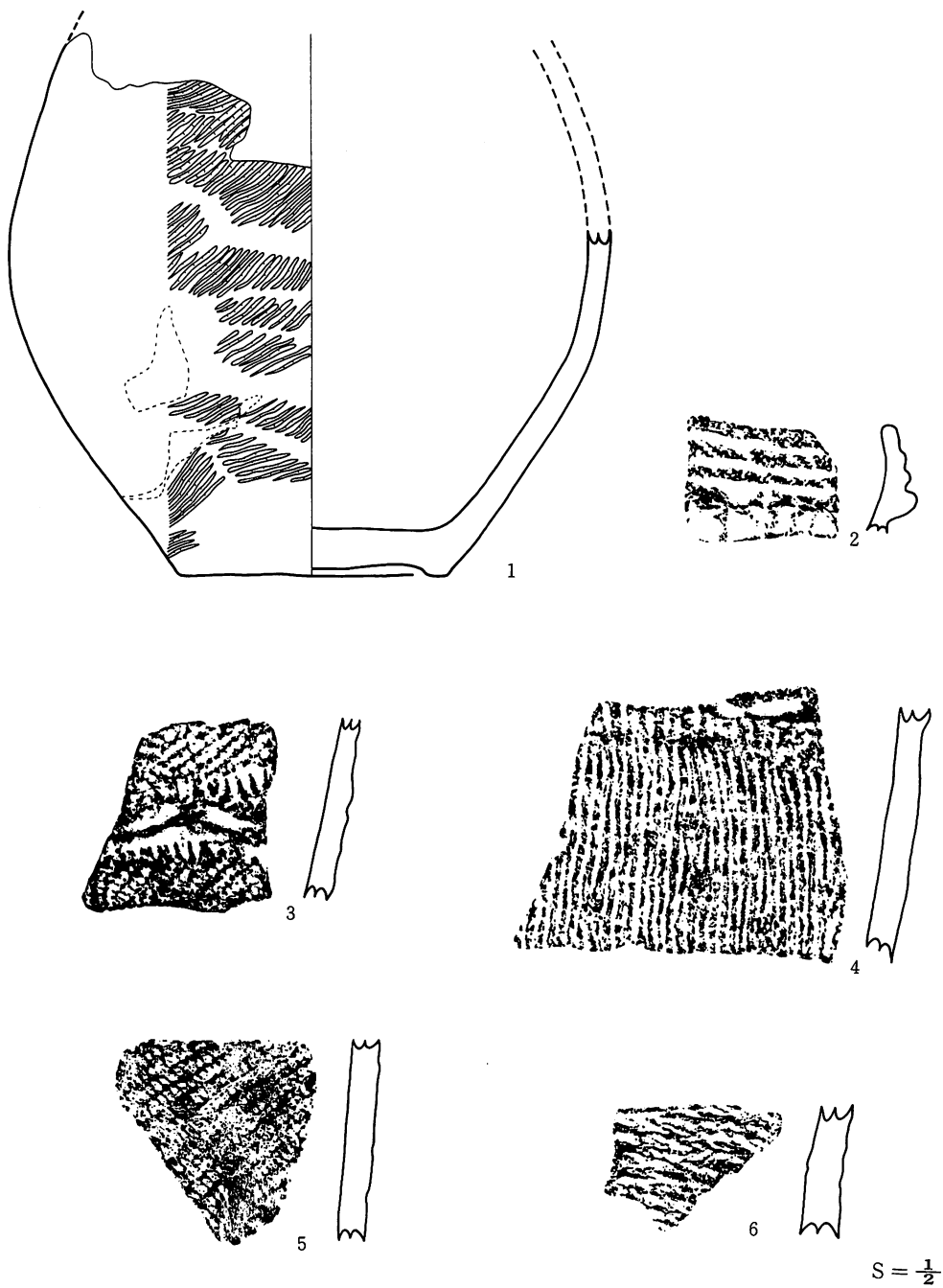
⑦ 磨石 (図版48—26・写真図版48—25)

出土した磨石は1点(26)である。形状は円形を呈し、その側縁部に研磨面がみられる。石質は安山岩である。

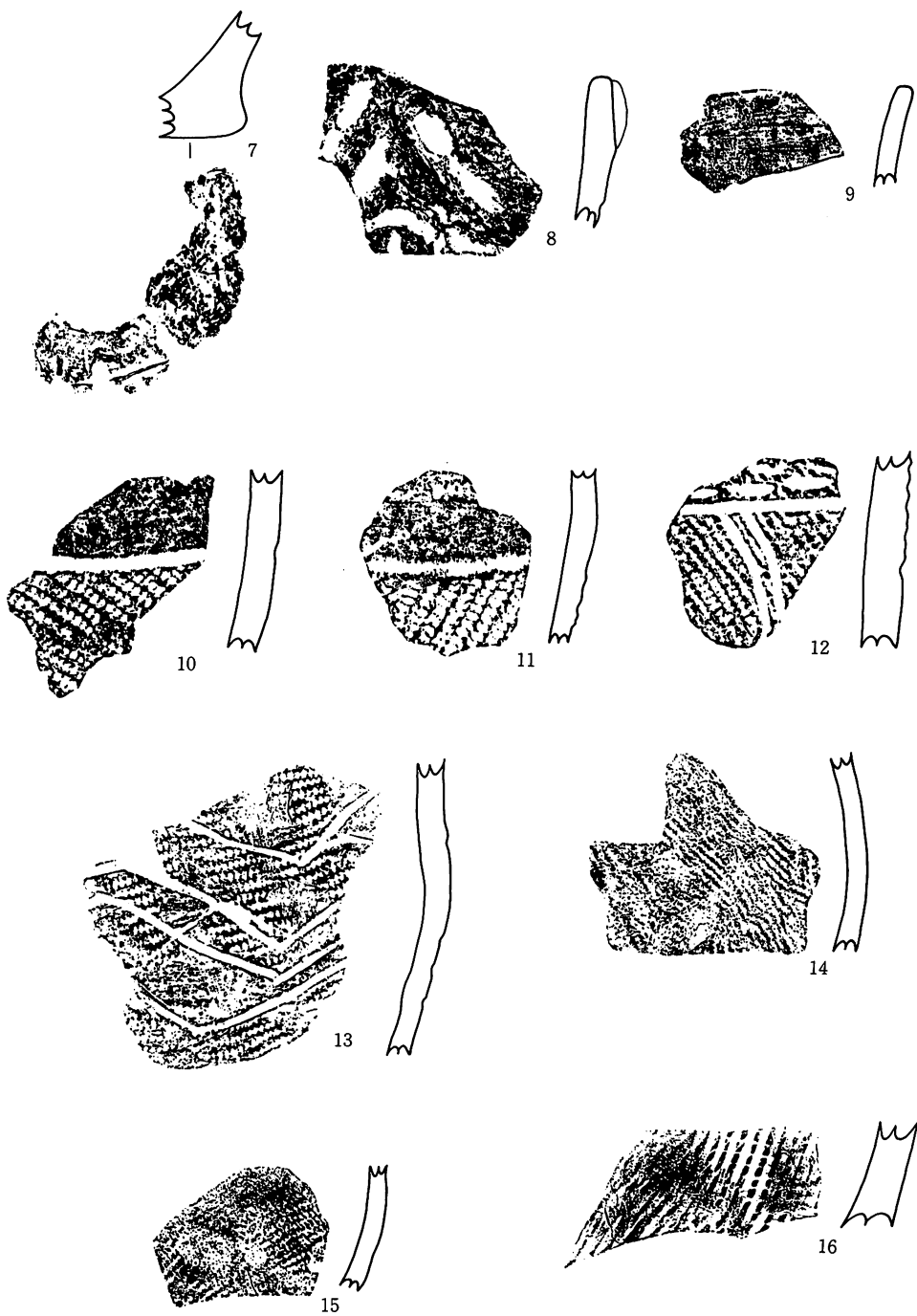
⑧ 半円状扁平打製石器 (図版48—25・写真図版48—24)

出土した石器は1点(25)である。扁平な安山岩を素材として、その周縁を半円状に打ち欠いている石器である。石器の長軸方向に平行する片方の縁辺に敲打痕と研磨痕が認められる。

遺構外(1~26)
 -・7.6・-

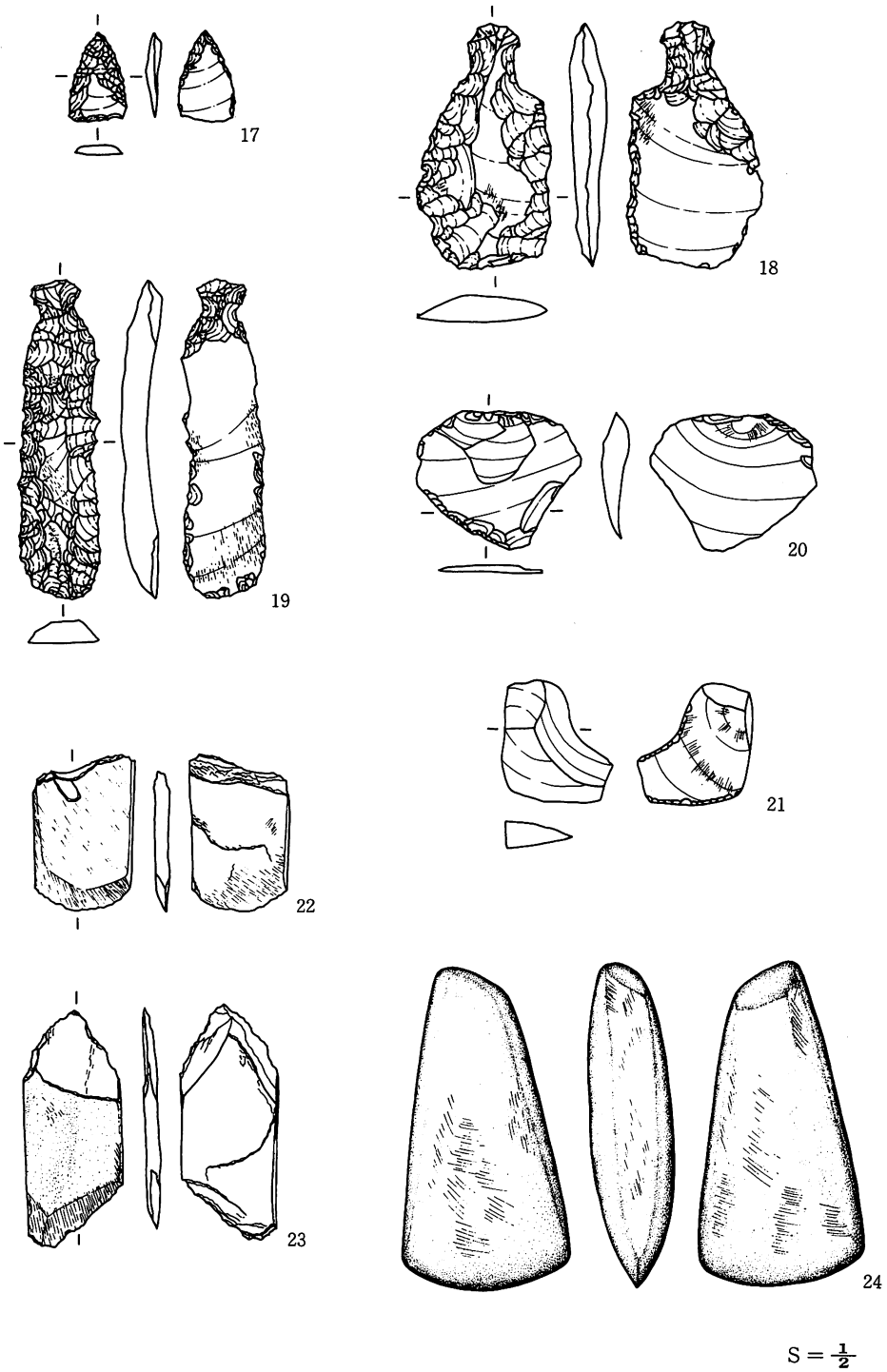


図版45 遺構外の出土遺物(1)

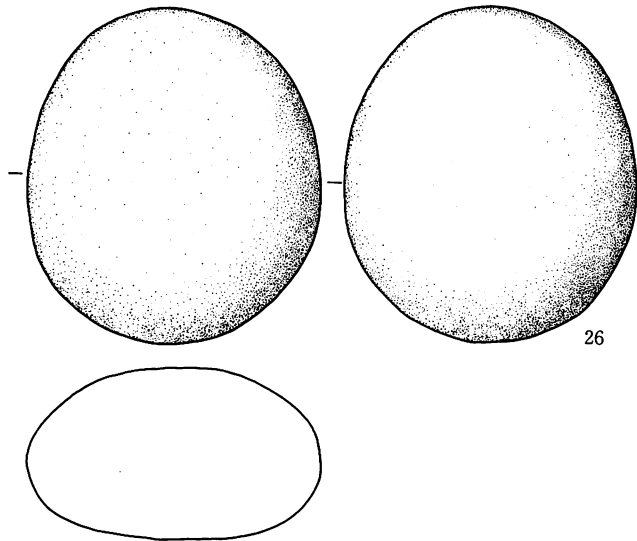
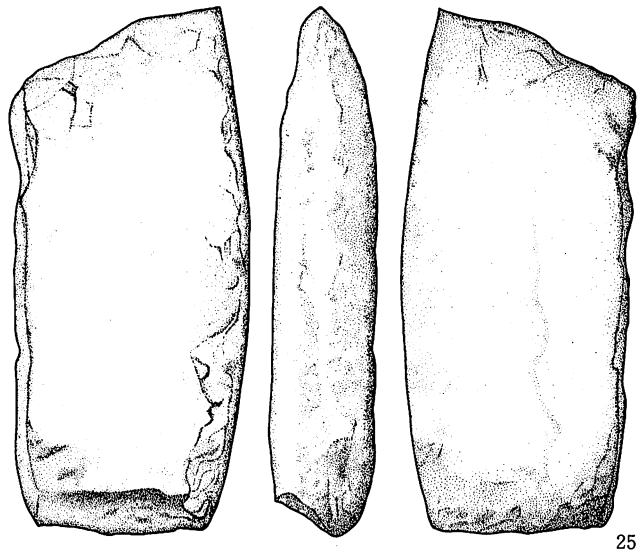


S = $\frac{1}{2}$

図版46 遺構外の出土遺物(2)



図版47 遺構外の出土遺物(3)



S = $\frac{1}{2}$

図版48 遺構外の出土遺物(4)

3. ま と め

本報告の有矢野遺跡の発掘調査区域は、岩手県遺跡地図に記載されている周知の有矢野遺跡の南端の緩斜面の一部である。従って、遺跡全体を反映させ得るものではないと思われる。しかし、一部ながら多種の遺構の検出、遺物の出土から有矢野遺跡の歴史の変遷に興味をいだかせうる資料であるといえよう。以下検出された遺構、および出土した遺物について要約する。

(1) 遺 構

① 竪穴住居址

当遺跡で検出された住居址は、縄文時代のもの9棟、平安時代のもの5棟である。なお、竪穴住居址状遺構を竪穴住居址の範疇に入れて記載したが、ここでは別項を設けて記述する。

a 縄文時代竪穴住居址

●時 期

検出された9棟の住居址のうち、構築時期を明確に決定できる遺物の出土がみられたのは3棟（BⅡ-3住・BⅡ-5住・DⅣ-1住）である。これらの住居址との比較、遺構の形態、およびその他の出土遺物などから次のような時期別に分けられる。縄文時代中期末葉の大木10式に併行するもの8棟（BⅡ-2住・BⅡ-3住・BⅡ-4住・BⅡ-5住・CⅡ-2住・DⅣ-1住・EⅣ-1住・EⅣ-2住）、晩期前葉のもの1棟（CⅡ-1住）である。

これらの住居址の占地は、調査区の緩斜面を便宜的に区分した上位緩斜面と下位平坦面の縁辺に立地している。

●規模および形状

緩斜面や平坦面の縁辺部に立地しているため、浸蝕によって完全に原形を呈する住居址は皆無である。従って規模と形状は、残存部からの推定によるものである。なお、2棟（EⅣ-1住・EⅣ-2住）は、重複関係と浸蝕のために壁などがほとんど残存しておらず、推定さえできなかつた。推定可能な住居址7棟の規模は、最大径2.7m±~4.5m±を計る。形状は、円形が4棟（BⅡ-2住・BⅡ-3住・BⅡ-4住・CⅡ-1住¹）、楕円形が2棟（CⅡ-2住・DⅣ-1住）、隅丸方形のもの1棟（BⅡ-5住）である。

●柱穴配置

柱穴配置不明な住居址1棟（BⅡ-5住）を除いた8棟は、住居址内部から検出された柱穴の相互関係を検討した結果、次のような柱穴配置が確認された。三角形の配置を示すもの（BⅡ-4住）、四角形の配置を示すもの（BⅡ-2住・DⅣ-1a住）、五角形の配置を示すもの（BⅡ-3住・DⅣ-1b住・EⅣ-1a住）、六角形の配置を示すもの（DⅣ-1c住・DⅣ-1d住）、

菱形の配置を示すもの（CⅡ-2住・EⅣ-2b住・EⅣ-2c住）、長方形の配置を示すもの（EⅣ-1b住）、台形状の配置を示すもの（EⅣ-2a住）、壁際に沿って環状に配列する配置を示すもの（CⅡ-1住）、以上の8種類の柱穴配置が認められる。平面的に1棟として把握される住居址の中に、上述のように同じ種類の柱穴配置や異なる種類の柱穴配置が複合した状態で存在しているが、これは「立て替え」と考えられる。なお、「立て替え」がみられるのは、上位の緩斜面に立地する住居址のみである。

● 炉の形態

各住居址に伴う炉の形態は、複式炉（BⅡ-3住）、石囲炉（CⅡ-1住・CⅡ-2住・DⅣ-1住）、地床炉（BⅡ-2住・BⅡ-4住・EⅣ-1住・EⅣ-2住）、石囲炉と地床炉（BⅡ-5住）の4種類である。これらの炉は、BⅡ-5住の炉址以外すべて床面のほぼ中央部に位置する。BⅡ-5住だけは、床面中央に地床炉、その南側（斜面下方）に石囲炉が位置する。また、BⅡ-3住の複式炉の前庭部とBⅡ-4住の地床炉以外すべて使用面には現地性の焼土が形成されている。なお、全体に炉の構築は簡単であり、特に下位平坦面の段丘崖縁辺に位置する住居址の炉にそれがみられる。

b 平安時代竪穴住居址

● 時期

DⅢ-1住・DⅢ-2住・DⅢ-3住の3棟の住居址は、重複関係、遺構の形態、出土遺物等から上の山Ⅹ遺跡の平安時代住居址より新しい平安時代末期に位置づけられるものと考えられる。また、BⅡ-6住とCⅡ-3住の2棟の住居址は、時期を決定しうる遺物の出土等みられなかったが、埋土状況がDⅢ-1住等のそれと類似していること、遺構の形態および立地面が同じ緩傾斜面中位に位置している等から同時期と推定した。

● 規模および形状

これらの住居址は、緩傾斜面中位に位置するため、いずれも斜面を「L」字状に掘り込んで構築されている。そのため斜面下方にあたる南側が浸蝕をうけて原形を呈する住居址は皆無である。従って規模、形状は残存部からの推定によるものである。BⅡ-6住とCⅡ-3住の規模は11.0m±×4m±を計り、形状は長方形を呈し、ほぼ同規模、同形状を呈する。DⅢ-1住・DⅢ-2住・DⅢ-3住の3棟は、重複するためもっとも新しいDⅢ-3住のみがほぼ原形に近い形状を呈するのみで、それ以外は不明である。DⅢ-3住は、4.8m±×4.8m±を計り、形状は方形を呈する。推定であるが他の2棟もそれに近いものと考えられる。

● 柱穴配置

BⅡ-6住とCⅡ-3住は同じ柱穴配置を示し、壁に沿って長方形状にジグザグ配置を呈する。DⅢ-1住・DⅢ-2住は、重複によって全体の柱穴配置は不明である。DⅢ-3住は、

壁に沿って配列する12本の柱穴による四角形の配置を呈する。

●カマドおよび炉の形態

カマドが検出されたのはDⅢ-3住のみである。かなり破壊され、配石等も崩れ落ちているため正確に形態を把握することができないが、袖部は芯に安山岩の中礫から大礫を用い、それを火山灰土で包みこむように固着していると考えられる。焚口部と燃焼部の区別は明確にできない。煙道部の全長は102cm±でやや屈曲し、ゆるやかな上昇傾斜を呈する。天井部は扁平な大礫によって構築されていたと考えられる。なお、BⅡ-6住とCⅡ-3住からは、地床炉が検出された。BⅡ-6住の地床炉は3基で、北壁にほぼ平行し、床面中央やや南側に等間隔に位置する。また、CⅡ-3住の地床炉は1基の検出であるが、焼土形成状況から使用頻度が激しかったものと考えられる。

② 竪穴住居址状遺構

当遺跡で検出された竪穴住居址状遺構は2棟（BⅡ-1竪穴住居址状遺構・EⅣ-3竪穴住居址状遺構）である。BⅡ-1竪穴状遺構は、南西側が段丘崖の浸蝕後退により、床面と壁の $\frac{2}{3}$ ほど消失しており、炉の存在と柱穴の確認ができなかった。しかし、残存部の $\frac{1}{3}$ は、BⅡ-4住居址等の形状に類似していることから「住居址」であった可能性を含めて「竪穴住居址状遺構」の名称を用いた。また、EⅣ-3竪穴住居址状遺構は、精査の結果、炉と柱穴の検出がされなかったので「住居址」と設定しなかったが、規模が3.2m前後、形状が円形を呈する竪穴であること、床面が一部であるが人為的に踏み固められていることが認められ、さらに2個の礫が埋設されている等から、形態的に住居址として使用された可能性も否定できないことから、その可能性を含めて「竪穴住居址状遺構」の名称をもちいた。これらの所属時期は、時期を決定しうる遺物の出土がみられなかったこと、遺構の形態が不明瞭であること等から不明である。

③ ピット

検出されたピットは合計37基である。これらのピットは形態から次の様に大別できる。

A. 平面形が円形、断面形がフラスコ状を呈するもの。

この中に含まれるピットは、BⅡ-51ピット・BⅡ-52ピット・CⅠ-51ピット・CⅠ-52ピット・DⅣ-53ピット・DⅣ-54ピット・DⅣ-57ピット・EⅣ-51ピット・EⅣ-53ピット・EⅣ-54ピットの10基である。規模は開口部径が75cm±～140cm±・底部径90cm±～158cm±・深さ48cm±を計る。これらの中で遺物が出土したピットは6基である。DⅣ-53ピットからは、完形品1個と多数の縄文土器片が埋土中～下部から出土した。時期は大洞B式土器に併行するものである。DⅣ-54ピットからは、多数の縄文土器片が埋土中部から出土した。時期は大洞C₁式土器に併行するものである。なお、これら以外のピットの出土遺物は、細片の縄文土器片であり、出土地点は埋土上位である。時期は縄文時代中期末葉と晩期前葉の物が種々入り

混じっている。これらのピットは、緩傾斜面最上位と下位平坦面南西側縁辺の2個所に立地する。

B. 断面形がピーカー状を呈するものであるが、さらに規模、平面形から次のように細別できる。

㉑ 規模が開口部径88cm±～178cm±・底部径75cm±～150cm±・深さ40cm±～160cm±を計り、平面形が円形を呈するもの。

この中に含まれるピットは、DⅢ-53ピット・DⅢ-54ピット・DⅣ-51ピット・DⅣ-52ピット・DⅣ-56ピット・EⅢ-51ピット・FⅣ-51ピットの7基である。これらのピットで遺物が出土したのはFⅣ-51ピットのみである。埋土の中部～上部から、石器1点と縄文土器片が出土した。縄文土器片は、細片が多く時期を明確に把握できないが、推定から縄文時代前期前葉の円筒下層a～b式土器に併行するものではないかと思われる。なお、これらのピットは、緩傾斜面の中位から上位にかけて立地する。

㉒ 規模が開口部径185cm±～298cm±・底部径155cm±～234cm±・深さ67cm±～188cm±を計り、平面形が円形を呈するもの。

この中に含まれるピットは、CⅠ-53ピット・CⅠ-55ピット・CⅡ-51ピット・CⅡ-53ピット・CⅡ-55ピット・CⅡ-57ピット・CⅡ-58ピット・CⅡ-59ピットの8基である。これらのピットで遺物が出土したのは、CⅠ-53ピットとCⅠ-55ピットの2基である。いずれも埋土上部から出土した縄文土器の細片である。時期は縄文時代晩期の大洞B C式土器と大洞C₁式土器に併行するものである。なお、これらのピットは下位平坦面に立地する。

㉓ 規模が開口部径415cm±×362cm±～347cm±×294cm±・底部径324cm±×265cm±～280cm±×244cm±・深さ95cm±～146cm±を計り、平面形が隅丸長方形を呈するもの。

この中に含まれるピットは、CⅠ-54ピット・CⅡ-54ピット・CⅡ-56ピットの3基である。これらのピットは、規模・形状、および埋土の堆積状況が非常に類似している。出土遺物は、すべてのピットから縄文土器の細片が出土している。この土器片は、自然堆積を示す埋土の上部からの出土で、時期は縄文中期末葉の大木10式土器と晩期中葉の大洞C₁式土器に併行するものである。なお、これらのピットは下位平坦面に立地する。

C. 平面形が円形・断面形が皿状を呈するもの。

この中に含まれるピットは、CⅡ-52ピット・CⅢ-51ピット・DⅡ-51ピット・DⅢ-51ピット・DⅢ-52ピット・DⅢ-55ピット・DⅢ-56ピット・DⅣ-55ピット・EⅣ-52ピットの9基である。規模は開口部径70cm±～140cm±・底部径52cm±～104cm±・深さ15cm±～47cm±を計る。これらのピットで遺物が出土したのは、DⅣ-55ピットとEⅣ-52ピットの2基で、すべて埋土上部から完形土器2個と土器片が出土した。DⅣ-55ピットから出土したのは、縄文土器の細片であり、時期は不明である。また、EⅣ-52ピットから出土した土器は、弥生

式土器の完形品2個である。時期は弥生時代中葉の二枚橋式土器に併行するものである。なお、これらのピットは、緩傾斜面中位～上位に立地する。

以上のピットの所属時期について断定することは大部分が困難である。それは、出土遺物がないものや、あっても埋土上部から得られたものが大半であるため、時期決定資料とするには問題があることによるものである。わずかに、DⅣ-53ピットとDⅣ-54ピットが出土遺物の出土状況から縄文時代晩期前葉の時期に位置づけられるものと考えられることと、Bのb群とc群に属するピットが、遺構の形態や埋土の状況から、白色細粒浮石降下（十和田a降下火山灰と思われる）以後に構築されたものと考えられることである。さらに、b群とc群に属するピットは、埋土状況、重複関係の事実からみて、それほど時間差はないようであるが、b群の方が古く、c群の方が新しい時期のものと考えられる。なお、EⅣ-52ピットの埋土上部から出土した弥生式土器は、この時代に属するものがこれのみであるため、詳細については不明であるが、しかし、これは、調査区域外にのびる遺跡内に、弥生時代の遺構、遺物の存在を示唆するものではないかと推定される。

④ 陥し穴状遺構

検出された陥し穴状遺構は3基である。これらの遺構の規模・形態はほぼ類似するが、唯一異なるのは、DⅡ-101陥し穴状遺構の底面の中軸線上に径8cm、深さ15cm前後の副穴が6個検出されたことである。これは、荒屋Ⅱ遺跡で検出された陥し穴状遺構のA類に類似するものである。なお、所属時期については、それを決定する遺物の出土等がみられず不明である。

⑤ その他

a. AⅡ-151溝

調査区西端の沖積面から検出された遺構である。この遺構の起点および終点は調査区域外に延びているため、全体の様相を把握することができない。従ってどの様な遺構であるのか、時期はいつかということについては不明である。

b. DⅣ-151埋甕

出土した土器は、縄文時代中期末葉大木10式土器に併行するものである。この遺構は、出土遺物の時期からみてDⅣ-1住かEⅣ-1住等となんらかの関係にあることも考えられるが、しかし、詳細は不明である。

(2) 遺物

① 土器

出土した土器は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器の広範囲にわたる。しかし、その出土量は、遺構内外ともに非常に少なく、また破片が多い。その中で出土した土器の大半を占め

る縄文土器について従来の型式の関連で比較すると次のような状況がみられる。前期は、円筒下層 a・b 式、中期は大木10式、晩期は、大洞 B・BC・C₁ 式に比定される土器群である。これらの中で特に大木10式土器と大洞 B～C₁ 式土器が多く出土しているのは、この時期の遺構が検出されていることと関連するものであろう。

② 石器

出土した石器は合計21個である。これらの半分以上（11個）が DⅣ-1 住居址内から出土している。全体的にみると剥片石器が多く粗雑な加工のものが多い。

以上、出土遺物について述べてきたが、全体的にその出土量が少ないこと、粗雑な作りのものが多いことなどが共通している。

表1 有矢野遺跡遺構名訂正表

番号	種別	旧遺構名	新遺構名	番号	種別	旧遺構名	新遺構名	番号	種別	旧遺構名	新遺構名
1	住居址状	BⅡ-8	BⅡ-1	21	ピット	CⅠ-3	CⅠ-53	41	ピット	DⅣ-8	DⅣ-51
2	住居址	BⅡ-1	BⅡ-2	22	ピット	CⅠ-2	CⅠ-54	42	ピット	DⅣ-9	DⅣ-52
3	住居址	BⅡ-5	BⅡ-3	23	ピット	CⅠ-1	CⅠ-55	43	ピット	DⅣ-2	DⅣ-53
4	住居址	BⅡ-3	BⅡ-4	24	ピット	CⅡ-12	CⅡ-51	44	ピット	DⅣ-1	DⅣ-54
5	住居址	BⅡ-2	BⅡ-5	25	ピット	CⅡ-13	CⅡ-52	45	ピット	DⅣ-5	DⅣ-55
6	住居址	BⅡ-4	BⅡ-6	26	ピット	CⅡ-7	CⅡ-53	46	ピット	DⅣ-4	DⅣ-56
7	住居址	CⅡ-8	CⅡ-1	27	ピット	CⅡ-6	CⅡ-54	47	ピット	DⅣ-7	DⅣ-57
8	住居址	CⅡ-5	CⅡ-2	28	ピット	なし	CⅡ-55	48	ピット	EⅢ-1	EⅢ-51
9	住居址	CⅡ-2	CⅡ-3	29	ピット	CⅡ-9	CⅡ-56	49	ピット	EⅣ-7	EⅣ-51
10	住居址	CⅢ-3	DⅢ-1	30	ピット	CⅡ-10	CⅡ-57	50	ピット	EⅣ-5	EⅣ-52
11	住居址	DⅢ-6	DⅢ-2	31	ピット	CⅡ-11	CⅡ-58	51	ピット	EⅣ-9	EⅣ-53
12	住居址	CⅢ-2	DⅢ-3	32	ピット	CⅡ-4	CⅡ-59	52	ピット	EⅣ-10	EⅣ-54
13	住居址	DⅣ-3	DⅣ-1	33	ピット	CⅢ-1	CⅢ-51	53	ピット	FⅣ-3	FⅣ-51
14	住居址	EⅣ-1	EⅣ-1	34	ピット	DⅡ-1	DⅡ-51	54	陥し穴状遺構	CⅡ-1	DⅡ-101
15	住居址	EⅣ-2	EⅣ-2	35	ピット	DⅢ-8	DⅢ-51	55	陥し穴状遺構	DⅢ-7	DⅢ-101
16	住居址状	EⅣ-8	EⅣ-3	36	ピット	DⅢ-3	DⅢ-52	56	陥し穴状遺構	EⅣ-3	EⅣ-101
17	ピット	BⅡ-7	BⅡ-51	37	ピット	DⅢ-4	DⅢ-53	57	溝	AⅡ-1	AⅡ-151
18	ピット	BⅡ-6	BⅡ-52	38	ピット	DⅢ-2	BⅢ-54	58	埋 甕	DⅣ-6	DⅣ-151
19	ピット	CⅠ-5	CⅠ-51	39	ピット	DⅢ-1	DⅢ-55				
20	ピット	CⅠ-4	CⅠ-52	40	ピット	DⅢ-5	DⅢ-56				

表2 有矢野遺跡出土石器計測表

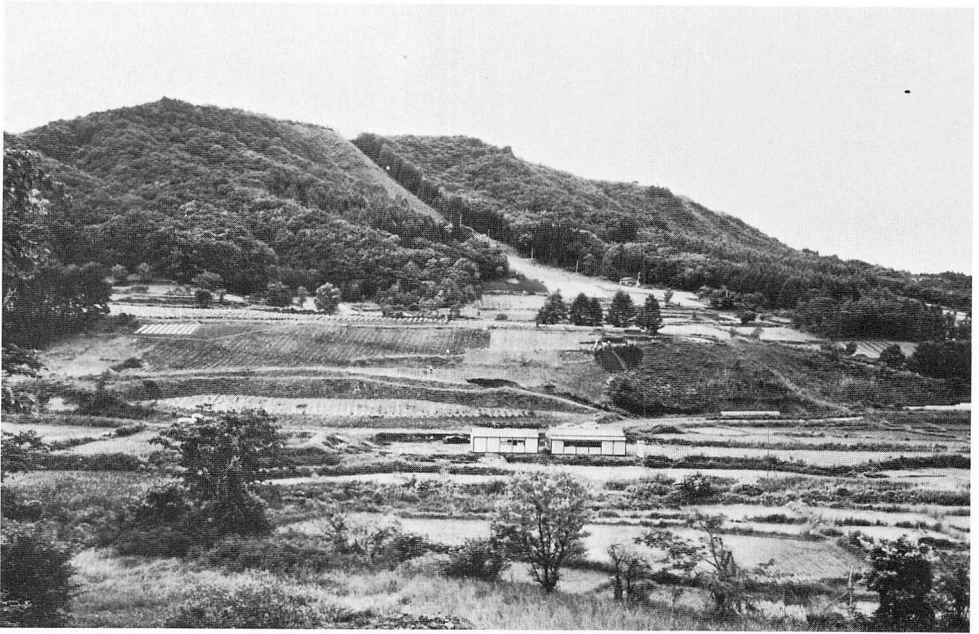
番号	出土地区	器種	図版番号	法 量				石 質
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	
1	C I区	石 鎌	47-17	4.7	1.7	0.3	3.4	玻璃質石英安山岩
2	E IV区	石 匙	47-18	8.9	2.0	0.6	21.1	玻璃質石英安山岩
3	E IV区	石 匙	47-19	7.0	3.5	1.0	24.7	玻璃質石英安山岩
4	D IV-1住居址	篋状石器	35-35	5.2	3.3	1.0	22.1	玻璃質石英安山岩
5	D IV-1住居址	篋状石器	35-36	6.5	4.0	1.3	29.3	玻璃質石英安山岩
6	D IV-1住居址	スクレイパー	35-39	7.2	4.5	0.6	27.7	玻璃質安山岩
7	D IV-1住居址	スクレイパー	35-40	13.0	4.0	1.0	59.0	玻璃質安山岩
8	E IV区	スクレイパー	47-20	4.1	4.0	0.5	9.7	玻璃質安山岩
9	F IV-51ピット	スクレイパー	43-105	4.8	3.8	1.4	24.6	玻璃質安山岩
10	D IV-1住居址	スクレイパー	35-41	5.3	3.3	1.0	27.3	玻璃質石英安山岩
11	D IV-1住居址	スクレイパー	35-37	4.9	4.3	0.9	16.0	玻璃質安山岩
12	D IV-1住居址	スクレイパー	35-38	5.6	2.2	0.4	9.5	玻璃質安山岩
13	D IV-1住居址	不定形石器	35-42	4.9	2.7	0.5	10.1	玻璃質石英安山岩
14	E III区	不定形石器	47-21	3.7	2.2	0.6	6.0	玻璃質安山岩
15	E IV区	剣状石製品	47-22・23	4.0・6.5	2.8・2.8	0.3・0.3	9.5・11.4	粘板岩
16	F IV区	石 斧	47-24	10.2	5.8	2.2	140.0	緑色岩
17	D IV-1住居址	石 斧	35-44	9.1	4.8	2.9	200.0	斑レイ岩
18	D IV-1住居址	磨 石	36-46	13.4	6.0	3.8	410.0	安山岩
19	E IV区	磨 石	48-26	10.1	9.0	4.5	520.0	安山岩
20	D IV-1住居址	半円状扁平打製石器	36-46	14.1	7.9	2.4	250.0	安山岩
21	D IV区	半円状扁平打製石器	48-25	15.1	7.2	2.3	355.0	安山岩

表3 有矢野遺跡 ¹⁴C 試料測定結果表

番号	試料採取遺構名	日本アイソトープ協会 コード	岩手県埋文センター コード	¹⁴ C 年 代
1	B II-2住居址(床面)	N-3625	I M No. 9	2790±80y B. P. (2700±80y B. P.)
2	C II-1住居址(炉使用面上)	N-3626	I M No.10	3200±85y B. P. (3110±80y B. P.)
3	D III-2住居址(埋土)	N-3628	I M No.12	830±75y B. P. (805±75y B. P.)
4	D III-3住居址(埋土)	N-3627	I M No.11	940±60y B. P. (915±55y B. P.)
5	D IV-1住居址(埋土)	N-3629	I M No.13	2240±90y B. P. (2180±90y B. P.)
6	E IV-3住居址(埋土)	N-3630	I M No.14	2940±95y B. P. (2850±95y B. P.)
7	C I-54ピット(床面)	N-3631	I M No.15	775±65y B. P. (750±60y B. P.)

(カッコ内は Libby の値5568年にもとづいて計算されたもの)

写 真 图 版

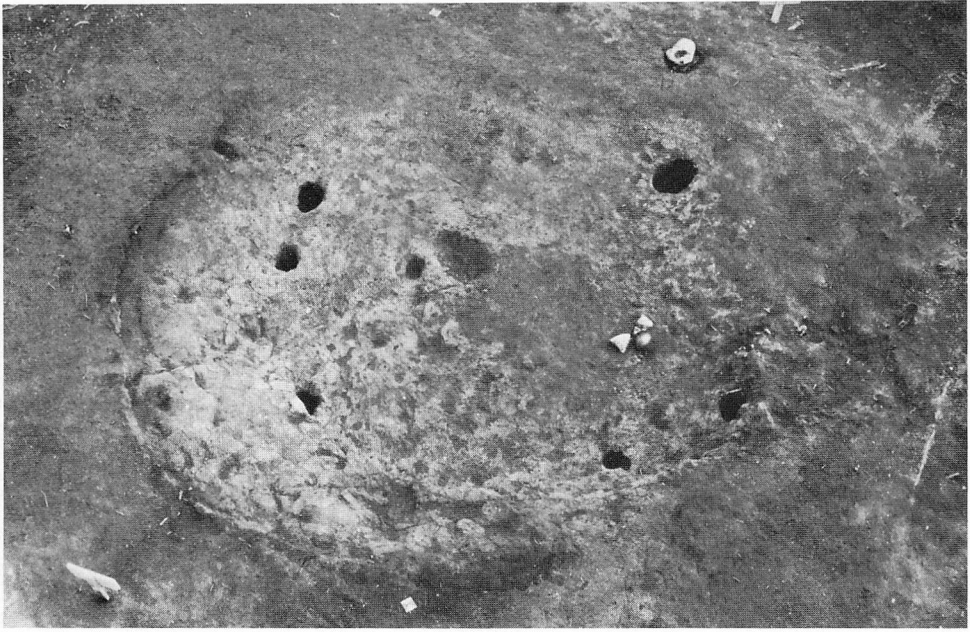


a. 遺跡遠景

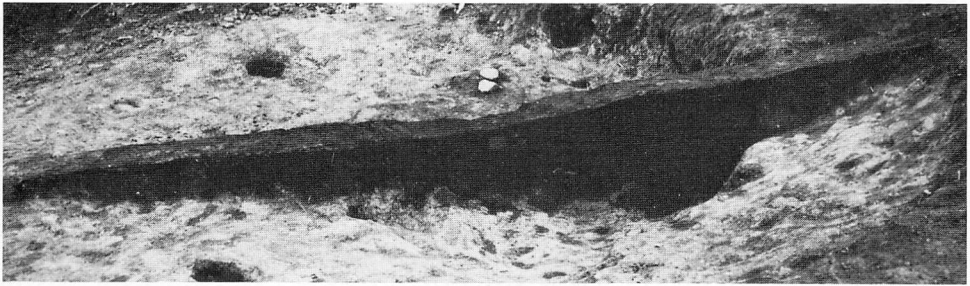


b. B II - I 住居址状遺構

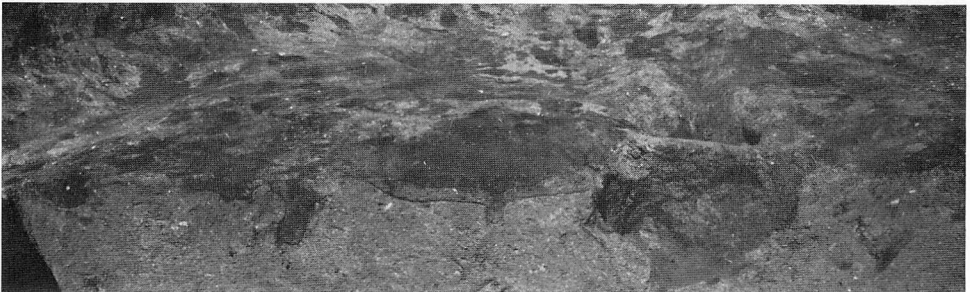
写真図版



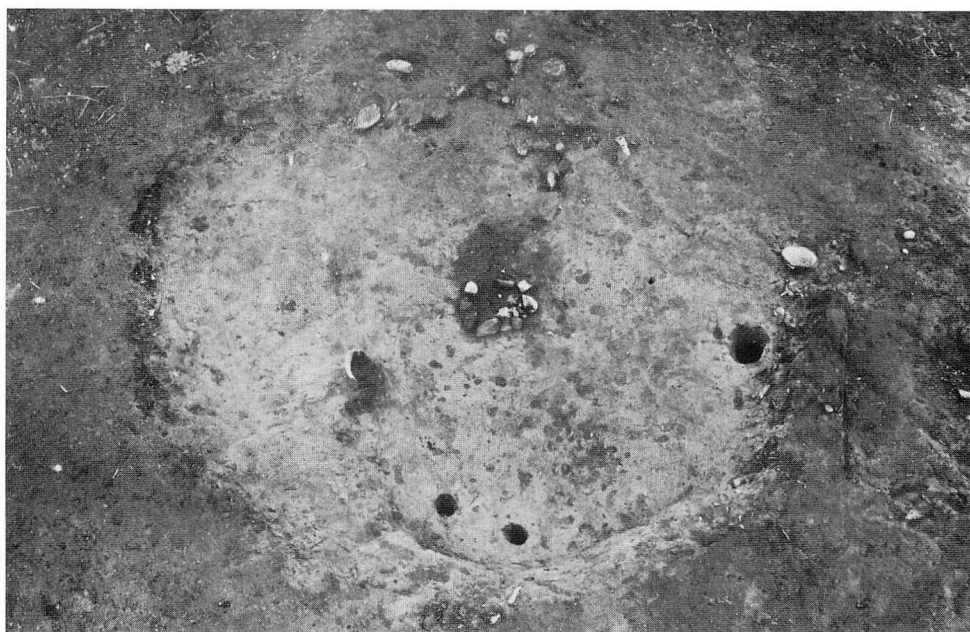
a. B II—2 住居址



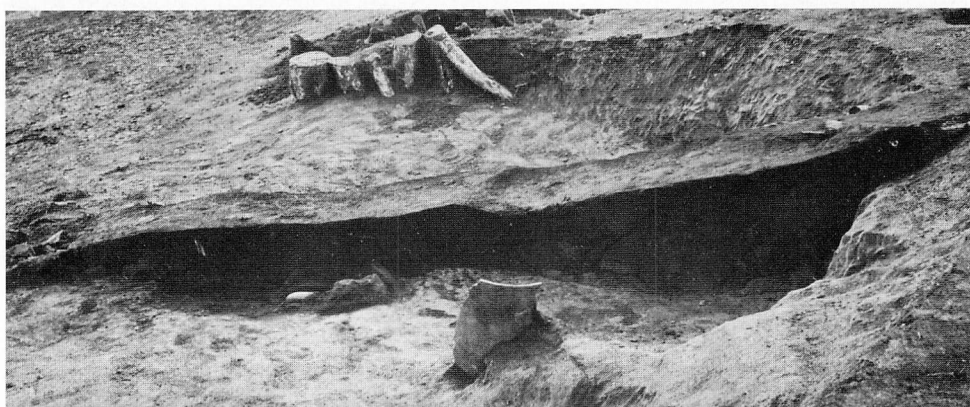
b. B II—2 住居址(土层断面)



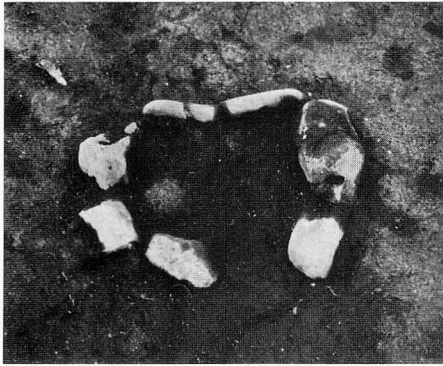
c. B II—2 住居址炉(断面)



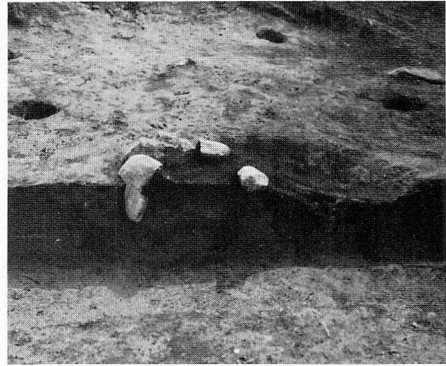
a. B II—3 住居址



b. B II—3 住居址(土層断面)



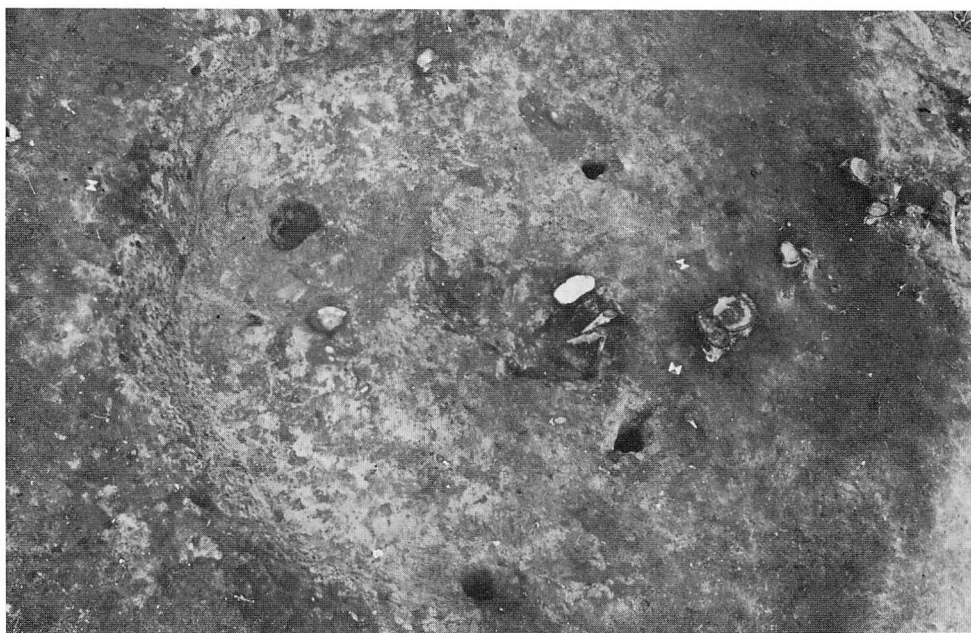
a. B II-3 住居址炉



b. B II-3 住居址炉(断面)



c. B II-3 住居址(土器出土状况)



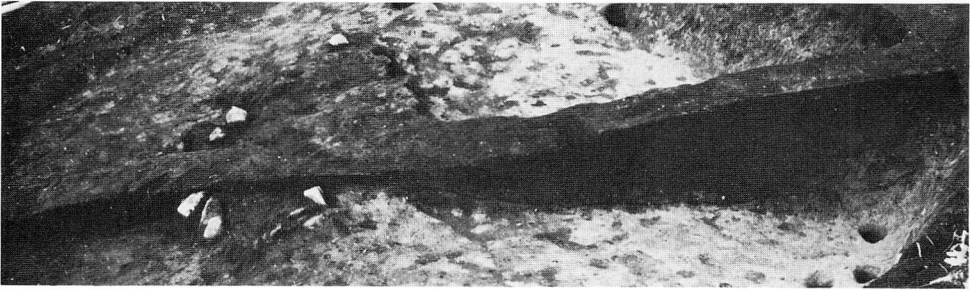
a. B II—4 住居址



b. B II—4 住居址(土層断面)



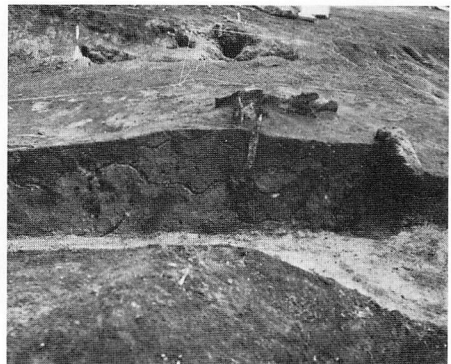
a. B II—5 住居址



b. B II—5 住居址(土層断面)



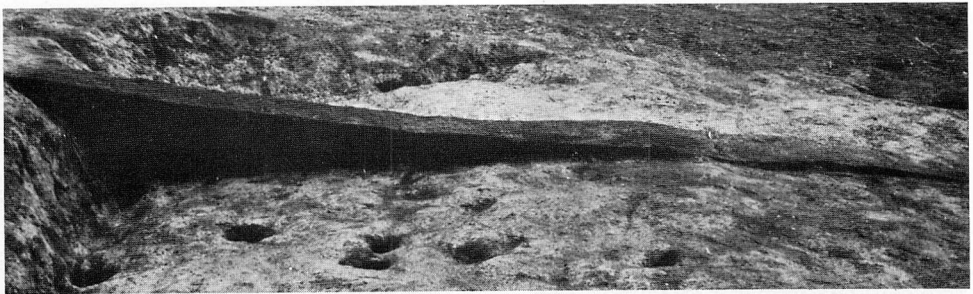
c. B II—5 住居址炉



d. B II—5 住居址炉(断面)



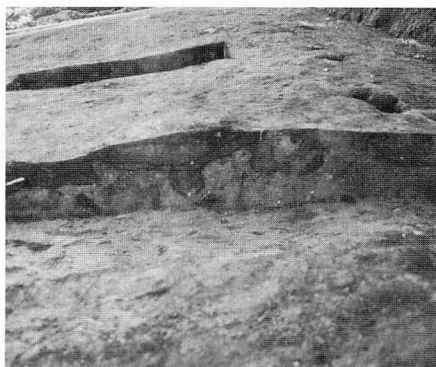
a. B II—6 住居址



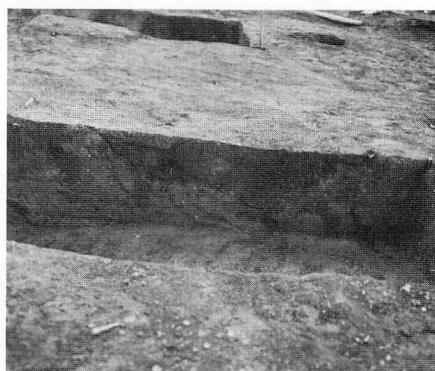
b. B II—6 住居址(土層断面)



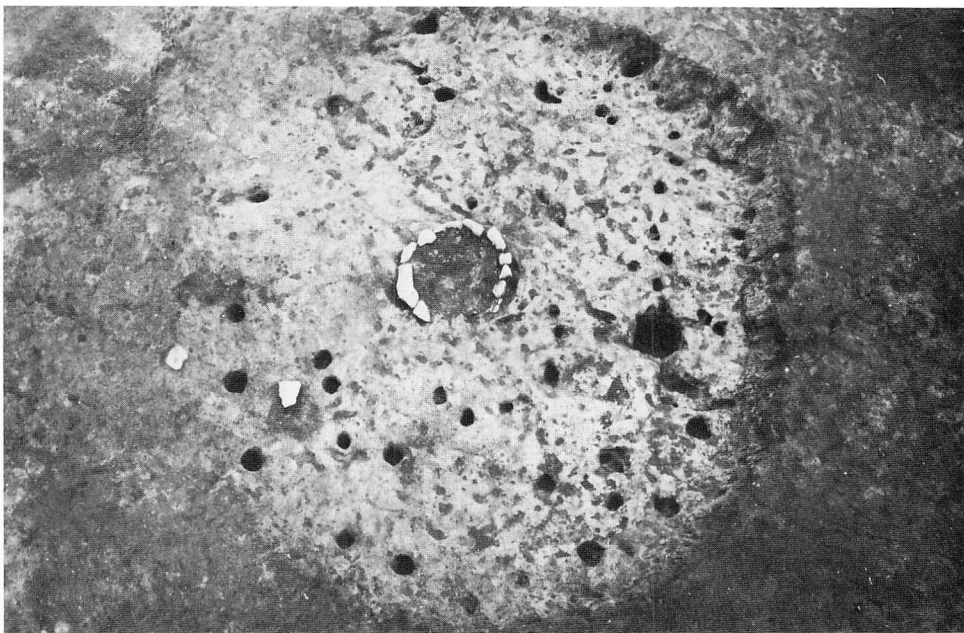
a. B II—6 住居址烧土(断面) No. 1



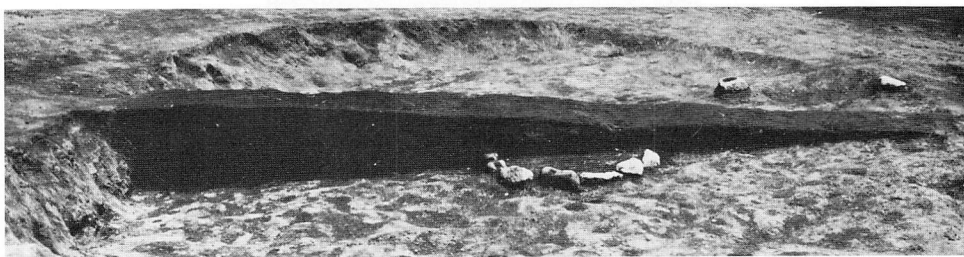
b. B II—6 住居址烧土(断面) No. 2



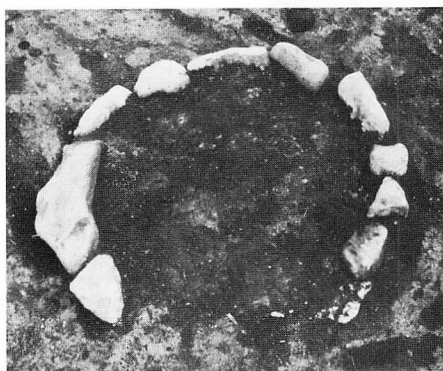
c. B II—6 住居址烧土(断面) No. 3



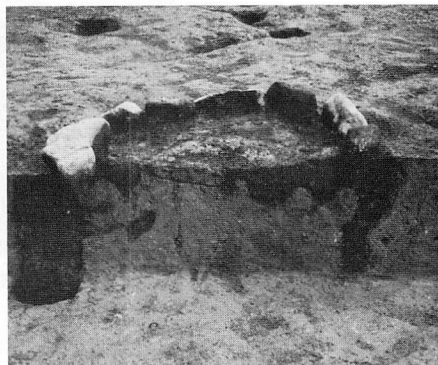
a. C II-1 住居址



b. C II-1 住居址(土層断面)



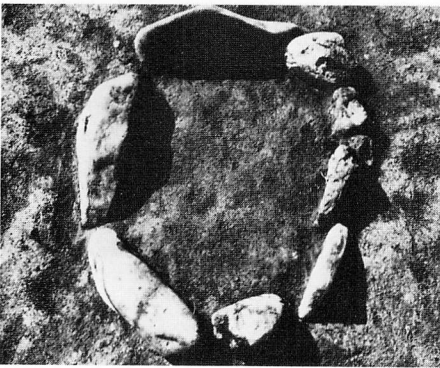
c. C II-1 住居址炉



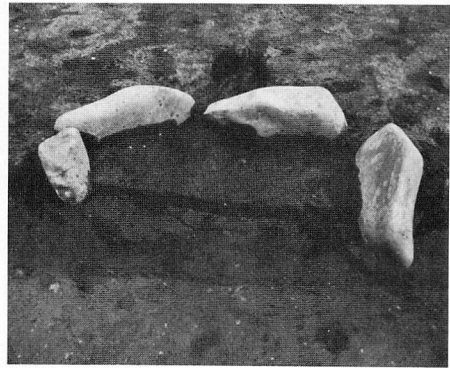
d. C II-1 住居址炉(断面)



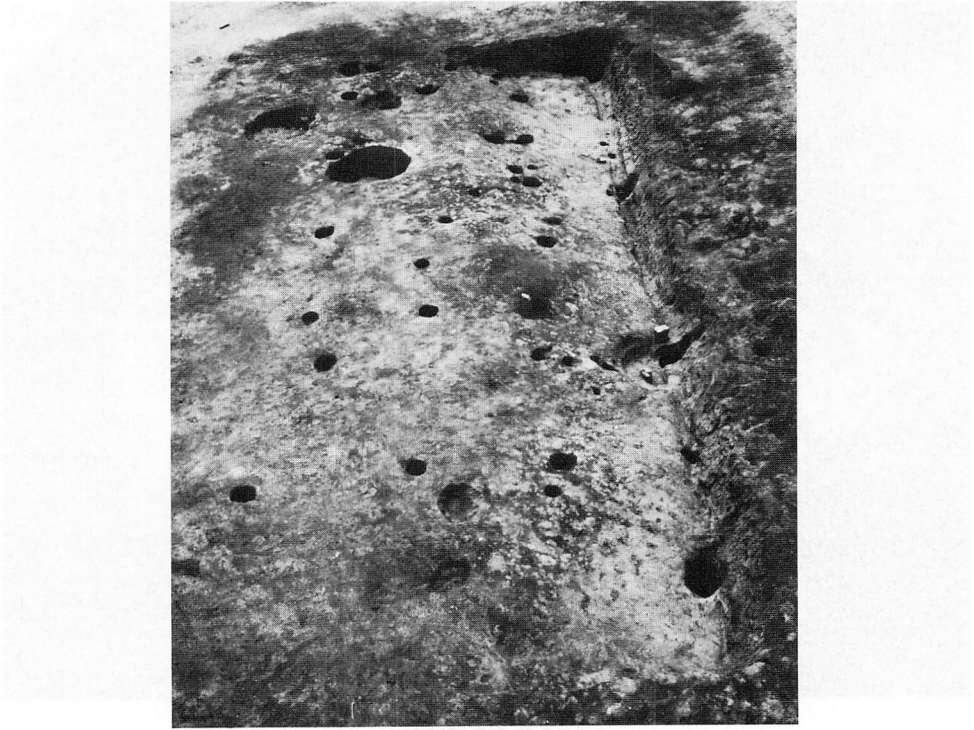
a. C II—2 住居址



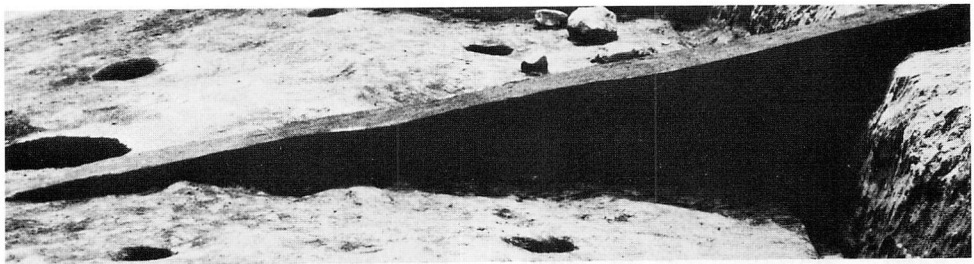
b. C II—2 住居址炉



c. C II—2 住居址炉(断面)



a. C II—3 住居址



b. C II—3 住居址(土层断面)

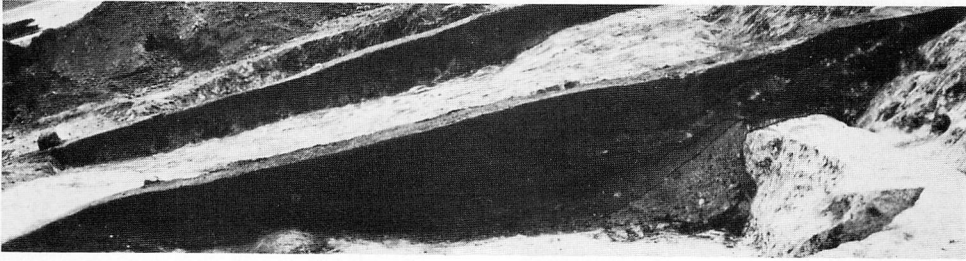


c. C II—3 住居址烧土(断面)

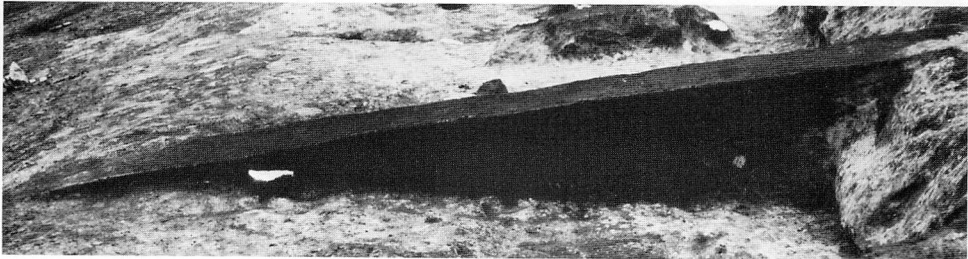
写真图版 II



a. D III-1・2・3 住居址



b. D III-1・3 住居址(土層断面)



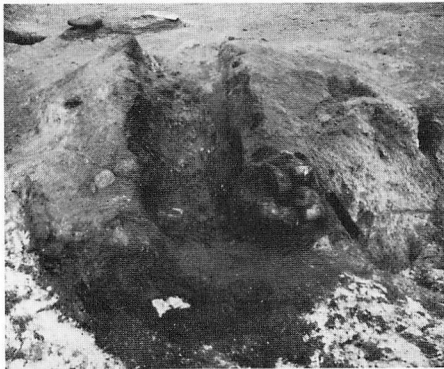
c. D III-2 住居址(土層断面)



a. D III-3 住居址カマド



b. D III-3 住居址カマド(断面)



c. D III-3 住居址カマド



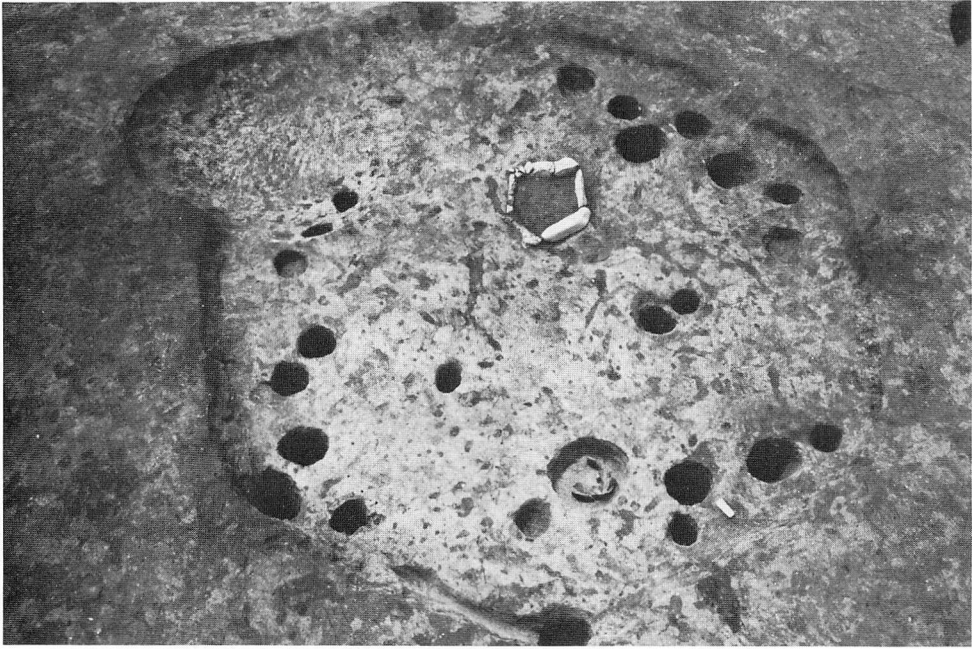
d. D III-3 住居址カマド(断面)



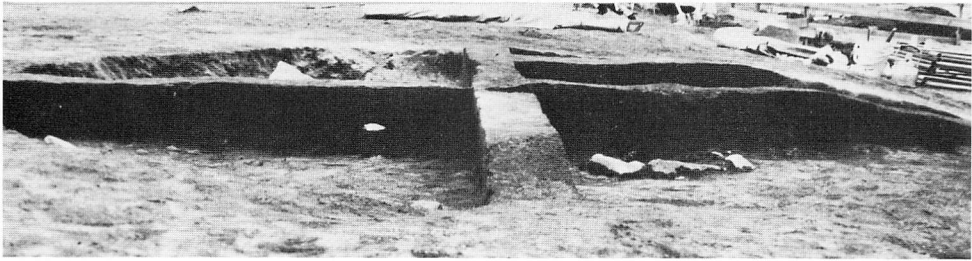
e. D III-3 住居址カマド(断面)



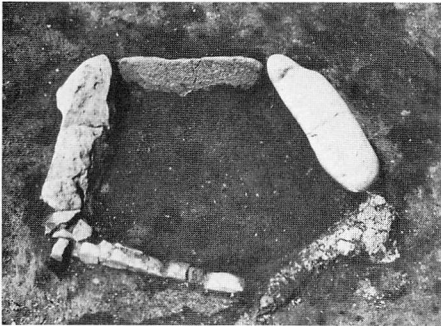
f. D III-3 住居址貯蔵穴



a. D IV - I 住居址



b. D IV - I 住居址(土層断面)



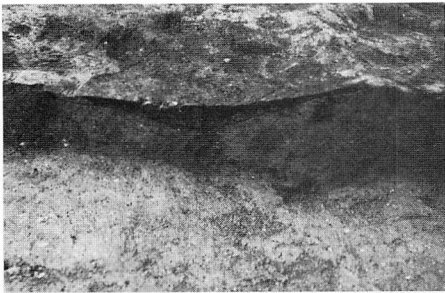
c. D IV - I 住居址炉



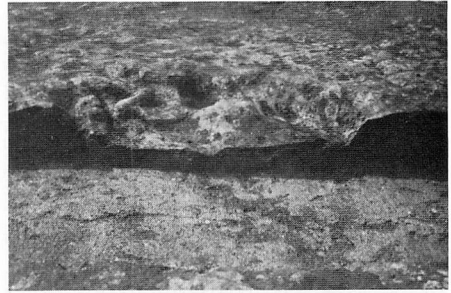
d. D IV - I 住居址埋設土器



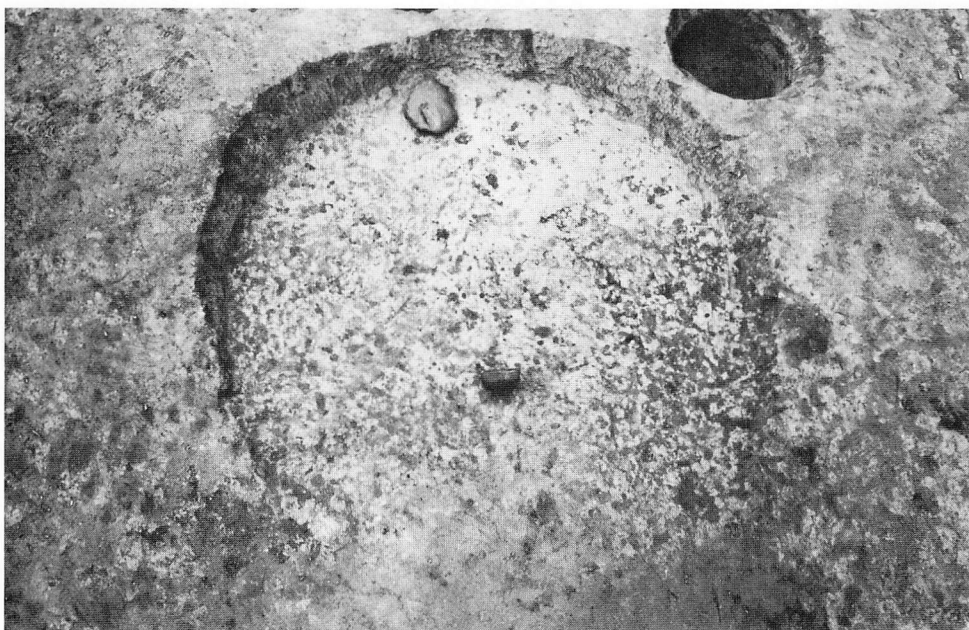
a. E IV—1·2 住居址



b. E IV—1 住居址炉(断面)



c. E IV—2 住居址炉(断面)



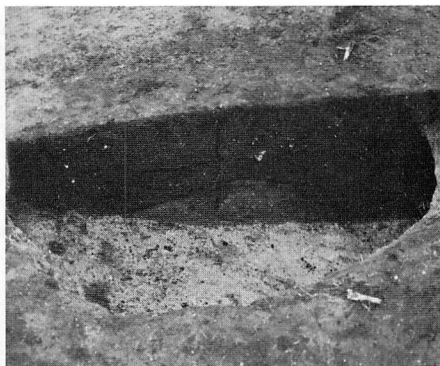
a. E IV—3 住居址状遺構



b. E IV—3 住居址状遺構(土層断面)



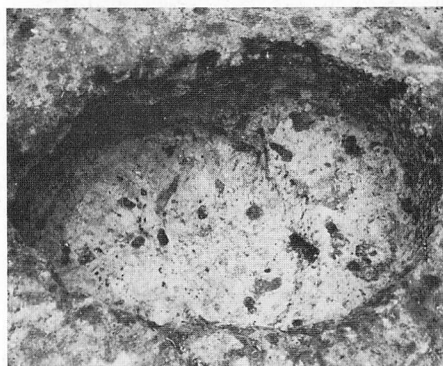
a. B II-51ピット



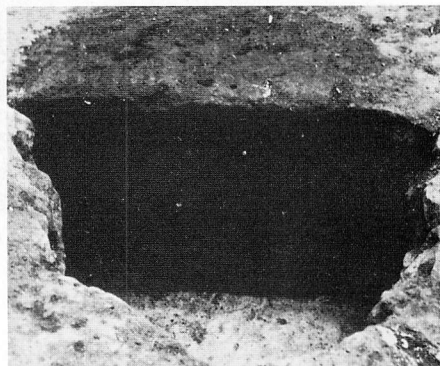
b. B II-51ピット(断面)



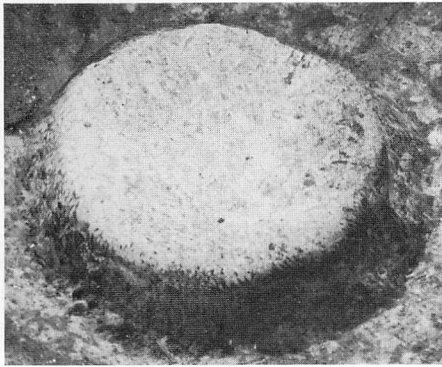
c. B II-52ピット



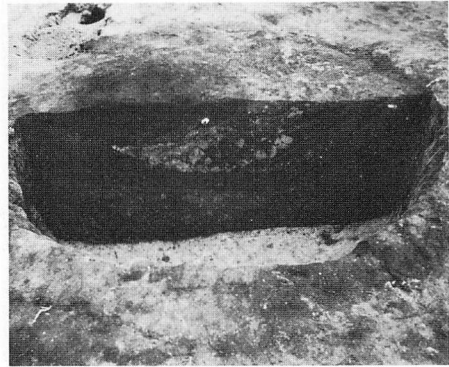
d. C I-51・52ピット



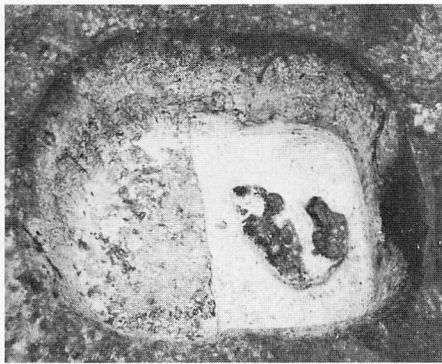
e. C I-52ピット(断面)



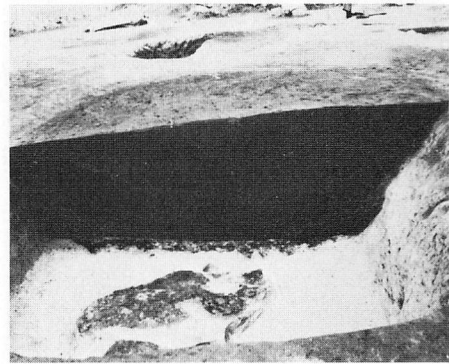
a. CI-53ピット



b. CI-53ピット(断面)



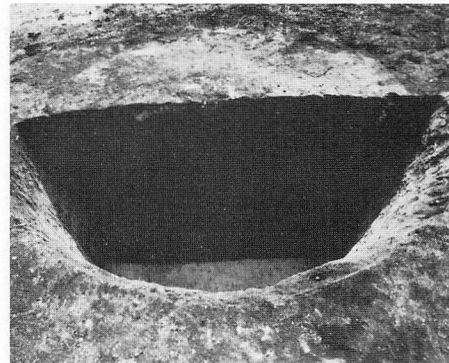
c. CI-54ピット



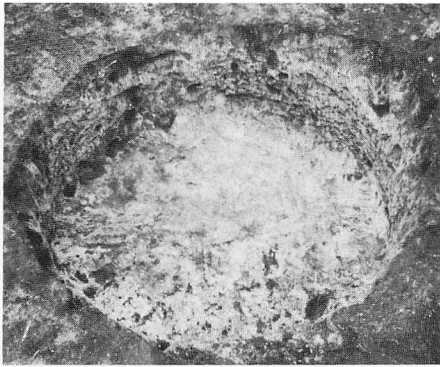
d. CI-54ピット(断面)



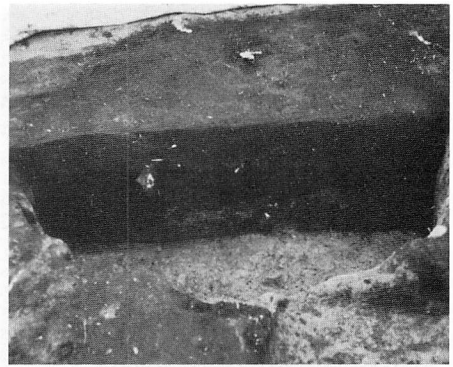
e. CI-55ピット



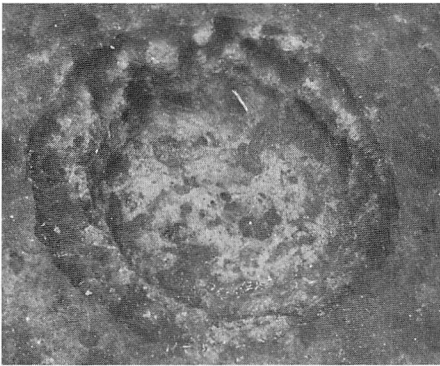
f. CI-55ピット(断面)



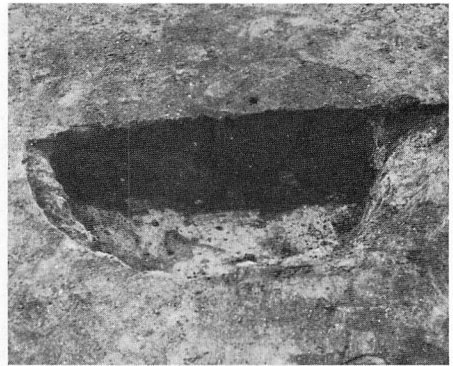
a. C II-51ピット



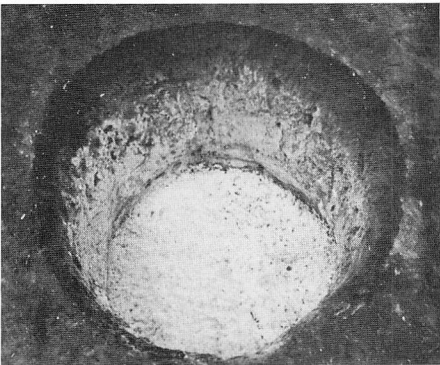
b. C II-51ピット(断面)



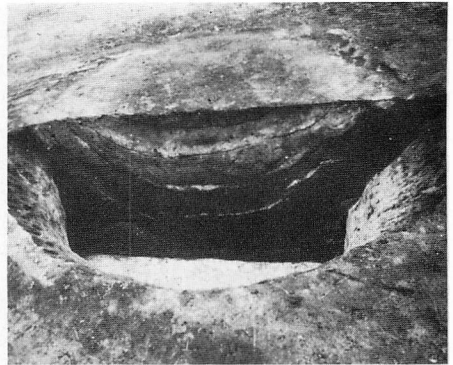
c. C II-52ピット



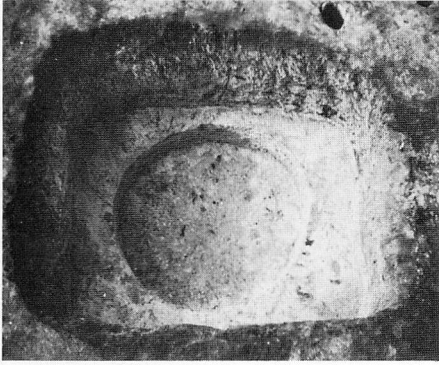
d. C II-52ピット(断面)



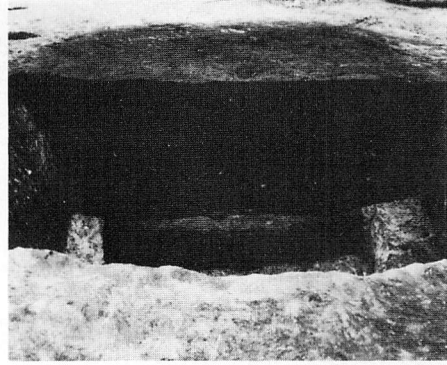
e. C II-53ピット



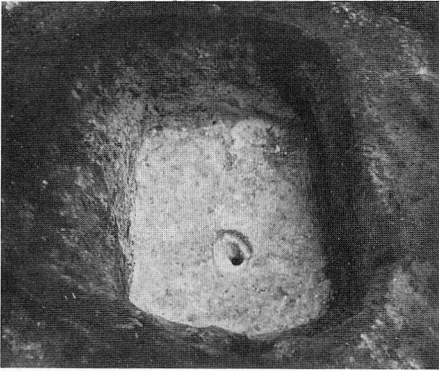
f. C II-53ピット(断面)



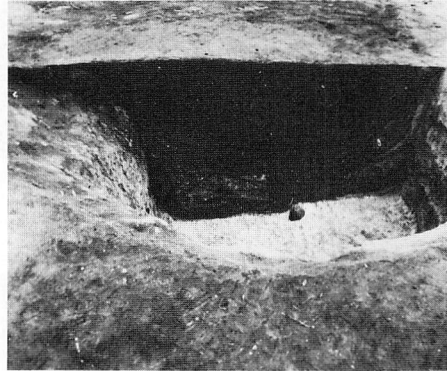
a. C II—54・55ピット.



b. C II—54ピット(断面)



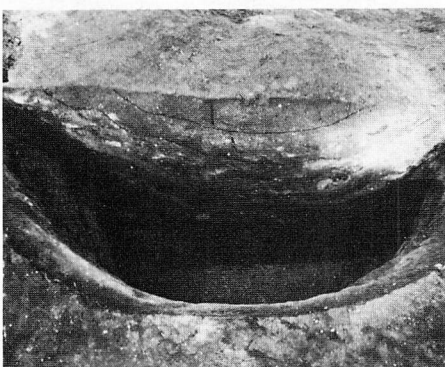
c. C II—56ピット



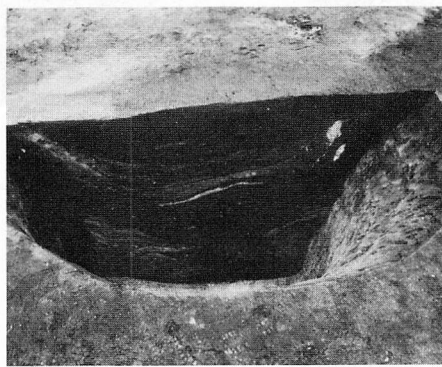
d. C II—56ピット(断面)



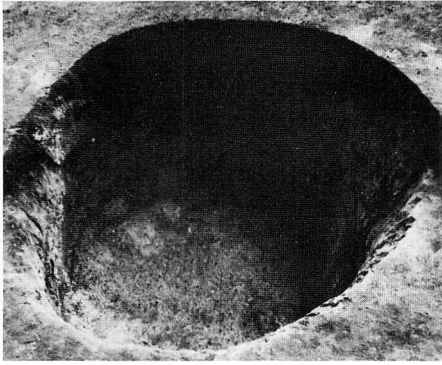
a. C II-57・58ピット



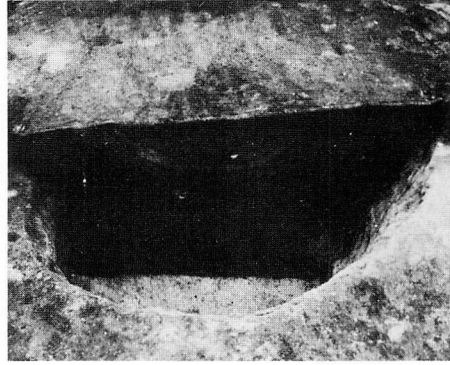
b. C II-57ピット(断面)



c. C II-58ピット(断面)



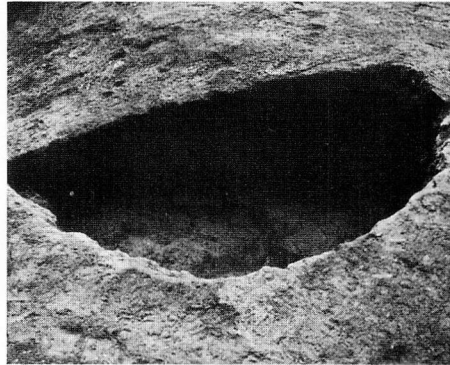
a. C II—59ピット



b. C II—59ピット(断面)



c. C III—51ピット



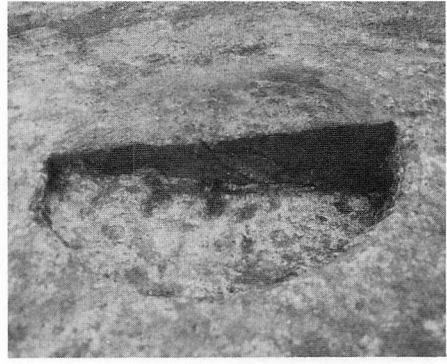
d. C III—51ピット(断面)



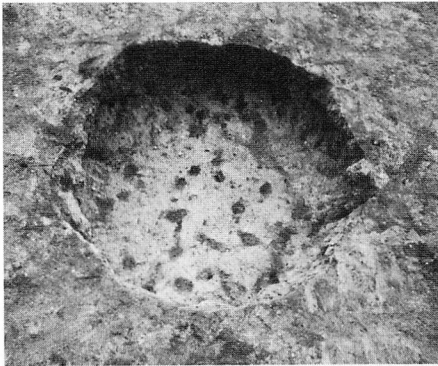
e. D II—51ピット



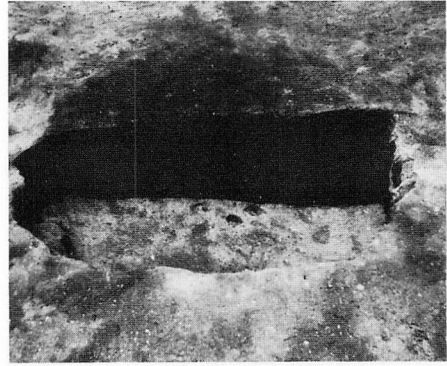
a. D III-51ピット



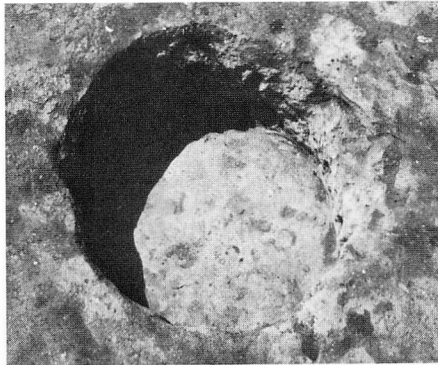
b. D III-51ピット(断面)



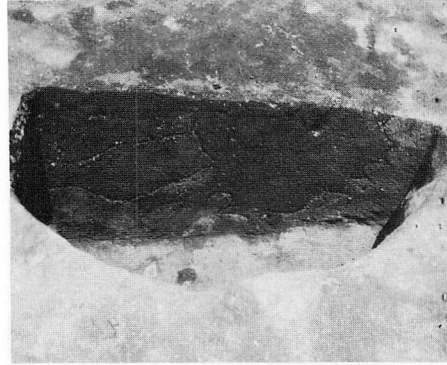
c. D III-52ピット



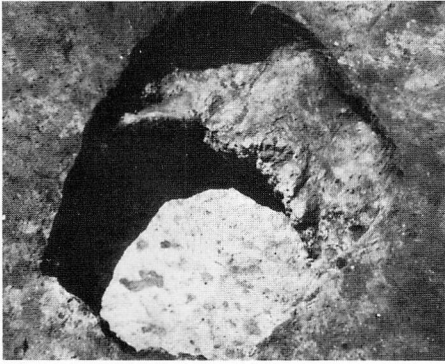
d. D III-52ピット(断面)



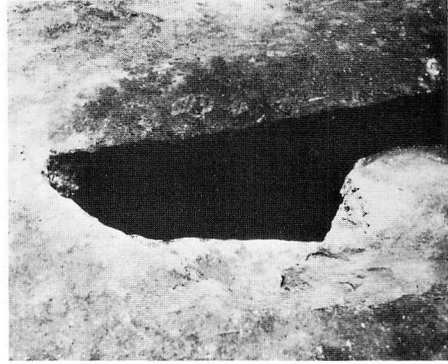
e. D III-53ピット



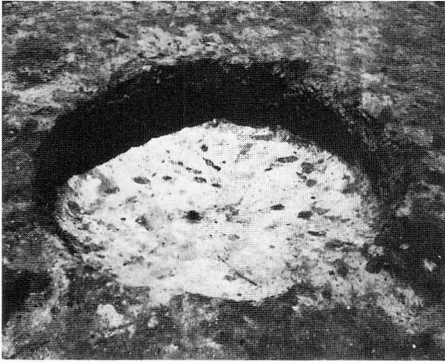
f. D III-53ピット(断面)



a. D III-54ピット



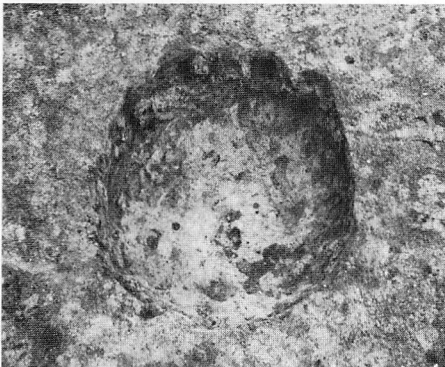
b. D III-54ピット(断面)



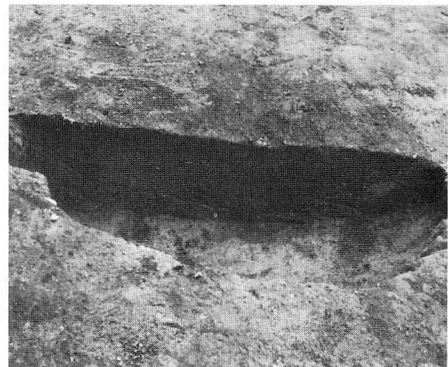
c. D III-55ピット



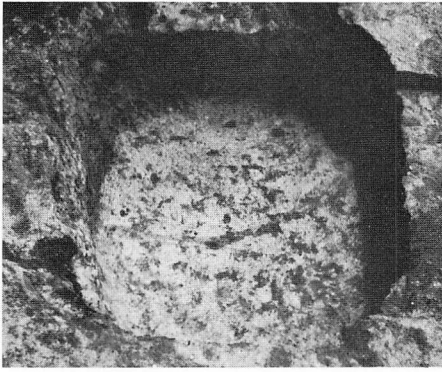
d. D III-55ピット(断面)



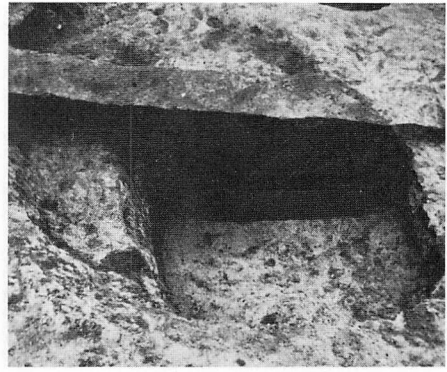
e. D III-56ピット



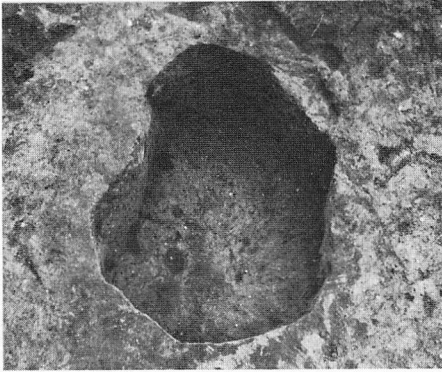
f. D III-56ピット(断面)



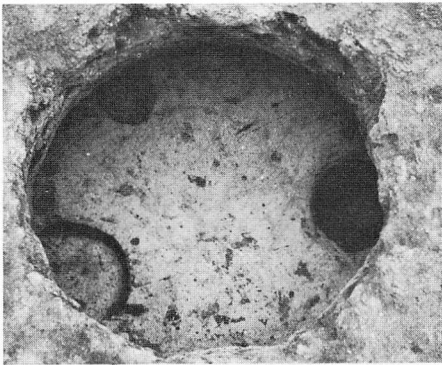
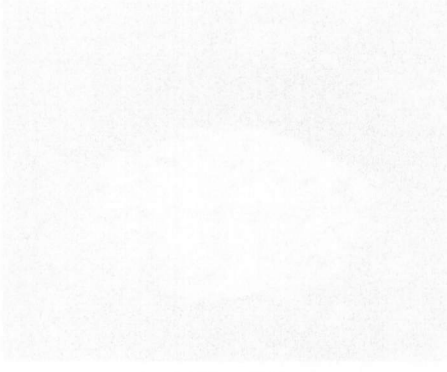
a. D IV-51ピット



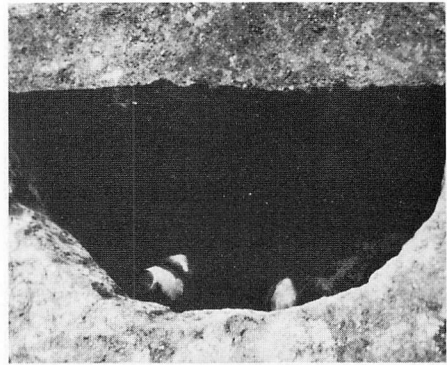
b. D IV-51ピット(断面)



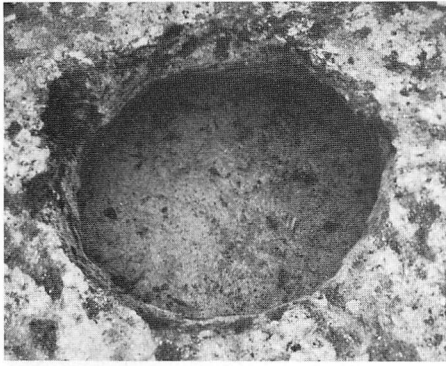
c. D IV-52ピット



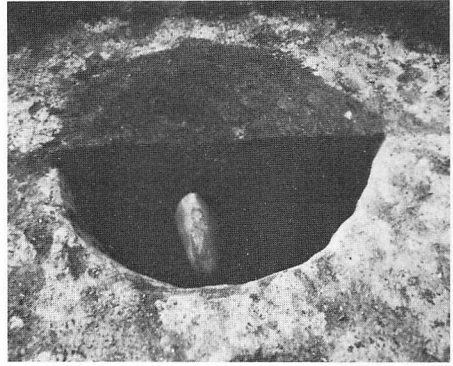
d. D IV-53ピット



e. D IV-53ピット(断面)



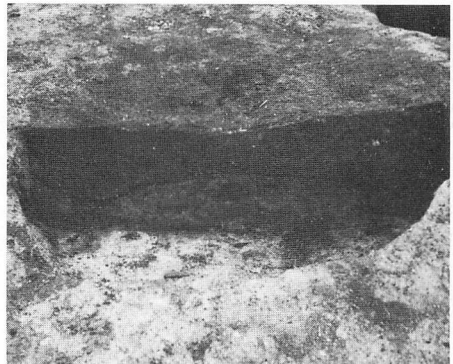
a. D IV-54ピット



b. D IV-54ピット(断面)



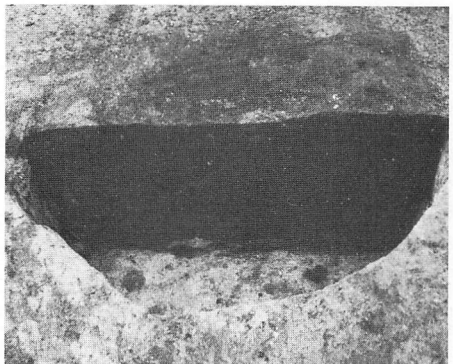
c. D IV-55ピット



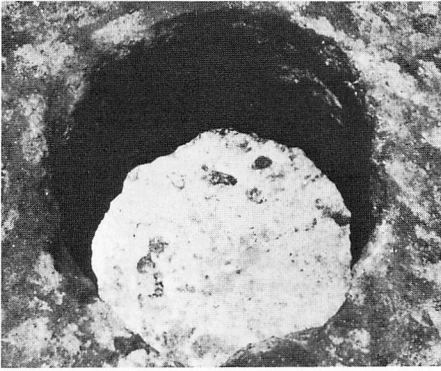
d. D IV-55ピット(断面)



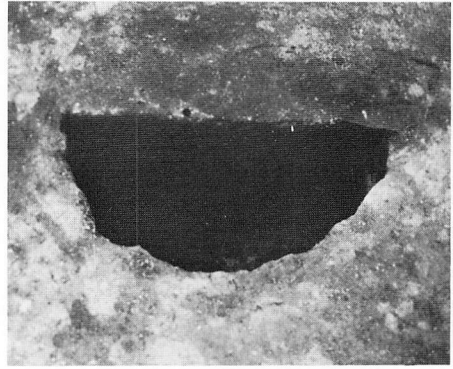
e. D IV-56ピット



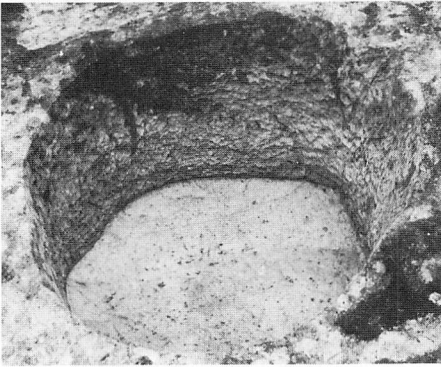
f. D IV-56ピット(断面)



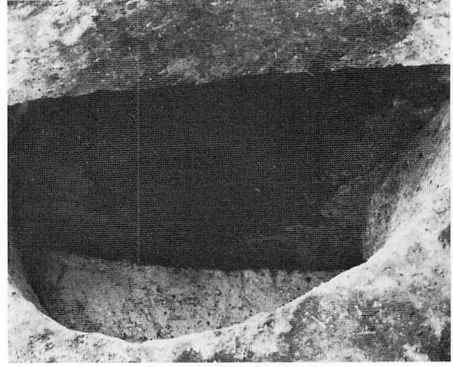
a. D IV—57ピット



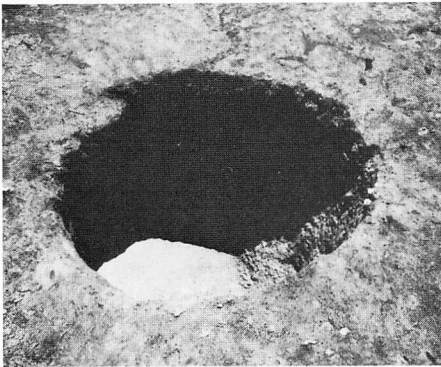
b. D IV—57ピット(断面)



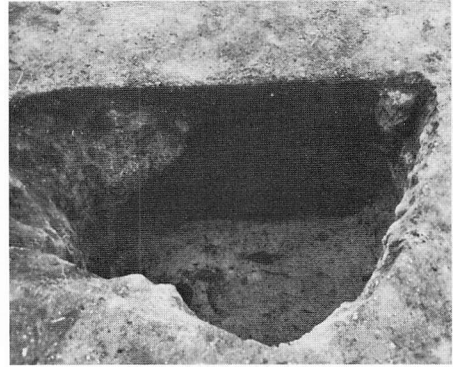
c. E III—51ピット



d. E III—51ピット(断面)



e. E IV—51ピット



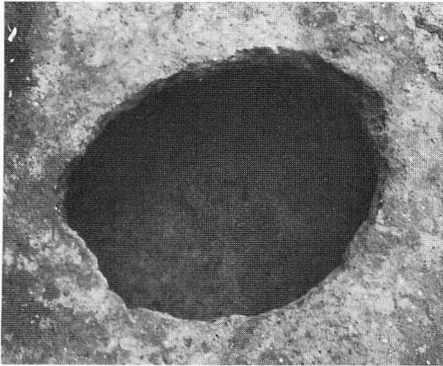
f. E IV—51ピット(断面)



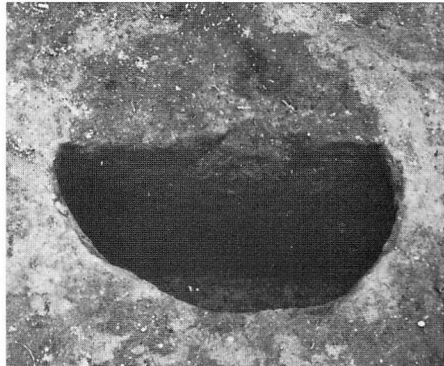
a. E IV-52ピット



b. E IV-52ピット(土器出土状況)



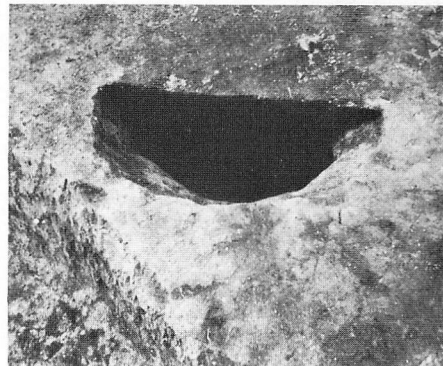
c. E IV-53ピット



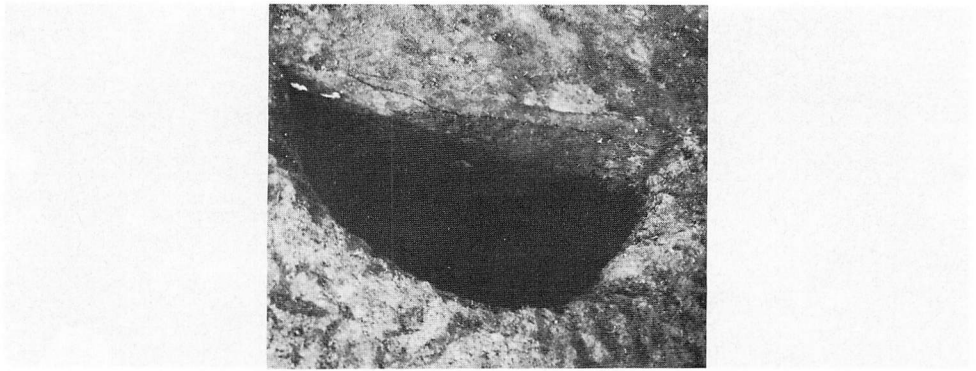
d. E IV-53ピット(断面)



e. E IV-54ピット



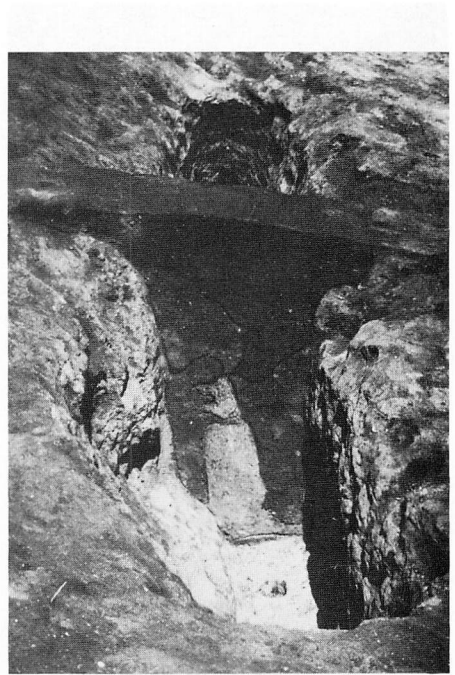
f. E IV-54ピット(断面)



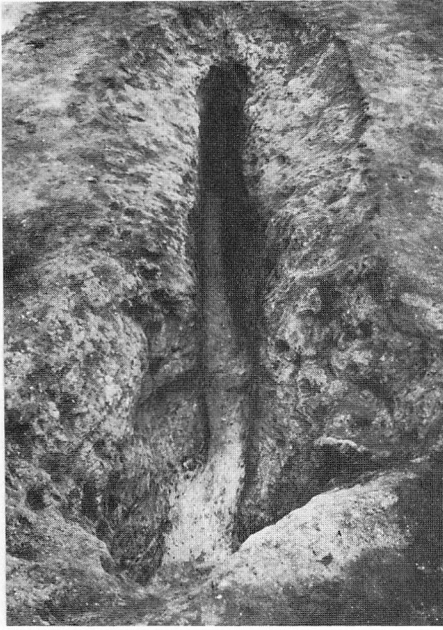
a. F IV-51ピット(断面)



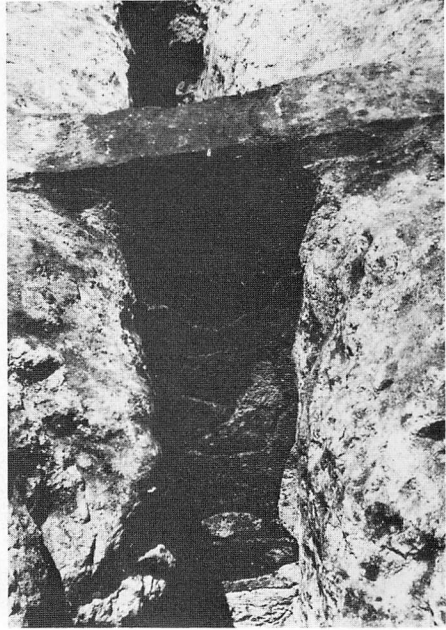
b. C II-101陥し穴状遺構



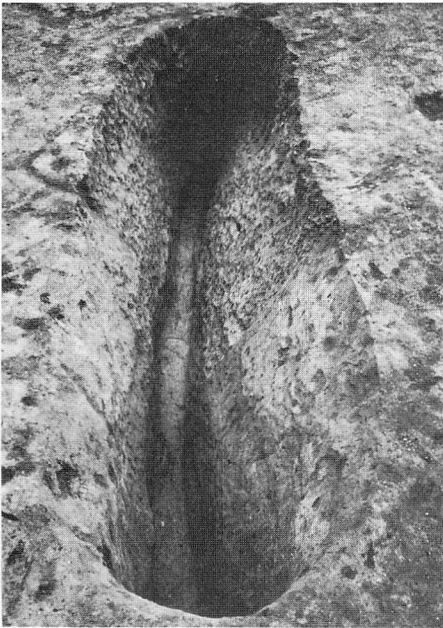
c. C II-101陥し穴状遺構(断面)



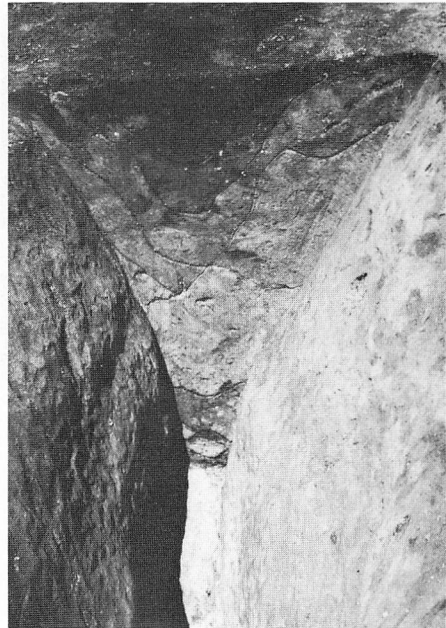
a. D III-101 陥し穴状遺構



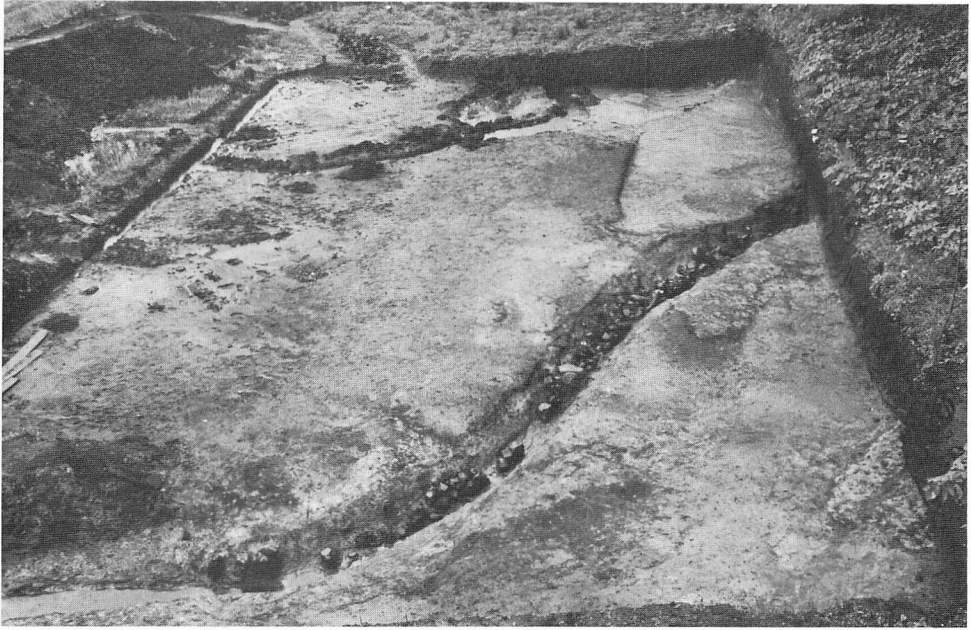
b. D III-101 陥し穴状遺構(断面)



c. E IV-101 陥し穴状遺構



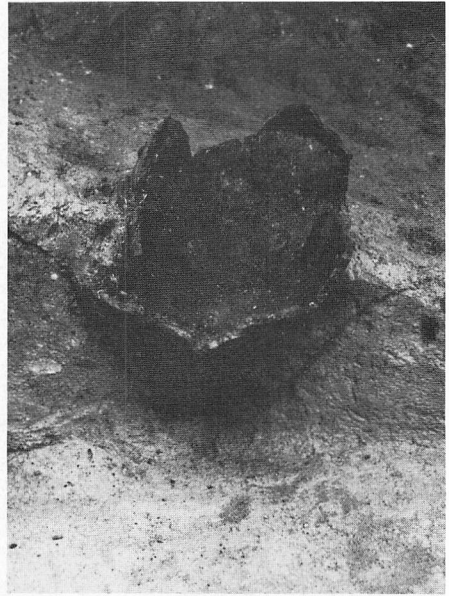
d. E IV-101 陥し穴状遺構(断面)



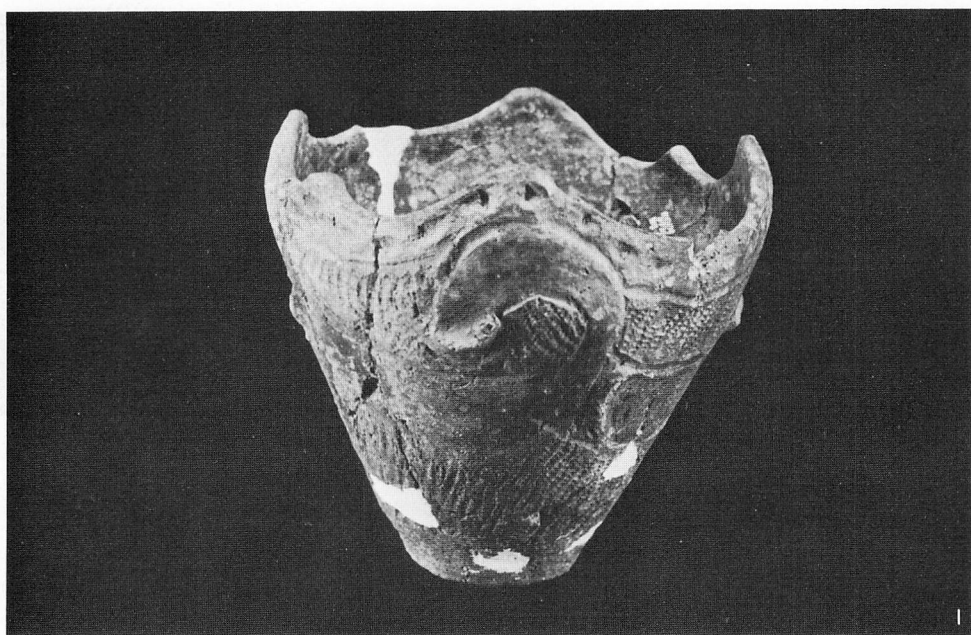
a. A II—151溝



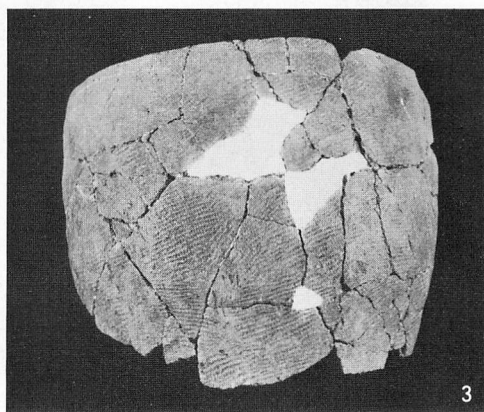
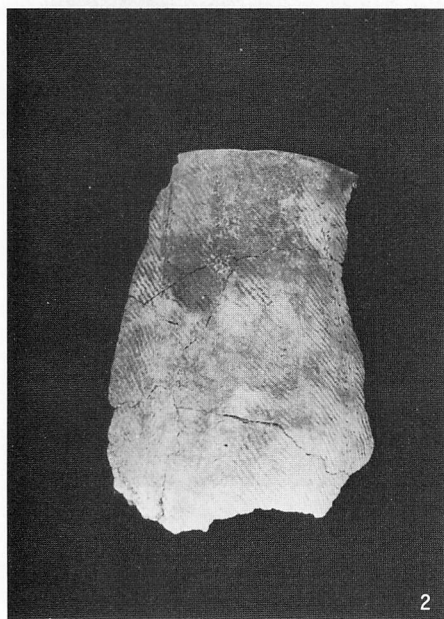
b. A II—151溝(断面)



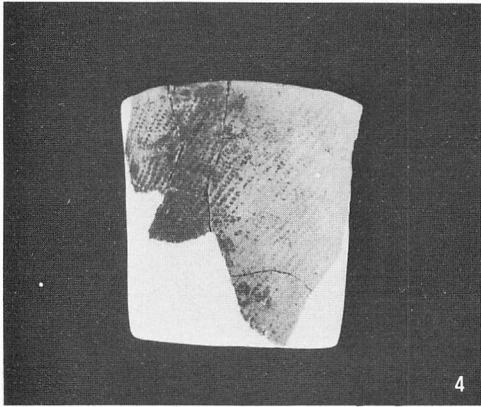
c. D IV—151埋葬



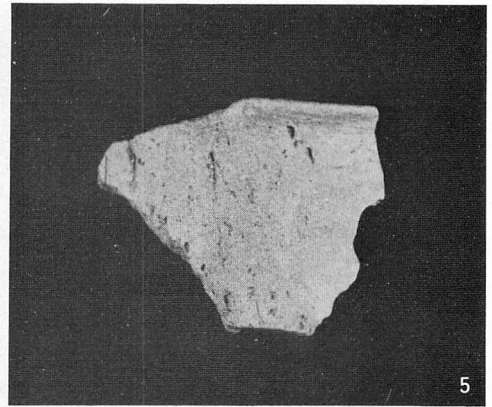
B II - 3 住居址(1 ~ 3)



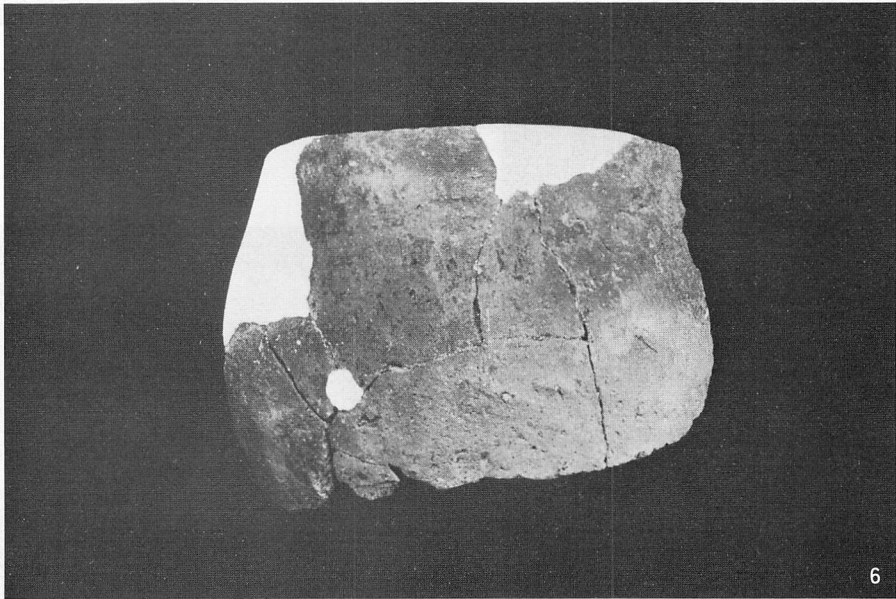
写真図版 32 遺構内の出土遺物(1)



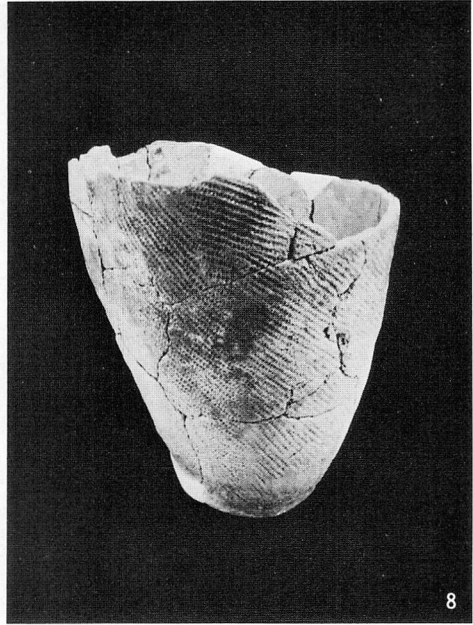
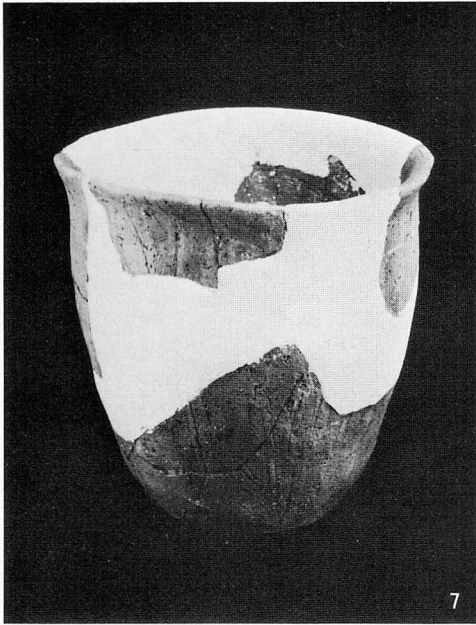
B II - 5 住居址(4)



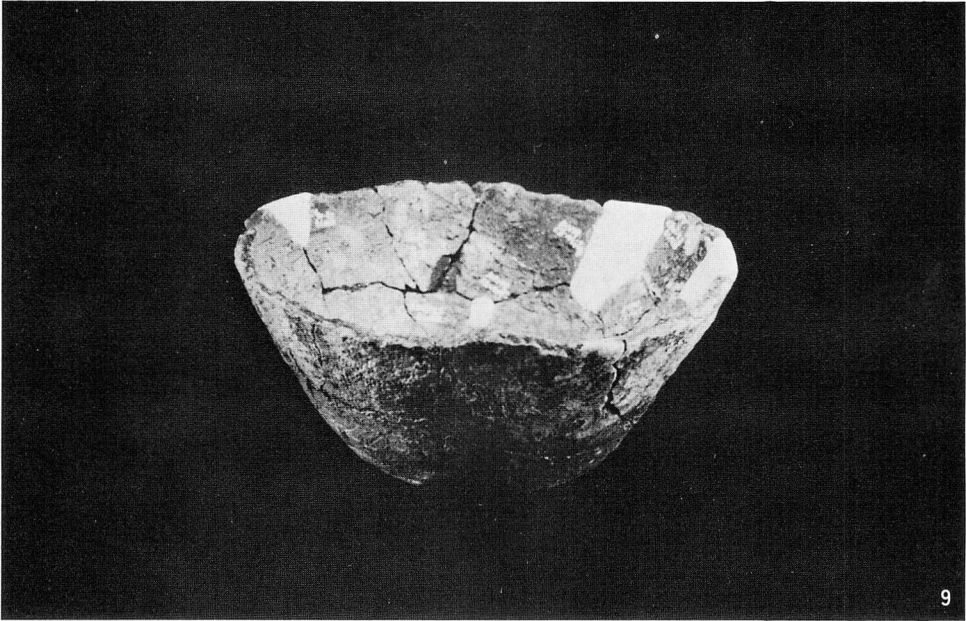
D III - 2 住居址(5)



D III - 3 住居址(6 ~ 7)



D IV-1 住居址(8)



C II-56ピット(9)



10

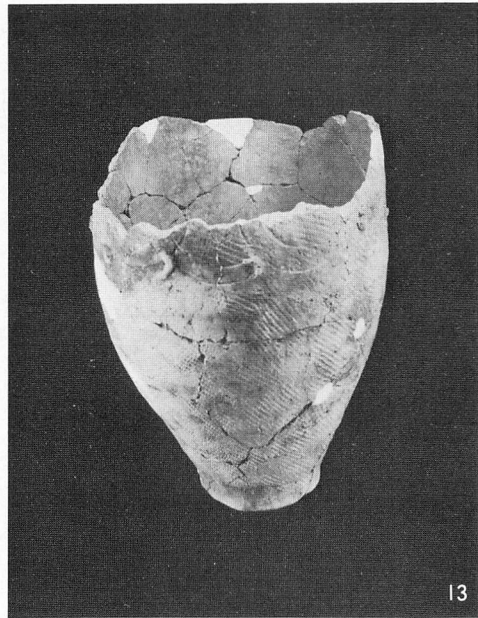
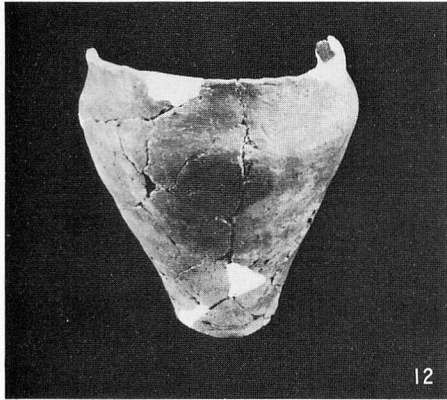
D IV—53ピット(10)



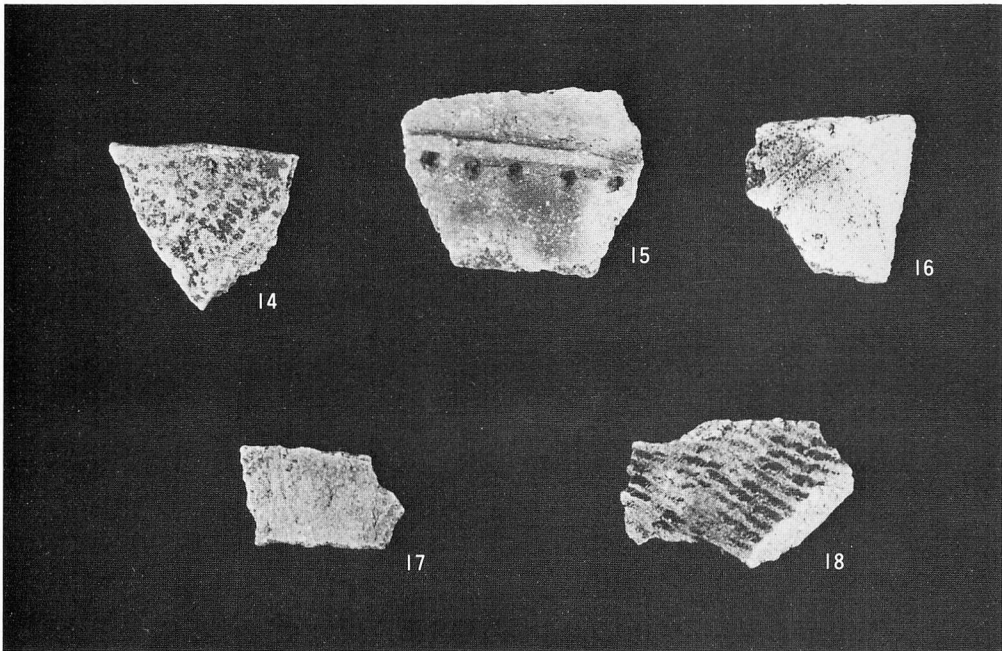
11

E IV—52ピット(11~12)

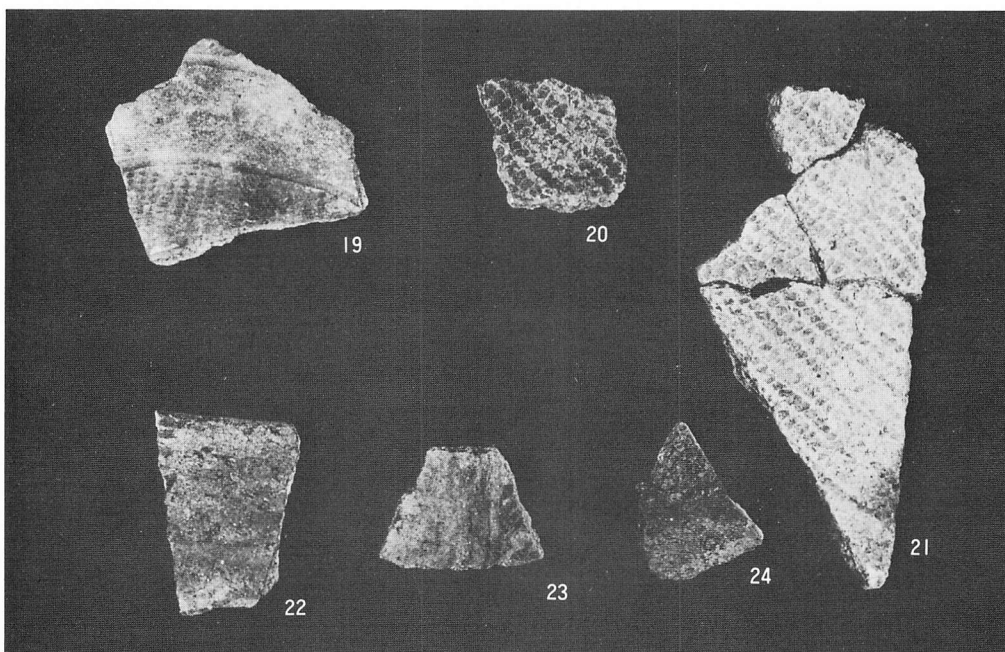
写真図版 35 遺構内の出土遺物(4)



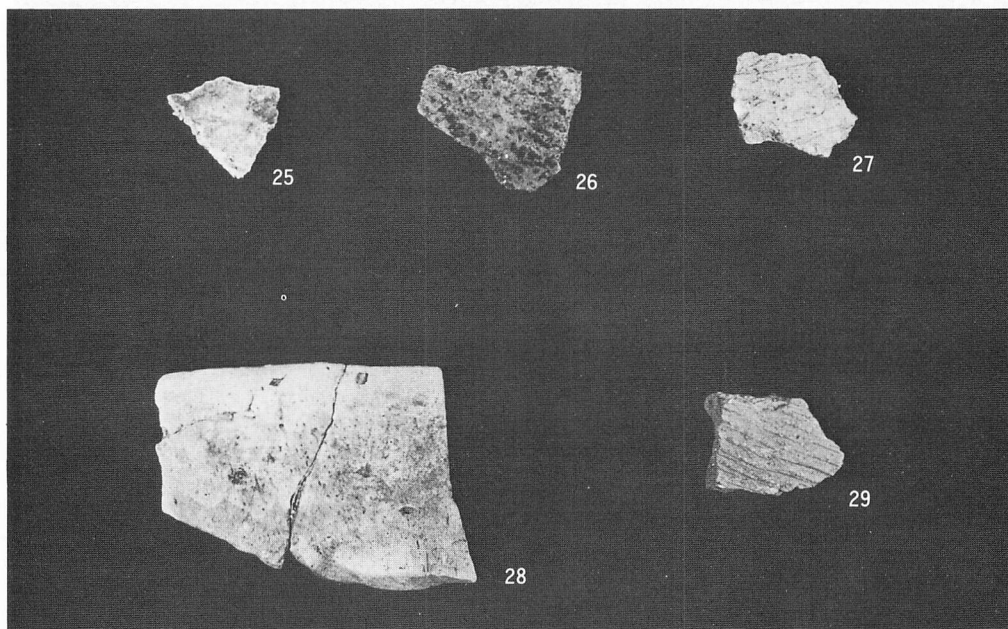
D IV-151埋設土器遺構



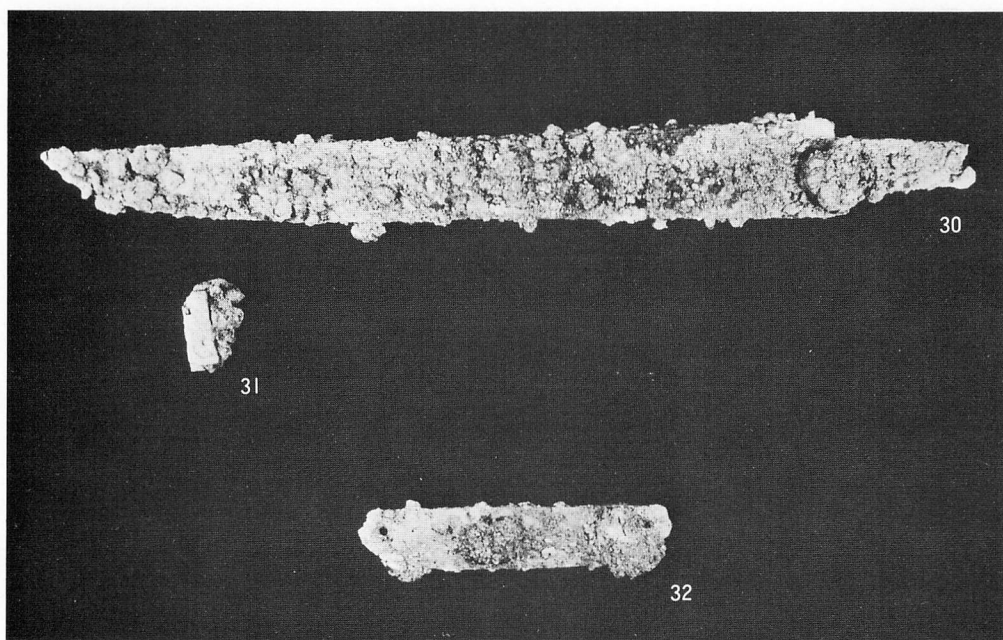
B II-2住居址(14~18)



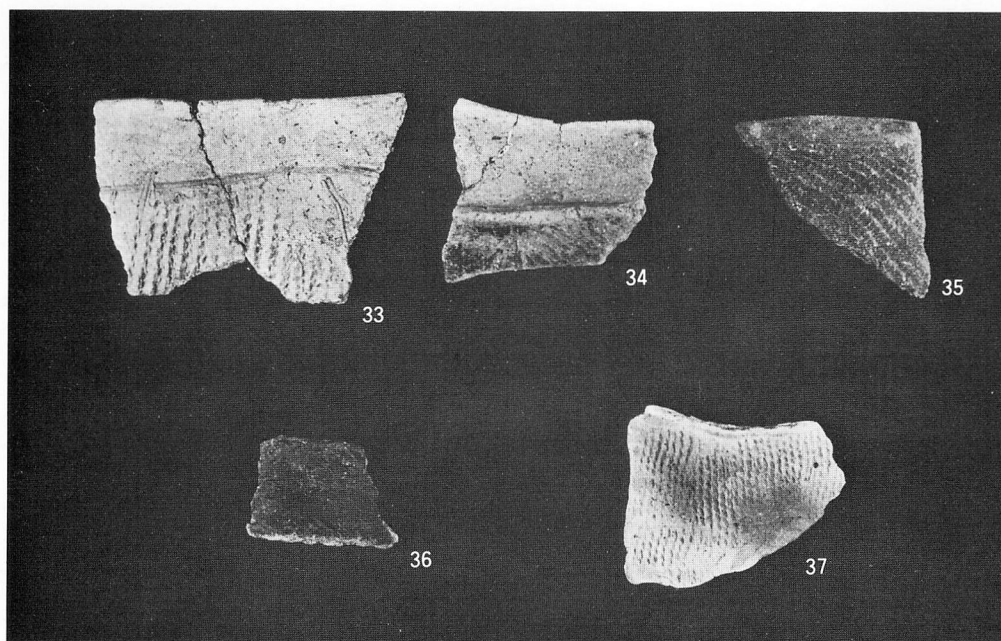
B II-3 住居址(19~21) ・ B II-5 住居址(22~24)



C II-1 住居址(25) ・ C II-2 住居址(26~27) ・ D III-1 住居址(28) ・ D III-2 住居址(29)

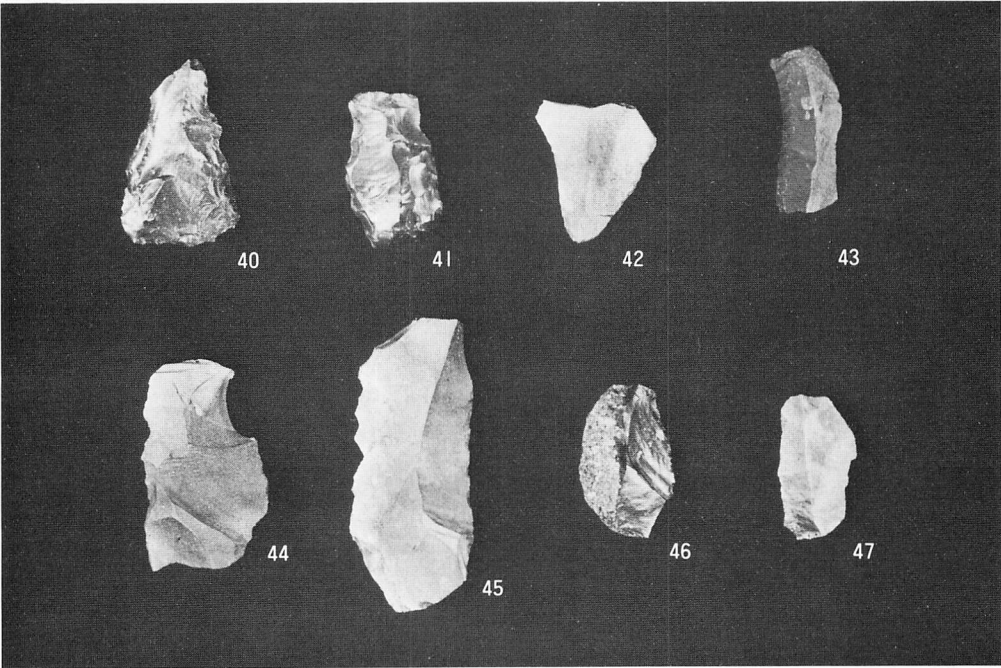
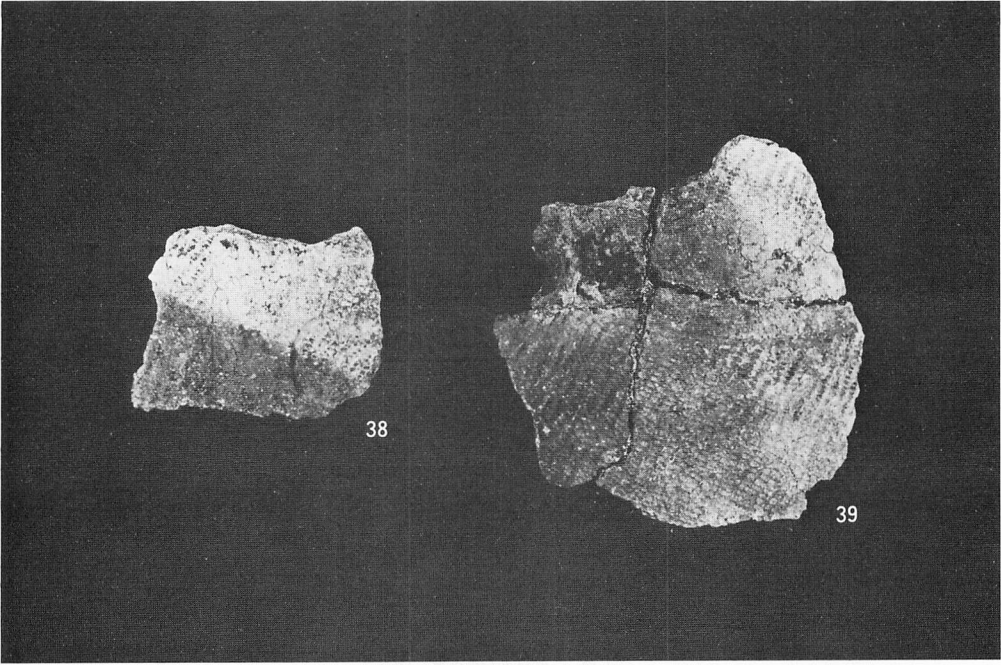


D III - 3 住居址(30~32)

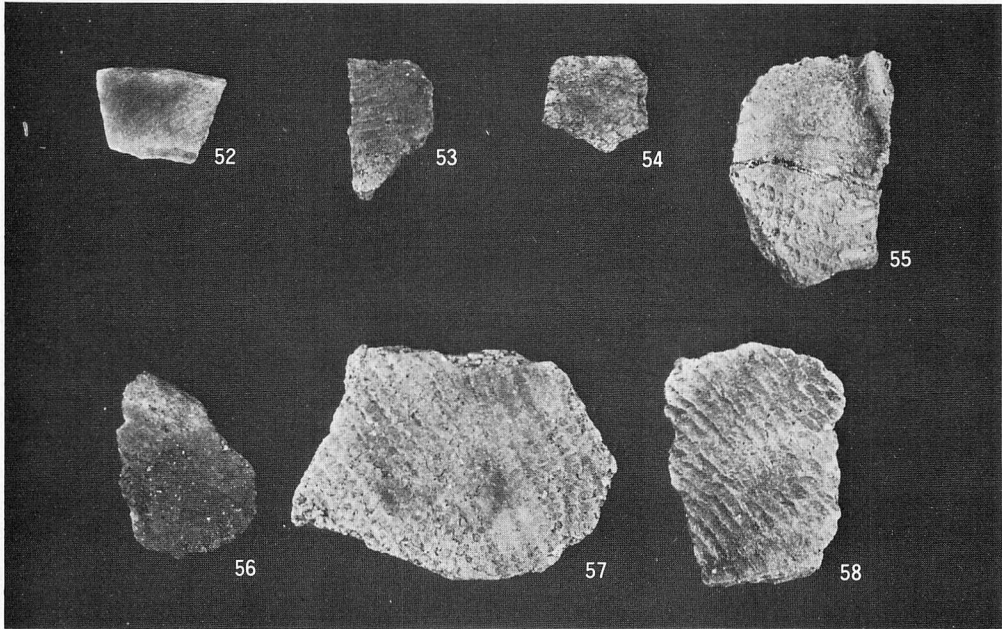
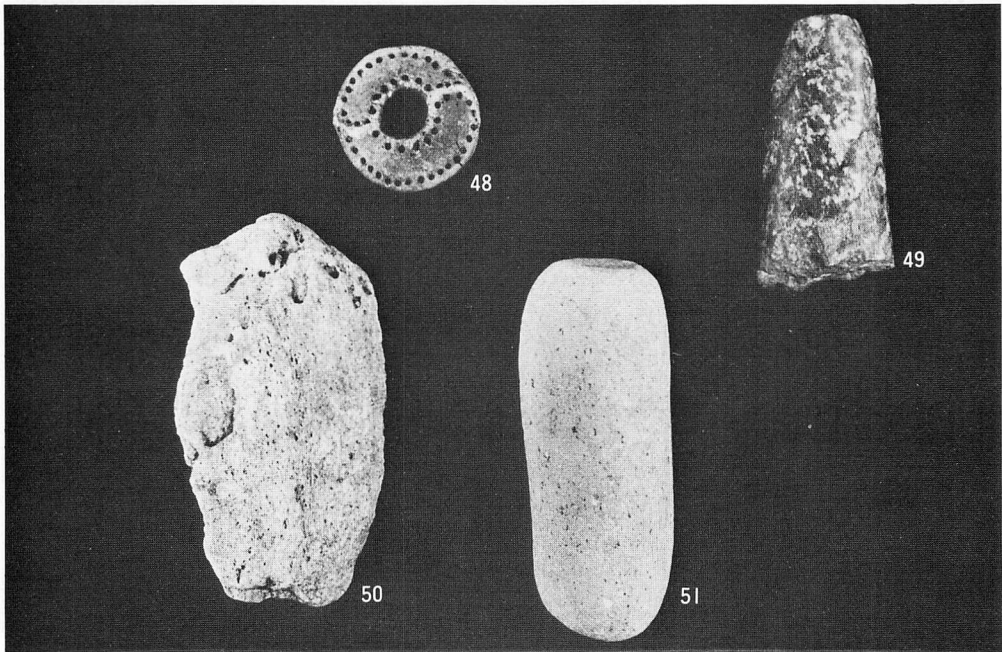


D IV - I 住居址(33~51)

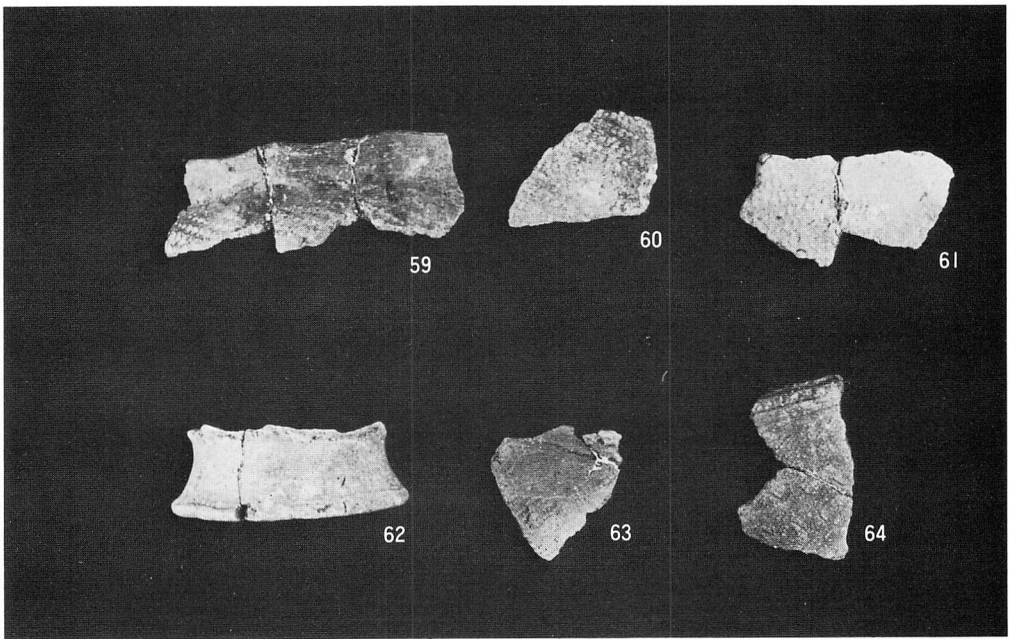
写真図版 38 遺構内の出土遺物(7)



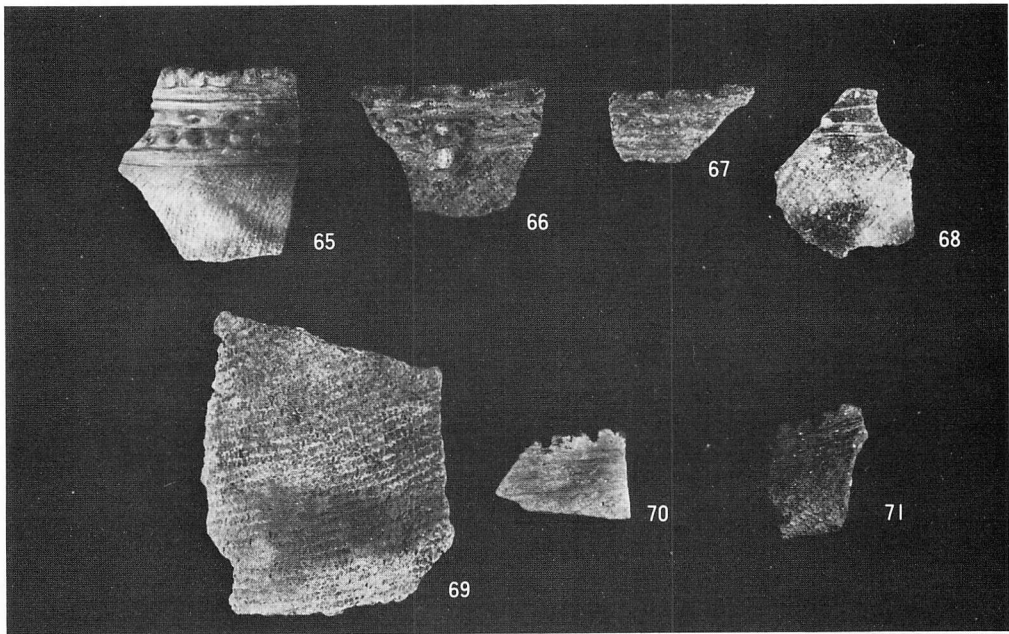
写真図版 39 遺構内の出土遺物(8)



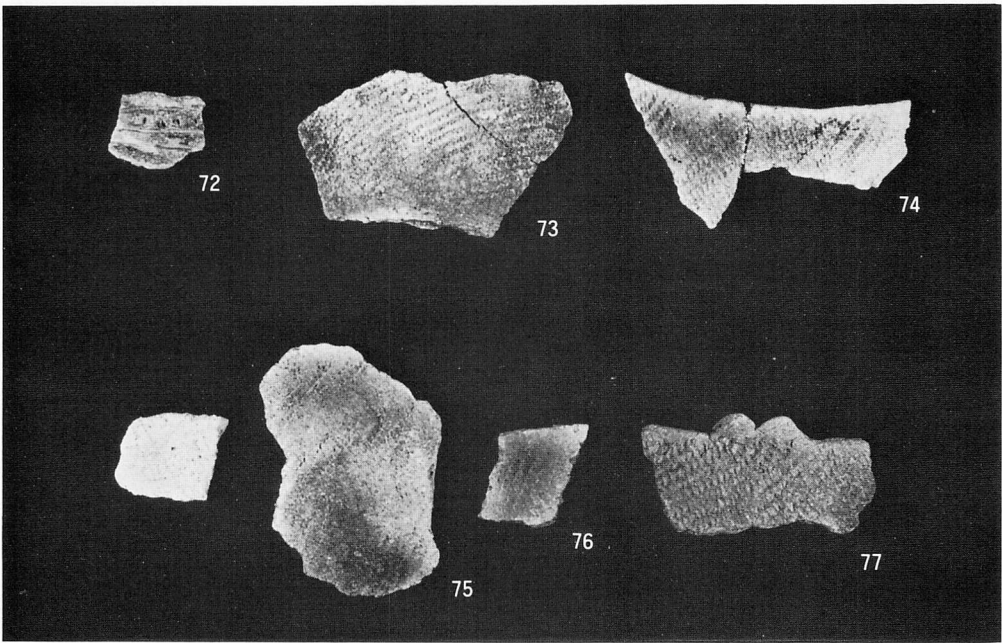
E IV-3 竪穴状遺構(52~54) ・ B II-51ピット(55) ・ B II-52ピット(56~58)



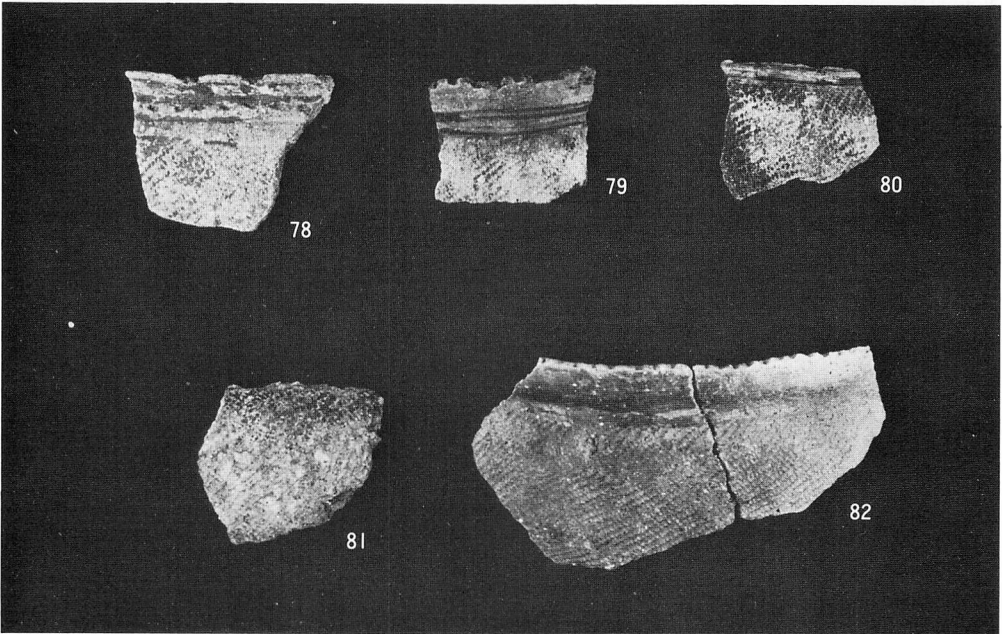
C I—52ピット(59~61) ・ C I—53ピット(62~63) ・ C I—54ピット(64)



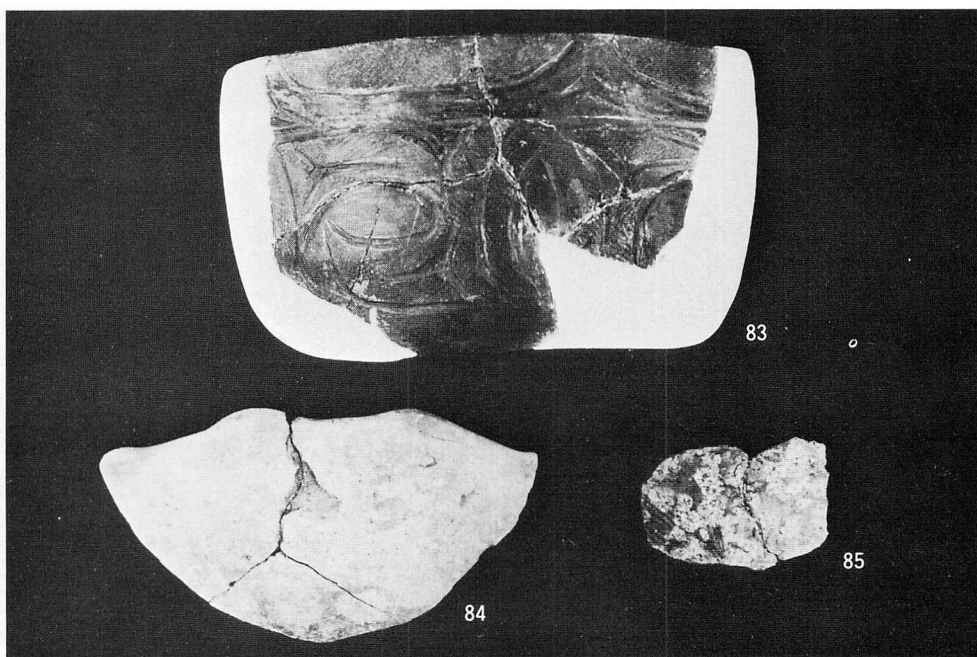
C I—55ピット(65~73)



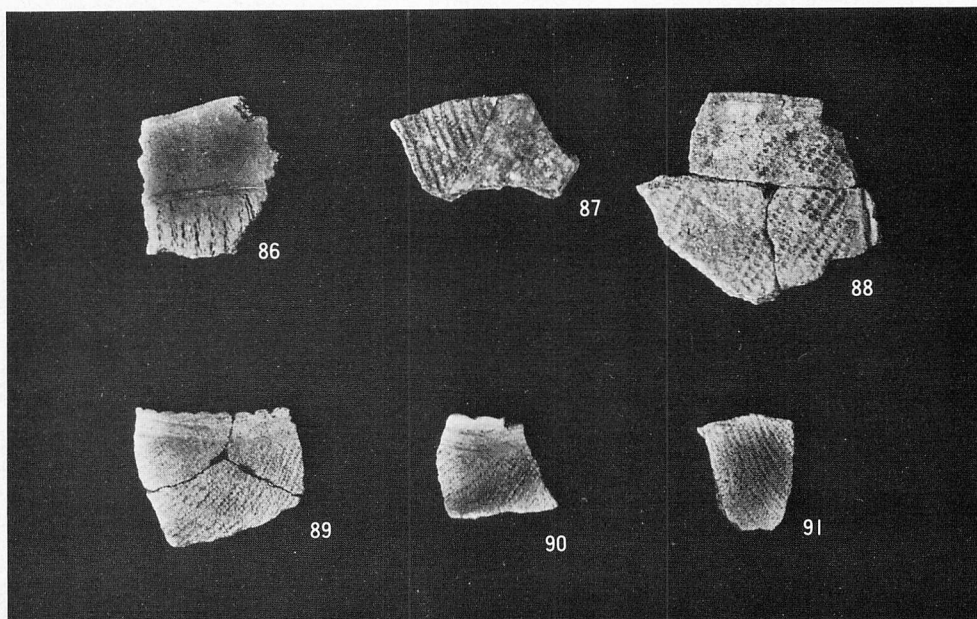
C II—54ピット(74~81)



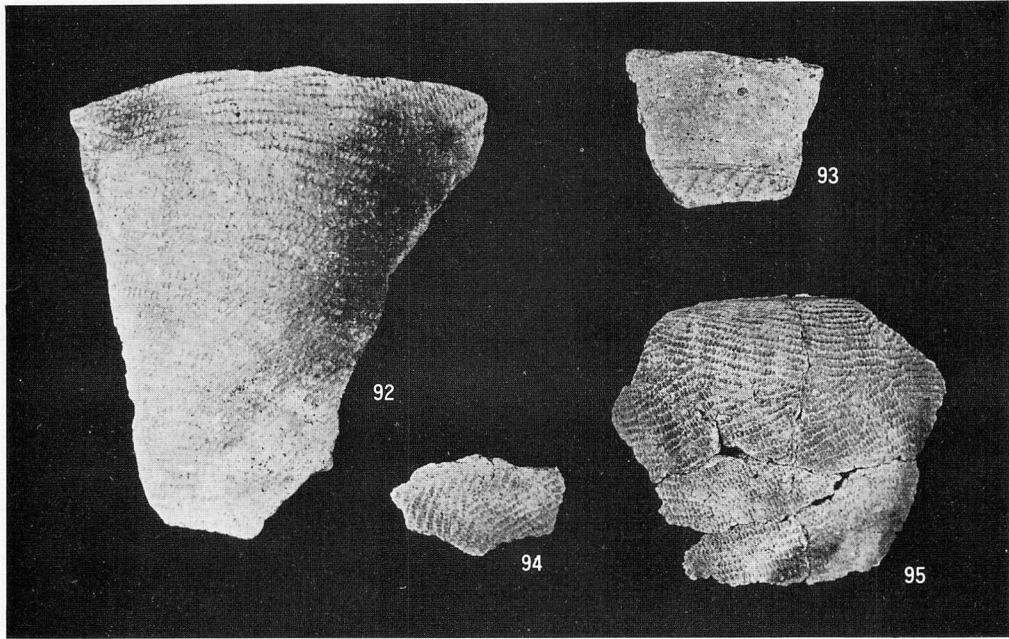
C II—56ピット(82)



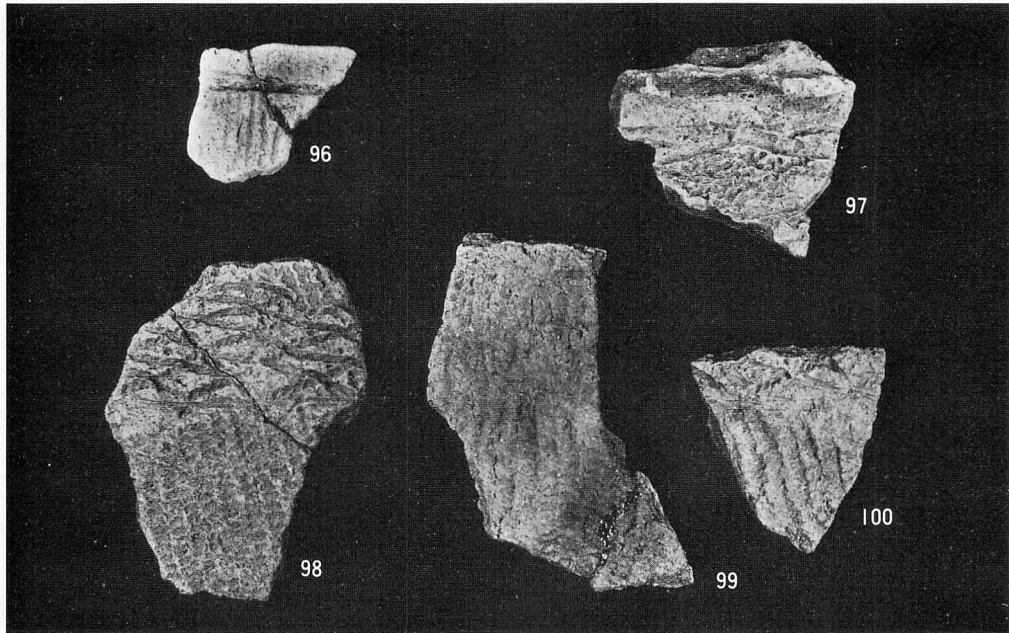
D IV-53ピット (83~85)



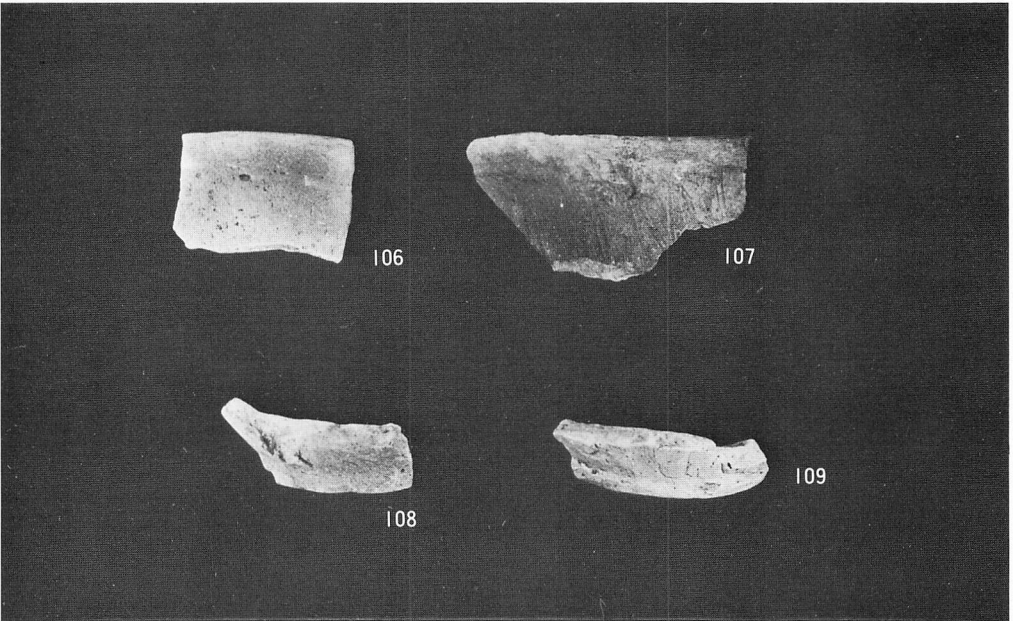
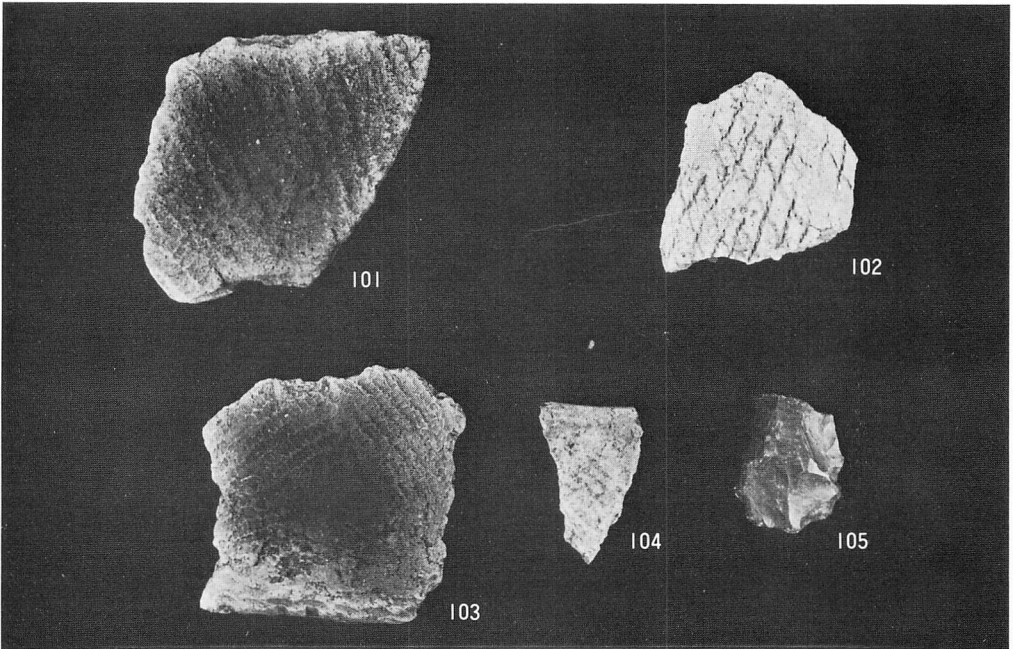
D IV-54ピット (86~91)



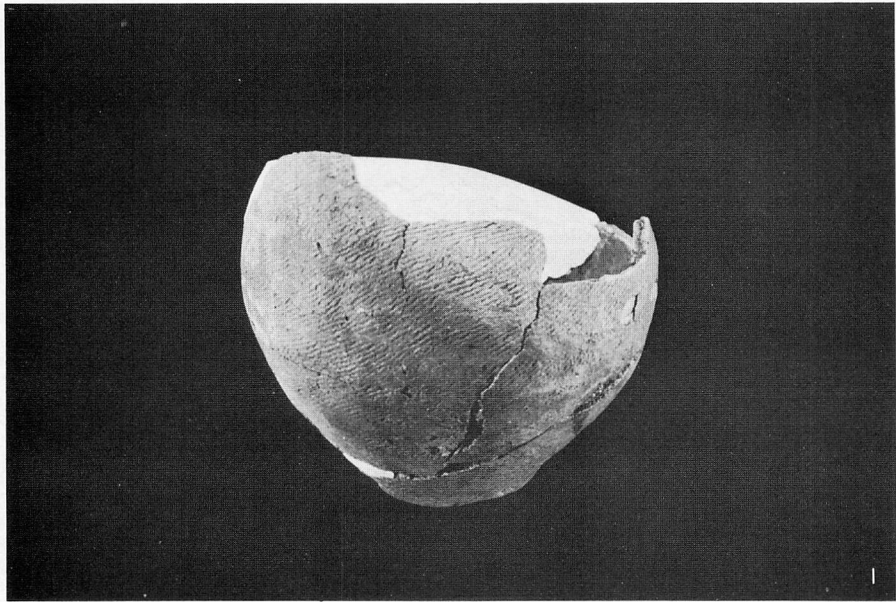
D IV—55ピット(92)・D IV—57ピット(93)・E IV—52ピット(93~95)



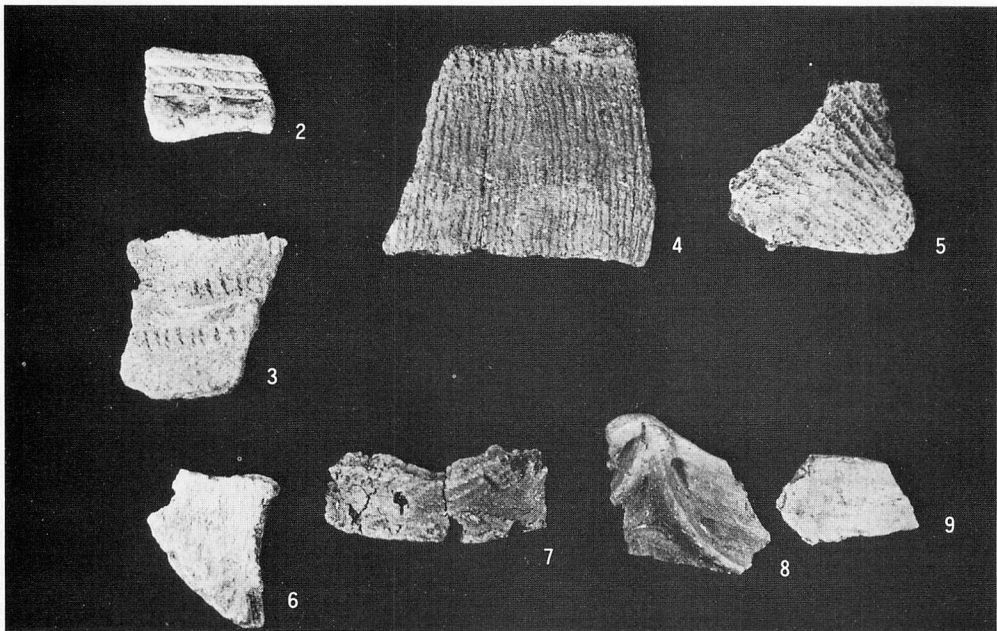
F IV—51ピット(96~105)



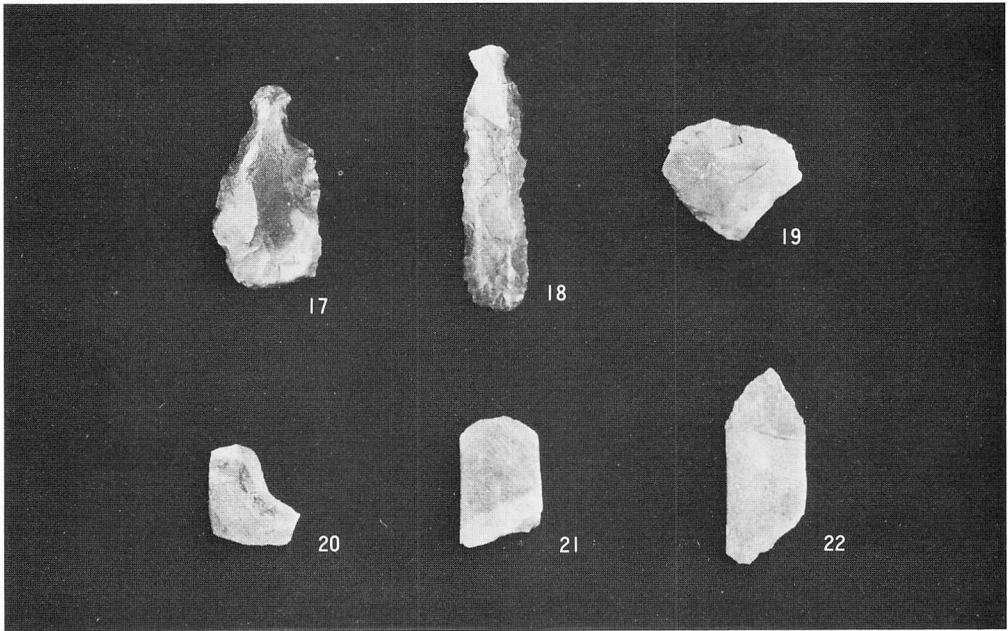
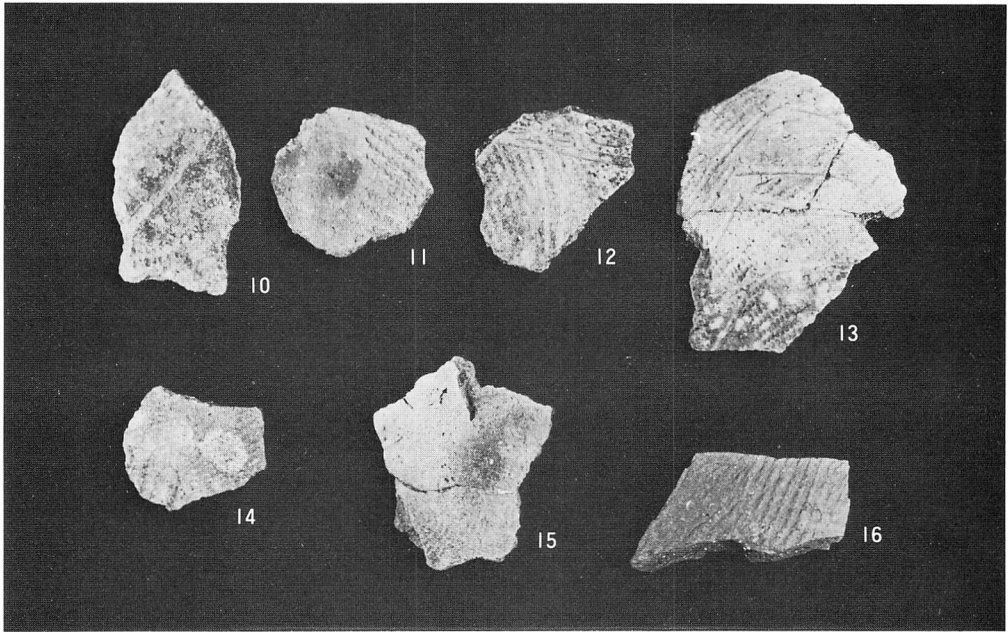
A II-151溝(106~109)



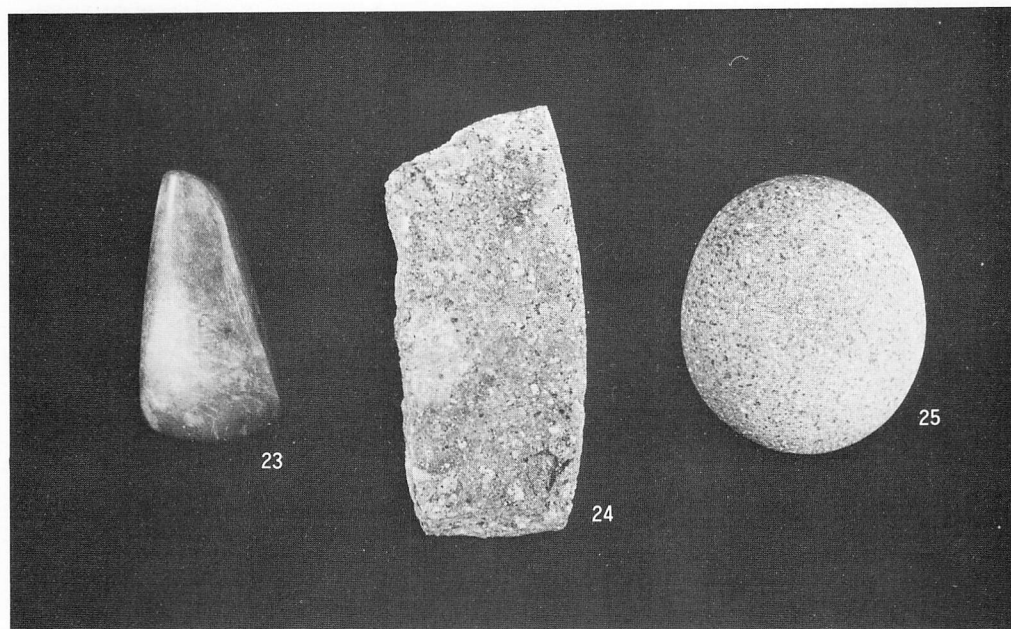
遺構外(1~25)



写真図版 46 遺構外の出土遺物(1)



写真図版 47 遺構外の出土遺物(2)



写真図版 48 遺構外の出土遺物(3)

Ⅲ. ^{うえ}上の山^{やま}X遺跡

1. 遺跡所在地 二戸郡安代町大字五日市上の山
2. 調査期間 昭和54年8月1日～8月31日
3. 調査対象面積 570m²
4. 発掘面積 570m²
5. 遺跡記号 UY-X79



図版 I 上の山 X 遺構配置図

1. 検出遺構

(1) 竪穴住居址

AⅡ区

AⅡ-1住居址

遺構 (図版2・写真図版2・3)

この住居址は、南西の段丘縁から10mほど段丘面内に入るところに位置する。北東壁が、AⅡ-101陥し穴状遺構の長軸と重複するかたちで切り込んで構築されている。規模は、475cm±×450cm±を計り、正方形を基本としている。しかし対応する南東壁と北東壁の長さの差は32cmほどあり、全体的にややゆがみ、台形に近い形状を呈する。

埋土は、上位より黒褐色土・暗褐色土が大部分を占め、壁ぎわから中心の底に向い褐色土が占める。その堆積状況は、ゆるやかな皿状である。この中の暗褐色土中には白色細粒浮石が、分級せずにブロック状に散在しており、二次的堆積の層相を呈する。

床面は、ほぼ平坦であり、5cm±の貼り床が施されている。床の中央面とカマド付近は、かなり堅いものであるが、周辺はそれに比し柔らかい。カマド付近とその東方の床面上にかけてカヤ状の炭化物が、4cm±の厚さをもって検出されている。この直下の床には特に焼成を受けている形跡は認められない。

壁高は、北東51cm±、南東54cm±、南西34cm±、北西35cm±を計り、全体に東から西にかけて低くなっている。壁は、ほぼ垂直に立ち上り、ほとんど崩壊はない。

周溝はAⅡ-101陥し穴状遺構との切り合いのため北東壁沿い北側では不明であるが、カマド部分を除き壁に沿って一周する形態である。幅10cm±~24cm±、深さ8cm±~11cm±を計る。

カマドは、南東壁の西寄りに位置しており、燃烧部から壁に沿って急に上昇する煙出し部をもつ形態である。袖部は、安山岩亜円礫を縦に置きその基部を粘土質火山灰土で固定して構築され、その高さは、35cm±を計る。カマド幅113cm±、燃烧部幅45cm±を計る。燃烧部の中央やや東寄りに柱状亜角礫が支脚として埋設され、その周囲には粗製土師器の大きな破片が散在する。燃烧部の底面は、よく焼成をうけており、深さ12cm±まで及んでいる。煙道部は全長60cm±で、約35度の角度で上昇している。天井部は、長さ35cm±、幅10cm±~19cm±の石英安山岩の亜円礫を、両袖に横たわし、両端を粘土で固定させている。これによって煙出し部と燃烧部を分けている。

床面上にP₁~P₉のピット、貼床下面にP₁₀~P₁₁のピットが検出された。この中で貯蔵穴と

みられるピットは、P₁とP₃である。P₁はカマド右側、P₂はカマド左側に位置し、それぞれ開口部径77cm±、底部径40cm±、深さ52cm±、開口部径45cm±、底部径27cm±、深さ29cm±を計る。両者とも平面形は円形でピーカー状の形態を呈する。埋土は、ともに炭化物を少量含む暗褐色土からなり、P₁には、土師器の一括土器が2個体分、P₂には、土師器破片が包含されていた。他に住居址東隅と北西壁中央付近に、他に比し大きめのP₄とP₁₁ピットがあり、それぞれ開口部径112cm±・深さ17cm±、開口部径52cm±・深さ19cm±を計る。その形態はともに播鉢状を呈する。埋土は、ともに暗褐色土である。P₄ピットの上面には十数個の礫と土師器片が散在していた。以下のピットは柱穴状の形態を呈しているが、配置から、柱穴と断定できなかった。P₂ (径21cm±・深さ21cm±)、P₅ (径26cm±・深さ18cm±)、P₆ (径42cm±・深さ10cm±)、P₇ (径22cm±・深さ14cm±)、P₈ (径16cm±・深さ17cm±)、P₉ (径14cm±・深さ17cm±)、P₁₀ (径30cm±・深さ44cm±) である。

出土遺物 (図版9、10、11-13~21・写真図版14・15・16-13~21)

出土遺物の1・2は貯蔵穴状ピット内、3・5はカマド内、4・6~20はカマド周辺部、21は埋土から得られたものである。

1・2は復元された土器で器形的には多くの類例がない。3は口縁部から底部まで、4~12は口縁部、13~20は底部付近でいずれも破片である。

1~16は甕で、巻上げによる形成の痕が多くのものに観察され、器壁外面には荒いヘラケズリ、内面にはナデが施されている。甕の口縁部については、1~3・6~10は粗雑な手法によって外反するようにつまみ出されており、細かい凹凸が顕著である。一方これらに比し、4・5のみが丁寧に形成され横ナデによって調整されている。

11・12は体部から直線的に口縁まで形成されており、さらにはヘラケズリ調整の上に化粧するかの如く粘土膜が貼り付けられている。

13~16は甕の底部付近の破片で、調整は口縁部破片と同様で、器壁外面にヘラケズリ、内面にナデが施されている。14の底面には木葉痕がある。

19・20は坏の底部であり、ロクロ使用痕がある。両者とも内面には丁寧なミガキが施されており、20にはさらに黒色処理が施されている。

21は埋土から出土したもので、長径方向の先端と側面に敲打痕、平坦面には研磨痕があり、石質は安山岩である。

この住居址は、以上の出土遺物や住居構築状況からみて平安時代に位置づけられるものと考えられる。

B I 区

B I - 1 住居址

遺 構 (図版 3 - a ・写真図版 4 ・ 5)

この住居址は、段丘縁に位置する。段丘崖の浸蝕後退により当住居址の南方部は消失しており、正確な規模・形状は不明である。測定可能に於いて515cm土×残存部400cm土を計り、復元予想形状は、やや菱形にゆがむ隅丸正方形又は隅丸長方形である。

埋土は、炭化物を含む暗褐色土の単一な層によって構成されている。床面はほぼ平坦であり、部分的に堅いが全体として柔らかい面となっている。中央やや南方に地床炉とみられる現地性焼土があり、43cm土×35cm土のほぼ円形に広がり8cm土の深さまで焼成が及んでいる。この周囲に粒径15cm土～20cm土の垂円礫が散在し、これらは、炉やその他の配石と想定できる状態にはない。柱穴は検出されていない。壁高は、北壁で50cm土を計り、垂直に近い状態で立ち上がっている。東西の壁は、浸蝕により南方につれ低くなり消失している。

当住居址内北東隅に、B I - 51ピットが構築されており、切り合いによる土色的区別が明確にみられなかったことにより、この住居址に関連するもので同時期又は大差のない時期の構築とみられる。詳細については、ピットの項で記述する。

出土遺物 (図版12～15・写真図版17～19)

出土遺物の25は、床面から、23・24・26～28は、埋土から得られた。

25は、粗製の鉢形土器である。口縁部と体部は、隆帯によって区画され、口縁部は、2対4個の波状口縁を有し無文である。体部は、単節斜縄文が施文されており、器表上半にはススが附着している。23・24・28は、粗製深鉢形土器である。いずれも底部が欠損している。地文に単節斜縄文が施されており、口唇部に磨消しが巡らされている。23・28の体部は、やや脹らみをもつ。26は、底部破片で、底面から立ち上がる部分にナデ、その上位に単節斜縄文が施されており、底面には、網代痕がみられる。27は、ミニチア土器の下半部である。単節斜縄文が施され全体にススや黒斑がある。29・30・33・34・39・41は、いずれも体部破片で原形は不明であり、地文は、単節斜縄文で沈線によって磨消部が区画されている。31・32は、同一個体の口縁部で、口縁部を沈線で区画し磨消しを施している。この区画沈線の下に刺突が施されている。35～37は、口縁部破片で、単節斜縄文が施されている。38は、口縁部破片で綾絡文を伴う単節斜縄文が施され、補修孔がつけられている。40は、底部破片で、底部には網代痕がみられる。

石器類は、7点である。42は、磨石で使用面は一面のみであり、石質は安山岩である。43～45は、スクレーパーである。刃部の剝離調整については、43は長軸方向に直角な縁辺、44は長軸方向に平行な左縁辺と直角な縁辺、45は長軸方向に平行な右縁辺にそれぞれ施されている。

46・47は、不定形石器で、剥片の一部に刃部が作り出されている。48は、磨製石斧の先端部の破片であり、石質は角閃石岩である。

この住居址は、以上の出土遺物からみて縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

B I - 2 住居址

遺 構 (図版4・写真図版6・7)

この住居址は、調査区域東方の段丘縁に位置する。北方は調査区域外に伸び、南方は段丘崖の浸蝕後退により消失しているため正確な規模・形状は不明である。検出部分に於ける遺構の東西長は、9.00m土を計り、大型の住居址とみられる。

埋土は、当住居址が大きな凹地となっているため、当遺跡の検出面上の層序のまま厚く堆積している。特に黒色土下位には、白色細粒浮石が10cmほどの厚さをもって皿状に堆積している。また西方壁付近に橙色の汚れのない火山灰土が盛土として60cmほどの厚さで検出されており、これは他遺構の掘り上げ土をこの部分に盛り上げたものとみられる。

床面は、ほぼ平坦で堅いものである。壁は崩壊がみられ明確な立ち上りとはなっていない。床面中央付近に2基の地床炉が検出された。1基は、49cm土×34cm土の不整形で、かつ床面より5cm土の盛土上に現地性焼土がみられる。他1基は掘り込みを施した地床炉であり、径77cm土の円形、深さ10cm土の浅い皿状ピットの底部に現地性焼土がみられる。この後者の地床炉は、B-54ピットによって南東端を切られている。

当床面上には、B I - 53・B I - 54・B I - 55、B II - 51の4基のピットが構築されており、いずれも2の住居址と同時期か、もしくはその後大差のない時期の構築とみられる。詳細については、ピットの項で記述する。

柱穴及び周溝は検出されていない。

出土遺物 (図版16~19、20-71~73・写真図版20~22)

出土遺物の49は、床面上、50~73は、埋土から得られた。特に埋土中にあるのは、67・70は下位から順層的に出土したものである。

49は、最大径が胴部にある深鉢形土器である。この最大径部から上方につれ浅いくびれをもち、口縁部にかけて外傾している。器表には、縦位に綾絡文を伴う単節斜縄文が施され、口縁部には、狭い磨消しが巡らされている。ススが体部上半に付着している。50・62は、胴部破片で深鉢形土器である。ともに器表に単節斜縄文が施されており、50の内面にはミガキが施され、器表全体にススが付着し、62の内面には縦のナデが施され、器表上半にススが付着している。51は、底部破片で立ち上り部にはケズリ、その上位は単節斜縄文が施されている。52・55・58

は口縁部破片、53・54・56・57・59は体部破片である。52は、単節斜縄文が施され、頸部とみられるくびれに一条の沈線が口縁に平行に巡らされている。53は、綾絡文を伴う単節斜縄文が施されている。54～56は、沈線と磨消技法によって施文されている。57は、三ヶ月状の隆帯が形成され、その基部に竹串状の刺突が施文されている。58は、単節斜縄文の施文で、口唇に近い部分が磨消しされている。59は、断面が三角形の隆帯が形成され、その両脇に丸棒状の刺突が施されている。60・61は、底部破片で、笹葉痕がある。63は、波状口縁をもつ深鉢形のミニチア土器であり、波状部分は1個確認されるが他は欠損しているため不明である。器表には、単節斜縄文が施されている。67は、埋土の中位から出土したもので、上半部が欠損しているが、残存器形から壺形土器と思われる。内外面とも入念に研磨されている。文様体の上下をそれぞれ2条の平行沈線で画し、内部の文様を閉曲線又は曲線の沈線で施文している。この土器は、文様・技法から縄文時代後期十腰内Ⅰ式に比定される。68は、口縁部の波状部分であり、単節斜縄文を施文の後、口縁に沿って削り込みを入れ、縄文部分を隆帯として残している。69は、台付椀形土器である。口縁は平縁であるが、浅い抉りを入れ、波状に作り出している。器表には細かい単節斜縄文を施し、台部には荒いミガキが施されている。70は、埋土上位から得られたもので椀形土器である。口縁部は平縁であるが、4ヶ所に対応する形で小波状部が形成されている。底面は、やや内部に押され、かつ幾分削り出され、円形の窪み状に形成されている。器壁の上位約 $\frac{1}{3}$ の部分に沈線が巡らされ、口縁部文様体が区画されている。この沈線から下位は、底面まで細かいミガキによって調整されている。口縁部文様体の地文として単節斜縄文が施され、小波状部の下に下向きの孤状沈線が入れられ、その内部が磨消しされている。この部位の左右に三叉文が施文されている。小波状部と小波状部の中間には、右さがりの平行な沈線が入れられ、その内部に磨消しが施されている。

71は、無茎の石鏃であり、基底辺を内弯させている。72は、スクレーパーであり、刃部は、石器の長軸に平行な縁辺に作り出されている。71・72とも石質は、玻璃質安山岩である。73は、磨製石斧である。大きな刃こぼれによる再調整の痕がみられる。石質は斑柘岩である。

この住居址は、以上の出土遺物からみて縄文時代中期末葉に位置づけられるものと考えられる。

B II 区

B II - 1 住居址

遺 構 (図版3 - b・写真図版8・9)

この住居址は、段丘中心部で段丘差より10mほど段丘面内に入ったところに位置する。当住

居址は、竪穴としての掘り込みがみられず、平地に炉の配石と柱穴のみで構築されている。住居址にかかわる $\frac{1}{2}$ ほどの面積部分が調査区域外に伸びているため、正確な規模・形状は不明である。埋土は、遺構検出面上の土層と同じである。(地質項参照)

床面は、ほぼ平坦でありしまっていない。汚れの目立つ床面であり、これは平地故の風化によるものとみられる。

柱穴については、この住居址が完掘されていないため検出された柱穴状ピットの規模を記述するに止める。

P₁ (径19cm±・深さ47cm±)、P₂ (径26cm±・深さ30cm±)、P₃ (径22cm±・深さ26cm±)、P₄ (径19cm±・深さ47cm±)、P₅ (径15cm±・深さ18cm±)、P₆ (径15cm±・深さ29cm±)、P₇ (径26cm±・深さ52cm±)、P₈ (径17cm±・深さ49cm±)、P₉ (径25cm±・深さ34cm±)、P₁₀ (径20cm±・深さ28cm±)、P₁₁ (径20cm±・深さ41cm±)、P₁₂ (径17cm±・深さ34cm±)、P₁₃ (径12cm±・深さ45cm±)、P₁₄ (径15cm±・深さ21cm±)、P₁₅ (径16cm±・深さ21cm±)、P₁₆ (径15cm±・深さ29cm±)、P₁₇ (径18cm±・深さ18cm±)、P₁₈ (径16cm±・深さ21cm±)、P₁₉ (径17cm±・深さ20cm±)。

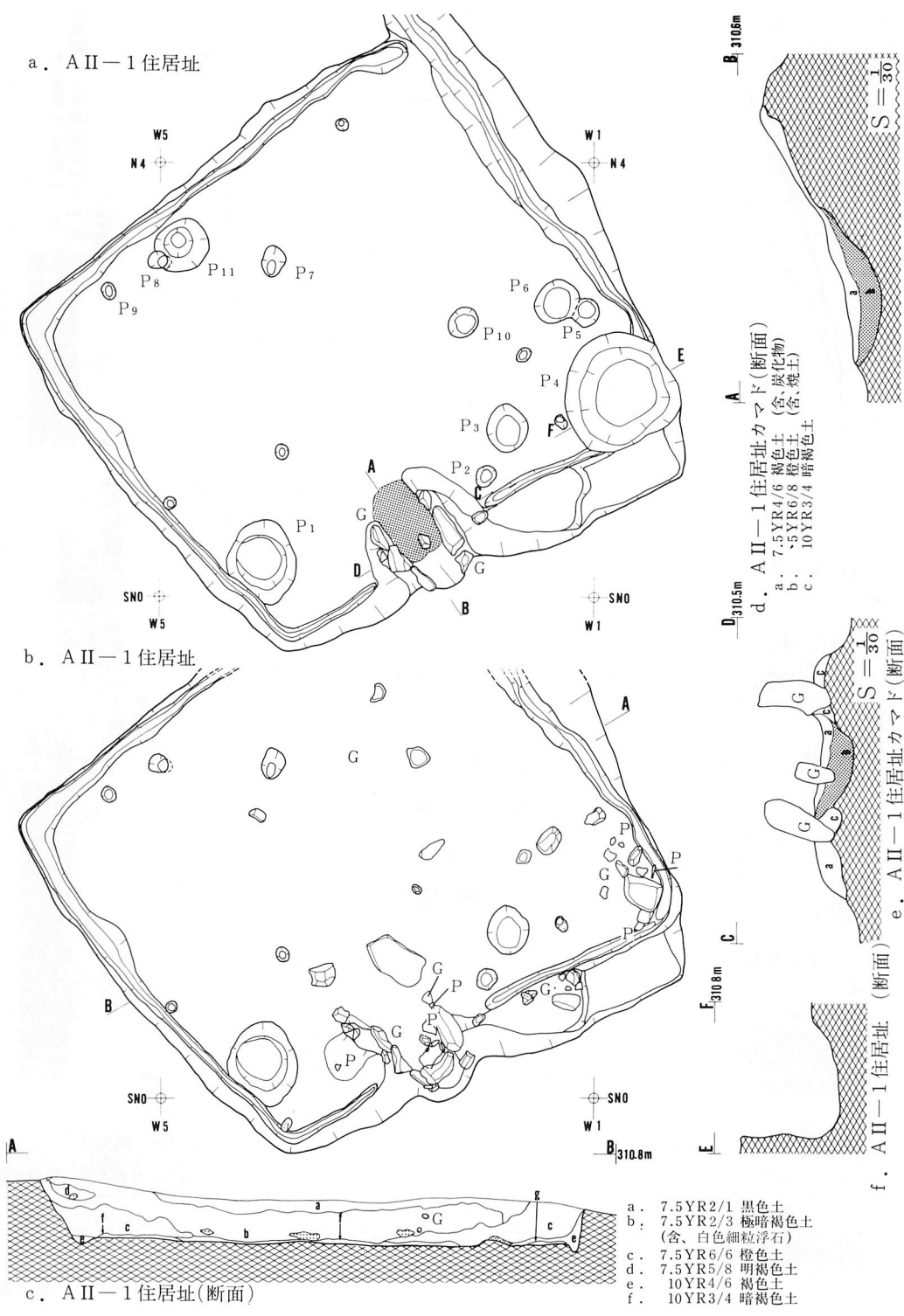
炉は住居址の中央とみられるところに位置し、粒径10～20cmほどの石英安山岩の垂円礫8個を五角形に埋設している石組炉である。この構成礫は焼成を受けもろくなっており、一部割れている礫もある。炉内部の焼成は、深さ10cm±まで及んでいるもので、特に焼成の強い部分は構成礫の中の最大礫付近であり、片寄った使用がみられる。使用面は床よりわずか低い。

この炉の60cm東方に「出入口状施設」とみられる配石が検出された。粒径20～40cmの扁平な垂円礫2個が40cmほどの間隔で埋設されている。

出土遺物 (図版20—74～76・写真図版23—74～76)

出土遺物の74は柱穴状ピット、75・76は床面から得られた。74は、ミガキを施された無文のミニチア土器である。75・76は、同一個体の破片と思われ、沈線と磨消技法によって施文されている。

この住居址は、以上の出土遺物や住居址形態からは、時代決定を明確に提示できないが、遺物から縄文時代中期末葉～後期前葉に位置づけられるものと推定される。



a. A II-1 住居址

b. A II-1 住居址

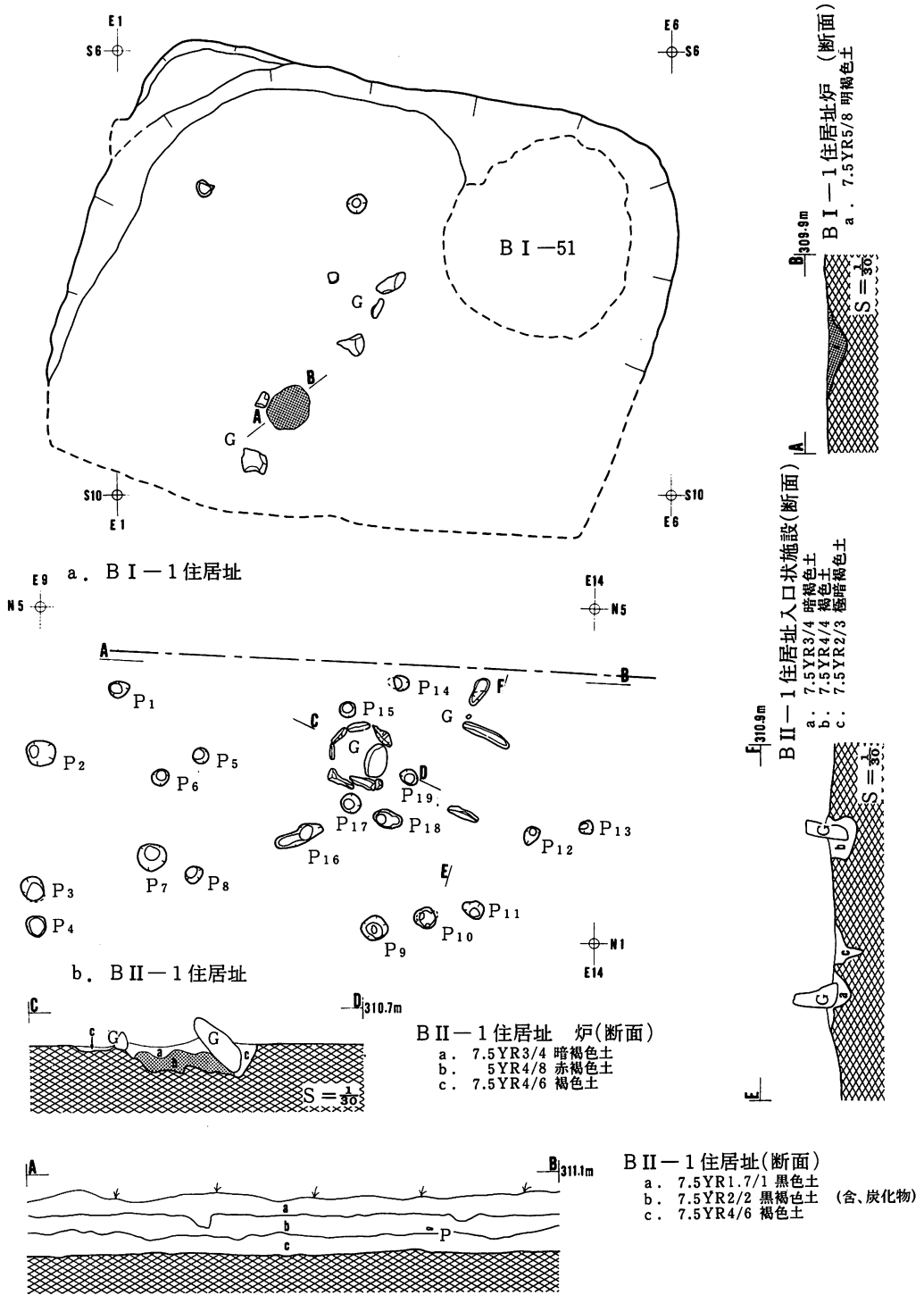
c. A II-1 住居址(断面)

d. A II-1 住居址カマド(断面)
 a. 7.5YR4/6 褐色土 (含、炭化物)
 b. 5YR6/8 橙赤土 (含、凝土)
 c. 10YR3/4 暗褐色土

e. A II-1 住居址カマド(断面)

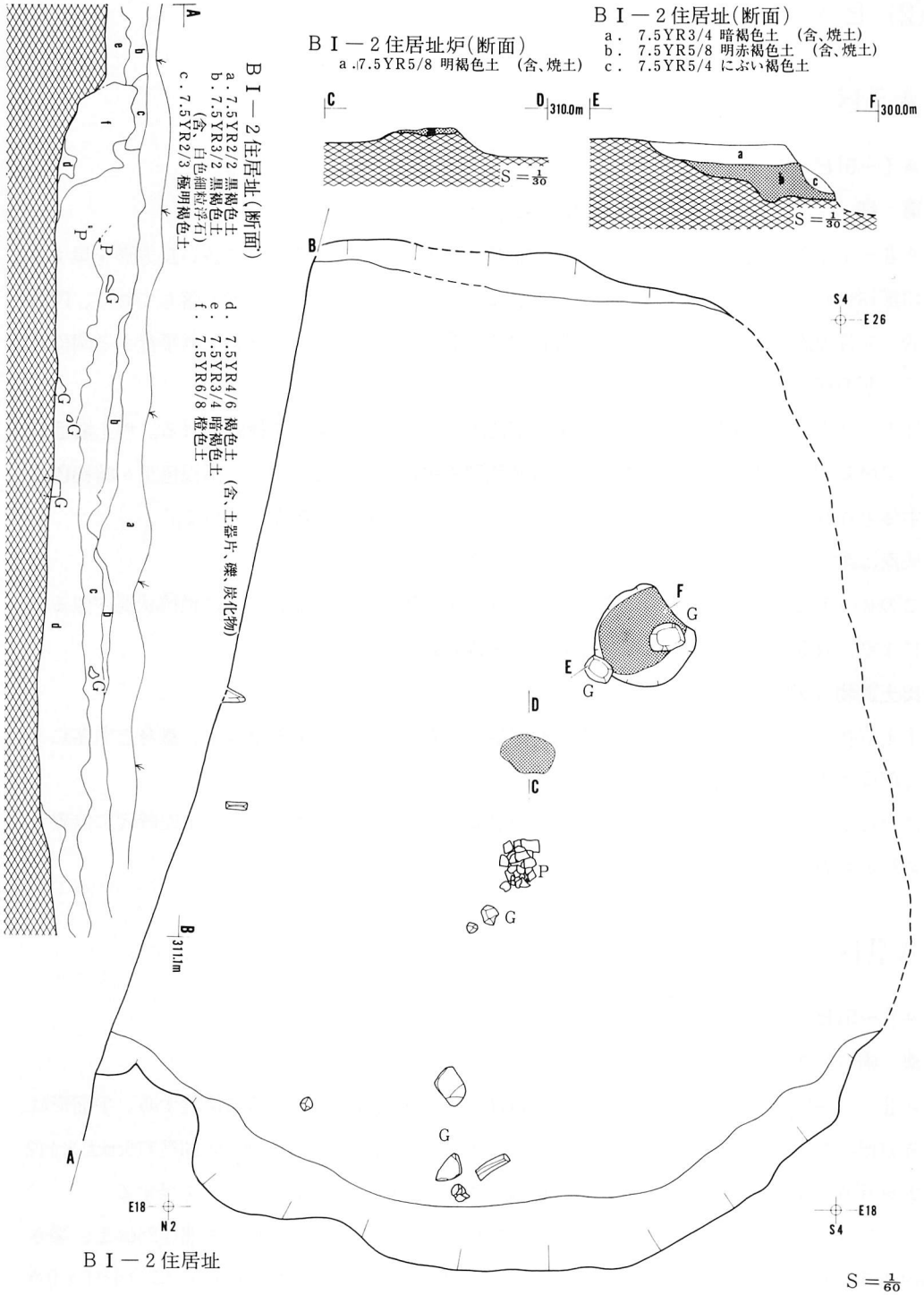
f. A II-1 住居址(断面)

- a. 7.5YR2/1 黒色土
- b. 7.5YR2/3 極暗褐色土 (含、白色細粒浮石)
- c. 7.5YR6/6 橙色土
- d. 7.5YR5/8 明褐色土
- e. 10YR4/6 褐色土
- f. 10YR3/4 暗褐色土



S = 30°

图版 3



图版 4

(2) ピット

A I 区

A I-51ピット

遺 構 (図版5-a、b・写真図版10-a、b)

A II-1住居址の南方約1.2mのところに位置し、平面形は、北西方向に長い長方形を呈する。開口部181cm±×163cm±で、深さ91cm±を計る。壁は、ほとんど垂直に近く落ちており、四隅に於いてほぼ直角に交わる。その壁は隣接するA II-1住居址の壁とそれぞれ平行する関係にある。断面形も長方形を呈する。

埋土は、上位より黒褐色土・暗褐色土・褐色土・黄褐色土によって構成される。埋土断面に於いてゆるやかな浅鉢状の堆積を呈し、自然堆積の層相を呈する。中でも黒褐色土・暗褐色土が主体となり、その中に白色細粒浮石がブロック状かつ不規則に散在している。

底面は柔らかく、平坦である。小ピット等は認められない。

このピットは、形状が方形であること、A II-1住居址と隣接し、埋土の堆積状況が似ることにより、A II-1住居址にかかわるピットとみられる。

出土遺物 (図版11-22・写真図版16-22)

出土遺物は、埋土下位から出土した鉄製の鏃(22)のみである。刃部は扁平、鏃身と中茎にあたる部位は四角に作り出されている。

このピットは、以上の出土遺物やピットの形態及び埋土の状況からみて、平安時代に位置づけられるものと考えられる。

A II 区

A II-51ピット

遺 構 (図版6-a～c・写真図版10-c～d)

A II-1住居址の西方で、段丘崖より5mほど段丘面内に入るところに位置する。平面形は、隅丸形状を呈する。開口部径118cm±×124cm±、頸部径85cm±×92cm±、底部径113cm±×112cm±を計る。深さは56cm±を計り、断面形は、頸部を上位にもつフラスコ状を呈する。

このピットの底面の北隅に、円形の副穴が検出され、開口部径30cm±、底部径25cm±、深さ34cm±を計る。中位がわずか抉りこまれており、断面形は、フラスコ状を呈する。この小ピットから掘り出されたとみられる灰黄褐色土が、この底面全体に薄く貼られており、柔らかいものである。

埋土は、黒褐色土・暗褐色土・褐色土・明褐色土から構成される。下位の埋土は不規則に堆

積するが、上位の黒褐色土・暗褐色土は「U」字状に堆積している。

出土遺物はない。

B I 区

B I-51ピット

遺 構 (図版5-c・e・写真図版10-c・f)

B I-1住居址の北東隅に位置する。当ピットが廃棄された後、橙色火山灰土で閉塞され、その後このピットの北西壁を共有して新たにB I-52ピットが構築された関係を有する。平面形は、円形を呈し、開口部径168cm土、頸部径141cm土、底部径158cm土を計る。深さは115cm土を計り、断面形は、頸部が中心に向い大きく張り出すフラスコ状を呈する。

埋土は、汚れの少ないかつ柔らかい黄橙色火山灰土の単層によって構成されている。これは、他遺構の新鮮な掘土を利用して一時にこのピットを閉塞したとみられる。当ピットの埋土断面には、B I-52ピットについても現われているが、それについてはB I-52ピットの項でふれる。

底面は、平坦で柔らかく、B I-52ピットと共有するものである。

出土遺物 (図版21、22-87~90・写真図版23-77~90)

いずれも埋土から得られたものである。77・85は、綾絡文を伴う単節斜縄文が施されている。78・79は、底部破片で底面に網代痕がみられる。79~83は、単節斜縄文を地文として、沈線と磨消技法によって施文されている。84は、地文に単節斜縄文を施し、その上位に平行沈線と刺突が施されている。86・87は、単節斜縄文の上に沈線が施されている。88は、口縁部破片で地文に単節斜縄文が施されている。90は、磨製石斧の半破片である。石質は、輝緑凝灰岩である。

このピットは、以上の出土遺物及びB I-1住居址の項で述べられた構築関係からみて、縄文時代中期末葉~後期前葉に位置づけられるものと考えられる。

B I-52ピット

遺 構 (図版5-d・e・写真図版11-a・b)

B I-51ピットの廃棄・閉塞後北西壁を共有して、その内部に構築されている。B I-51ピットの2分法による断面で確認されたため、南半分についてはすでにB I-51ピットの形で掘られており、残り北半分のみを検出である。このため正確な規模・形状は不明である。残部による推定では、その平面形はいびつな円形を呈し、開口部径141cm土、底部径101cm土を計り、深くなるにつれ中心が北西方向に寄る形態である。深さ115cm土を計り、断面形は、傾斜したピ

カー状を呈する。底面は、B I-51ピットと同じ面である。

埋土については、上位半分は、黒褐色土を主として「U」字状に堆積し、その中間に2層の砂の薄層が入る。その下位は、褐色土・暗褐色土・明褐色土・橙色土の不規則な堆積によって構成される。出土遺物はない。

B I-53ピット

遺構 (図版6-d~f・写真図版11-c・d)

B I-2住居址の西方壁ぎわに位置する。平面形は円形を呈し、開口部径214cm±、頸部径200cm±、底部径230cm±を計る。深さは95cm±を計り、断面形は中位から下位にかけ14cm±の挟りこみのあるフラスコ状を呈する。

底面は、ゆるやかな凹凸を呈する。その南西壁寄りに小ピットが検出された。平面形は、円形を呈し、開口部径44cm±、底部径47cm±を計る。深さ26cm±を計り、断面形は、底部にかけて広がりをもせるフラスコ状を呈する。

埋土は、暗褐色土・褐色土・橙色土・黄橙色土・黒褐色土によって構成される。どの層も汚れが目立ち、浅鉢状に堆積している。その中で中位に堆積している黒褐色土には、褐色土・黄橙色土が、ブロック状にかなり混入している。

遺構図版では、南東部分に張り出しが記されている。これが遺構の一部であるのか又は崩壊によるものなのかは判断できなかったため、この報告では、そのままの形で記載した。

出土遺物 (図版22-91~96・写真図版23-91~92・24-93~96)

出土遺物は、いずれも埋土から得られた。91~93は、下半部の破片であり、単節斜縄文が施文されている。94は、口縁部破片で単節斜縄文が施文されている。95は、単節斜縄文を地文とし、沈線と磨消技法によって施文されている。96は、磨石であり、全面に研磨痕がある。石質は、花崗閃緑岩である。

このピットは、以上の出土遺物からみて、縄文時代中期末葉~後期前葉に位置づけられるものと考えられる。

B I-54ピット

遺構 (図版7-a・b・写真図版11-e・f)

B I-2住居址の南東で段丘縁に位置し、B I-2住居址の地床炉を切って構築されている。平面形は、円形を呈し、開口部径115cm±、底部径70cm±を計る。深さは35cm±を計り、断面形は、浅鉢状を呈する。

埋土は、黒褐色土・極暗褐色土・褐色土・明褐色土によって構成され、全体的には、黒色系

の埋土が主体を占める。その堆積状態は不規則である。

底面には凹凸がみられる。

出土遺物（図版22-97・写真図版24-97）

出土遺物は、埋土中位から得られた土器片1点のみである。97は、地文に単節斜縄文を施し沈線と磨消技法によって施文している。

このピットは、以上の出土遺物からみて縄文時代中期末葉～後期前葉に位置づけられるものと考えられる。

B I-55ピット

遺構（図版7-c・d・写真図版12-a・b）

B I-2住居址の東壁寄りに位置する。平面形は円形を呈し、開口部径140cm±、頸部径120cm±、底部径127cm±を計る。深さは、37cm±を計り、断面形は、頸部から底部にかけてやや抉りこみのみられるフラスコ状を呈する。

埋土は、褐色土・橙色土・明褐色土・にぶい褐色土によって構成され、全体に炭化物を少量含むものの汚れは少ない。その堆積状態は不規則である。

底面は、ほぼ平坦である。出土遺物はない。

B II区

B II-51ピット

遺構（図版7-e・f・写真図版12-c・d）

B I-2住居址の北東部分に位置する。平面形は、いびつな円形を呈し、開口部径110cm±、頸部径87cm±、底部径135cm±を計る。深さは、65cm±を計り、断面形は、中位に頸部をもつフラスコ状を呈する。

埋土は、褐色土・黒褐色土・にぶい褐色土・暗褐色土・明褐色土によって構成され、B I-55ピットのそれと似る。上位 $\frac{2}{3}$ ほどは、一時に褐色土が堆積した状態を示し、下位 $\frac{1}{3}$ は、その他の埋土が入り組んで堆積している。

底面は、ほぼ平坦である。

出土遺物（図版22-98・写真図版24-98）

出土遺物は、埋土中位から得られた土器片1点のみである。98は、細かい単節斜縄文を地文とし、口縁に沿った沈線を巡らしその上位に磨消しを施したものと思われる。

このピットは、以上の出土遺物1点からは、時代決定を明確にし得ない。

(3) 陥し穴状遺構

A II-101陥し穴状遺構

遺 構 (図版8-a~c・写真図版12-e・f)

段丘中央からやや西に位置し、A II-1住居址の北東壁によって切られている。長軸は、N 35°Wの方向を呈する。北西端は、調査区域外に伸び、かつ南西部の上位部分がA II-1住居址によって切られているため、正確な形状を明らかにし得ない。

長軸方向では、確認できる範囲に於いて底部径330cm土を計る。南方半分が南西方向に弓なりに掘られており、南端下部は中位よりわずかに抉りこまれている。短軸方向では、開口部径60cm土、頸部径19cm土、底部径10cm土を計る。平面形は、底部軸長比 $\frac{1}{8}$ 以下で、長楕円形を呈する。深さは、120cm土を計り、短軸での断面形状は、上位から下位にかけて急に狭くなり、 $\frac{1}{2}$ ほどのところよりほぼ同じ幅で底部まで垂直に落ち、細長い「Y」字状を呈する。

埋土は、暗褐色土が上位を占め、下位につれ汚れた褐色火山灰土に漸移しており、層理は発達していない。

底面は、南方ほど高く北方に傾斜し、測定可能部分に於いてその差21cm土を計る。凹凸の少ない面であり、杭状のピットはみられない。

B I-101陥し穴状遺構

遺 構 (図版8-d・e・写真図版13-a・b)

調査区域の中央に位置し、後述のB I-102陥し穴状遺構と並列する。長軸は、ほぼ北方向を呈する。

長軸方向では、開口部径360cm土、頸部径327cm土、底部径324cm土を計り、短軸方向では、開口部109cm土、頸部径42cm土、底部径13cm土を計る。平面形は、底部軸長比 $\frac{1}{6}$ で長楕円形を呈する。深さ172cm土を計り、長軸での断面形状は、上位の外反はわずかであり、南北両端ともに中位にわずかの凹凸がみられるもののほぼ垂直に落ちる。短軸での断面形状は、頸部から開口部にかけての反りは長軸でのそれと比較し大きく外反している。頸部から下位につれては、細長い「V」字状を呈する。

埋土は、上位より暗褐色土・黄褐色土・明黄褐色土と漸移し、その堆積状態は、ゆるやかな「U」字状を呈する。底面とは黒褐色の薄層をもって境する。

底面は、ほぼ平坦である。杭状のピットはみられない。出土遺物はない。

B I-102 陥し穴状遺構

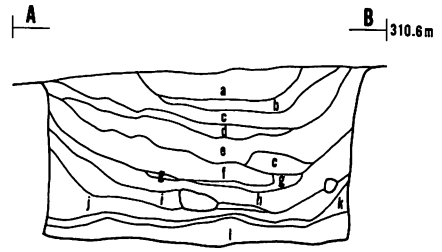
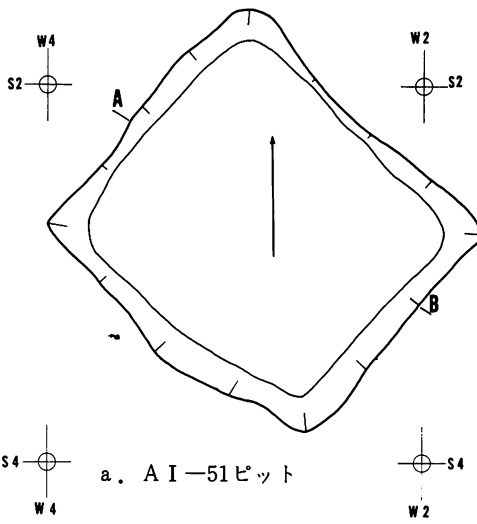
遺 構 (図版 8-f・g・写真図版 13-c・d)

前述の B I-101 陥し穴状遺構とは、約 1.2m の間隔をもって並列する。長軸は N12° W の方向を呈する。当遺構の南端は、風倒木痕により上位部分が破壊されているが、大きく原形を崩すものではない。

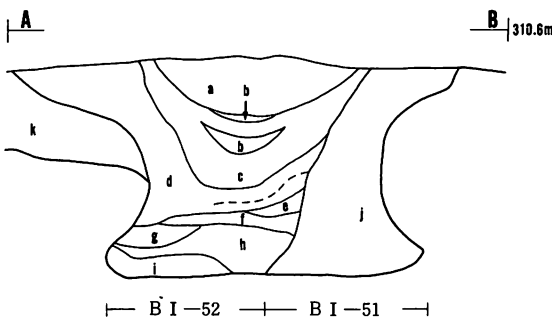
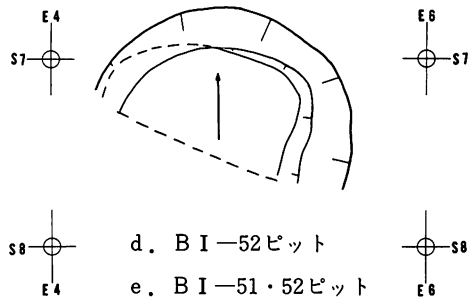
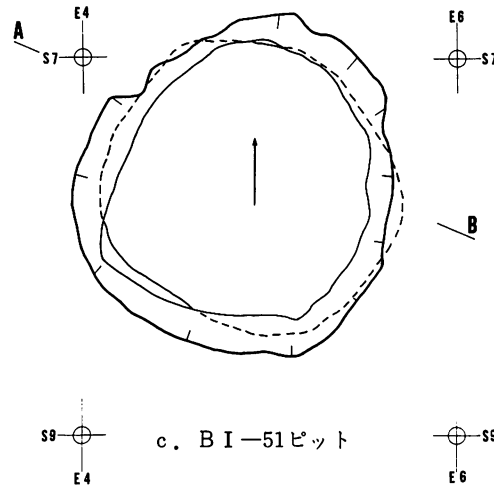
長軸方向では、開口部径・底部径ともに上記破壊により不明であるが底部径 328cm 土を計り、短軸方向では、開口部径 132cm 土、頸部径 52cm 土、底部径 11cm 土を計る。平面形は、底部軸長比 $\frac{1}{30}$ で長楕円形を呈する。深さ 184cm 土を計り、長軸での断面形状は、頸部から下位にかけわずかな抉りこみがみられる。短軸での断面形状は、頸部から開口部にかけて大きく外反しており、それより下位は、細長い「V」字状を呈する。並列する B I-101 陥し穴状遺構のそれに比べ、より垂直に近く落ちている。

埋土は、上位より暗褐色土・灰黄褐色土・明黄褐色土と漸移し、その堆積状態は、ゆるやかな「U」字状を呈する。炭化物は上位の暗褐色土中に少量含まれる。底面とは暗褐色の薄層をもって境する。

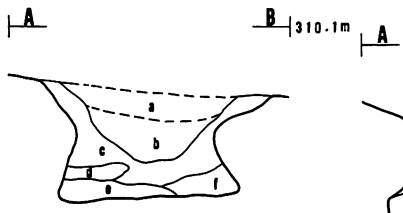
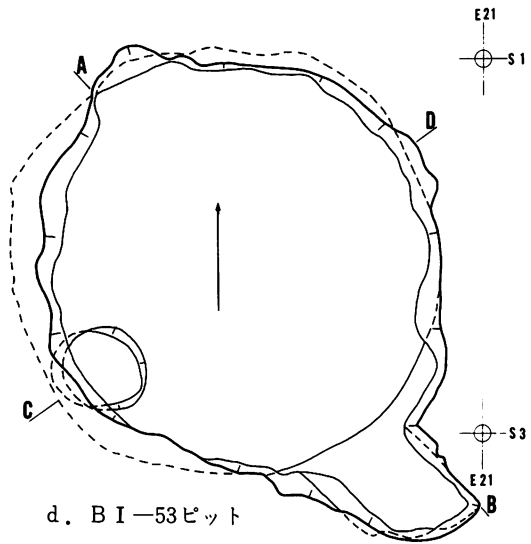
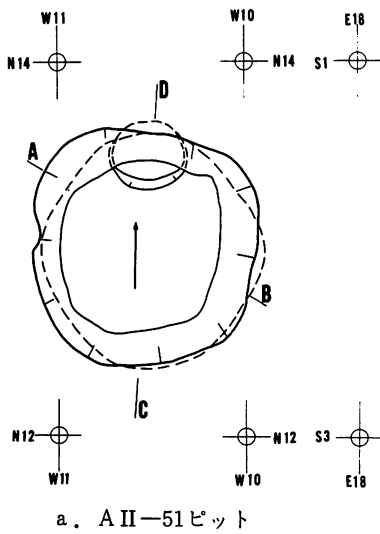
底面は、ほぼ平坦である。出土遺物はない。



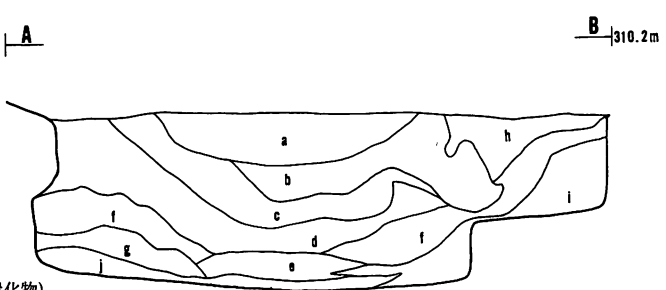
- b. AI-51ピット
- a. 7.5YR3/2 黒褐色土
 - b. 7.5YR4/3 褐色土
 - c. 7.5YR3/3 明褐色土
 - d. 7.5YR3/2 黒褐色土 (含、白色細粒浮石)
 - e. 7.5YR5/8 明褐色土 (含、白色細粒浮石)
 - f. 7.5YR5/6 明褐色土
 - g. 7.5YR4/6 褐色土
 - h. 7.5YR6/6 橙色土
 - i. 7.5YR6/3 にぶい褐色土
 - j. 7.5YR5/8 明褐色土
 - k. 7.5YR3/3 暗褐色土
 - l. 7.5YR5/8 明褐色土



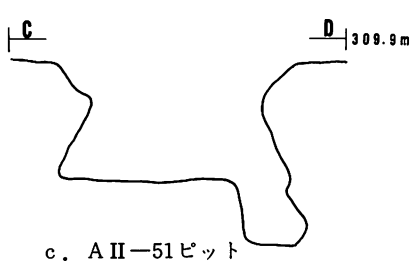
- e. BI-51・52ピット
- a. 7.5YR1.2/1 黒色土
 - b. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、白色細粒浮石)
 - c. 7.5YR2/1 黒色土
 - d. 7.5YR5/6 明褐色土
 - e. 7.5YR3/2 黒褐色土
 - f. 7.5YR2/3 極暗褐色土
 - g. 7.5YR7/6 橙色土
 - h. 7.5YR4/4 褐色土
 - i. 7.5YR5/6 明褐色土
 - j. 7.5YR6/8 橙色土
 - k. 7.5YR5/4 にぶい褐色土



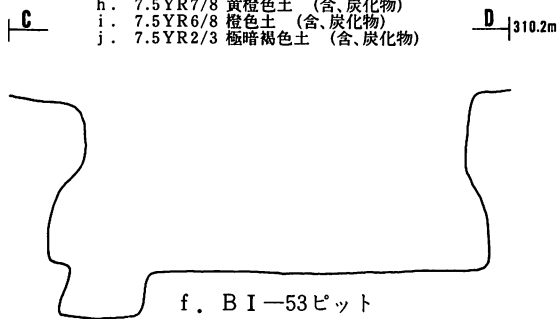
- b. A II-51ピット
- a. 7.5YR2/3 黒暗褐色土 (含、炭化物)
 - b. 7.5YR3/4 暗褐色土
 - c. 7.5YR4/4 褐色土
 - d. 7.5YR5/8 明褐色土
 - e. 10YR4/4 褐色土
 - f. 7.5YR4/4 褐色土



- e. B I-53ピット
- a. 7.5YR3/3 暗褐色土 (含、炭化物)
 - b. 7.5YR3/4 暗褐色土 (含、炭化物)
 - c. 7.5YR4/4 褐色土 (含、炭化物)
 - d. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、炭化物)
 - e. 7.5YR4/3 褐色土 (含、炭化物)
 - f. 7.5YR6/8 橙色土 (含、炭化物)
 - g. 7.5YR6/6 橙色土 (含、炭化物)
 - h. 7.5YR7/8 黄橙色土 (含、炭化物)
 - i. 7.5YR6/8 橙色土 (含、炭化物)
 - j. 7.5YR2/3 極暗褐色土 (含、炭化物)



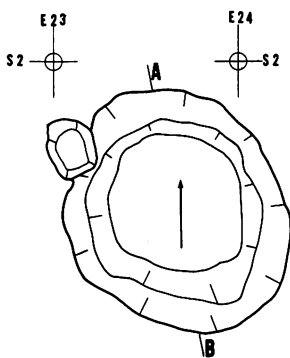
c. A II-51ピット



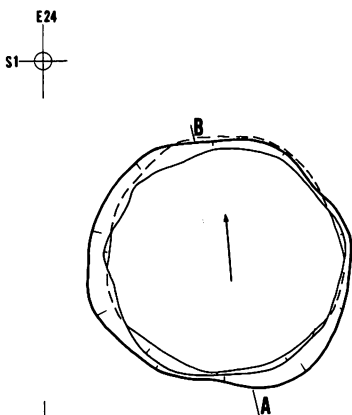
f. B I-53ピット

S = $\frac{1}{40}$

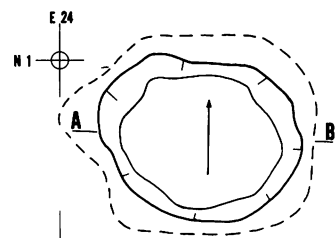
図版 6



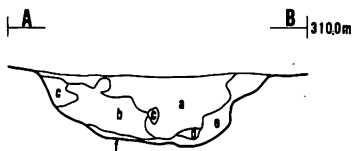
a. BI-54ピット



c. BI-55ピット



e. BII-51ピット



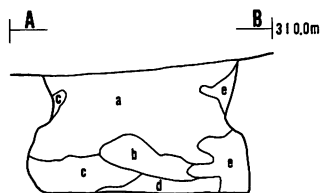
b. BI-54ピット

- a. 7.5YR2/2 黒褐色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR2/3 極暗褐色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR5/8 明褐色土
- d. 7.5YR5/6 明褐色土 (含、炭化物)
- e. 7.5YR4/3 褐色土 (含、炭化物)
- f. 7.5YR6/6 橙色土 (含、炭化物)



d. BI-55ピット

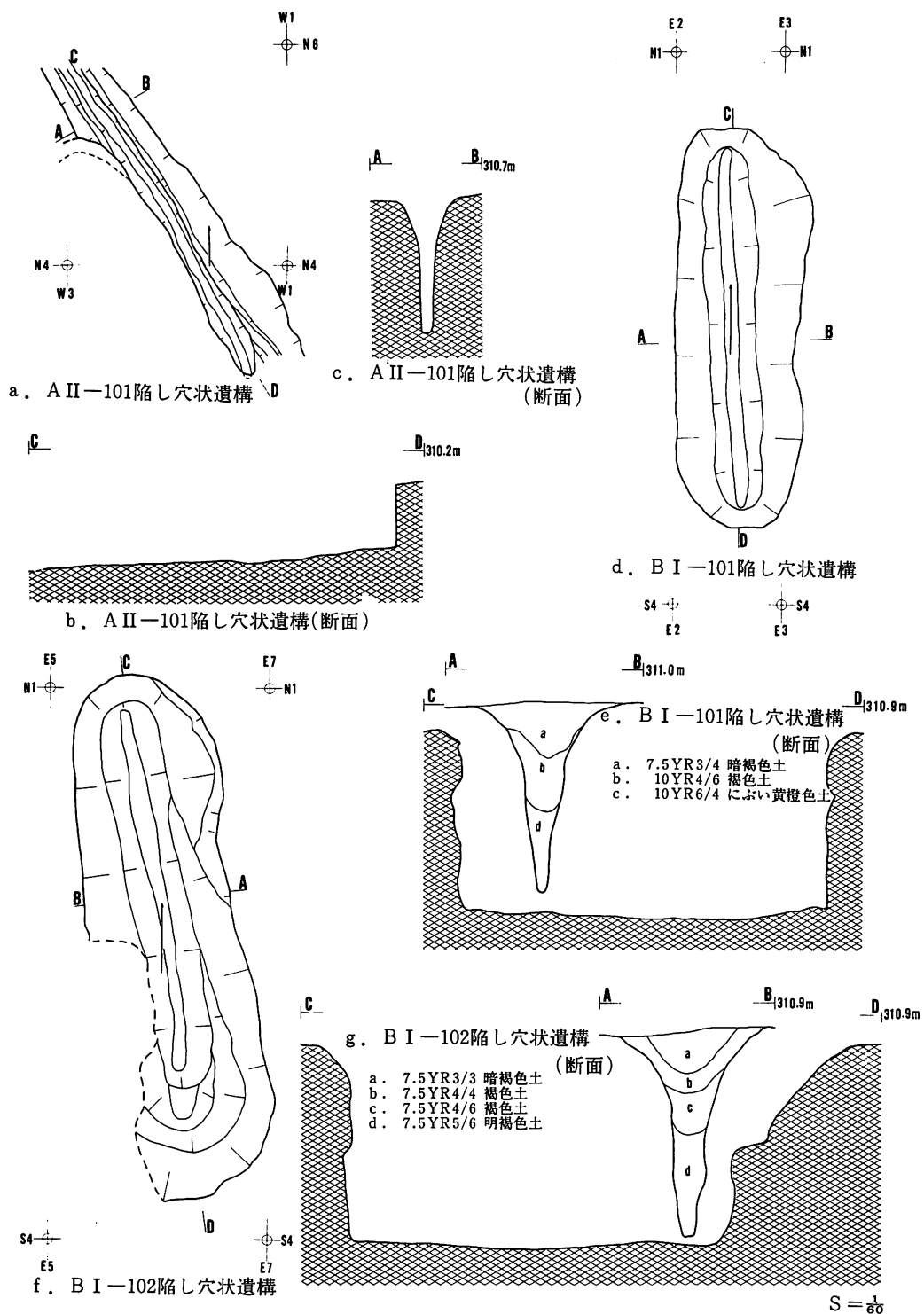
- a. 7.5YR4/6 褐色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR4/4 褐色土 (含、炭化物)
- c. 7.5YR6/6 橙色土 (含、炭化物)
- d. 7.5YR5/8 明褐色土 (含、炭化物)
- e. 7.5YR7/6 橙色土 (含、炭化物)
- f. 7.5YR6/4 にぶい褐色土



f. BII-51ピット

- a. 7.5YR4/4 褐色土 (含、炭化物)
- b. 7.5YR2/2 黒褐色土
- c. 7.5YR4/5 にぶい褐色土 (含、炭化物)
- d. 7.5YR3/4 暗褐色土
- e. 7.5YR5/6 明褐色土

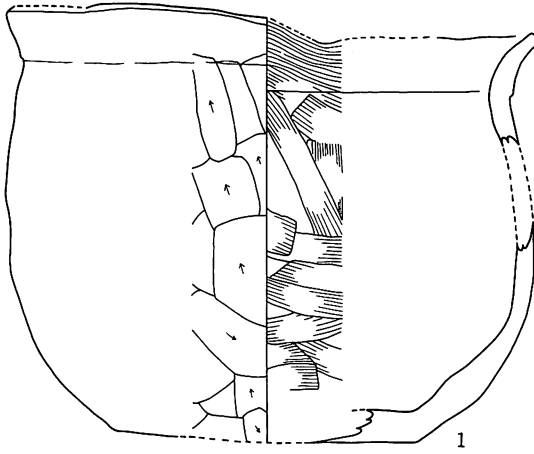
S = $\frac{1}{40}$



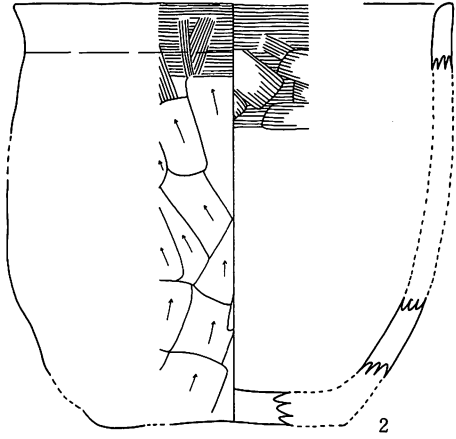
図版 8

A I - 1 住居址(1~21)

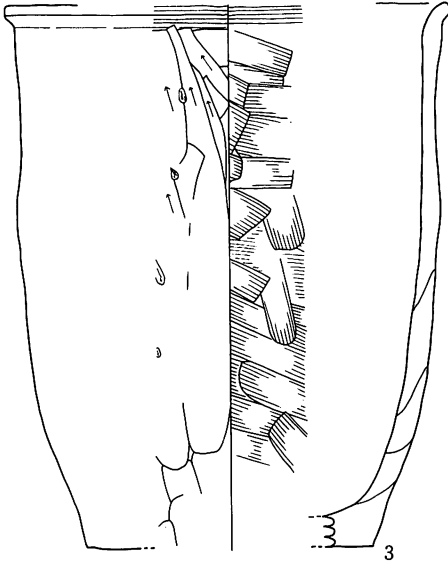
20.8・12.0・17.2



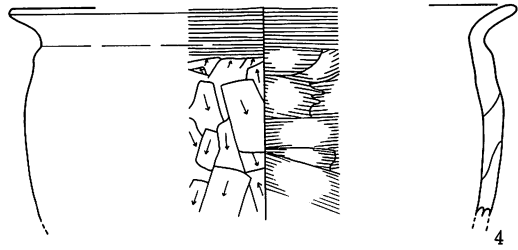
17.6・9.7・17.1



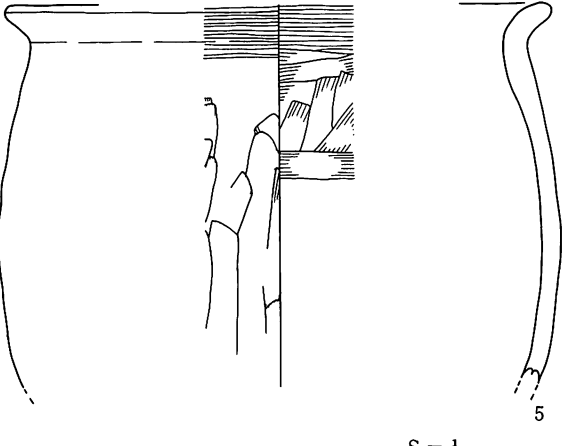
(17.8)・(10.5)・21.8



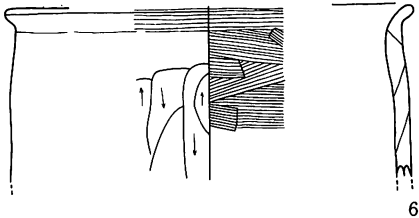
19.9・—・(8.6)



(21.6)・—・(15.4)



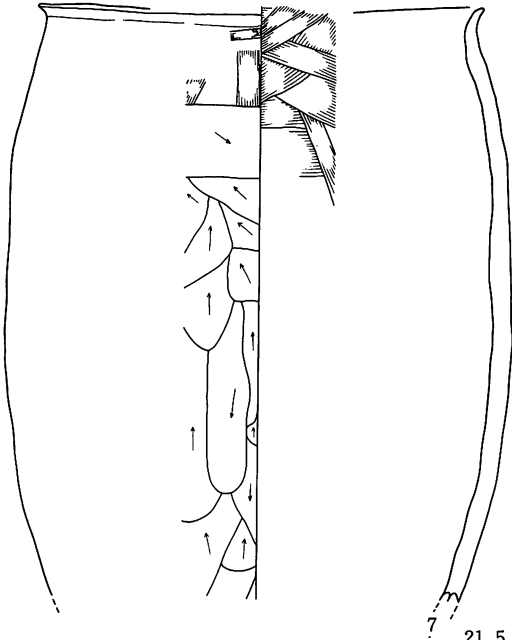
16.4・—・(7.0)



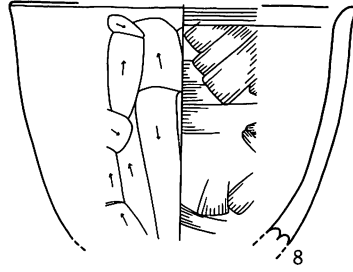
S = $\frac{1}{4}$

図版 9 遺構内の出土遺物(1)

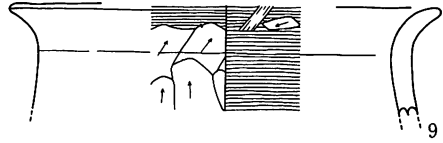
(18.0) ··· (24.0)



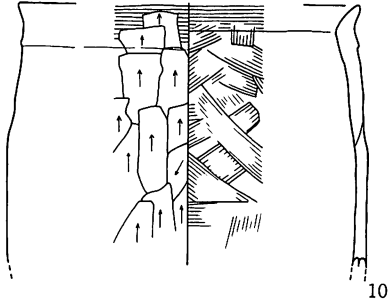
14.0 ··· (9.5)



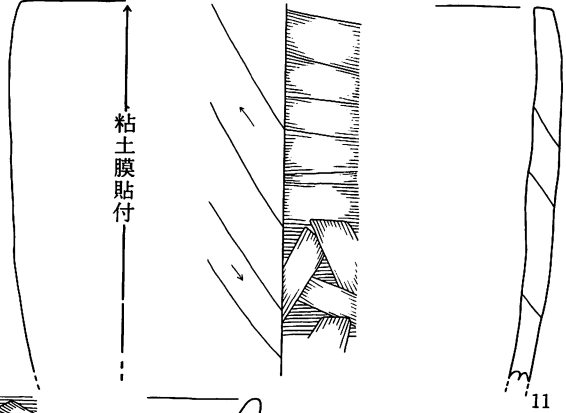
17.4 ··· (5.0)



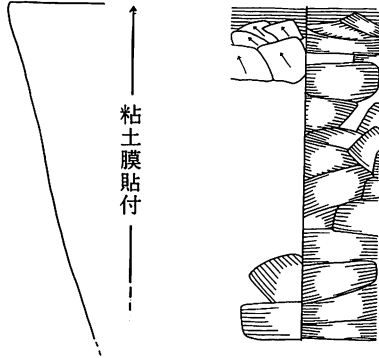
13.6 ··· (10.4)



21.5 ··· (15.0)



(23.8) ··· (13.5)



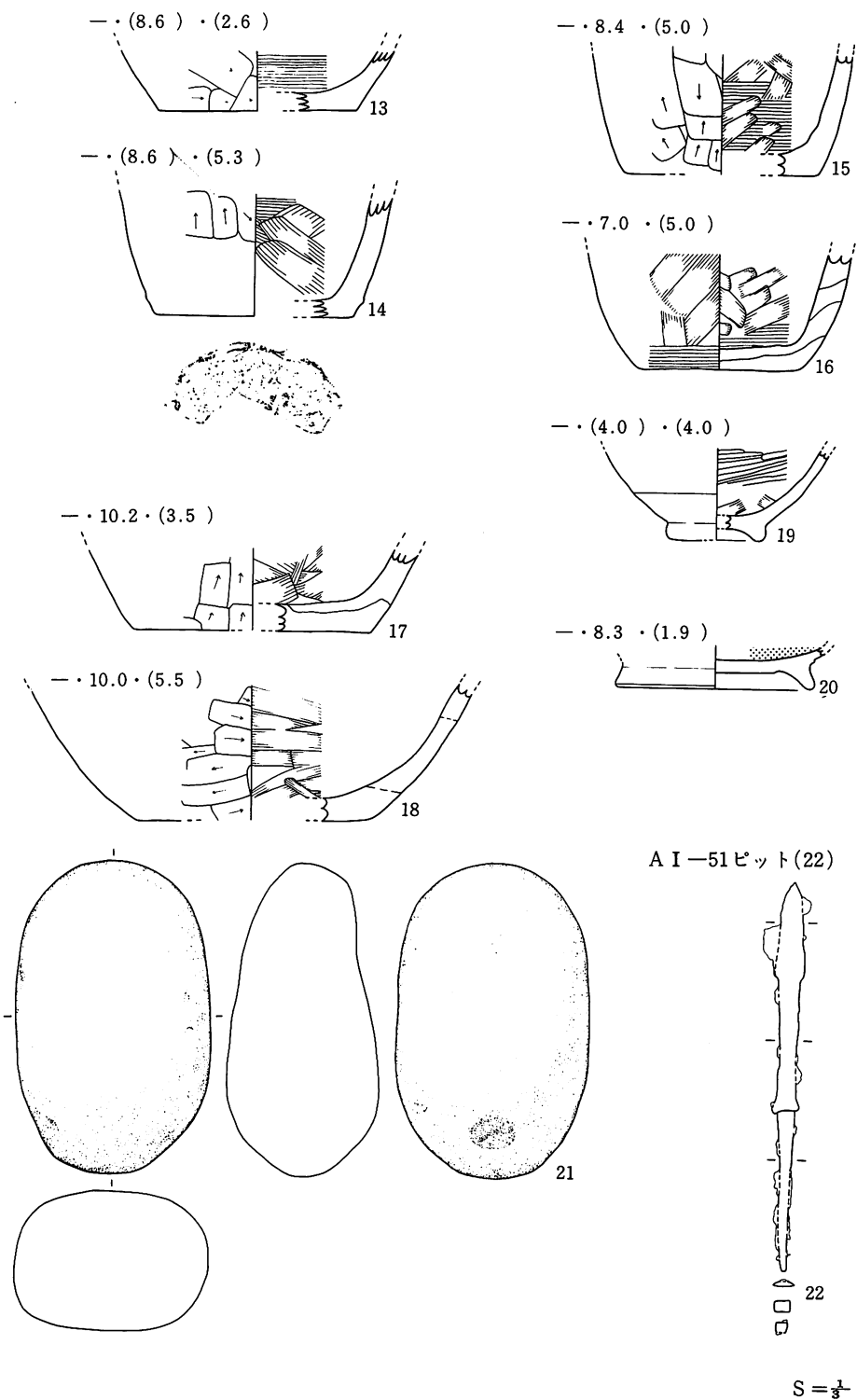
粘土膜貼付

粘土膜貼付

12

S = 1/3

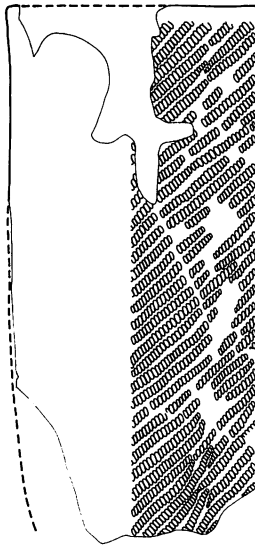
図版10 遺構内の出土遺物(2)



図版II 遺構内の出土遺物(3)

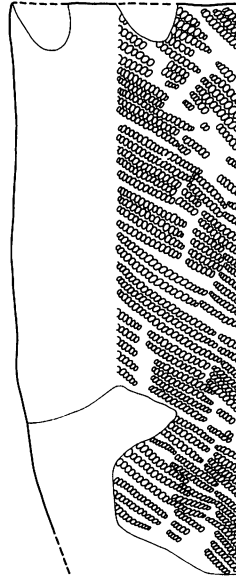
B I - 1 住居址(23~48)

20.0 · — · (21.4)



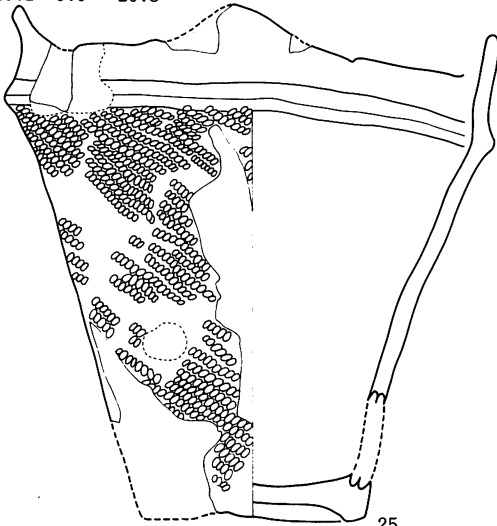
23

18.8 · — · 23.0



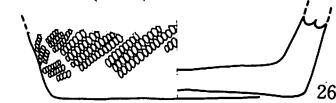
24

19.2 · 9.0 · 20.8



25

— · 10.0 · (3.0)



26

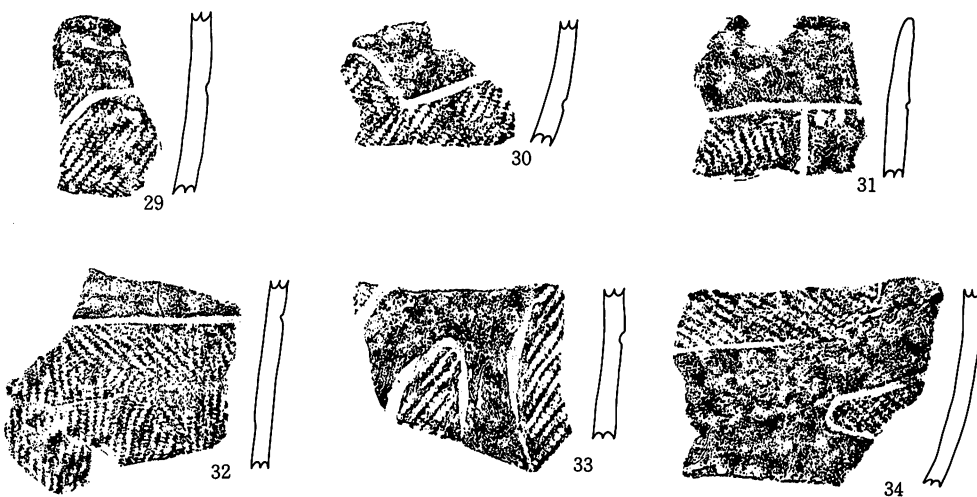
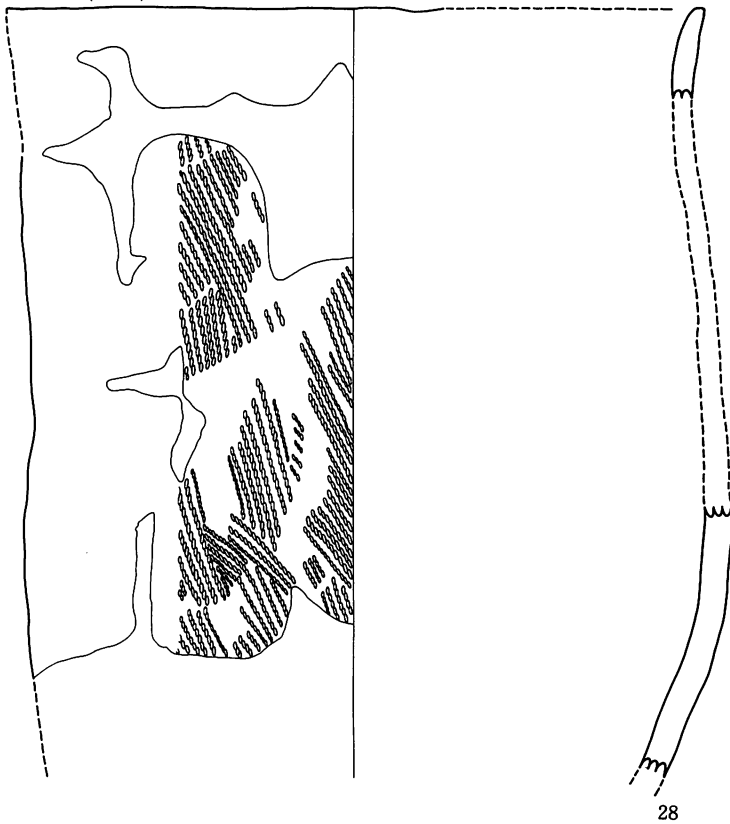
— · 2.2 · (2.5)



27

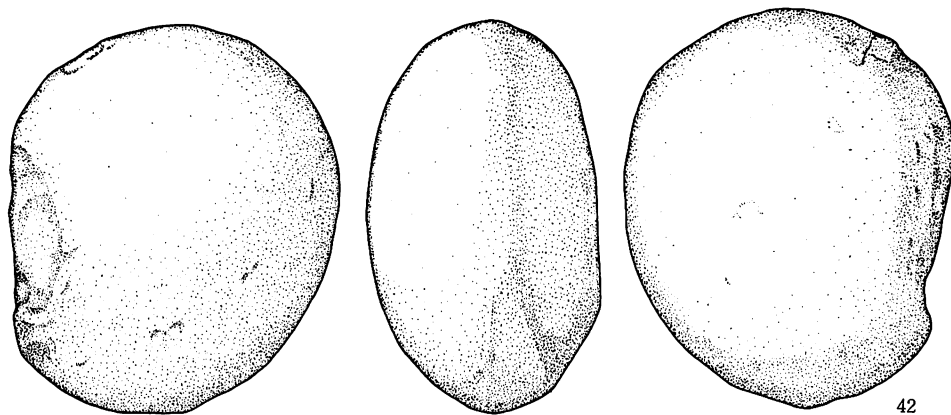
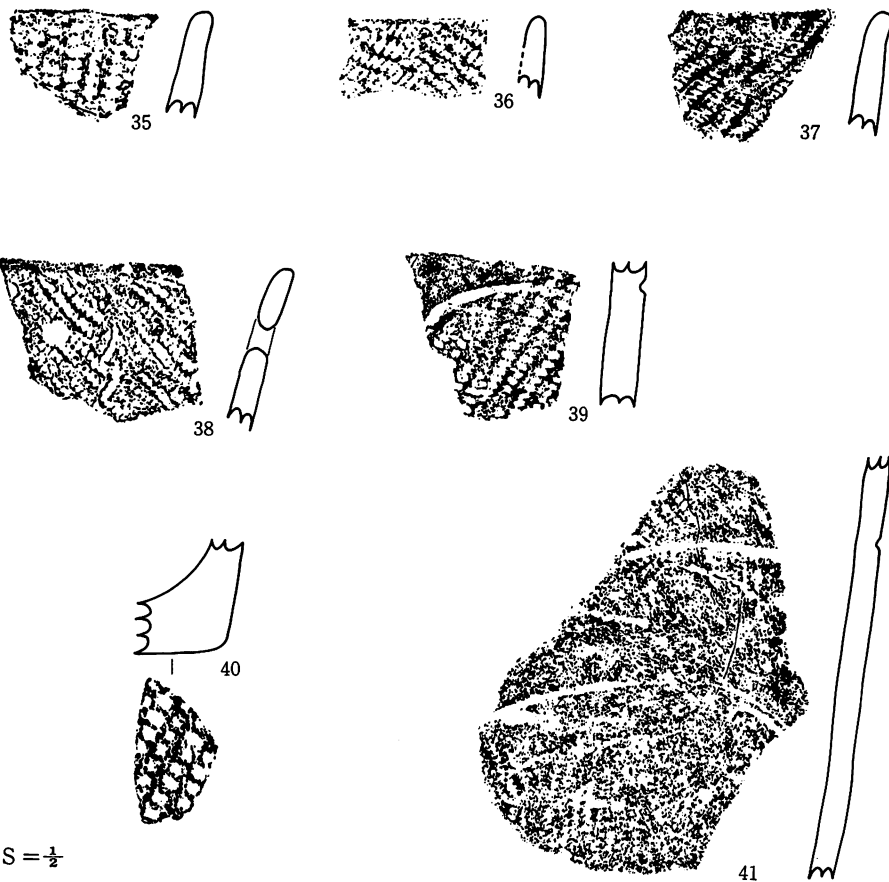
S = $\frac{1}{3}$

図版12 遺構内の出土遺物(4)

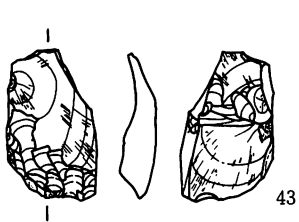


S = $\frac{1}{2}$

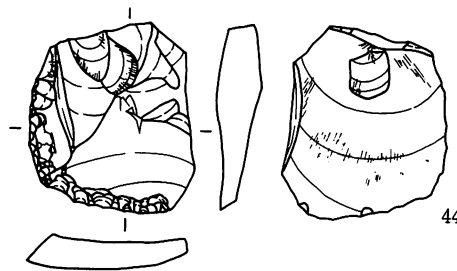
図版13 遺構内の出土遺物(5)



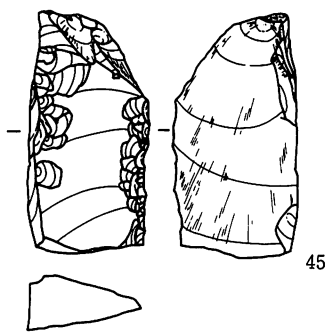
図版14 遺構内の出土遺物(6)



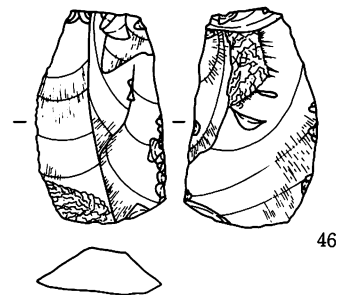
43



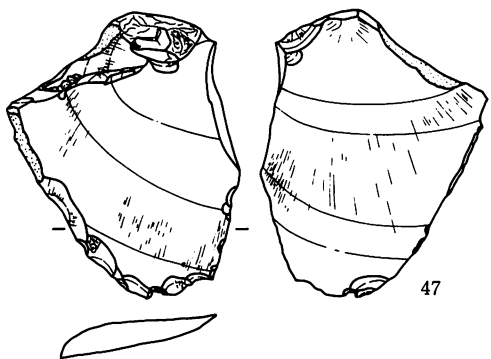
44



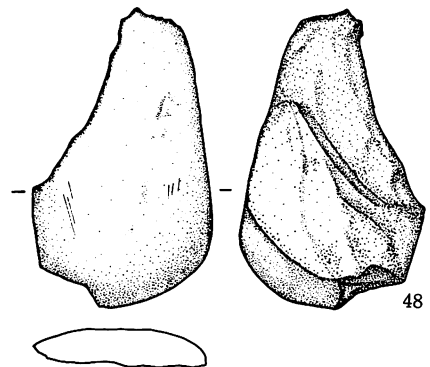
45



46



47



48

S = 1/2

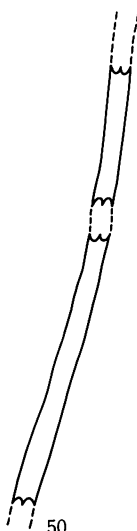
図版15 遺構内の出土遺物(7)

B I - 2 住居址(49~73) 21.9 . . . (32.5)



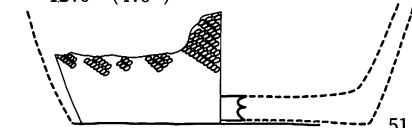
49

. . . (20.1)



50

. . . 12.0 . (4.5)

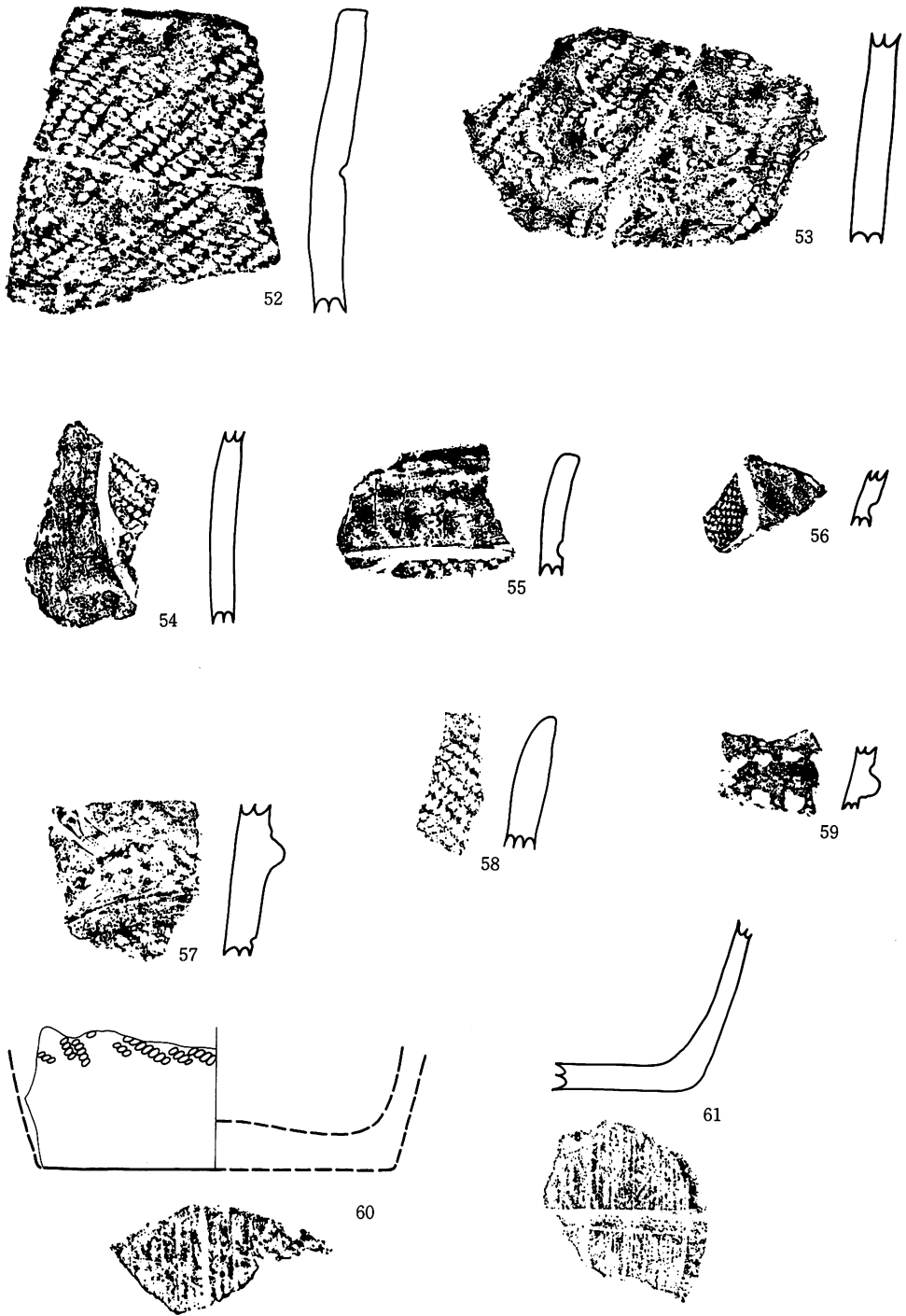


51



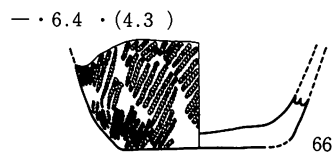
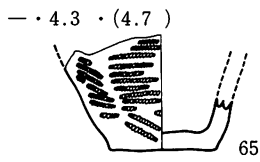
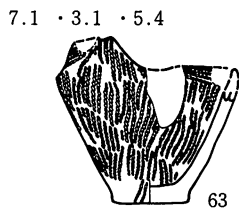
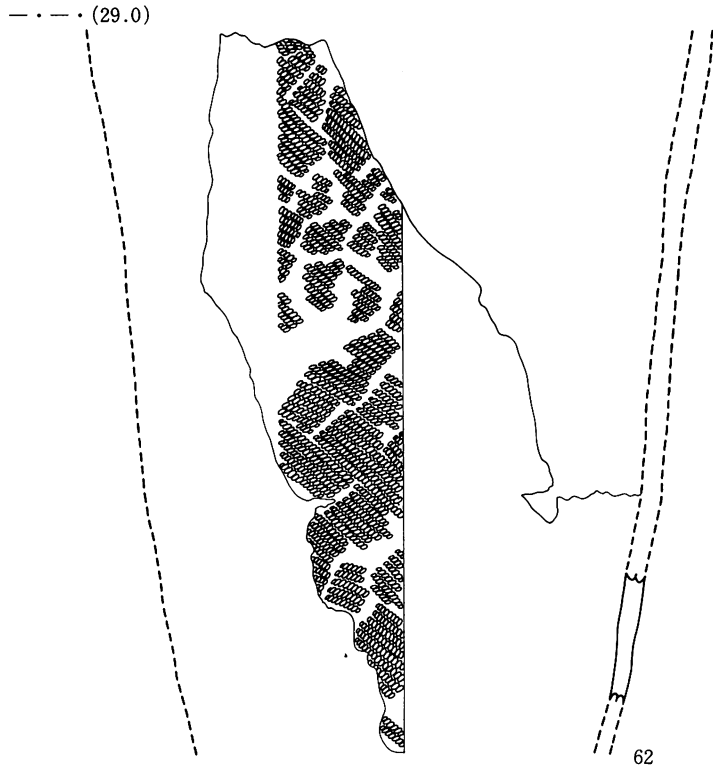
S = $\frac{1}{3}$

図版16 遺構内の出土遺物(8)



S = 1/2

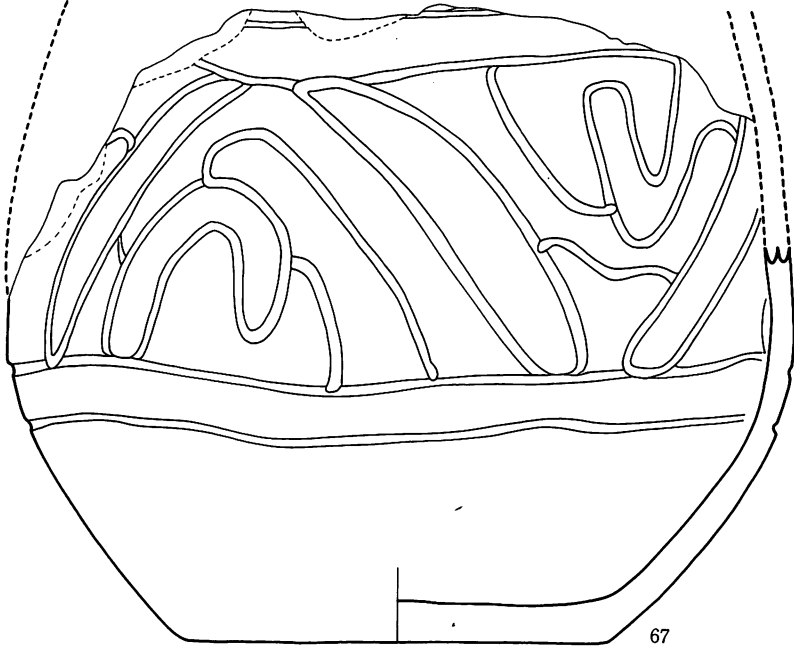
図版17 遺構内の出土遺物(9)



S = $\frac{1}{3}$

図版18 遺構内の出土遺物(10)

— 11.2 · (17.1)

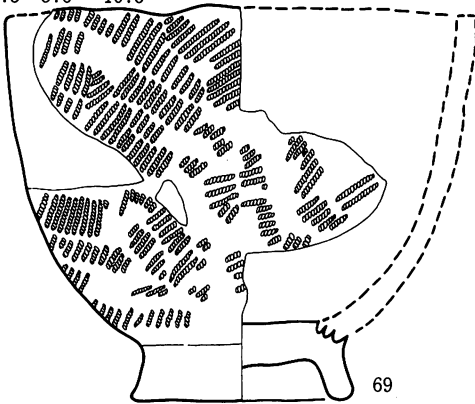


67



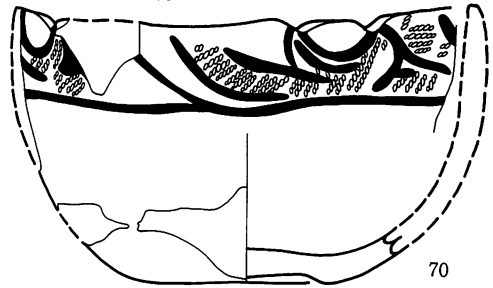
68

12.5 · 5.6 · 10.6



69

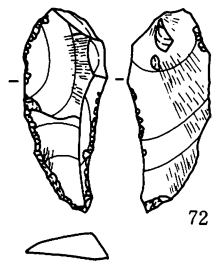
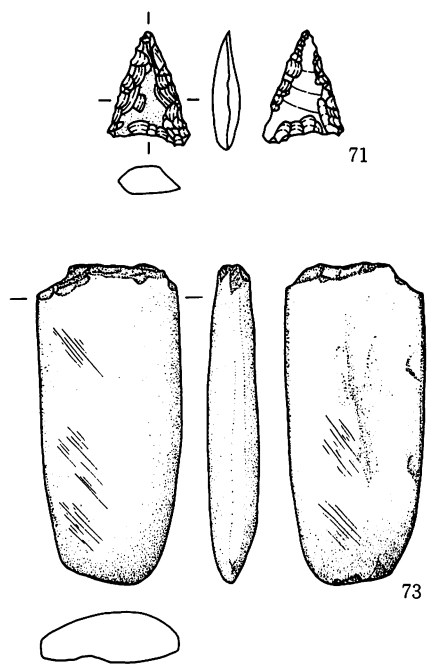
12.4 · 5.1 · 7.0



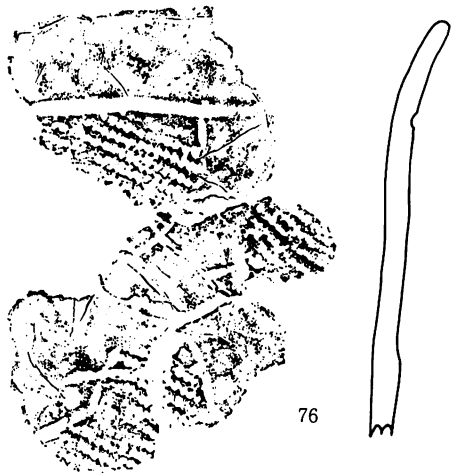
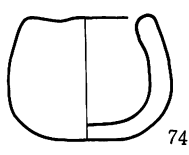
70

S = 1/2

図版19 遺構内の出土遺物(II)



B II-1 住居址(74~76)
3.4・2.0・3.3

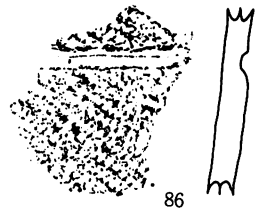
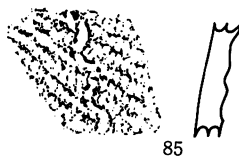
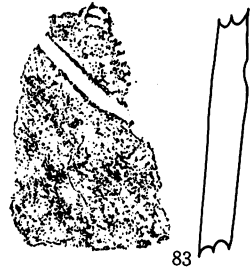
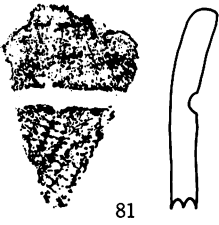
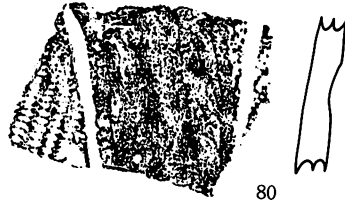
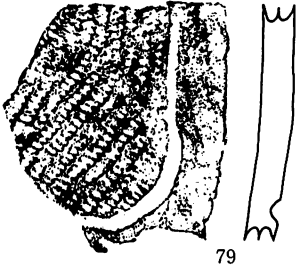


S = 1/2

図版20 遺構内の出土遺物(12)

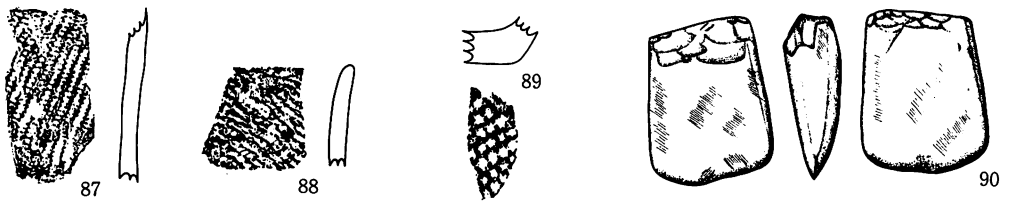
BI-51ピット(77~90)

—・7.0・(1.5)

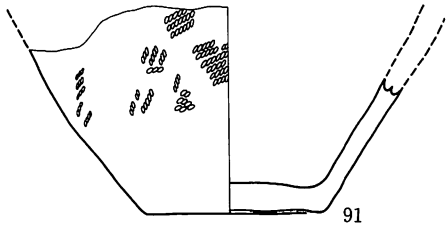


S = 1/2

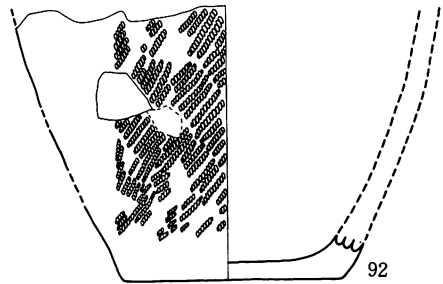
図版21 遺構内の出土遺物(13)



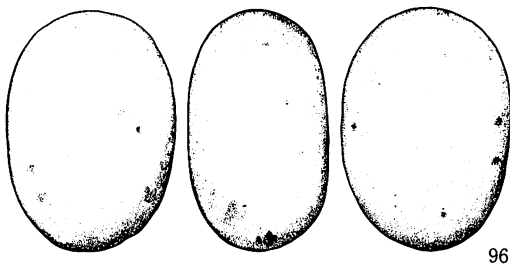
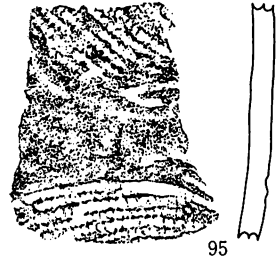
B I—53ピット(91~96)
—・7.2・(8.3)



—・8.8・(11.0)



—・5.6・(3.5)



B I—54ピット(97)



B II—51ピット(98)



S = 1/3

図版22 遺構内の出土遺物(14)

2. 遺構外の出土遺物

上の山X遺跡の遺構外の出土遺物は、土器・石器からなる。土器は、縄文時代・弥生時代のものだけであり、このほかの時代のものは出土していない。石器は、石匙1点のみが出土している。以上の遺物のほとんどは、遺跡南端の段丘崖の下に、崖錐堆積物とともに出土したものである。この項で報告される土器は、文様の明確なもの・口縁部付近・底部付近など特徴の明確なものに限っている。

(1) 土 器

縄文時代中期・晩期及び弥生時代の土器が出土している。これらの土器を時期別に分類し、それぞれ第Ⅱ群土器～第Ⅴ群土器の名称を付した。この分類は、有矢野遺跡の遺構外の出土遺物の分類に従ったものである。すなわち、縄文時代中期の土器を第Ⅱ群土器、晩期の土器を第Ⅳ群土器、弥生時代の土器を第Ⅴ群とした。これらのいずれに属するか識別しかねる土器については、別に項を改めて記述する。

①第Ⅱ群土器（図版23-1～8・写真図版25-1～6）

すべて深鉢の土器片であり、Ⅲ層又は段丘崖下位からの出土である。いずれも胴部に最大径があり、口縁部が外反する器形の土器の一部と思われる。全て地文として単節斜縄文が施されている。1～4は、縦位に綾絡文を伴い、口縁部に磨消しが巡らされている。5は、口唇に指頭状圧痕が施され、補修孔がある。6・7は、沈線と磨消技法によって施文されている。

これらの土器は、器形及び、文様から縄文時代中期末葉に比定されると思われる。

②第Ⅳ群土器（図版24-12・写真図版25-12）

段丘崖下位から出土した壺形土器1点のみである。口縁部は、内湾しながら外傾し、頸部は外反しながら内傾している。体部は、球胴形の脹みを呈し、底部は欠損している。外面全体に細かい単節斜縄文が施されているが、頸部のみ入念に研磨されている。文様体は肩部にあって、上端は連続刻目文、下端は平行沈線によって画されており、その間に陰刻の唐草風入組文が施文されている。

この土器は、器形及び文様から縄文時代晩期前葉の大洞B式に比定されるものと思われる。

③第Ⅴ群土器（図版24-13・14・写真図版25-13・14）

13は段丘崖下位、14はⅠ層からの出土である。13は、長頸甕形土器の口縁部の破片と思われ、地文として単節斜縄文が施され頸部が磨消しされており、その後頸部上半に7条の平行沈線が巡らされている。14は、胴部破片であり、地文として条が縦位に表出するように単節縄文の斜

位施転がなされ、その後上下に3条の平行沈線を巡らしその間に3条の平行沈線によって山形文を施文されている。

13・14の土器は、形態及び文様から弥生時代田舎館式土器に比定されると思われる。

④口縁部および底部（図版23-9～11・写真図版25-9～11）

9・11は段丘崖下位、10は第Ⅲ層から出土した。9・10は、ともに口縁部破片で、9は単節斜縄文、10は無節斜縄文が施されている。11は、ミニチア土器の底部付近の破片で、単節斜縄文が施されている。

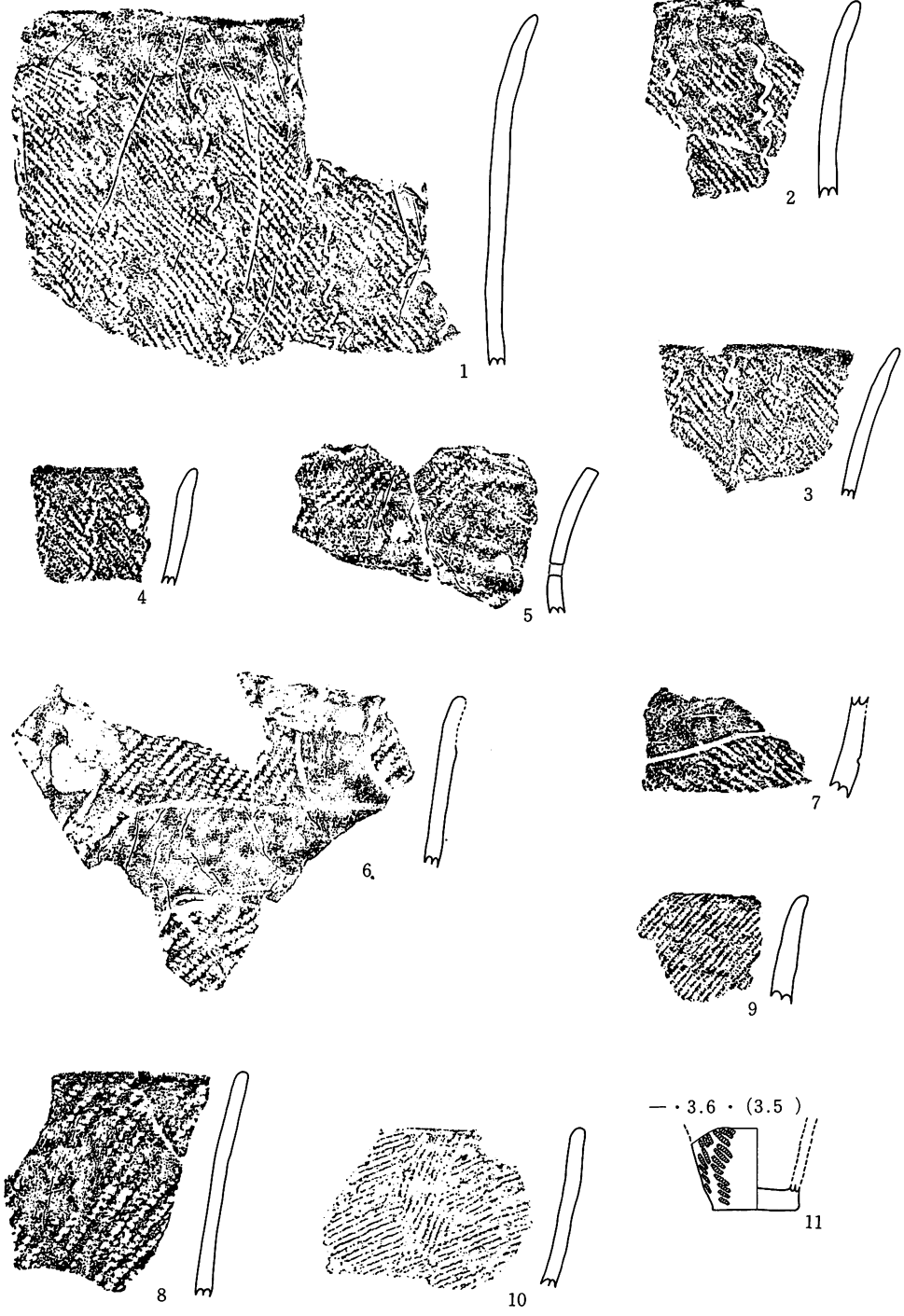
(2) 石器

石器の出土は、石匙1点のみである。

①石匙（図版24-15・写真図版25-15）

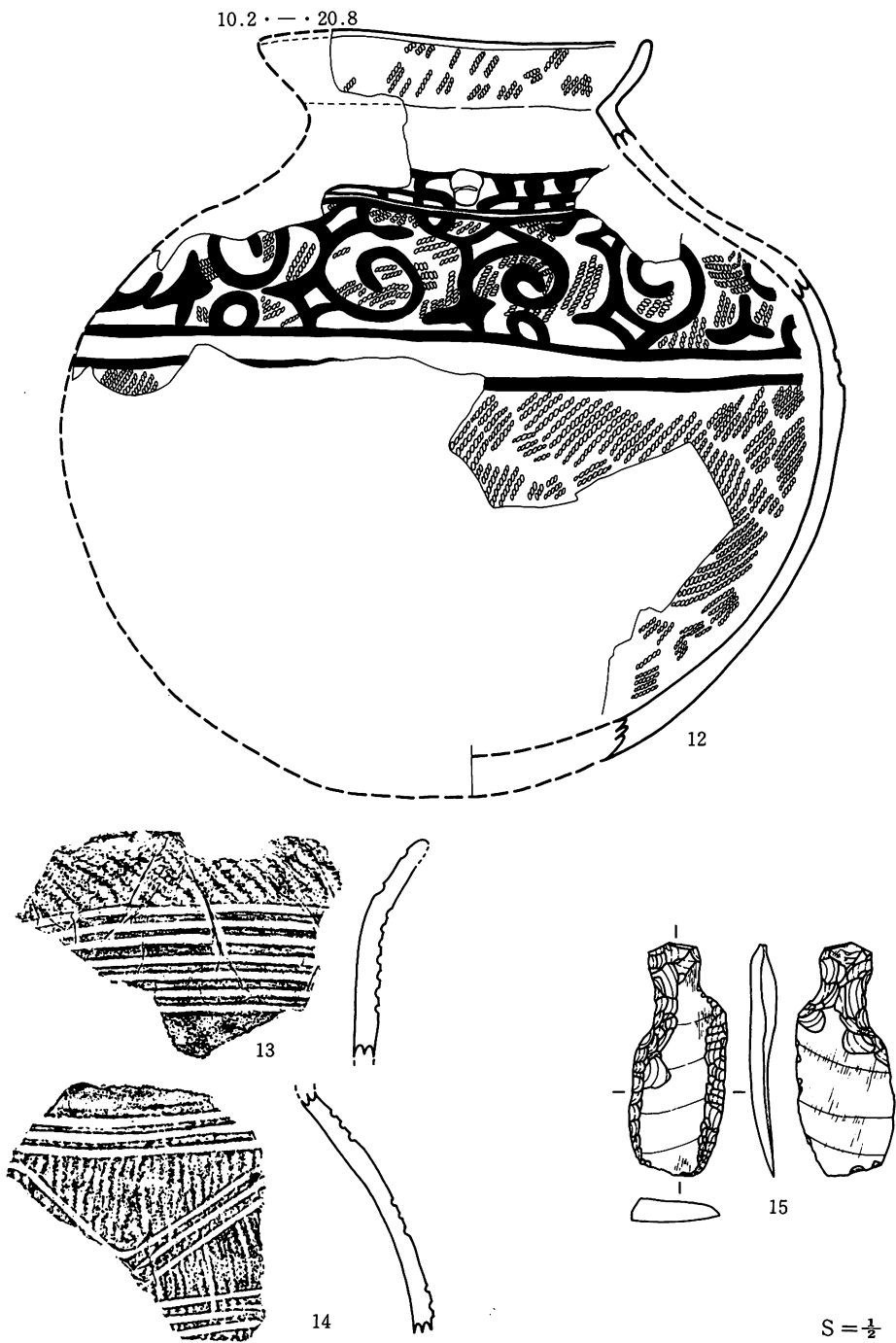
石器の長軸方向の一端につまみ部をもつ縦形石匙である。つまみ部は、両面に調整剝離が加えられ形成されている。刃部は、長軸に平行な縁辺の片面の調整剝離によって形成されている。

遺構外(1~15)



S = $\frac{1}{3}$

図版23 遺構外の出土遺物(1)



図版24 遺構外の出土遺物(2)

3. ま と め

上の山X遺跡の発掘調査の結果、検出された遺構、および出土遺物は、これまで述べた通りである。しかしながら、これらについては、上の山X遺跡の南端のわずか一部分の調査によるものであり、遺跡全体の性格を反映させ得るものであるかは明確にし得ない。但し、小面積の調査ながら、多種の遺構が検出されたことは、上の山X遺跡全体の時代変遷に興味を深くすることができるものである。以下検出遺構・出土遺物について要約した。

(1) 遺 構

① 竪穴住居址

当遺跡で検出された住居址は、縄文時代のもの3棟と平安時代のもの1棟である。

a. 縄文時代竪穴住居址

● 時期

構築時期を明確に決定できる精製土器の出土は破片のみであったため断定はできない。しかし、粗製深鉢の器形なども考え合せ、縄文時代中期末葉に位置づけられる住居址は2棟、中期末葉から後期前葉に位置づけられる住居址は1棟である。

● 規模および形状

浸蝕や、調査区外へ広がっているなど、完全に原形を呈する住居址はない。確認された部分から、B I-1住居址は最大径515cmを計り隅丸正(長)方形、B I-2住居址は最大径900cmを計り形状不明、B II-1住居址は壁が確認されないため規模・形状とも不明となっている。以上の中、B I-2住居址は、確認される部分でさえ最大径9mと大きく、これが楕円形の短軸である可能性もある。いずれにしても大型の住居址であろう。

● 柱穴配置

B I-1及びB I-2住居址内には、柱穴は確認されなかった。B II-1住居址については炉を取り囲むように多くの柱穴状ピットが確認されたが、その配置については、調査区外へ遺構が広がっているため不明である。

● 炉の形態

石組炉と地床炉の2種が検出されている。石組炉をもつ住居址は、B II-1住居址である。地床炉をもつ住居址は、B I-1・B I-2住居址である。B I-2住居址は、床上に盛り上がった地床炉と、掘り込んだ地床炉の2種をあわせもっている。

b. 平安時代竪穴住居址

● 時期

この住居址は、保戸沢遺跡報告書に於ける住居址や、未報告であるが上の山Ⅶ遺跡の平安時代住居址と同類のものである。構築時期については、埋土から白色細粒浮石降下以前ではあるが、具体的な時期については、今後の検討を要する。

●規模および形状

この住居址の規模は、4.75m×4.5mのほぼ方形であり、カマドは南向きで西寄りに位置している。保戸沢遺跡調査報告書に於ける1号～5号址の中で、この住居址と同規模のものはないが、形態的には同類であり、特にも2号址に似る。又未報告ではあるが、上の山Ⅶ遺跡で検出されている住居址には、この住居址と同類のものが多い。

●カマド

煙道は短く、壁に沿って急に上昇している。両袖は、礫を芯としてシルトで固定し、支脚として礫を燃焼部中央に埋設している。このカマド形態は、安代町内でも秋田県寄りと秋田県に検出された住居址に多くみられる。

●柱穴配置

柱穴は、床面を掘り下げた状態に於いても検出されなかった。

② ピット

検出されたピットは8基である。規模・形態とも個々に異なり、類別することはできない。但し、平安時代に位置づけられるAⅠ-51ピットは方形を呈し、縄文時代の円形のものとは異質である。縄文時代に位置づけられるフラスコ型のAⅡ-51・BⅠ-53ピットは、副穴をもつということで特徴的なものであろう。この副穴をもつピットは、先の有矢野遺跡に於いても検出されており、他資料とともに今後の検討を要する。

③ 陥し穴状遺構

検出された陥し穴状遺構は3基であり、規模・形態から次の2組に分けられる。

A：BⅠ-101・BⅠ-102陥し穴状遺構、底部軸長比 $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 、深さ172～184cm

B：AⅡ-101陥し穴状遺構 底部軸長比 $\frac{1}{3}$ 以下、深さ120cm

底部軸長比に於いては、大きな差はないが、開口部短軸長では、A(109～132cm)はB(60cm)の倍に近い。又、埋土に於いても差異がみられ、Aは褐色土系、Bは暗褐色系である。

(2) 遺物

縄文土器は、縄文時代中期末葉～晩期の広きにわたるが、住居址に伴うものは、縄文時代中期末葉～後期前葉に限られている。出土量の多いものは、粗製深鉢形の土器片である。復元された土器は、最大径が胴部にあり口縁にかけゆるやかにくびれをもつものが多い。施工方法はその大半が、縦位の綾絡文を伴う単節斜縄文又は沈線と磨消技法によるものである。その他量

的に少ないが、十腰内I式・大洞B式に比定されるものも出土している。

弥生土器は、2点のみで壺形土器の破片であり、田舎館式に比定されるものである。

土師器は、AⅡ-1住居址から得られたもので、甕と坏の2種類であり、その多くは甕の破片である。甕の調整技法は、大別2方法に分けられる。その1つは、口縁部をつまみ出して横ナデを施しその後くびれ直下まで縦方向のヘラケズリを施す方法である。このケズリの方向はほとんどが口縁に向うものである。大半は、この方法によって調整されている。他の技法は、体部にヘラケズリを施した後、口縁部に回転台を使用した横ナデを施す方法である。この技法によるものは少ない。坏については、底部破片であるため、器形は不明である。成形上の技法としてロクロ使用痕が、底部付近にみとめられる。甕については、保戸沢遺跡出土のものと同類であり、粗雑なヘラケズリにその特徴が見い出される。今後上の山Ⅶ遺跡出土遺物などの比較検討を必要としよう。

石器は、合計14点出土している。出土数が少ないため、その特徴については不明である。

表1 上の山Ⅹ遺跡遺構名訂正表

番号	種別	旧遺構名	新遺構名
1	住居址	AⅠ-1	AⅡ-1
2	住居址	BⅡ-3	BⅠ-1
3	住居址	BⅠ-2	BⅠ-2
4	住居址	BⅠ-1	BⅡ-1
5	ピット	AⅡ-1	AⅠ-51
6	ピット	AⅠ-1	AⅡ-51
7	ピット	BⅡ-2	BⅠ-51
8	ピット	BⅡ-5	BⅠ-52
9	ピット	BⅠ-3	BⅠ-53
10	ピット	BⅠ-4	BⅠ-54
11	ピット	BⅠ-5	BⅠ-55
12	ピット	BⅠ-6	BⅡ-51
13	陥し穴状遺構	AⅠ-3	AⅡ-101
14	陥し穴状遺構	BⅡ-1	BⅠ-101
15	陥し穴状遺構	BⅡ-4	BⅠ-102

表2 上の山X遺跡出土石器計測表

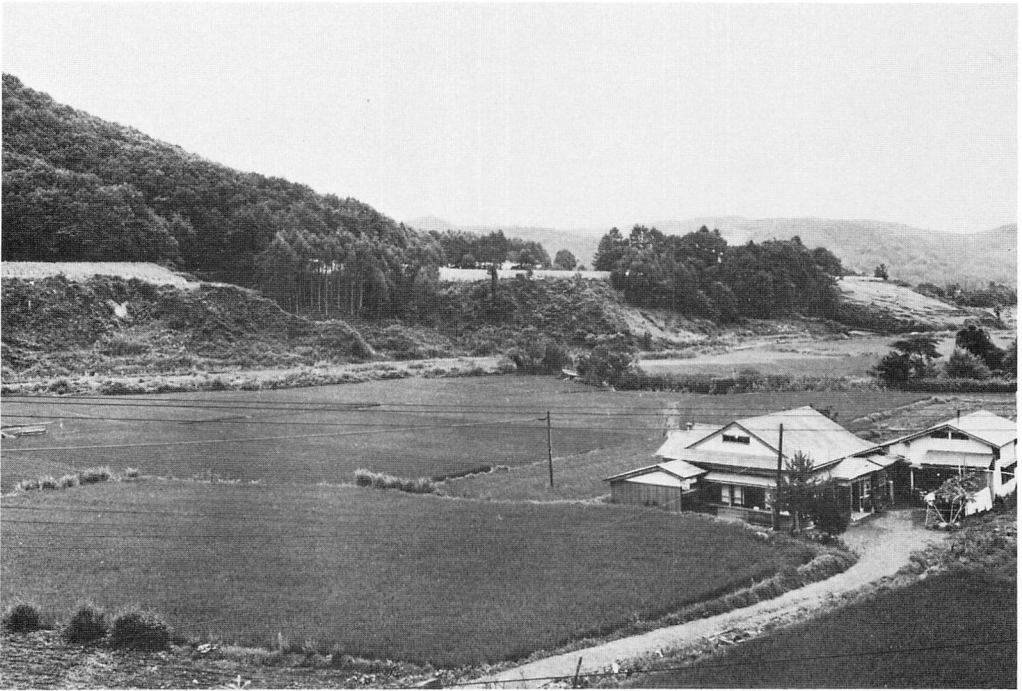
番号	出土地区	器種	図版番号	法 量				石 質
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	
1	A I-1住居址	磨石	10-21	13.5	8.4	6.6	1,140	安山岩
2	B I-1住居址	磨石	13-42	10.4	8.8	5.8	800	安山岩
3	B I-1住居址	スクレーパー	14-43	3.9	2.4	1.13	11.05	玻璃質安山岩
4	B I-1住居址	スクレーパー	14-44	5.1	4.4	1.75	23.65	玻璃質石英安山岩
5	B I-1住居址	スクレーパー	14-45	6.4	3.2	1.53	35.65	玻璃質安山岩
6	B I-1住居址	不定型石器	14-46	5.6	3.4	1.53	29.65	玻璃質安山岩
7	B I-1住居址	不定型石器	14-47	7.6	5.8	1.45	53.7	玻璃質安山岩
8	B I-1住居址	磨製石斧	14-48	7.9	4.8	1.13	49.35	角閃石岩
9	B I-2住居址	石鏃	19-71	2.8	2.2	0.71	3.5	玻璃質安山岩
10	B I-2住居址	スクレーパー	19-72	5.3	2.2	0.73	8.15	玻璃質安山岩
11	B I-2住居址	磨製石斧	19-73	8.5	3.8	1.33	80	斑柎岩
12	B I-51ピット	磨製石斧	21-90	6.4	5.0	2.03	120	輝緑凝灰岩
13	B I-53ピット	磨石	21-96	9.65	6.8	5.7	580	花崗閃緑岩
14	遺 構 外	石匙	23-15	6.4	2.6	0.75	12.3	玻璃質石英安山岩

表3 上の山X遺跡¹⁴C試料測定結果表

番号	試料採取遺構名	日本アイソトープ協会コード	岩手県埋文センターコード	¹⁴ C 年 代
1	A II-1住居址(床面)	N-3632	I MNo16	1120±75y B. P. (1090±75y B. P.)
2	A II-1住居址(埋土)	N-3633	I MNo17	1190±90y B. P. (1150±85y B. P.)

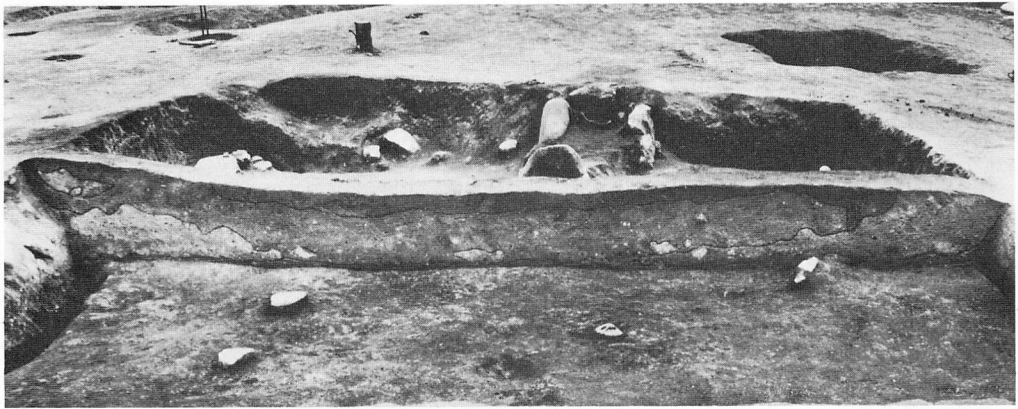
(カッコ内は Libby の値5568年にもとづいて計算されたもの)

写 真 图 版



遺跡遠景

写真図版 Ⅰ



a. A II-1 住居址(埋土断面)



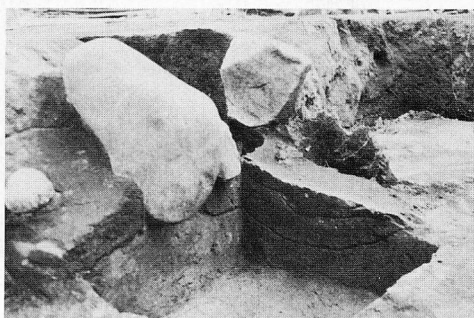
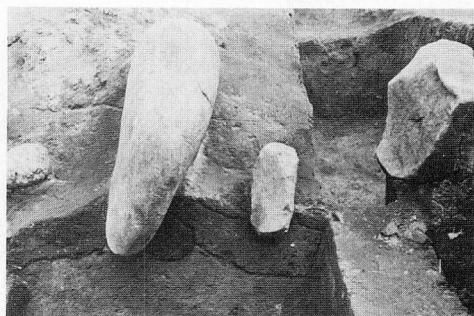
b. A II-1 住居址



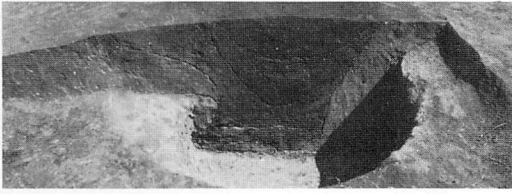
a. A II-1 住居址カマド(オ1次)



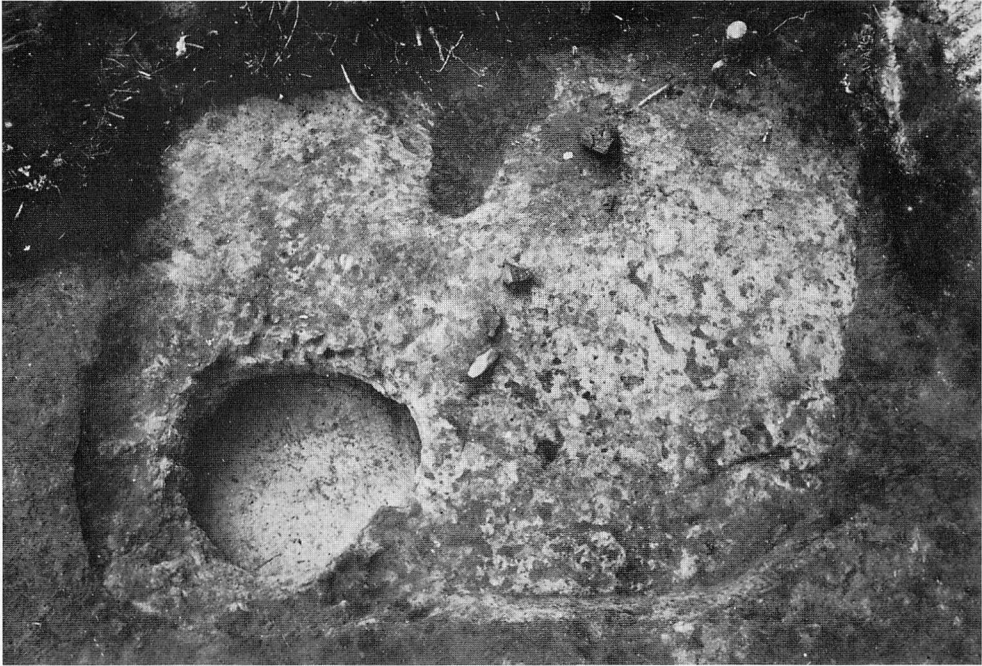
b. A II-1 住居址カマド(オ2次)



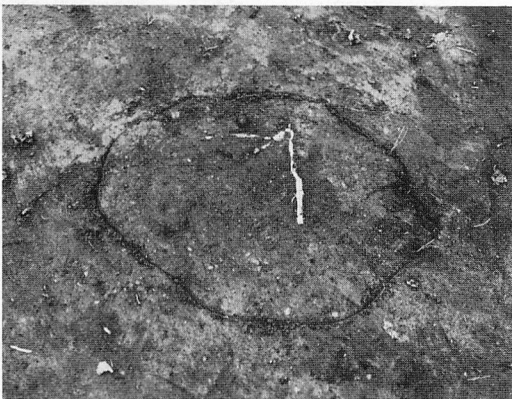
c. A II-1 住居址カマド(断割)



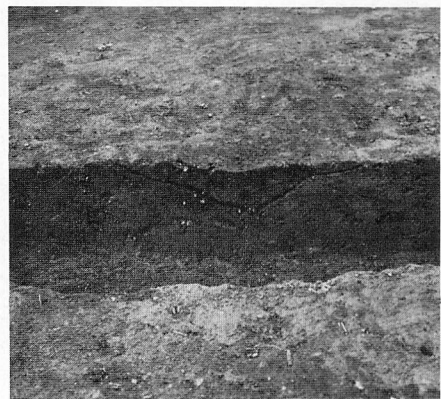
a. B I - I 住居址・B I - 51ピット・B I - 52
ピット(埋土断面)



b. B I - I 住居址



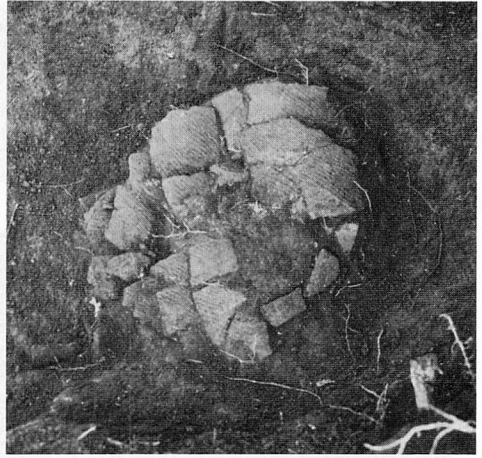
c. B I - I 住居址地床炉



d. B I - I 住居址地床炉(断面)



a.



b.



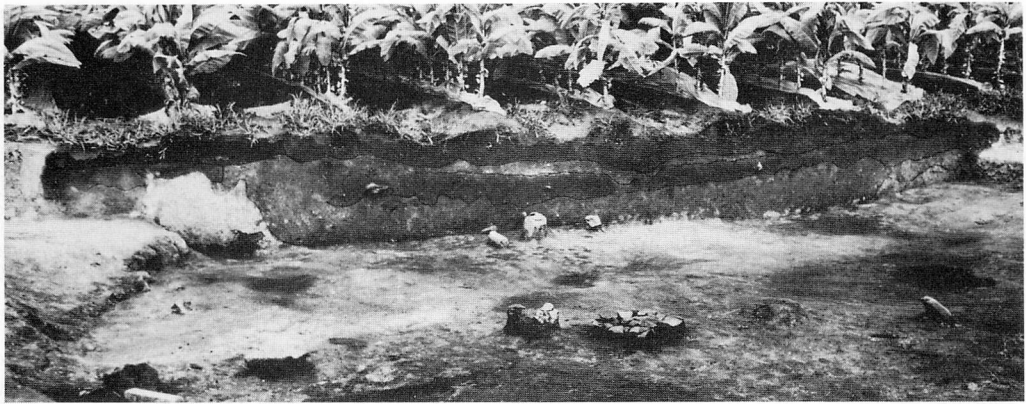
c.



d.

a. b. c. d. B I - I 住居址(土器出土状況)

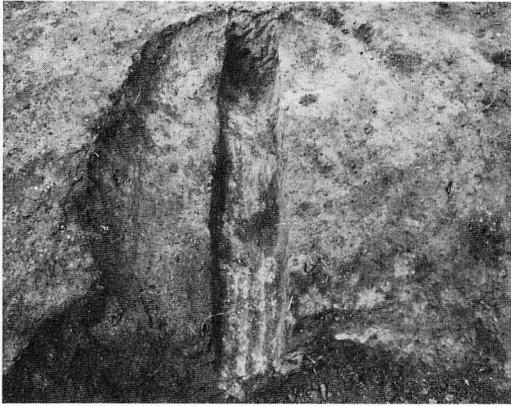
写真図版 5



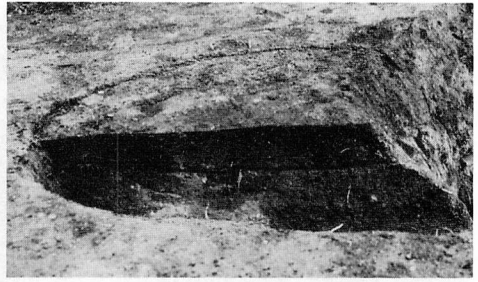
a. B I - 2 住居址(埋土断面)



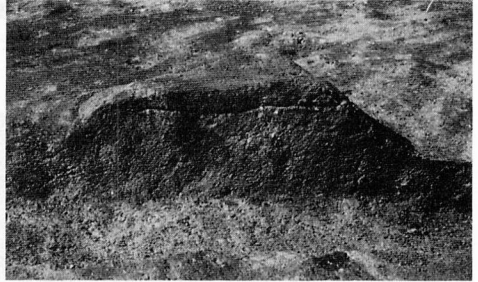
b. B I - 2 住居址



a. B I - 2 住居址炉



b. B I - 2 住居址炉(断面)



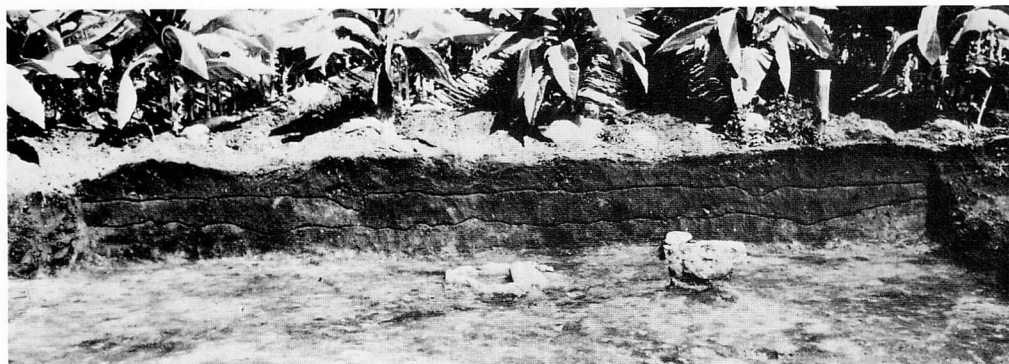
c. B I - 2 住居址炉(断面)



d. B I - 2 住居址(埋土下位土器出土状况)



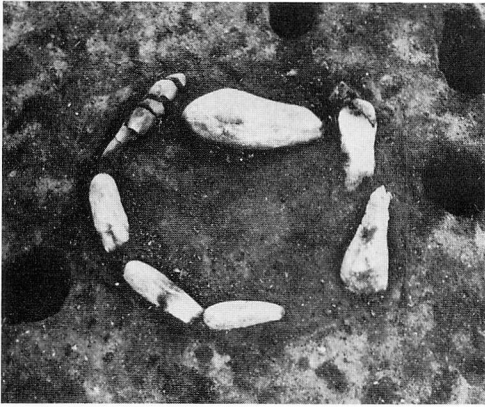
e. B I - 2 住居址(床面土器出土状况)



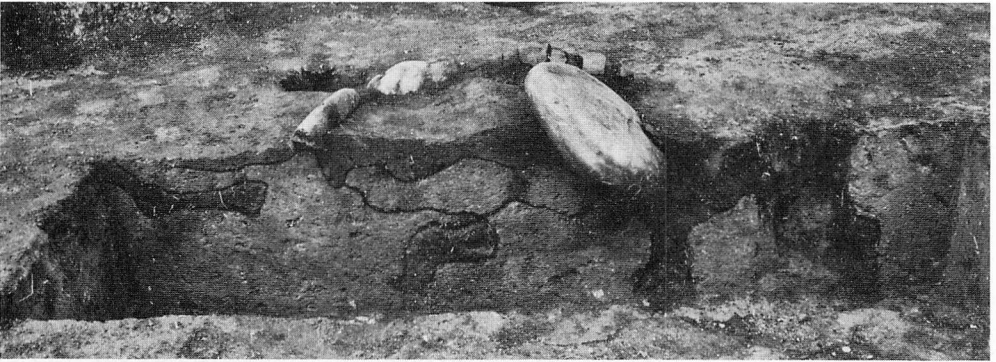
a. B II— I 住居址(埋土断面)



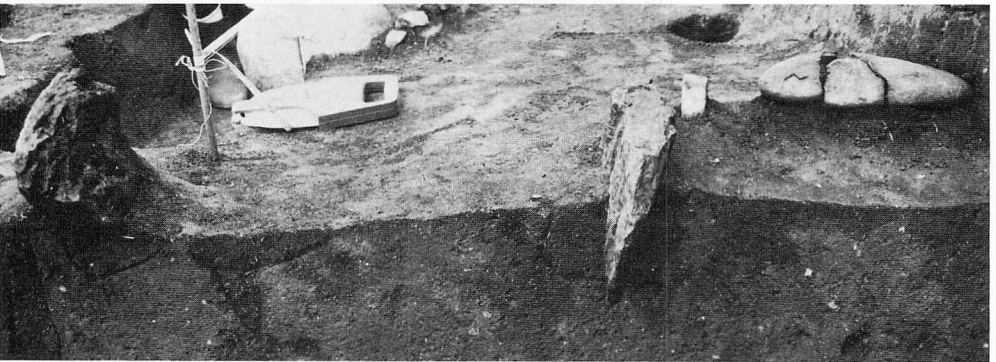
b. B II— I 住居址



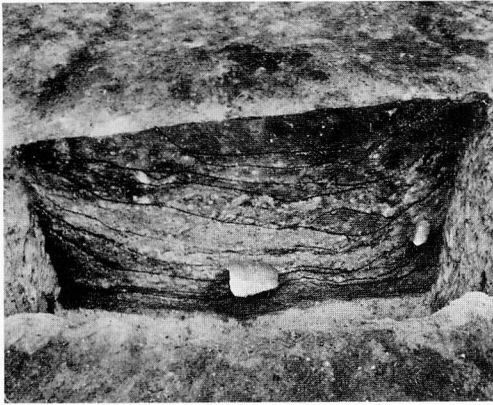
a. B II-1 住居址炉



b. B II-1 住居址炉(断面)



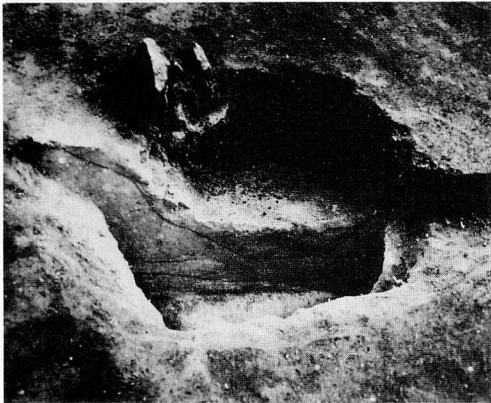
c. B II-1 住居址入口状施設(断面)



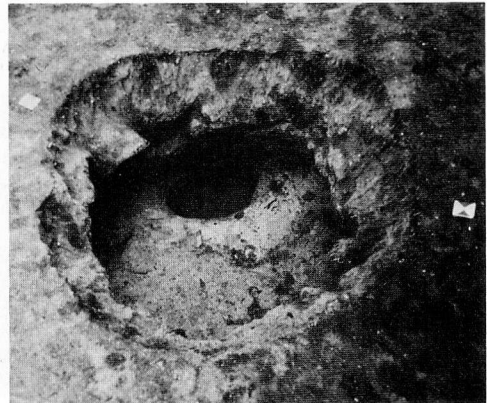
a. A I-51ピット(埋土断面)



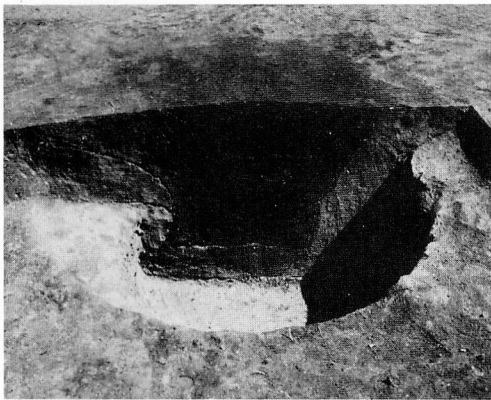
b. A I-51ピット



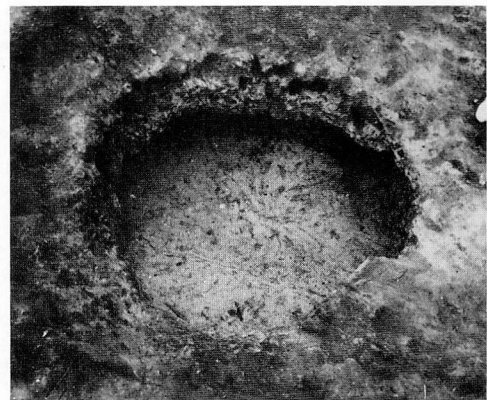
c. A II-51ピット(埋土断面)



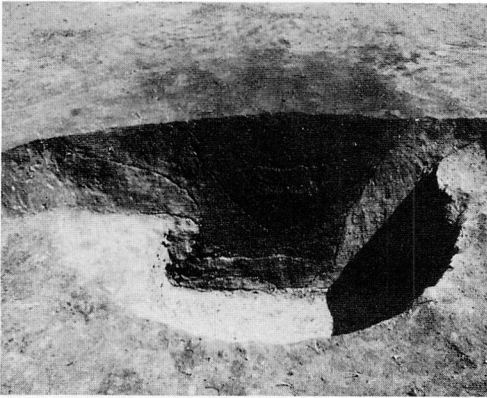
d. A II-51ピット



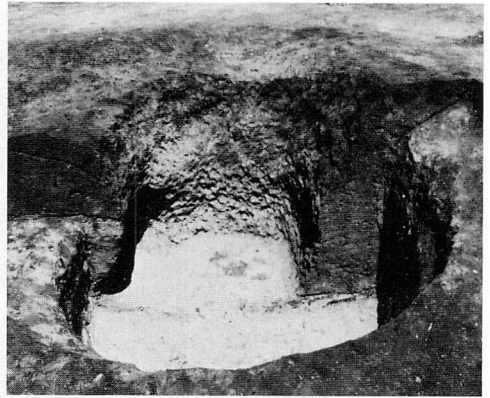
e. B I-51ピット・B I-52ピット(埋土断面)



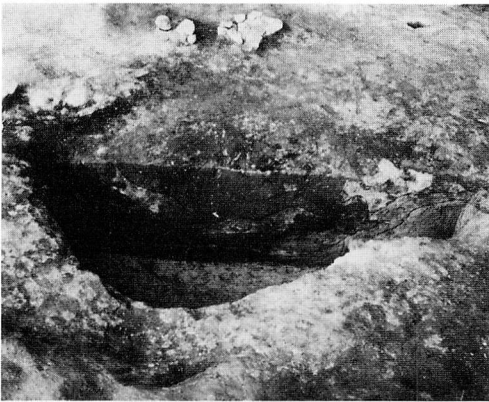
f. B I-51ピット



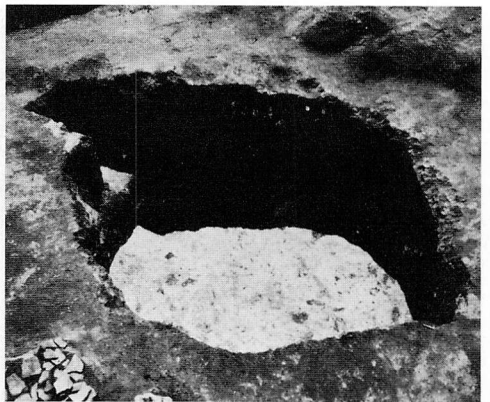
a. B I-51ピット・B I-52ピット(埋土断面)



b. B I-52ピット



c. B I-53ピット(埋土断面)



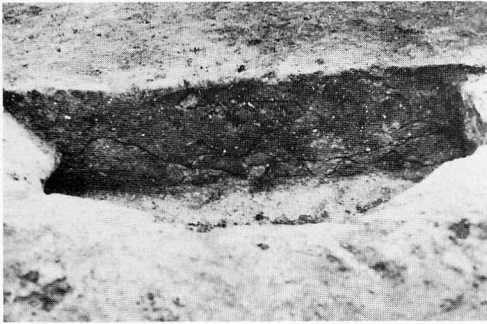
d. B I-53ピット



e. B I-54ピット(埋土断面)



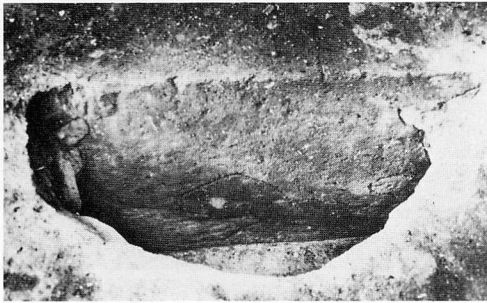
f. B I-54ピット



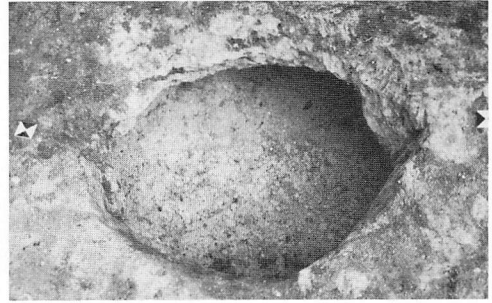
a. B I-55ピット(埋土断面)



b. B I-55ピット



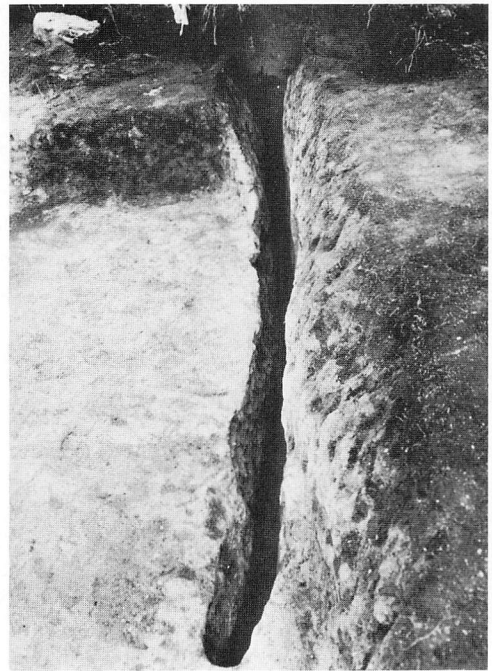
c. B II-51ピット(埋土断面)



d. B II-51ピット



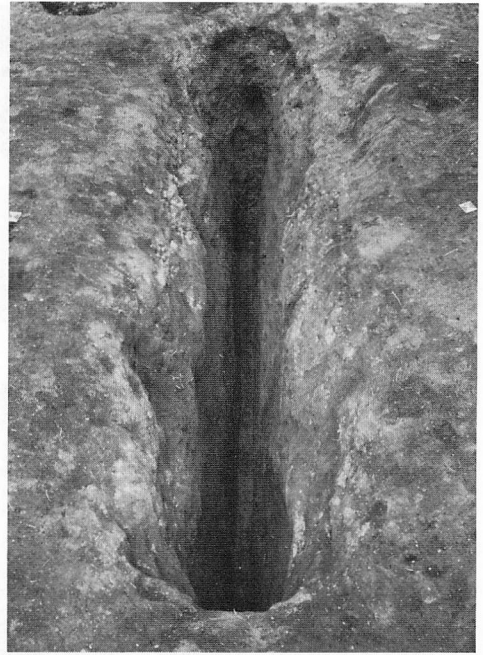
e. A II-101 陥し穴状遺構(埋土断面)



f. A II-101 陥し穴状遺構



a. B I-101 陥穴状遺構(埋土断面)



b. B I-101 陥穴状遺構

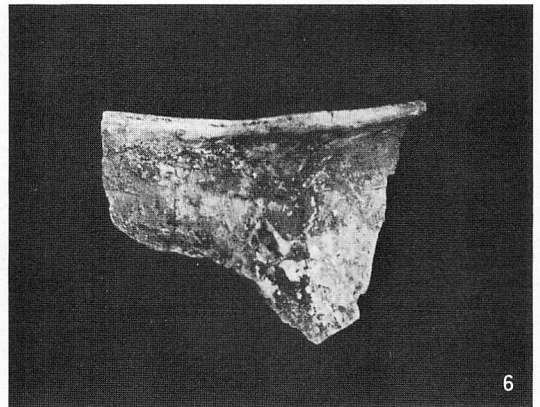
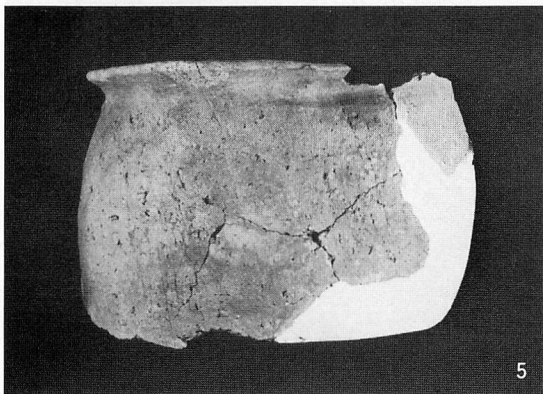
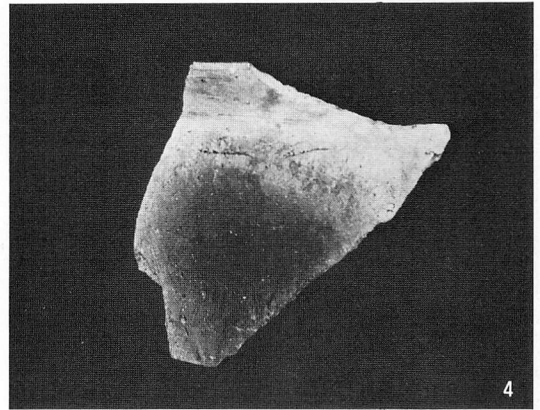
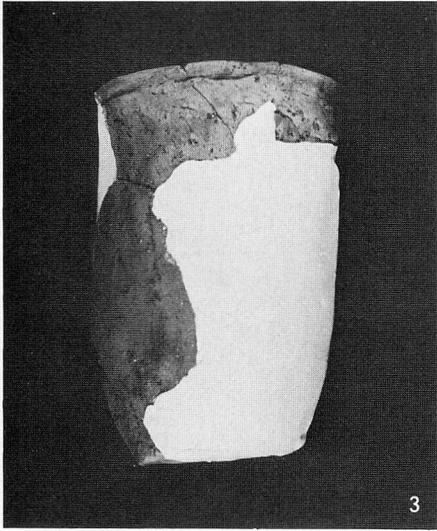
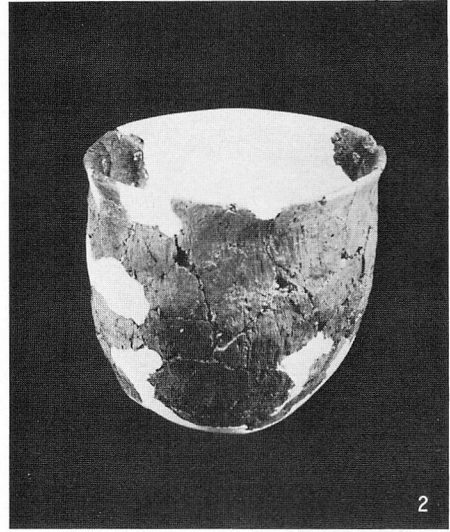
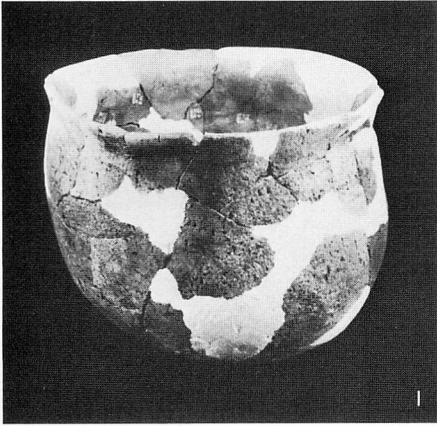


c. B I-102 陥穴状遺構(埋土断面)

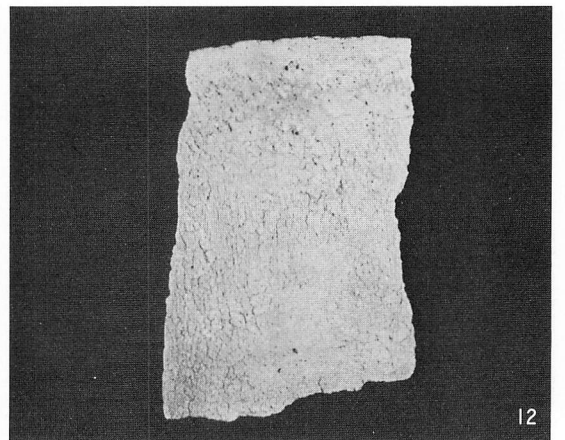
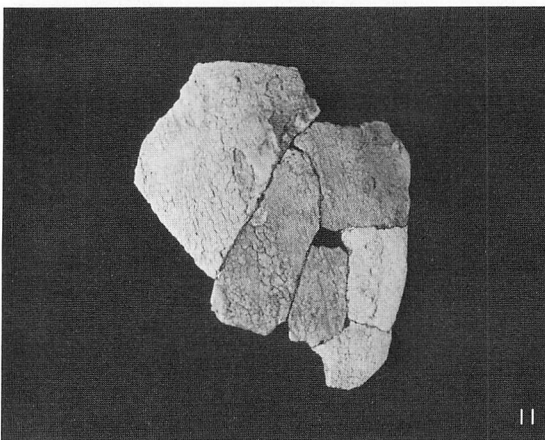
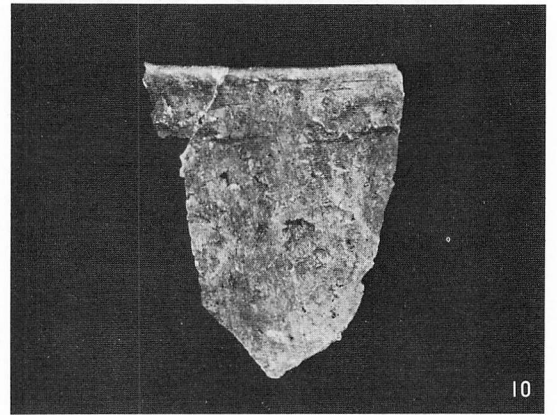
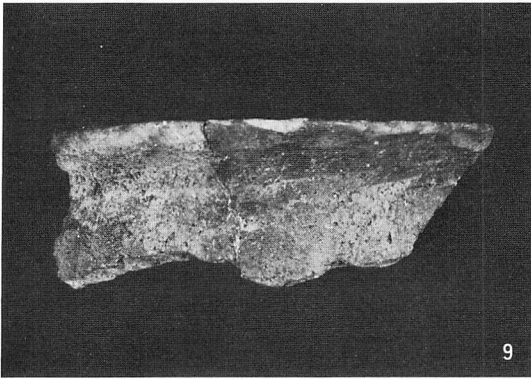
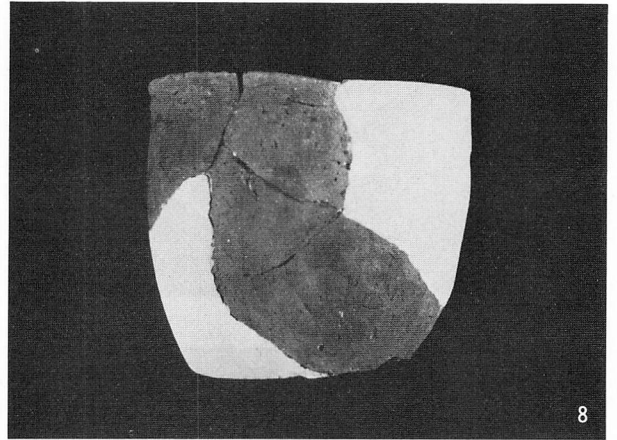


d. B I-102 陥穴状遺構

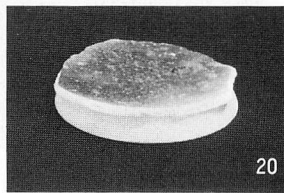
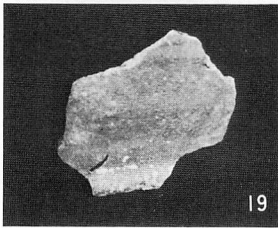
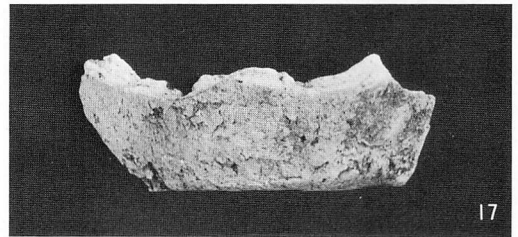
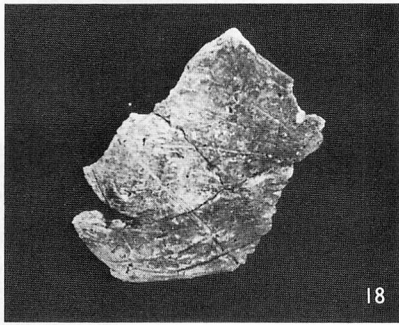
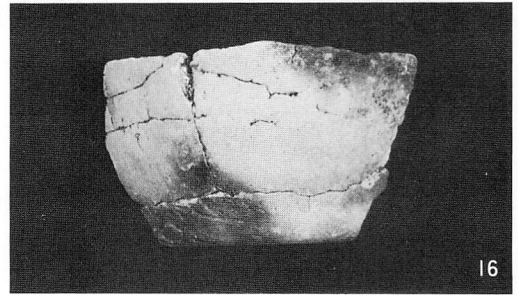
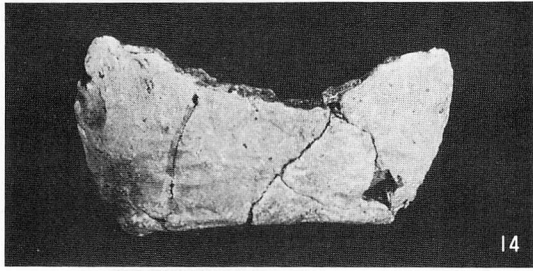
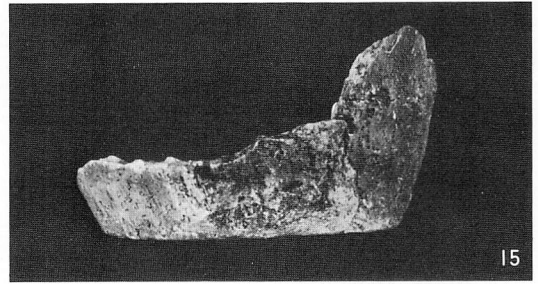
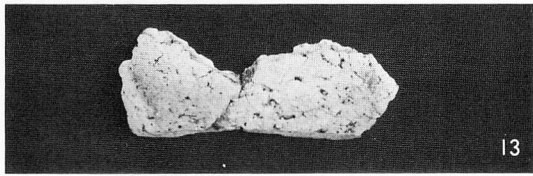
A I - I 住居址(1~21)



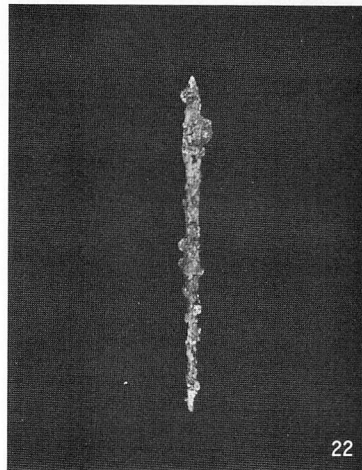
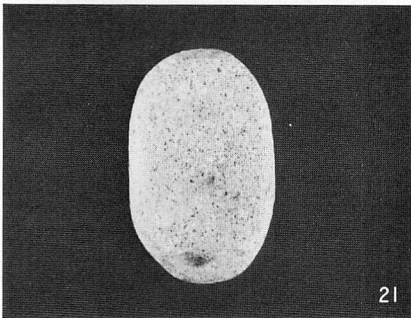
写真図版14 遺構内の出土遺物(1)



写真図版15 遺構内の出土遺物(2)

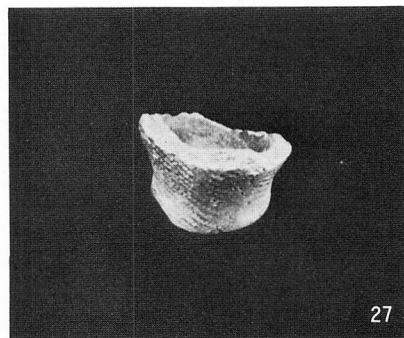
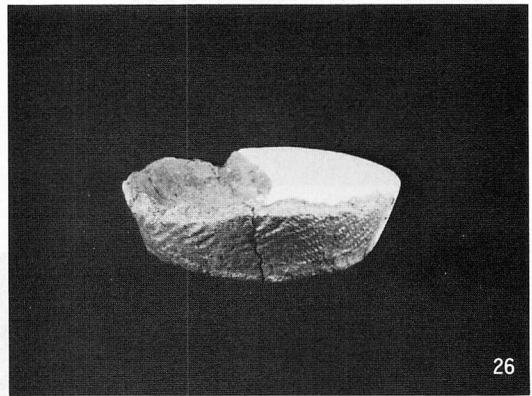
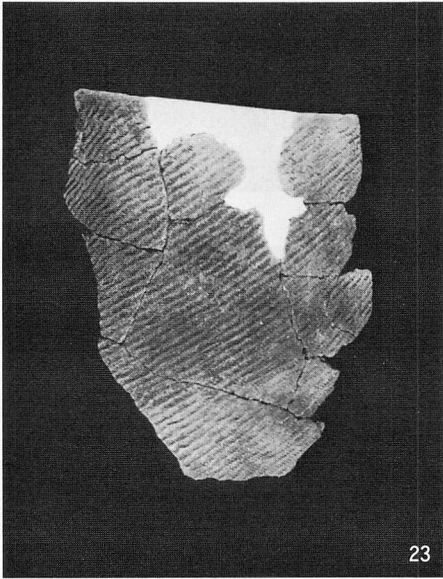


A I-51ピット(22)

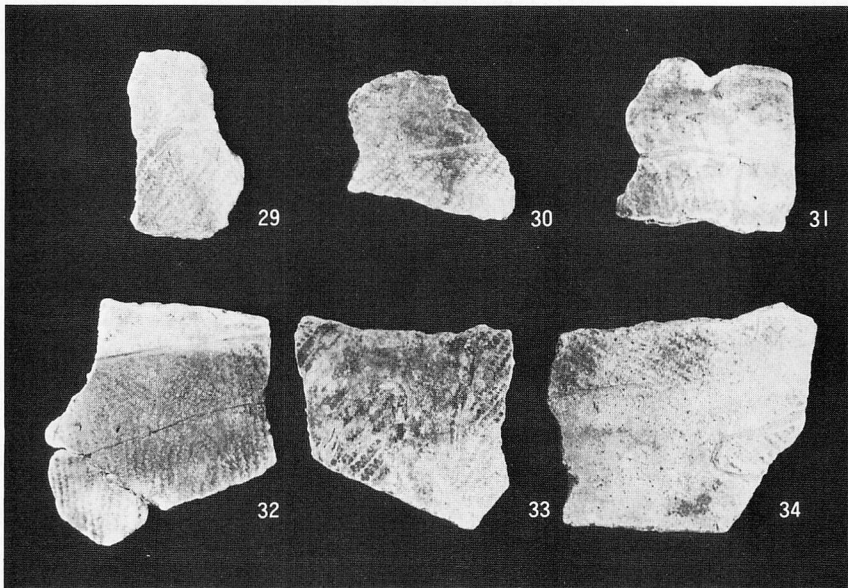
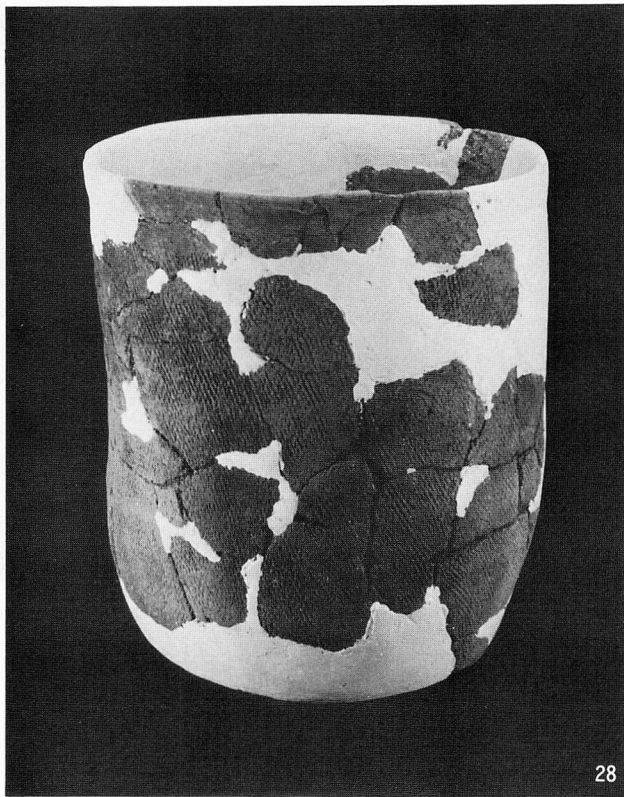


写真図版16 遺構内の出土遺物(3)

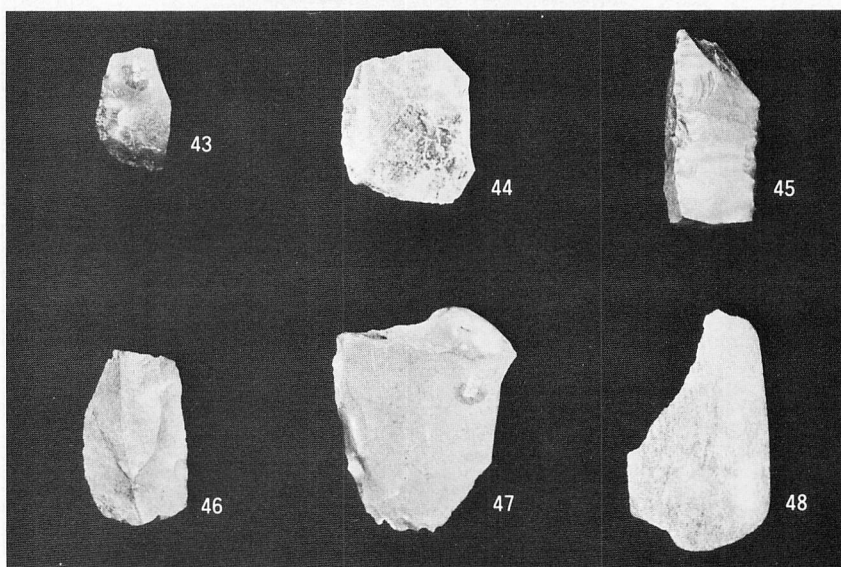
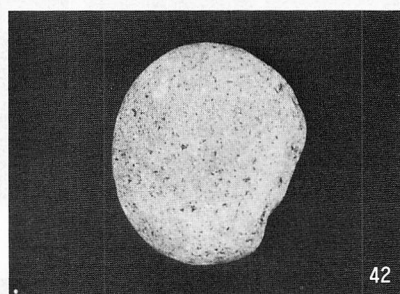
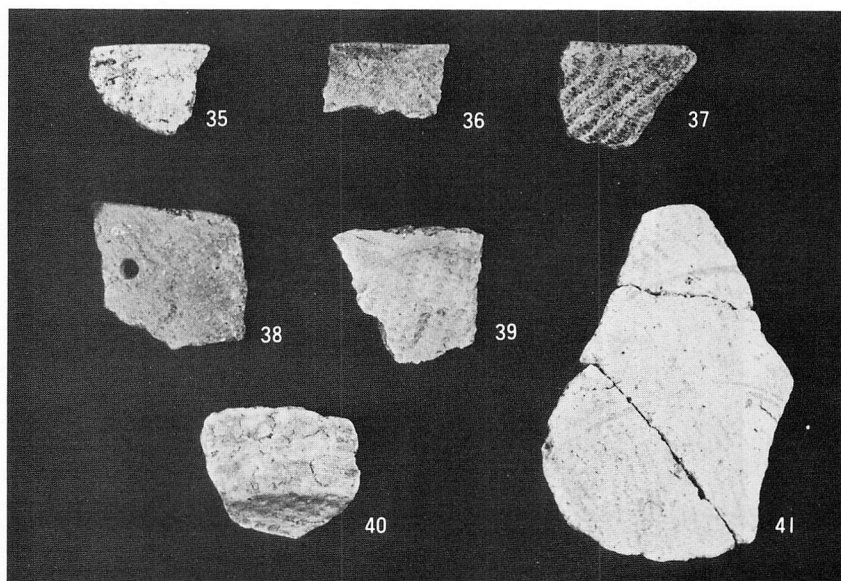
B I - I 住居址(23~48)



写真図版17 遺構内の出土遺物(4)

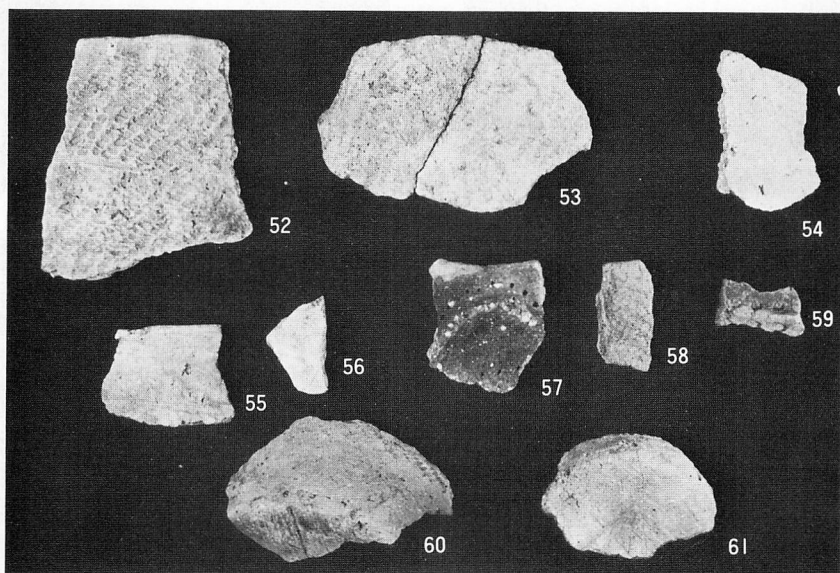
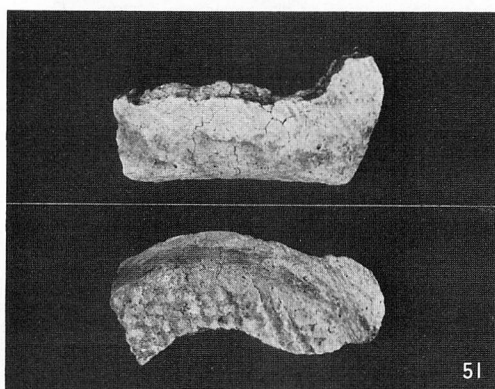
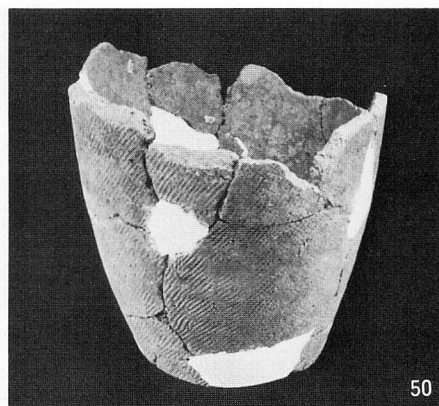
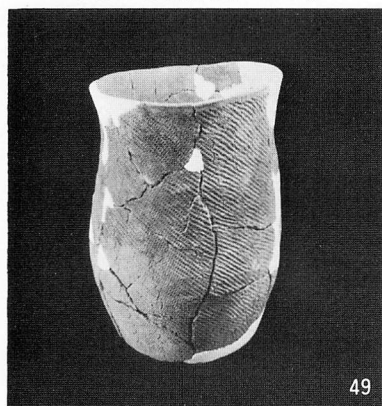


写真図版18 遺構内の出土遺物(5)

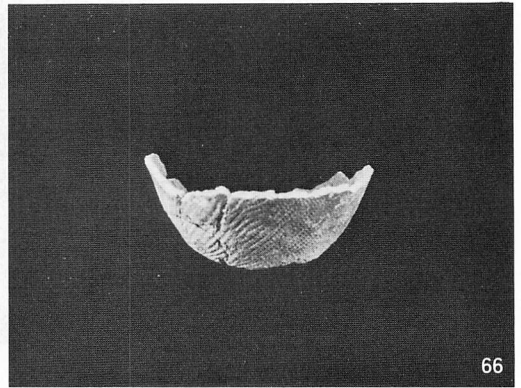
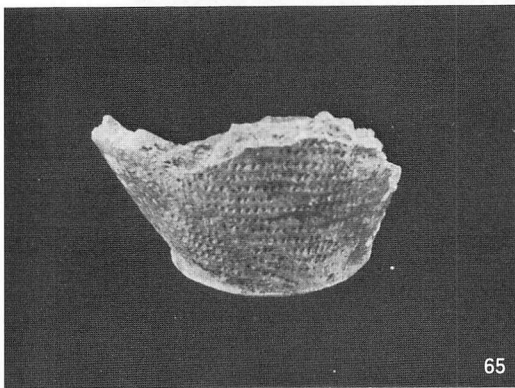
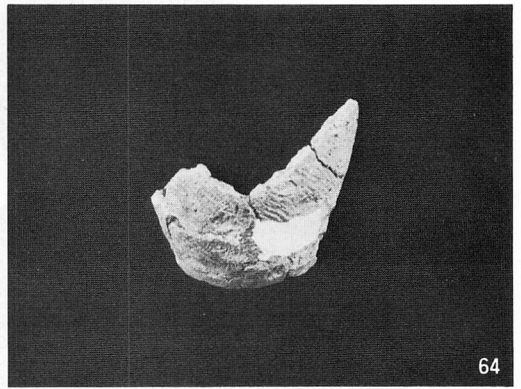
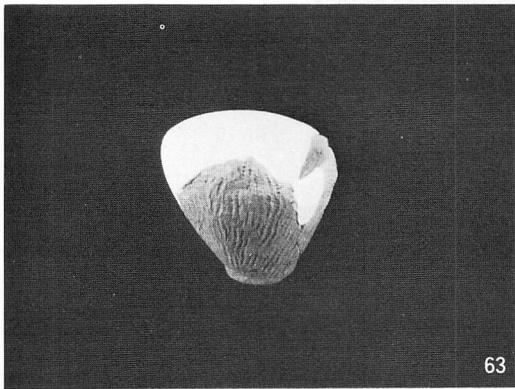
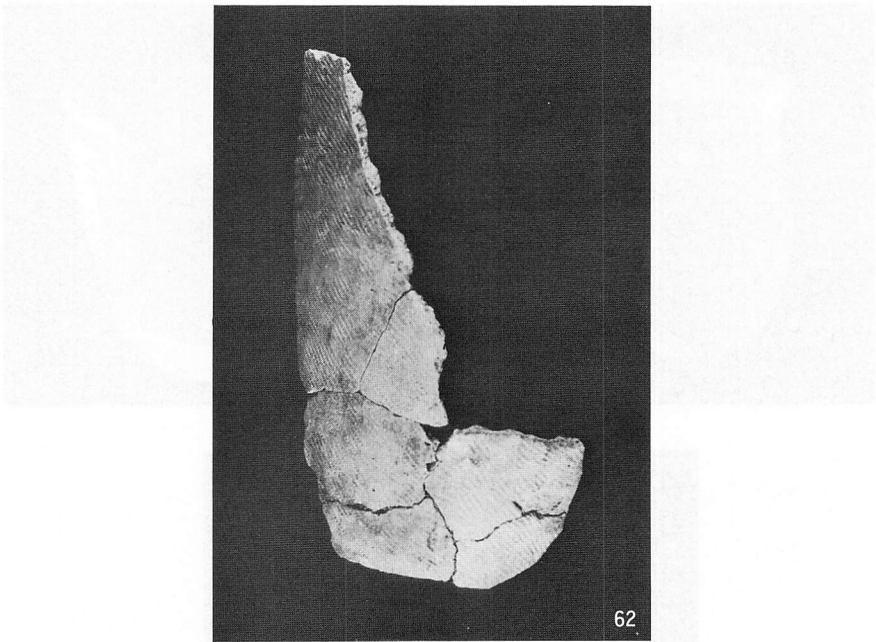


写真図版19 遺構内の出土遺物(6)

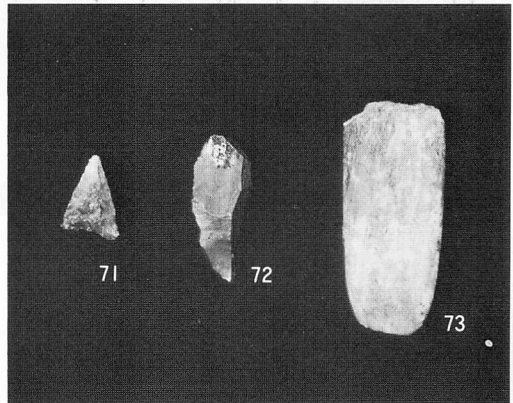
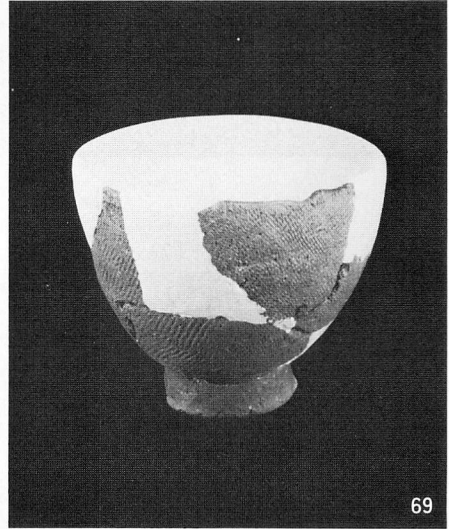
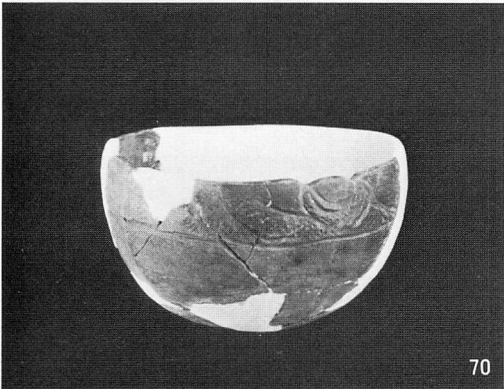
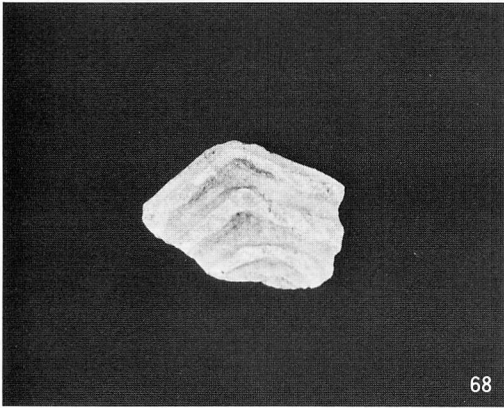
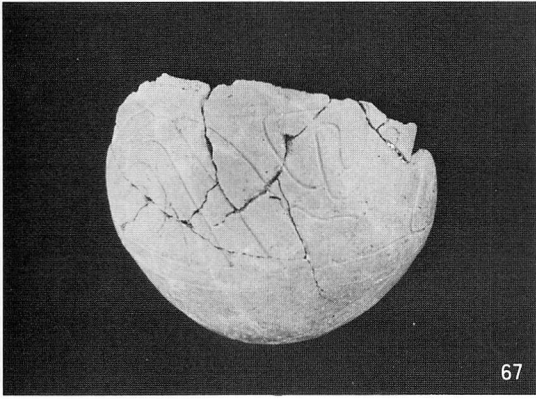
B I - 2 住居址(49~73)



写真図版20 遺構内の出土遺物(7)

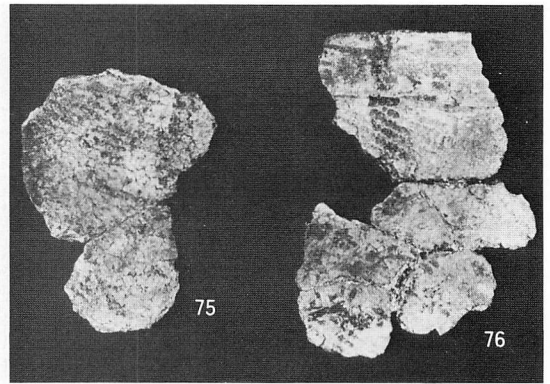
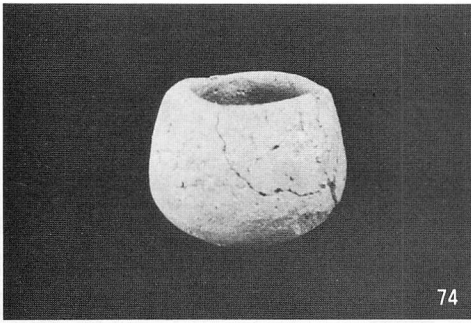


写真図版21 遺構内の出土遺物(8)

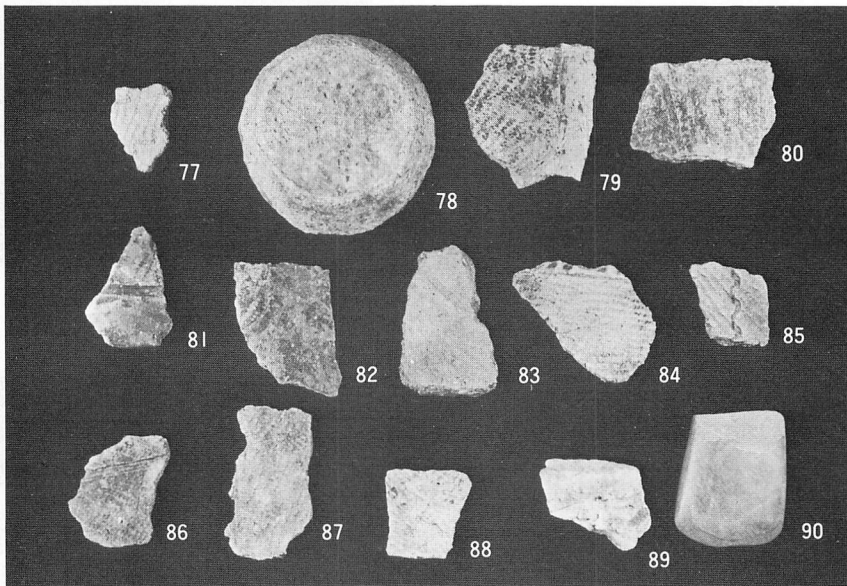


写真図版22 遺構内の出土遺物(9)

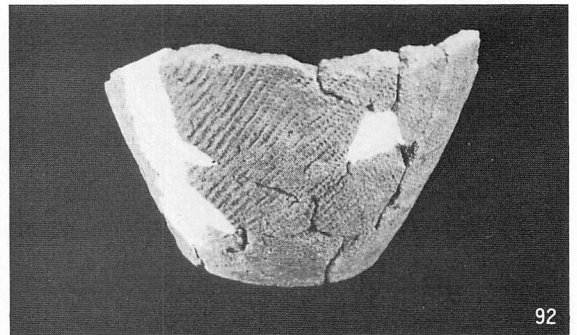
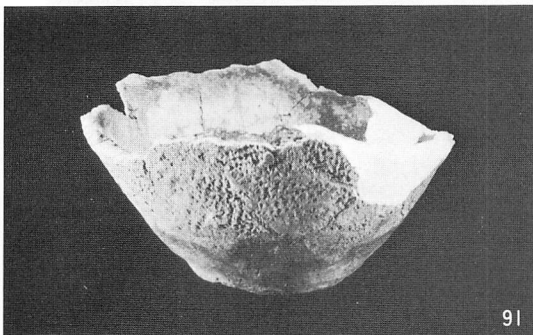
B II-1 住居址(74~76)



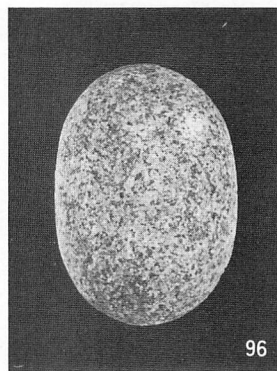
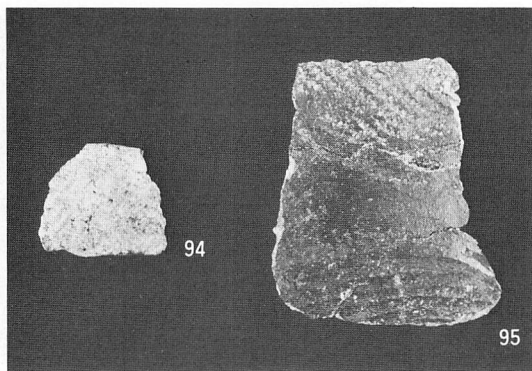
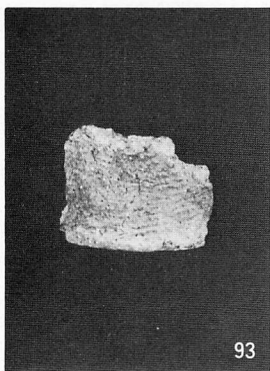
B I-51ピット(77~90)



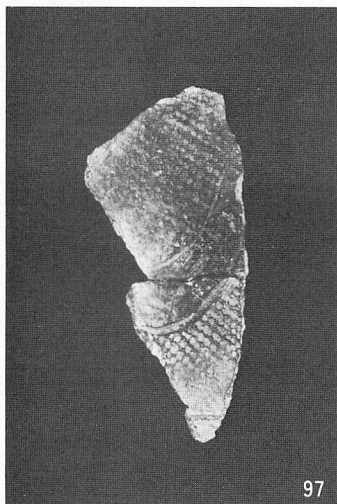
B I-53ピット(91~96)



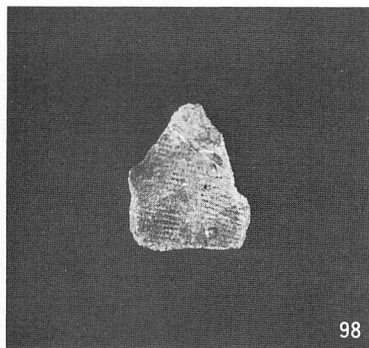
写真図版23 遺構内の出土遺物(10)



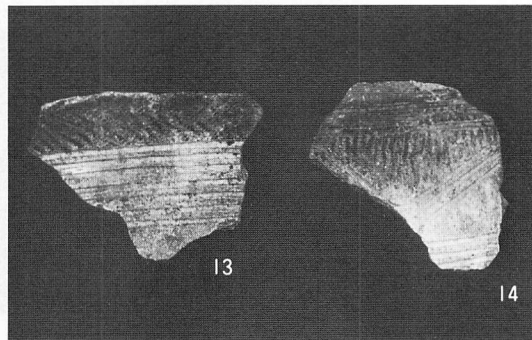
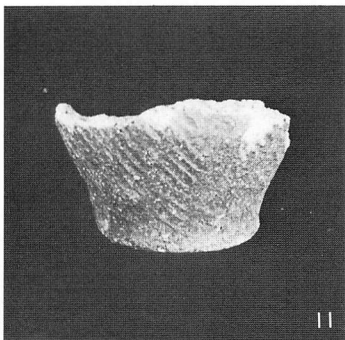
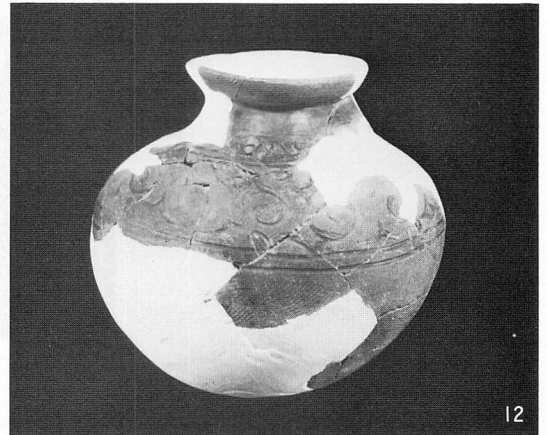
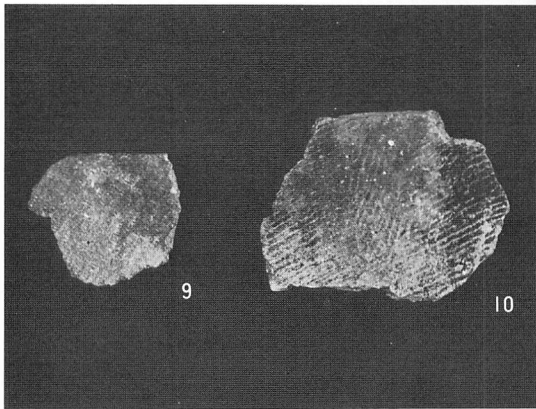
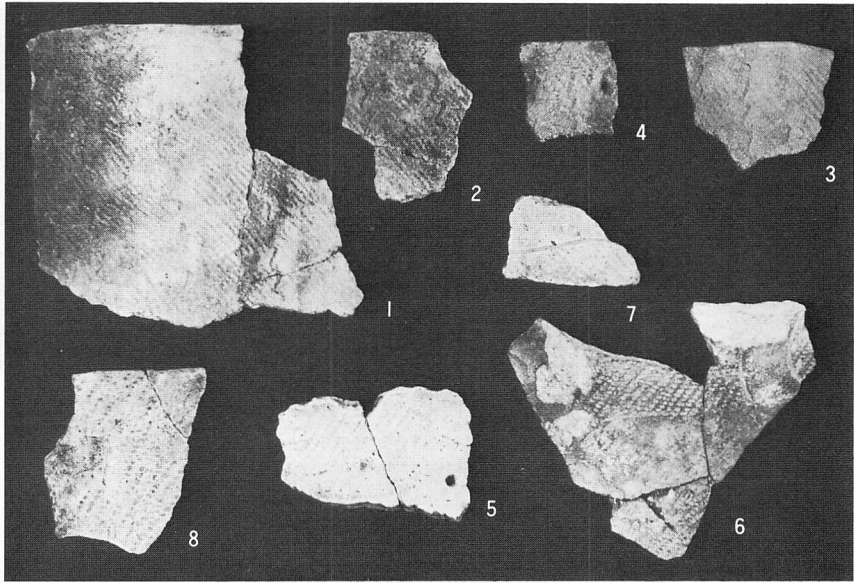
B I—54ピット(97)



B II—51ピット(98)



遺構外(1~15)



写真図版25 遺構外の出土遺物

参考・引用文献

- 芹沢長介 1972 『石器時代の日本』
- 山内清男 1964 『縄文式土器Ⅰ』 日本原始美術 1
- 草間俊一他 1967 『貝島貝塚』
- 草間俊一他 1974 『岩手県大槌町吉里吉里崎山弁天遺跡』
- 村越 潔 1974 『円筒土器文化』
- 三浦謙一他 1977 『都南村湯沢遺跡』
- 鈴木克彦他 1978 『熊沢遺跡』
- 小林達雄 1979 『縄文土器Ⅰ』 日本の原始美術 1
- 佐原 眞 1979 『縄文土器Ⅱ』 日本の原始美術 2
- 武田良夫 1978 「岩手県における弥生式土器について—盛岡地方を主として—」
『考古風土記第3号』
- 鈴木克彦 1978 「青森県の弥生時代土器集成Ⅰ～Ⅳ」 『考古風土記第3～6号』
- 高橋信雄 1976 『保戸沢遺跡発掘調査報告書』
- 大池昭二 1972 「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」 『第四紀研究第11巻4号』
- 中川久夫 1972 「青森県の第四系」 『青森県の地質』
- 大池昭二 1974 「十和田火山は生きている」 『国土と教育No.26』
- 町田 洋 1977 『火山灰は語る』
- 四井謙吉他 1980 『松尾村野駄遺跡、寄木遺跡、西根町崩石遺跡』
- 高橋正之他 1980 『広瀬Ⅱ遺跡、堂ヶ沢遺跡、繫Ⅲ遺跡』
- 安田喜憲 1980 『環境考古学事始』
- 橘 善光 1979 『考古学ジャーナル』 弥生土器 北東北 1～4
- 相原康二 1980 『東裏遺跡』
- 須藤 隆 1970 「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」
『考古学雑誌第56巻第2号』

岩手県埋文センター文化財調査報告書第38集

有矢野・上の山 X 遺跡発掘調査報告書
東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

昭和57年3月20日印刷

昭和57年3月25日発行

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡

第11地割字高屋敷185

TEL (0196) 38-9001

印刷 (株) 杜陵印刷
